北山Ｃ遺跡（第２～７次）・西山古墳群 発掘調査報告

―桑名市大字志知・四日市市西大鐘町―

２０２０（令和２）年３月

三重県埋蔵文化財センター

第５次調査（南から）

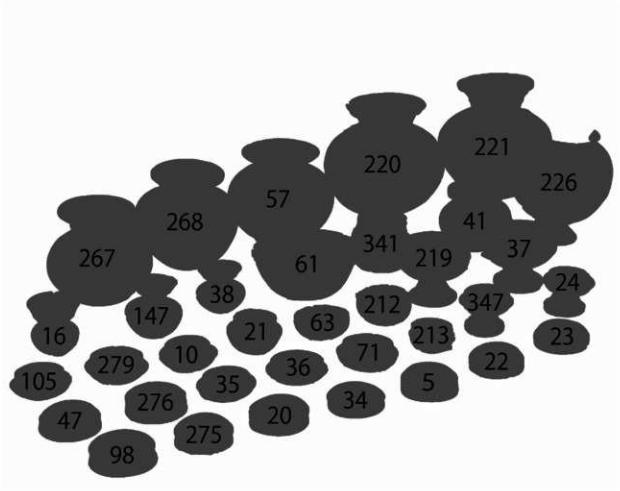
第２次調査（西から）

第６次調査（東から）

第４次調査（北から）

西山14号墳（北東から）

西山11号墳（東から）



木棺墓ＳＫ92（南東から）

出土遺物

序

三重県埋蔵文化財センターでは、平成20年度から、新名神高速道路の四日市ＪＣＴ～亀山西ＪＣＴ間の路線内に存在する埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。対象となる埋蔵文化財は22遺跡、発掘調査対象面積は約34万㎡と広大です。

当センターとしては、供用開始までのスケジュールに対応するため、担当職員を増員するとともに現地調査を最優先し、５万㎡を超える面積を調査した年もありました。

すべての現地調査が終了してから本格的に報告書作成に取り組みはじめ、ここに桑名市大字志知・四日市市西大鐘町に所在する北山Ｃ遺跡・西山古墳群の調査成果を、とりまとめることが出来ました。後世の開発によって削平されながらも、わずかに残っていた主体部や、台地の端まで広がる数多くの周溝の存在によって、未知の古墳群の存在が明らかになり、地域の歴史に新たな１ページが加わりました。

現地調査から報告書作成まで一貫してご理解とご協力をいただいた中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事務所をはじめとする関係機関の方々、志知第一～第四自治会・西大鐘町自治会など近隣にお住まいの方々に心からのお礼を申し上げます。

令和２年３月

三重県埋蔵文化財センター
所長　上　村　安　生

例　言

1　本書は、三重県桑名市大字志知・四日市市西大鐘町に所在する北山Ｃ遺跡・西山古墳群の発掘調査報告書である。

2　本書で報告する発掘調査は、近畿自動車道名古屋神戸線（四日市ＪＣＴ～亀山西ＪＣＴ）建設事業に伴う緊急発掘調査である。

3　発掘調査にかかる費用は、中日本高速道路株式会社が全額負担した。

4　発掘調査成果は、『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市ＪＣＴ～亀山西ＪＣＴ）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ～Ⅴ』の３冊においてその概要を公表しているが、本書をもって正報告とする。

5　調査は下記の体制で実施した。（詳細はＩ－２参照）

- 委託者　　中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事務所
- 受託者　　三重県教育委員会
- 調査主体　三重県教育委員会
- 調査担当　三重県埋蔵文化財センター

6　本書の執筆は三重県埋蔵文化財センター職員の森川常厚・服部芳人・鈴木規之・山中由紀子・水橋公恵が行ない、写真撮影は調査担当者および萩原義彦が行った。編集は水橋が行なった。文責については目次及び文末に記載したが、Ⅲ・Ⅳ章の分担は以下の通りである。

Ⅲ･･･第２次調査分：森川・鈴木、第５次調査分：山中・水橋、その他：水橋

Ⅳ･･･第２次調査分：森川、第５次調査分：山中・水橋、その他：水橋

7　本書で示す方位は、世界測地系第Ⅵ座標による座標北である。

8　本書で表記する土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社　1967年初版）に拠った。

9　本書で使用した地図は、国土地理院発行の１：25,000の地形図「菰野」「桑名」「四日市西部」「四日市東部」、三重県共有デジタル地図Ⅶ平成19年測図を用いた。三重県共有デジタル地図は三重県市町総合組合の承認を得て使用した。（承認番号：平成31年４月３日付三総合地第１号）

10　本書では、以下のように遺構の略記号を使用している。

ＳＨ：竪穴建物　　ＳＢ：掘立柱建物　　ＳＫ：陥し穴・墓壙・土坑　　ＳＤ：溝・周溝

11　発掘調査及び報告書作成に際し、下記の方々・機関等に多大なるご協力・ご指導を賜った。記して感謝の意を表したい。（順不同、敬称略）

辻川哲朗　堀真人　藤居朗　公益財団法人滋賀県文化財保護協会　草津市教育委員会
桑名市教育委員会　四日市市教育委員会　志知第一～第四自治会　西大鐘町自治会

12　調査図面・写真・出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。

本 文 目 次

Ⅰ　前言 ……（服部）…… 1
1　調査に至る経緯 ……1
2　調査の経過 ……1

Ⅱ　位置と環境 ……（水橋）…… 7
1　地理的環境 ……7
2　歴史的環境 ……7

Ⅲ　調査の方法と遺構 ……（森川・鈴木・山中・水橋）…… 9
1　調査の方法と名称 ……（水橋）……9
2　基本層序と遺構概観 ……（水橋）……9
3　縄文時代の遺構 ……（水橋）……9
4　弥生時代の遺構 ……（森川）……13
5　古墳時代の遺構 ……（森川・鈴木・山中・水橋）……13
　a　古墳　b　木棺墓など　c　竪穴建物　d　土坑　e　溝
6　飛鳥時代の遺構 ……（森川・水橋）……91
　a　竪穴建物　b　掘立柱建物　c　土坑・土壙墓
7　時期不明の遺構 ……（水橋）……97

Ⅳ　遺物 ……（森川・山中・水橋）…… 109
1　弥生時代 ……（森川）…… 109
2　古墳時代 ……（森川・山中・水橋）…… 109
　a　古墳　b　木棺墓など　c　竪穴建物　d　土坑　e　溝
3　飛鳥時代 ……（森川・水橋）…… 132
4　遺構外出土遺物 ……（水橋・山中）…… 133

Ⅴ　自然科学分析 …… 143
1　分析の目的 ……（山中）…… 143
2　分析 ……（パリノ・サーヴェイ株式会社）…… 143
　（1）調査遺構　（2）放射性炭素年代測定　（3）リン・カルシウム分析
　（4）植物遺体同定　（5）炭化材の樹種

Ⅵ　結語 ……（森川・水橋）…… 149
1　調査のまとめ ……（水橋）…… 149
2　西山古墳群の変遷 ……（水橋）…… 153
3　西山８号墳出土盌形土器 ……（森川）…… 160

挿　図　目　次

第１図　北山Ｃ遺跡・西山古墳群調査区位置図……２
第２図　周辺の遺跡位置図……８
第３図　第２～６次調査区グリッド設定図……10
第４図　第２～６次調査区主要遺構位置略図……11
第５図　ＳＫ182・186・192・318・319遺構図　……12
第６図　ＳＫ６遺物出土状況図……13
第７図　西山１号墳遺構図……14
第８図　西山２号墳・西山３号墳遺構図……16
第９図　西山４号墳遺構図・遺物出土状況図……17
第10図　西山５号墳・ＳＫ２遺構図……18
第11図　西山６号墳遺構図・遺物出土状況図……20
第12図　西山７号墳遺構図・遺物出土状況図……21
第13図　西山８号墳遺構図・遺物出土状況図……23
第14図　西山10号墳遺構図・遺物出土状況図……24
第15図　西山９号墳遺構図・遺物出土状況図……26
第16図　西山11号墳遺構図……26
第17図　西山11号墳上層図・遺物出土状況図……27
第18図　西山11号墳主体部遺構図……28
第19図　西山12号墳遺構図・土層図……29
第20図　西山13号墳遺構図・土層図……30
第21図　西山14号墳遺構図……30
第22図　西山14号墳上層図・遺物出土状況図……31
第23図　西山15号墳遺構図・土層図……32
第24図　西山16号墳遺構図・土層図・
主体部詳細図　……33
第25図　西山17号墳遺構図・土層図……35
第26図　西山23号墳遺構図・土層図……35
第27図　西山18号墳遺構図・土層図・
遺物出土状況図　……36
第28図　西山19号墳遺構図・土層図・
遺物出土状況図　……37
第29図　西山20号墳遺構図・土層図……38
第30図　西山21号墳遺構図・土層図……39
第31図　西山21号墳遺物出土状況図……40
第32図　西山22号墳遺構図・土層図……40
第33図　西山24号墳遺構図・土層図……41
第34図　西山24号墳主体部遺構図・土層図……42
第35図　西山24号墳主体部上層図・断面図……43
第36図　西山25号墳遺物出土状況図……43
第37図　西山25号墳遺構図・土層図……44
第38図　西山26号墳遺構図・土層図……45
第39図　西山27号墳遺構図・土層図・
遺物出土状況図　……47
第40図　西山28号墳遺構図・土層図……48
第41図　西山29号墳遺構図・土層図……49
第42図　西山30号墳遺構図・土層図・
遺物出土状況図　……50
第43図　西山34号墳遺構図・土層図……50
第44図　西山31号墳遺構図・土層図……51
第45図　西山32号墳遺構図・土層図……52
第46図　西山32号墳遺物出土状況図……53
第47図　西山33号墳・ＳＫ320遺構図・土層図　……53
第48図　西山35号墳遺構図・土層図……55
第49図　西山35号墳遺物出土状況図……56
第50図　西山36号墳遺構図・土層図……56
第51図　西山37号墳遺構図・土層図……57
第52図　西山38号墳遺構図・土層図……57
第53図　西山39号墳遺構図・土層図……58
第54図　西山40号墳遺構図・土層図……58
第55図　西山41号墳遺構図・土層図……59
第56図　西山42号墳遺構図・土層図……59
第57図　西山43・44号墳遺構図・土層図・
遺物出土状況図　……60
第58図　西山45号墳・ＳＫ161遺構図・土層図　……61
第59図　西山45号墳遺物出土状況図、
ＳＫ161遺構図……62
第60図　西山46号墳遺構図・土層図・
遺物出土状況図　……63
第61図　西山47号墳遺構図・土層図……64
第62図　西山48号墳遺構図・土層図……65
第63図　西山49号墳遺構図・土層図……66
第64図　西山50号墳遺構図・土層図……66
第65図　西山51号墳遺構図・土層図……66
第66図　西山52号墳遺構図・土層図……67
第67図　西山53号墳・ＳＫ312遺構図・土層図　……67
第68図　西山54号墳遺構図・土層図……68
第69図　西山55号墳遺構図・土層図……69
第70図　ＳＫ64・174遺構図　……71
第71図　ＳＫ92遺構図・遺物出土状況図……72
第72図　ＳＫ152遺構図・遺物出土状況図　……73

第 73 図　ＳＫ154遺構図 ……74
第 74 図　ＳＫ159遺構・遺物出土状況図 ……75
第 75 図　ＳＫ170遺構図 ……76
第 76 図　ＳＫ179遺構図 ……78
第 77 図　ＳＫ181・183遺構図……79
第 78 図　ＳＫ184・187遺構図……80
第 79 図　ＳＫ185遺構図 ……81
第 80 図　ＳＫ185遺物出土状況図 ……82
第 81 図　ＳＫ191・197遺構図……83
第 82 図　ＳＫ200遺構図 ……84
第 83 図　ＳＫ204・207遺構図……85
第 84 図　ＳＫ314・315遺構図……86
第 85 図　ＳＨ59遺構図・竈詳細図……88
第 86 図　ＳＤ１遺構図……90
第 87 図　ＳＤ３遺物出土状況図……90
第 88 図　ＳＤ51遺物出土状況図……90
第 89 図　ＳＨ60遺構図・竈詳細図……92
第 90 図　ＳＨ66遺構図・竈詳細図……93
第 91 図　ＳＢ62・ＳＢ70・ＳＢ71遺構図……94
第 92 図　ＳＫ61・ＳＫ69・ＳＫ302遺構図、
ＳＫ74遺物出土状況図 ……95
第 93 図　ＳＢ180遺構図 ……96
第 94 図　第２～６次調査区遺構全体図１……98
第 95 図　第２～６次調査区遺構全体図２ ……99・100
第 96 図　第７次調査区平面図１ ……101
第 97 図　第７次調査区平面図２ ……102
第 98 図　第７次調査区平面図３ ……103
第 99 図　出土遺物実測図１（１）……109
第100図　出土遺物実測図２（２～17）……110
第101図　出土遺物実測図３（18～40）……111
第102図　出土遺物実測図４（41～64）……112
第103図　出土遺物実測図５（65～78）……113
第104図　出土遺物実測図６（79～97）……115
第105図　出土遺物実測図７（98～129）……116
第106図　出土遺物実測図８（130～145）……117
第107図　出土遺物実測図９（146～165）……119
第108図　出土遺物実測図10（166～176）……120
第109図　出土遺物実測図11（177～195）……121
第110図　出土遺物実測図12（196～210）……122
第111図　出土遺物実測図13（211～231）……123
第112図　出土遺物実測図14（232～252）……125
第113図　出土遺物実測図15（253～269）……126
第114図　出土遺物実測図16（270～290）……127
第115図　出土遺物実測図17（291～300）……128
第116図　出土遺物実測図18（301～308）……129
第117図　出土遺物実測図19（309～339）……130
第118図　出土遺物実測図20（340～352）……131
第119図　出土遺物実測図21（353～364）……132
第120図　出土遺物実測図22（365～380）……133
第121図　試料採取位置 ……147
第122図　暦年較正結果（２σ）……147
第123図　植物遺体・炭化材 ……148
第124図　飛鳥時代の建物と遺物出土範囲の関係 …151
第125図　主な遺構の時期別変遷 ……152
第126図　西山２～４期の主な須恵器１ ……154
第127図　西山２～４期の主な須恵器２ ……155
第128図　西山古墳群築造過程推定図 ……158
付図１　遺構全体図１―第２次西区―
付図２　遺構全体図２―第２次東区～第６次―

表　目　次

第１～４表　北山Ｃ遺跡・西山古墳群
遺構一覧表 ……104～107
第５表　掘立柱建物一覧表……108
第６～14表　北山Ｃ遺跡・西山古墳群
出土遺物観察表 ……134～142
第15表　放射性炭素年代測定結果……147
第16表　リン・カルシウム分析結果……148
第17表　植物遺体同定結果……148
第18表　樹種同定結果……148

写　真　図　版　一　覧

巻頭図版

図版１　第５次調査、第２次調査
図版２　第６次調査、第４次調査
図版３　西山14号墳、西山11号墳
図版４　木棺墓ＳＫ92、出土遺物

写真図版　東上空から見た北山Ｃ遺跡・西山古墳群

図版１　第２次調査、第２次調査東区、第２次調査西区、第４次調査、第５次調査、第６次調査、第７次調査
図版２　ＳＫ182、ＳＫ182土層、ＳＫ186、ＳＫ192、ＳＫ318、ＳＫ319、ＳＫ６、ＳＫ６遺物出土状況
図版３　１号墳、２号墳
図版４　１号墳土層、２号墳土層、３号墳、３号墳土層、４号墳、４号墳土層、５号墳、５号墳土層
図版５　６号墳、７号墳
図版６　６号墳遺物出土状況、６号墳遺物出土状況、７号墳遺物出土状況、７号墳遺物出土状況、８号墳
図版７　８号墳遺物出土状況、８号墳遺物出土状況、９号墳、９号墳遺物出土状況、10号墳
図版８　11号墳、11号墳土層、11号墳遺物出土状況、11号墳主体部、12号墳
図版９　13号墳、13号墳東溝土層、14号墳、14号墳南溝土層、14号墳西溝遺物出土状況
図版10　16号墳、15号墳、16号墳主体部、17号墳、17号墳北溝土層
図版11　18号墳、18号墳西溝土層、19号墳、19号墳南溝土層、19号墳遺物出土状況
図版12　20号墳、20号墳土層、21号墳、21号墳南溝土層、21号墳東溝遺物出土状況、21号墳北溝遺物出土状況、22号墳、22号墳東溝土層
図版13　23号墳、23号墳南溝土層、24号墳、24号墳主体部、24号墳南溝土層
図版14　25号墳、25号墳西溝土層、25号墳南溝遺物出土状況、25号墳西溝遺物出土状況、26号墳、26号墳北溝土層、28号墳、28号墳
図版15　27号墳、27号墳東溝土層、27号墳南溝遺物出土状況、29号墳、29号墳東溝土層
図版16　30号墳、31号墳、32号墳、32号墳西溝遺物出土状況、32号墳東溝遺物出土状況
図版17　34号墳、34号墳東溝土層、35号墳、35号墳南溝遺物出土状況、36・37号墳、37号墳南溝土層、38号墳、38号墳南溝土層
図版18　39～42号墳、39号墳南溝土層、43・44号墳、44号墳西溝遺物出土状況、43号墳南溝土層
図版19　45号墳、ＳＫ161、45号墳西溝土層、45号墳西溝遺物出土状況
図版20　46号墳、46号墳遺物出土状況、46号墳土層、47号墳、47号墳土層
図版21　48号墳、48号墳土層、49号墳、49号墳土層、50号墳、50号墳北溝土層、51号墳、51号墳東溝土層
図版22　52号墳、52号墳土層、53号墳、ＳＫ312、54号墳、54号墳東溝土層、55号墳、55号墳北溝土層
図版23　ＳＫ92、ＳＫ92遺物出土状況、ＳＫ92遺物出土状況、ＳＫ92遺物出土状況、ＳＫ92土層
図版24　ＳＫ152、ＳＫ152遺物出土状況、ＳＫ154、ＳＫ159
図版25　ＳＫ174、ＳＫ179、ＳＫ181遺物出土状況、ＳＫ183

図版26　ＳＫ185、ＳＫ185上層遺物出土状況、ＳＫ185下層遺物出土状況、ＳＫ185遺物出土状況
図版27　ＳＫ184、ＳＫ187、ＳＫ191、ＳＫ197、ＳＫ207
図版28　ＳＫ200、ＳＫ315
図版29　ＳＨ59、ＳＨ59竈、ＳＤ３、ＳＤ３遺物出土状況、ＳＤ51遺物出土状況
図版30　ＳＨ60、ＳＨ66
図版31　ＳＢ62、ＳＢ70
図版32　ＳＢ71、ＳＫ74遺物出土状況

遺物図版

図版33　１（上）．１（下）．５．６．10．11．15．16
図版34　20．21．22．23．24．25．26．28
図版35　34．35．35（ヘラ記号）．36．36（ヘラ記号）．37．38．39
図版36　41．42．47．47（口縁部）．50．51．52．57
図版37　58．59．60．61．63．64．68．69
図版38　71．74．75．78．80．89．90．91
図版39　92．93．97．98．99．103．105．107．108
図版40　109．110．111．112．114．119．120．122
図版41　123．124．125．128．129．130．131．132
図版42　134．139．140．142．143．147．151．152．153
図版43　154．156．167．171．174．175．176．177
図版44　178．179．185（表）．185（裏）．187．187（底）．196．201
図版45　205．207．212．213．215．217．219．221
図版46　220．220（外面拡大）．224．225．226．230．231．232
図版47　235．235（ヘラ記号）．237．238．241．246．251．252
図版48　259．260．266（口縁部）．266．267．268．275．276
図版49　279．282．284．285（表）．285（裏）．286（表）．286（裏）．288
図版50　289．309．310．311．312．314．315・316．317～328．341
図版51　347．353．354．360．372．374．377．378
図版52　291．293．296．297．298．301．303．304．305．308
図版53　329．330．331．332．333．334．338．339．379．380

Ⅰ　前　言

1　調査に至る経緯

近畿自動車道名古屋神戸線（以下、新名神高速道路とする）は、名古屋市と神戸市を結ぶ、総延長約175㎞の高規格幹線道路である。昭和40年に開通した名神高速道路は、自動車交通の増大により、慢性的な渋滞や混雑を生み、高速性・定時性が損なわれる状況が生じてきた。そこで、この課題の解消の対策として、代替路線の新名神高速道路の整備が進められることとなったのである。

三重県教育委員会と中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事務所は、平成21（2009）年２月24日付けで、事業地内に所在する埋蔵文化財の取り扱い、及び発掘調査の方法についての協定書を取り交わし、四日市JCT～亀山西JCT間の発掘調査を実施してきた。

既に刊行している報告書[1]には、新名神高速道路事業の概要、発掘調査に至る経緯、保護措置などの詳細について記載しているため、参照されたい。

2　調査の経過

（1）調査経過の概要

北山Ｃ遺跡は、四日市市西大鐘町の集落北方、標高56ｍ～61ｍの台地上に位置する、弥生時代から古墳時代の遺跡である。遺跡の面積は、概ね南北800ｍ、東西250ｍと20万㎡を超えるほど広大である。

1970（昭和45）年に、大阪市の業者が住宅団地造成を目的に当遺跡一帯を買収した。翌年、三重県教育委員会文化課と四日市市教育委員会が実地踏査を行った結果、造成地内全域に遺物の散布が認められたため、遺跡であることを確認した。その翌年、会社側は造成計画を変更し、造園用樹木の育苗園として、表土掘削を行うこととなった。

そこで、1975（昭和50）年、四日市市教育委員会が主体となって、概ね20ｍ間隔で４ｍ四方の試掘坑を88か所設定した第一次の試掘調査が実施された。調査の結果、竪穴住居、掘立柱建物、土坑などの遺構が検出され、６世紀前半から７世紀後半にかけての土師器・須恵器のほか、鉄滓が出土した[2]。

また、1987（昭和62）年には、スポーツ施設・管理施設等の建設に伴う第二次の試掘調査が行われた。場所は、遺跡の南部に当たり、20ｍ間隔で４ｍ四方の試掘坑が29か所設定された。調査の結果、弥生時代の溝、古墳時代の掘立柱建物、土坑、溝が検出され、弥生時代後期の壺・甕の他、古墳時代の土師器・須恵器が出土した[3]。

さて、今回、新名神高速道路の計画がなされ、北山Ｃ遺跡が所在する丘陵の北端を東西方向に走ることとなった。そのため、用地買収や伐採などの発掘調査の諸条件が整った平成23年度から、二次調査の必要の有無確認の一次調査を実施してきた。以下に、平成29年度にかけて行われた発掘調査の年度ごとの概要を記述する。

平成23年度

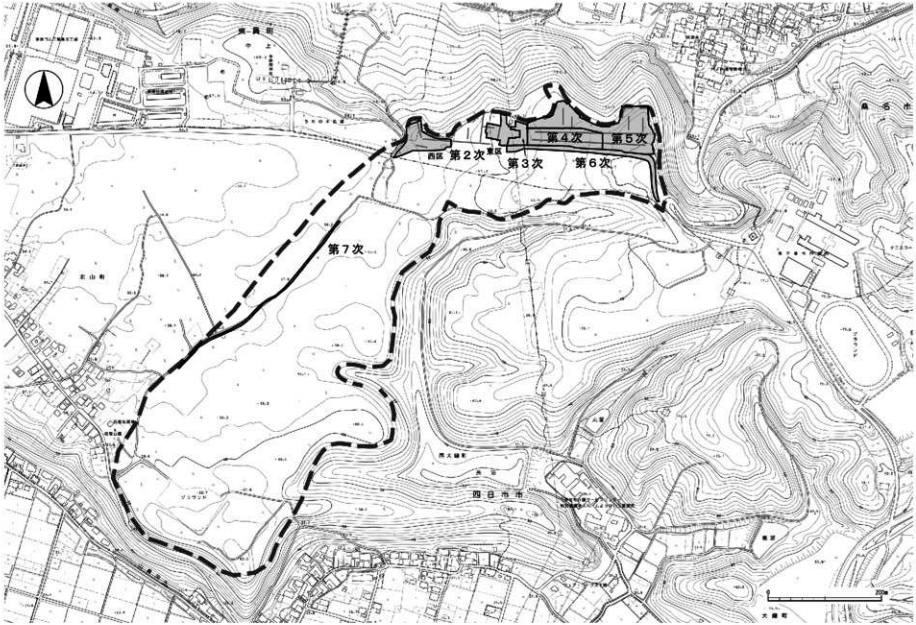
概ね用地買収や伐採が終了したため、８月から、幅２ｍの調査溝を７本、総延長300ｍの計600㎡を設定して、遺構・遺物の有無の確認を行った。その結果、４本の調査溝から、幅１ｍほどの溝状遺構が確認され、そのいくつかは途中で直角に曲がっていた。出土遺物も数点であるが、須恵器・土師器があり、古墳の存在の可能性が考えられた。

対象とした範囲の中央部で遺構・遺物とも確認されなかったため、二次調査については、東側の500㎡（東区）と西側の3,000㎡（西区）の２か所に分断されるが、合計3,500㎡が次年度の前半に計画された。

平成24年度

前年度、二次調査が必要となった、3,500㎡の内、西区3,000㎡の一部の用地引渡しが、９月末頃となる予定であった。そこで、引渡し後、速やかに発掘調査が開始出来る体制を年度前半から整えて、10月から発掘調査（第２次調査）を開始することとなった。

東区に関しては、発掘調査の過程で、古墳の周溝が調査区外へ広がる事が判明したため、調査範囲をさらに拡大することとなった。当年度は、結果的に



第１図　北山Ｃ遺跡・西山古墳群　調査区位置図（１：2,500）

合計、4,350㎡の調査を行って終了した。

年度の後半、次年度の調査を検討する定例会で、遺跡範囲の拡大に伴う東側への伐採や、伐採後の一次調査の検討、東区周辺に所在する高圧線の移設工事の緊急性などの調整協議を行った。その結果、高圧線周辺の二次調査900㎡を平成25年7月までに終了すること、伐採後に一次調査を1,000㎡実施し、仮に二次調査が全面必要になった場合は、平成25年度だけでは終了できないため、複数年発掘調査が必要なことなどが決まった。平成25年度の調査計画としては、4,000㎡の二次調査を行うこととなった。

なお、年度末には、遺跡範囲の拡大と、新たな古墳群の発見（西山古墳群と命名）に伴う行政的な手続きも行った。

遺跡北方（桑名市側）の眺望

【第２次調査　調査日誌（抄）】

10月26日　調査前写真撮影

10月30日　西区表土掘削開始

11月９日　西区人力掘削・東区表土掘削開始

12月10日　大雪のため現場中止

12月17日　東区人力掘削開始

１月10日　空中写真撮影

１月30日　拡張部表土掘削開始

１月31日　拡張部人力掘削開始

２月13日　桑名市教育委員会職員現地確認

３月１日　現地作業終了

平成25年度

年度が改まり、まず昨年度東区に隣接する高圧線周辺の915㎡の発掘調査（第３次調査）から開始した。調査の途中、６月中旬には、伐採作業が終了したため、一次調査として、東側へ丘陵の東側縁辺まで調査溝を６本設定して発掘調査を実施した。いずれの調査溝からも古墳の周溝と思われる遺構や遺物が確認されたため、丘陵の東側縁辺までの平坦面全体が二次調査の対象となった。

８月の定例会において、工事計画との調整を図った結果、９月から計画路線内の南側に4,000㎡の発掘調査（第４次調査）を実施することとなった。残りの調査面積8,750㎡については、翌年度に繰り越すこととなったが、供用開始予定が迫る中、発掘調査を９月末までに終了することを依頼された。

なお、普及啓発活動の一環として、第４次調査の現地説明会を12月15日（日）に行い、117名の参加があった。

【第３次調査　調査日誌（抄）】

５月13日　調査前写真撮影・表土掘削開始

５月21日　人力掘削開始

第２次調査からつづく竪穴建物や掘立柱建物のほか、竪穴建物１棟と古墳２基を北から順に調査。

６月27日　一次調査開始。台地の東端まで古墳群が広がることが判明。

７月10日　通路部分表土掘削開始

７月16日　通路部分人力掘削開始

７月31日　調査後写真撮影

９月６日　現地作業終了

【第４次調査　調査日誌（抄）】

９月９日　調査前写真撮影・表土掘削開始

９月19日　人力掘削開始

調査区全体に広がる古墳周溝を東側から順に調査。

10月１日　７世紀の土壙墓発見

10月23日　古墳の主体部残欠発見

11月20日　最後の遺構から鉄斧・鉄刀などが出土し、古墳時代の土壙墓と判明。

12月４日　空中写真撮影

12月15日　現地説明会開催

12月24日　現地作業終了

平成26年度

昨年度の協議で依頼された8,750㎡の発掘調査を９月末までに終了させるために、調査体制としては、担当職員４名の２班体制を採り、調査に臨んだ。

調査の開始直後、表土除去の作業中に、調査区内で産業廃棄物の存在を確認した。一時的ではあるが、産業廃棄物の安全確認のため、その周辺の調査を取りやめ、調査計画を見直すことなども行った。

最終的には、9,047㎡の面積を調査して、10月中旬には終了することが出来た。

なお、普及啓発活動の一環として、第５次調査の現地説明会を８月31日（日）に行い、179名の参加があった。

また、調査途中に数回行われた定例会では、高速道路の路線外ではあるが、周知の北山Ｃ遺跡の範囲内で、15万㎥の掘削土の仮置きや、その西側にある市道北山１号の拡幅工事、第５次調査区の南側での志知工事用道路などの計画が提示された。調整協議の結果、掘削土の仮置きについては、慎重工事での対応であること、北山１号線は一次調査が必要であり、結果次第で二次調査となること、志知工事用道路は第５次調査区に隣接しているため、二次調査が必要であることが決まった。

翌年度の計画として、志知工事用道路の二次調査2,900㎡と、北山１号線の一次調査222㎡を行うこととなった。

現地説明会の様子

【第５次調査　調査日誌（抄）】

５月９日　調査前写真撮影

５月12日　表土掘削開始。開始した直後に古墳の周溝が調査区外（東側）へのびることが判明したため、拡張することに。その後、北側へも古墳がのびることが判明。北側は伐採が必要なため、当初の調査終了後、行うことにした。

６月10日　人力掘削開始

調査区全体に広がる古墳周溝と土壙墓を東側から順に調査。

８月28日　空中写真撮影

８月31日　現地説明会開催

９月12日　拡張部表土掘削開始

９月16日　拡張部人力掘削開始

９月24日　現地作業終了

９月29日　現地引き渡し

平成27年度

志知工事用道路部分の発掘調査（第６次調査）については、第５次調査区の南側に隣接するため、昨年度同様に調査区内や排土置場予定地内に、多くの産業廃棄物が存在していた。また、北側の第５次調査区は、既に道路の建設工事が行われているため、深く開削が行われている中での発掘調査であったが、最終的は、2,423㎡の面積を行い、終了した。

なお、普及啓発活動の一環として、第６次調査の現地説明会を10月31日（土）に行い、140名の参加があった。

北山１号線の一次調査については、四日市市との伐採許可手続きや不法投棄など、発掘調査のための調整がなかなか進まない状況であった。ようやく10月に諸条件が整ったため、ネクスコの労務提供で調査を行った。２ｍ×３ｍの調査坑を36か所設定して行った結果、遺構が確認され、計画道路延長の概ね中央部分が二次調査の対象となった。

この二次調査であるが、平成28年度に発掘調査を依頼されてはいたが、年度末の定例会の時点でも計画図面が未完成であり、現地の幅杭打ちなども行われていない状況であった。そのため、他の遺跡との合計対応面積の検討もあるため、平成28年度内に、道路計画図面の完成や地元との各種調整を行い、発掘調査は平成29年度の前半で行うこととなった。

【第６次調査　調査日誌（抄）】

６月24日　表土掘削開始

７月10日　人力掘削開始

第３・４・５次調査からつづく古墳や掘立柱建物のほか、陥し穴・土壙墓・古墳などを西から順に調査。

８月17日　前日からの大雨のため作業中止。調査区の西端付近冠水。眼下にみえる工事区も被害甚大。

10月26日　空中写真撮影

10月31日　現地説明会開催

11月４・５日　県立桑名西高等学校の日本史講座選択生徒見学

11月12日　現地作業終了

12月17日　現地引き渡し

平成29年度

北山１号線の道路計画図面については、道路幅や勾配の検討を再三行い、また、果樹園や樹木の伐採などの地元調整もようやく整ったため、発掘調査（第７次調査）を６月下旬から開始した。細長い調査区で、また、台風などによる浸水で苦労したものの12月初めに調査を終了した。遺跡の西端に当たるため、溝やピットを若干確認したに止まる。調査面積は1,960㎡であり、この第７次調査をもって新名神高速道路関連の発掘調査は終了となった。

【第７次調査　調査日誌（抄）】

７月31日　表土掘削開始

８月18日　人力掘削開始

11月８日　空中写真撮影

11月13日　現地作業終了

（２）調査の体制

各年度の担当・体制などは、次のとおりである。

平成23年度

・一次調査

担当：鈴木規之・石井智大　（調査研究Ⅱ課）

現地作業：西武緑化有限会社

期間：平成23年７月11日～平成23年９月９日

面積：600㎡

平成24年度

・第２次調査

担当：森川常厚・鈴木規之　（調査研究Ⅲ課）

調査補助：安西工業株式会社

期間：平成24年10月10日～平成25年３月18日

面積：4,350㎡

平成25年度

・第３次調査

担当：鈴木規之・水橋公恵　（調査研究３課）

現地作業：株式会社アート

期間：平成25年４月24日～平成25年８月29日

面積：915㎡

・一次調査

担当：鈴木規之・水橋公恵　（調査研究３課）

現地作業：株式会社アート

期間：平成25年６月19日～平成25年７月12日

面積：1,000㎡

・第４次調査

担当：水橋公恵・鈴木規之　（調査研究３課）

調査補助：大成エンジニアリング

期間：平成25年８月21日～平成26年１月14日

面積：4,030㎡

平成26年度

・第５次調査

担当：水橋公恵・山中由紀子・矢田陽・鈴木規之（調査研究３課）

調査補助：大成エンジニアリング

期間：平成26年４月18日～平成26年９月29日

面積：9,047㎡

平成27年度

・第６次調査

担当：松永公喜・水橋公恵　（調査研究３課）

現地作業：株式会社島田組

期間：平成27年６月５日～平成27年12月11日

面積：2,423㎡

・一次調査

担当：村上央・服部芳人　（調査研究３課）

労務提供：ネクスコ中日本

期間：平成27年10月19日～平成27年10月22日

面積：216㎡

平成29年度

・第７次調査

担当：松永公喜・泉賢治　（調査研究３課）

現地作業：共栄建設株式会社

期間：平成29年６月28日～平成29年12月４日

面積：1,960㎡

（３）文化財保護法等にかかる諸通知

◎文化財保護法第94条に基づく三重県文化財保護条例第48条第１項（周知の埋蔵文化財における土木工事等の発掘に関する通知）

・平成22年８月６日付け、中高名支四工第760号（中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事務所長から三重県教育委員会教育長あて）

◎文化財保護法第99条第１項（発掘調査の着手報告）

・平成24年11月６日付け、教埋第302号
（三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委員会教育長あて）　【平成24年度・第２次】
・平成25年５月10日付け、教埋第57号
（三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委員会教育長あて）　【平成25年度・第３次】
・平成25年９月９日付け、教埋第233号
（三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委員会教育長あて）　【平成25年度・第４次】
・平成26年５月２日付け、教埋第39号
（三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委員会教育長あて）　【平成26年度・第５次】
・平成27年６月19日付け、教埋第99号
（三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委員会教育長あて）　【平成27年度・第６次】
・平成29年７月６日付け、教埋第120号
（三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委員会教育長あて）　【平成29年度・第７次】

◎文化財保護法第100条第２項（文化財の発見・認定通知）

・平成25年３月13日付け、教委第12-4442号
（三重県教育委員会教育長から四日市北警察署長あて）　【平成24年度・第２次】
・平成25年９月５日付け、教委第12-4406号
（三重県教育委員会教育長から四日市北警察署長あて）　【平成25年度・第３次】
・平成26年１月８日付け、教委第12-4412号
（三重県教育委員会教育長から四日市北警察署長あて）　【平成25年度・第４次】
・平成26年10月23日付け、教委第12-4422号
（三重県教育委員会教育長から四日市北警察署長あて）　【平成26年度・第５次】
・平成27年12月21日付け、教委第12-4418号
（三重県教育委員会教育長から四日市北警察署長あて）　【平成27年度・第６次】
・平成29年12月７日付け、教委第12-4420号
（三重県教育委員会教育長から四日市北警察署長あて）　【平成29年度・第７次】

◎周知の埋蔵文化財の範囲変更

・平成25年３月11日付け、教埋第499号
（三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委員会教育長あて）

◎新たな埋蔵文化財包蔵地の把握について

・平成25年３月27日付け、教埋第567号
（三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委員会教育長あて）

（服部）

【註】

①三重県埋蔵文化財センター『伊坂窯跡・伊坂遺跡（第５次）発掘調査報告』2011年。
②小玉道明・番条勇雄『北山遺跡試掘調査概要』四日市市教育委員会、1975年。
③四日市市遺跡調査会『北山Ｃ遺跡−（仮称）緑の広場計画に伴う試掘調査報告書』1988年。

そらんぽ四日市（四日市市立博物館）での展覧会「高速道路発掘物語」（平成28年６月14日～７月17日）

Ⅱ　位置と環境

1　地理的環境

北山Ｃ遺跡は、三重県北勢地方の桑名市・四日市市・東員町にまたがって所在し、鈴鹿山脈から伊勢湾に向かって注ぎ込む員弁川と朝明川に挟まれた朝日丘陵の上に立地している。今回の調査によって遺跡範囲が追加されたため、遺跡の北側は丘陵上の平坦面、南側は南へ向かって緩やかに下がる緩斜面（当初の遺跡範囲）となっている。また、新たに遺跡として認定された西山古墳群は、丘陵上部の平坦面に立地し、北（桑名市）側の眺望が良好である。

周辺の地質や地形については、近隣遺跡の既刊報告書[2]を参考にされたい。

2　歴史的環境（第２図）

ここでは、主に北山Ｃ遺跡・西山古墳群（１）に関係する時代について記述する。それ以外の詳細は近隣遺跡の既刊報告書[2]を参考にされたい。

（１）縄文時代

これまでは西ヶ広遺跡（８）で遺構・遺物が僅かに知られていたにすぎないが、近年、同じ朝日丘陵上の中野山遺跡（21）や、朝明川の対岸に位置する小牧南遺跡（29）などで発見が相次いだ。中野山遺跡からは早期の竪穴住居・煙道付炉穴・集石炉、中期の竪穴住居、晩期の土器棺墓などが確認された。小牧南遺跡からは中期の竪穴住居と掘立柱建物、勾玉形の石製垂飾が入った埋設土器などが見つかった。

（２）弥生時代

同じ朝日丘陵上の東側には、扁平紐式銅鐸の出土地とされる伊坂町があり、その周辺の西ヶ広遺跡・菟上遺跡（11）・山村遺跡（12）・伊坂遺跡（10）などの調査によって、中期以降に本格的に開発が進んだことが明らかになっている。また、環壕をもつ高地性集落の金塚遺跡（13）では、住居跡から出土した扁平紐～突線紐の銅鐸片が注目を集めた。近年、丘陵上西側の中野山遺跡や居林遺跡（23）、朝明川の対岸に位置する小牧南遺跡などでも中期から古墳時代前期の竪穴住居が多数発見されている。

（３）古墳時代

前期の古墳は極めて少なく、四日市市大宮町の志氏神社古墳や、桑名市大字北別所の高塚山古墳の前方後円墳が挙げられる程度である。

中期の古墳としては、朝明川左岸の丘陵上に城ノ広古墳群（19）がある。前方後円墳１基と方墳５基が調査され、出土した須恵器や埴輪から、方墳群の築造開始は５世紀末とされる[3]。朝日丘陵上にある広古墳群（５）も西山古墳群と同じく方墳を主体とする中期の古墳群であるが、調査されていないため詳細は不明である。

周辺地域では後期古墳の数が圧倒的に多い。近年、10基の古墳が調査された筆ヶ崎古墳群（24）は、現存する八幡古墳（36）と同じく川原石を使用した横穴式石室であった。また、当地の特色として、死人谷横穴墓群（43）・広永横穴墓群（15）・金塚横穴墓群（13）といった横穴墓群が確認されていることは注目される。

集落跡についても、後期から飛鳥時代にかけての住居跡が西ヶ広遺跡・中野山遺跡・山奥遺跡（42）・筆ヶ崎西遺跡（24）などで数多く確認されている。

（水橋）

【註】

①三重県埋蔵文化財センター『伊坂窯跡・伊坂遺跡（第５次）発掘調査報告』2011年。

②前掲註①および三重県埋蔵文化財センター『北山Ａ遺跡（第２・３・５・６次）発掘調査報告』2017年。

③三重県埋蔵文化財センター『城ノ広古墳群・城ノ広遺跡（第２次）発掘調査報告』2005年。

【主な参考文献】

・三重県『三重県史』資料編考古１・２、2005・2008年。

・三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅱ～Ⅵ、2012～2016年。

・三重県埋蔵文化財センター・四日市市教育委員会などの遺跡発掘調査報告

1．北山C遺跡・西山古墳群　2．北ノ山古窯　3．西辻遺跡　4．鐘撞遺跡　5．広古墳群
6．浄ヶ坊古墳群　7．西ノ広城跡　8．西ヶ広遺跡・松山古墳　9．伊坂城跡
10．伊坂遺跡・伊坂窯跡　11．茖上遺跡　12．山村遺跡　13．金塚遺跡・金塚横穴墓群ほか
14．城ノ谷遺跡　15．広永横穴墓群ほか　16．間ノ田遺跡　17．辻子遺跡　18．埋縄城跡
19．城ノ広古墳群ほか　20．北山A遺跡　21．中野山遺跡　22．北山城跡　23．居林遺跡
24．筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡　25．西山遺跡　26．小牧北遺跡　27．若宮古墳群　28．門ノ上古墳群
29．小牧南遺跡　30．高山古墳　31．大沢古墳　32．符光寺山古墳群　33．鶯谷古墳群　34．萱生城跡
35．中村遺跡　36．八幡古墳　37．大矢知城跡　38．下ノ宮遺跡　39．久留倍遺跡　40．大矢知山畑遺跡
41．鳩浦古窯　42．山奥遺跡　43．死人谷横穴墓群　44．志知城跡　45．志知南浦遺跡　46．島田城跡
47．額田廃寺　48．額田城跡　49．星川城跡

第２図　周辺の遺跡位置図（１：50,000）［国土地理院『菰野』『桑名』『四日市西部』『四日市東部』（１：25,000）に加筆作成］

Ⅲ　調査の方法と遺構

1　調査の方法と名称

グリッド設定（第３図）　第２次調査開始時には、工事用道路部分（第６・７次）の調査は想定されておらず、本線部分の調査範囲も東端が確定していなかった。本線部分は幅60mほどで、ほぼ東西方向に伸びていたため、100m四方の大地区は使用せず、４m四方の小地区のみ設定し、南北をＡ～Ｙ、東西を１～とすることで、拡張に対応しようとした（例：Ｊ25の東はＪ26）。

ところが、第５次調査では北側へ、第６次調査では南側へ調査区が張り出すことになり、南北方向がＡ～Ｙだけでは対応できなくなった。そこで大地区の法則を変則的に適用し、アルファベットの前に、北側はN°、南側はＳを付けて地区を表示することにした。（例：Ｙ117の南はＳＡ117）

第７次調査は、細長い斜め方向の調査区で、他の調査区とは離れていたため、独自のグリッド（３m四方の小地区を、座標に対し45度傾けたもの）設定を行った（第96～98図）。

遺構番号の付与　溝や建物などの遺構には、種類を問わず通し番号を付与し、ピットについては小地区（グリッド）ごとに通し番号を付けた。

古墳については、調査中は溝ＳＤ・土坑ＳＫの略記号で取扱い、調査後、古墳としての番号を新たに付与した（１～55号墳）。

土壙墓については、土坑ＳＫの略記号で調査し、その後、ＳＸに変更することも検討したが、土坑の中には土壙墓の可能性が想定されるものの確定できないものがあるため、土坑・土壙墓ともにＳＫのまま報告することとした。　（水橋）

2　基本層序と遺構概観

基本的には上から表土、褐色系粘質土、地山となる。地山は、礫が目立つ場所もあったが（第２次西区北西部や第７次調査区北端にかけて）、大半は橙色系もしくは黄色の軟質な粘質土である。地山直上で行った遺構検出で、すべての時代の遺構を確認した。

遺構は丘陵上の平坦面に集中しており、縄文時代の陥し穴５基、弥生時代の土坑１基、古墳時代中後期の古墳55基・木棺墓などの墓壙[2]20基・竪穴建物１棟・土坑・溝、飛鳥時代の竪穴建物２棟・掘立柱建物３棟・土壙墓１基、時期不明の掘立柱建物１棟などがある（第４図）。丘陵南斜面（第７次調査）で検出された土坑や溝は、すべて時期不明である。

（水橋）

3　縄文時代の遺構（第５図）

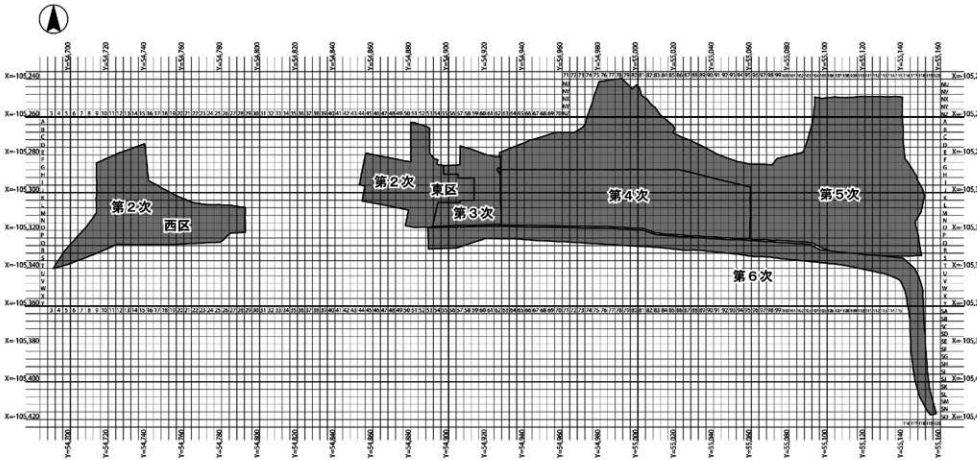
丘陵平坦面の東側で土坑を５基検出した。遺物はないが、規模・形状・埋土の特徴と、ＳＫ182・192の分析結果（Ⅴ自然科学分析参照）から、縄文時代後期後葉から晩期初頭の陥し穴と推定される。

ＳＫ182　第５次調査区東半の南壁付近で検出した。平面形は略円形を呈し、底面中央に円形の小穴がある。規模は検出面では直径1.4m、底面では直径0.9m、検出面からの深さは1.0mである。小穴は直径16cm、深さは土坑底面から15cm。埋土は基本的に炭化物を含む褐色系粘質土である。

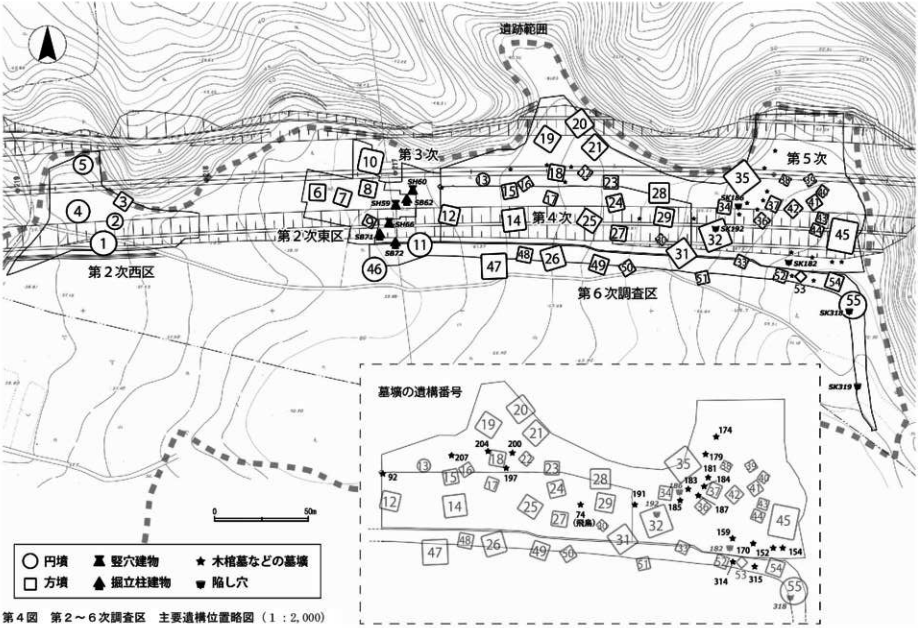
ＳＫ186　第５次調査区中央付近で検出した。平面形は略円形を呈し、底面中央に円形の小穴がある。規模は検出面では直径1.25m、底面では直径0.8m、検出面からの深さは0.8mである。小穴は直径15cmで、深さは土坑底面から35cm。埋土は基本的に炭化物を僅かに含む褐色系粘質土である。

ＳＫ192　第５次調査区中央の西山32号墳周溝内側で検出した。平面形は長方形に近い楕円形を呈し、底面中央に円形の小穴がある。規模は検出面では長径1.3m×短径0.95m、底面では長径1.05m×短径0.8m、検出面からの深さは0.7mである。小穴は直径25cm、深さは土坑底面から40cm。埋土は基本的に炭化物を含む褐色系粘質土である。

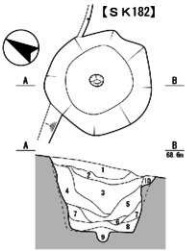
ＳＫ318　第６次調査区の西山55号墳周溝内側で検出した。平面形は楕円形を呈し、底面中央に円形の小穴がある。規模は検出面では長径1.0m×短径0.75m、底面では長径0.65m×短径0.55m、検出面からの深さは1.0m。小穴は土坑床面では直径18cm



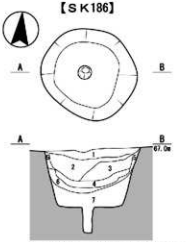
第３図　第２～６次調査区　グリッド設定図（1：2,000）



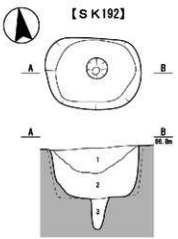
第４図　第２～６次調査区　主要遺構位置略図（１：2,000）



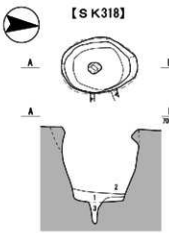
1:7.5YR3/4 暗褐色シルト（7.5YR4/4 褐色粘質土ブロック多混）
2:7.5YR4/2 灰褐色粘質土（炭化物多混）
3:7.5YR4/4 褐色粘質土（炭化物粒多混）
4:7.5YR4/6 褐色粘質土
（1 cmの 7.5YR5/6 明褐色シルトブロック・炭化物混）
5:10YR4/6 褐色粘質土（炭化物混）
6:7.5YR5/6 明褐色粘質土（炭化物粒多混）
7:7.5YR5/4 にぶい褐色粘質土（大きな炭化物多混）
8:10YR5/6 黄褐色弱粘質土（炭化物粒少混）
9:10YR4/6 褐色粘質土（炭化物多混）
10:7.5YR5/6 明褐色粘質土
地山 :7.5YR5/8 明褐色粘質土



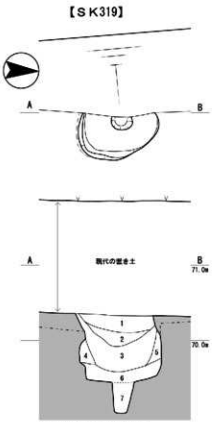
1:7.5YR3/2 ～ 3/3（黒褐～暗褐色）粘質土
（外縁部に炭化物少混）
2:7.5YR4/3 褐色粘質土（しまりやや弱）
3:7.5YR4/4 褐色粘質土（しまりやや弱）
4:7.5YR3/3 ～ 3/4 暗褐色粘質土（炭化物混）
5:7.5YR5/6 明褐色粘質土
6:7.5YR4/6 褐色粘質土と 7.5YR5/8 明褐色粘質土
の混合土（しまりやや強、粘度やや強）
7:地山似（炭化物粒混）



1:7.5YR4/4 褐色粘質土
（炭化物少混）
2:7.5YR5/6 明褐色粘質土
（炭化物多混）
3:7.5YR5/6 明褐色粘質土
（2 層より炭化物多混）
地山 :7.5YR5/8 明褐色粘質土



1:7.5YR5/6 明褐色粘質土
（～ 5mm の炭化物多混）
2:7.5YR5/6 明褐色粘質土
（地山ブロック混）
3:7.5YR5/6 明褐色粘質土
（1・2 層よりやや明）



1:10YR4/2 灰黄褐色粘質土
2:7.5YR4/3 褐色粘質土
3:10YR5/6 黄褐色粘質土
4:10YR4/6 褐色粘質土
5:10YR5/8 黄褐色粘質土
6:10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土
7:10YR5/6 黄褐色砂質土
地山 :7.5YR5/6 明褐色粘質土

0　　2m

第５図　ＳＫ182・186・192・318・319遺構図（１：50）

の略円形だが、下部は細く８×４cmの楕円形となり、深さは底面から30cmである。埋土は基本的に炭化物を含む褐色系粘質土である。

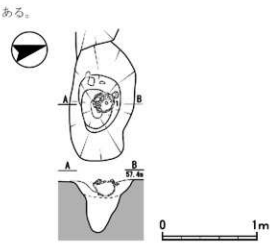
ＳＫ319　第６次調査区の南東部で検出した。調査区外へ続くため全体の形状は不明であるが、平面形はおそらく楕円形を呈し、底面中央の小穴も円形を呈する。規模は検出面では1.05m×0.6m～、底面では0.95m×短径0.5m～、検出面からの深さは0.9m。小穴は直径27cm、深さは40cmである。埋土は黄褐色系粘質土を基本とするが、小穴部分は砂質土である。　（水橋）

4　弥生時代の遺構

ＳＫ６（第６図）　検出段階では西接する土坑と一連のものと判断し、溝としていたが、掘削の結果、長径1.2m、短径0.7mの長円形の土坑であることが分かった。中央部が円形に検出面から50cm落ち込む異様な形態を呈する。埋土は比較的濃い褐色土で差異はないが、この部分を重複する別遺構とし、深さ14cm程度の長円形の土坑としたい。ほぼ完形の台付甕（１）が横倒し状態で、底部に接して出土した。甕は、土坑中央部に長軸に直交する状態で検出され、埋納されたものと考えられるが、その意図は不明である。　（森川）

5　古墳時代の遺構

丘陵上平坦面の調査区で古墳時代の遺構を数多く確認した。古墳55基は第２～６次調査区のほぼ全域に分布し、木棺墓などの墓壙20基は北東部（第５次調査区）に集中する。他に、竪穴建物１棟、土坑がある。



第６図　ＳＫ６遺物出土状況図（１：40）

a　古墳（西山古墳群）

円墳８基、方墳47基の合計55基の古墳が確認された。その分布は、調査区西側に円墳、中央から東半に方墳の集中が見て取れる。

墳丘は削平され、大半は周溝を残すのみであったが、11・16・24号墳では主体部を１基ずつ、45・53号墳でもその可能性のある土坑を確認した。

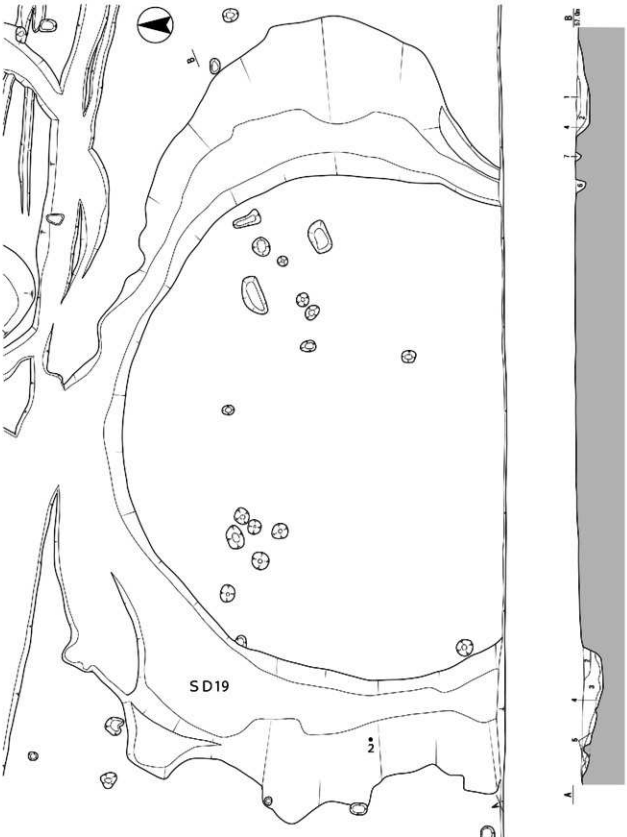
古墳の規模（周溝を含めず）は、方墳では最大の45号墳で16.2×13.5m、最小の53号墳で一辺4.2mで、円墳では、最大の55号墳で14.0m、最小の２号墳で直径8.2m（推定）である。　（水橋）

西山１号墳（ＳＤ19：第７図）

第２次調査西区中央部南端で検出した。調査区外へ続くため全体の形状は不明であるが、ほぼ円形に巡る溝で、円墳の周溝と考えられる。直径は周溝の内側で約13.2mを測り、今回の調査で検出したものとしては大型のものである。検出面からの深さは一様でなく、北部は10cm程度、東西は50cmを測る。周溝底は南に向かうほど徐々に深さを増し、加えて検出面自体も南へ向かって高さを増す結果である。したがって、北部では本来深さがやや浅いところへ、後世の削平が及んで僅かの残存という結果になったものと考えられる。周溝は内側が円形を呈するのに対し、外側は極端な不整形である。したがって、その幅は不均一で、最も広い東側及び西側で４mを測る。北側では１m程度であるが、前述したように削平の影響を考慮しなければならない。ただし、東南側の調査区端では、30cm以上の深さを保つにもかかわらず、幅は１mに急激に狭まっている。この意味するところは、調査区端のため不明である。

他の周溝と比べれば、その残存状況は比較的良好で、周溝断面は墳丘側の急傾斜に対し、外側は緩斜面となる。埋土は褐色から暗赤褐色の粘質土で３層に分かれるが、付近の古墳周溝の最上層に認められる攪乱土は存在しない。土層は西側では外から内へ傾斜しているのに対し、東側は内から外へ傾斜する傾向がある。多少の無理を承知で推測すれば、墳丘は主に東側へ崩壊し、西側では浅い外側から順に埋没していった結果となる。

周溝の残存が比較的良好であるにもかかわらず、遺物の出土は極めて少ない。器形を判断できるもの



1:10YR6/3 にぶい黄橙色土（SD19 埋土）
2:10YR4/4 褐色粘質土（SD19 埋土）
3:7.5YR4/6 褐色粘質土（SD19 埋土）
5:5YR3/3 暗赤褐色粘質土（SD19 埋土）
4:10YR3/4 暗褐色粘質土（SD19 埋土）
6:7.5YR6/4 にぶい橙色土（撹乱）
7:7.5Y5/2 灰オリーブ色腐植土（撹乱）
地山：10YR6/6 明黄褐色粘質土

0　5m

第７図　西山１号墳（ＳＤ19）遺構図（１：100）

としては、西側から出土した須恵器壺の底部（２）及び土師器壺の体部片である。その他では周溝東側及び西側から土師器の小片が若干出土したに止まる。

西山２号墳（ＳＤ８：第８図）

第２次調査西区中央部で検出した。ほぼ円形に巡る溝で、円墳の周溝と考えられる。直径は周溝の内側で約8.2ｍを測り、検出面から周溝の最深部までは20～30㎝で、削平のためか比較的浅いものである。周溝幅は１ｍほどであるが、最も残存が良好な部分では1.4ｍを測る。埋土は褐色粘質土であるが、上層が黒褐色の攪乱土になる箇所も西側・東側を中心に認められる。おそらく周溝の最終埋没が近代以降に下った結果と考えられる。１号墳と３号墳に挟まれるかたちで隣接するが、その間隔は１ｍ程度の非常に近接したものである。まとまった遺物の出土はなく、北側の周溝から受部1/4程度残存の須恵器杯身（３）、須恵器蓋・無蓋高杯の小片が出土するに止まる。

西山３号墳（ＳＤ７：第８図）

第２次調査西区中央北端部で検出した方墳の周溝と考えられる溝である。北東辺は調査区外であるが、北東側ほど削平が強く調査区端付近では消滅する。ただし、調査区外には谷が迫っているため、北東辺は谷に落ち込み、当初から北東辺の設定がなかった可能性もある。周溝の内側で7.5ｍを測り、周溝幅は１～２ｍで不均一である。これは削平が影響した結果と考えられるが、周溝の内側は直線的な方形を呈するのに対し、外側はやや円弧状に外に張り出す傾向を認めることができる。深さは残存の良好な部分でも検出面から20㎝程度で、埋土は褐色から暗褐色の粘質土である。ただし、東南辺から南西辺にかけてこれと重複する攪乱層があり、周溝の完全な埋没が近代以降に下ることを示している。北西辺の北西側の埋土である黒褐色粘質土（第８図１層）についても、東南辺と類似した状況から攪乱層と判断できなくもないが、その確証は得られなかった。ここでは一応ＳＤ７の埋土としておくが、その埋没時期は古墳時代から相当下る可能性がある。

遺物は東南辺から南西辺にかけて出土しているが、いずれも須恵器蓋・土師器の小片で、唯一図示できたものが西隅付近で出土した須恵器杯身（４）である。

西山４号墳（ＳＤ15：第９図）

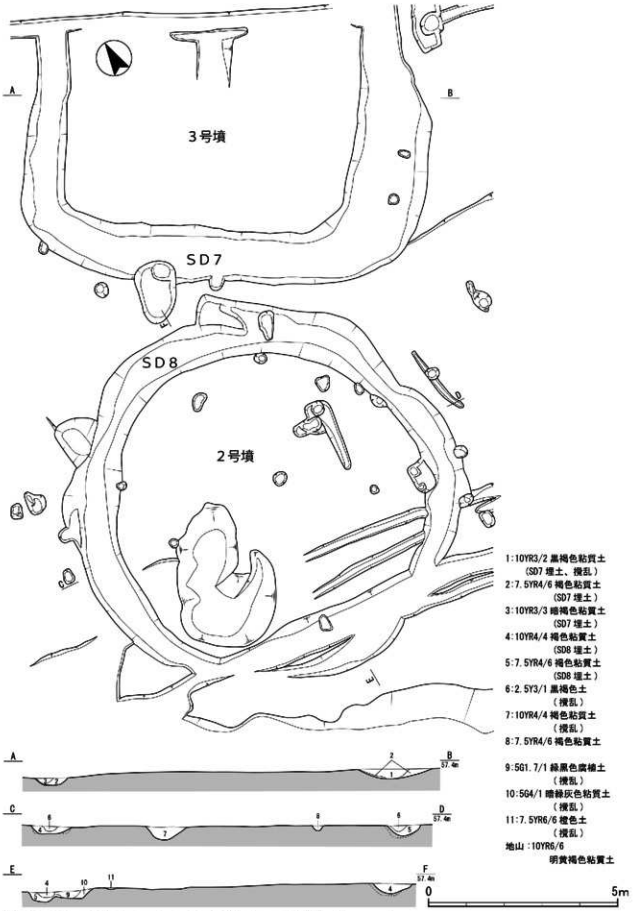
第２次調査西区中央部で検出したが、削平が激しく、他の遺構や攪乱溝との重複もあり、原形を止めていない。西側が削平のため完全に消滅しているが、周溝内側で直径12ｍの円墳と考えられ、１号墳に次ぐ規模である。周溝幅は、最も残りの良い北東側で3.3ｍを測るが、この部分でも深さは検出面から30㎝ほどしかない。埋土は褐色粘質土で、上下２層に分かれ、周溝の自然な埋没を示しているが、２・３号墳にみられるような最上層が攪乱層になることはない。

劣悪な残存状況にもかかわらず、比較的多くの遺物が出土した。遺物は東側から南側にかけて出土し、北側からの出土はない。周溝東側には須恵器蓋杯・高杯等が集中して出土しているが、底から10㎝ほど浮いた状態で、完形に近いものもなく、埋納とは判断し難い。その北側にでは須恵器甕体部片が多く出土し、体部の1/8程度まで接合できた（17）。他にも同一個体と考えられる破片があり、埋納されていたものが削平の影響を受けたものかもしれない。周溝南東側では、1.5～2.0ｍ間隔で須恵器の杯蓋（５）・杯身（10）・蓋（16）の３個体が出土している。３個体とも完形またはほぼ完形であるが、底から10～20㎝浮いた状態で、蓋と杯身は倒立状態である。原位置を保っていないものと判断できるが、埋納されたものか、または墳丘上から転落したものと考えられる。

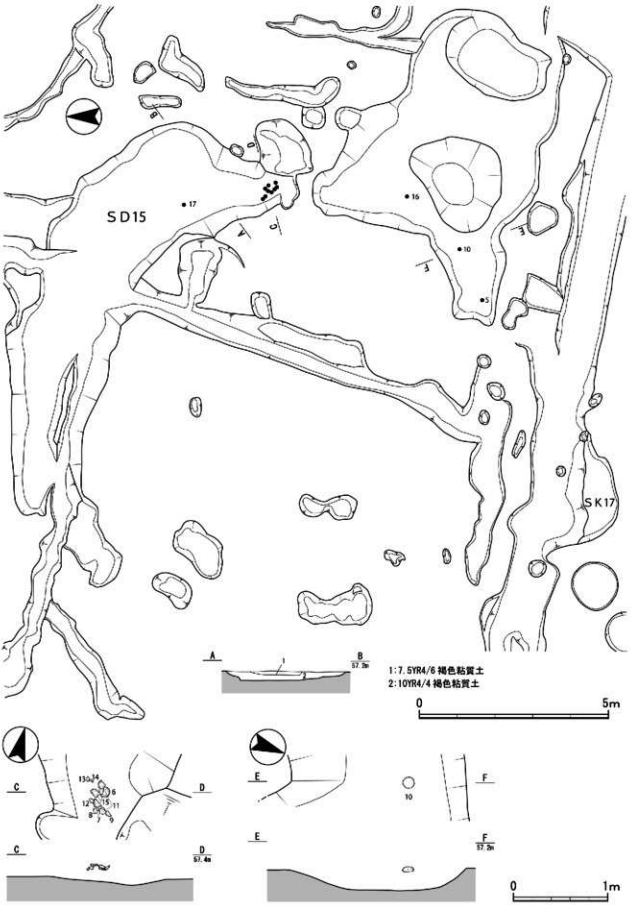
なお、攪乱溝を挟んで対岸のＳＫ17も周溝の一部と推測するに無理がない。

西山５号墳（ＳＤ９：第10図）

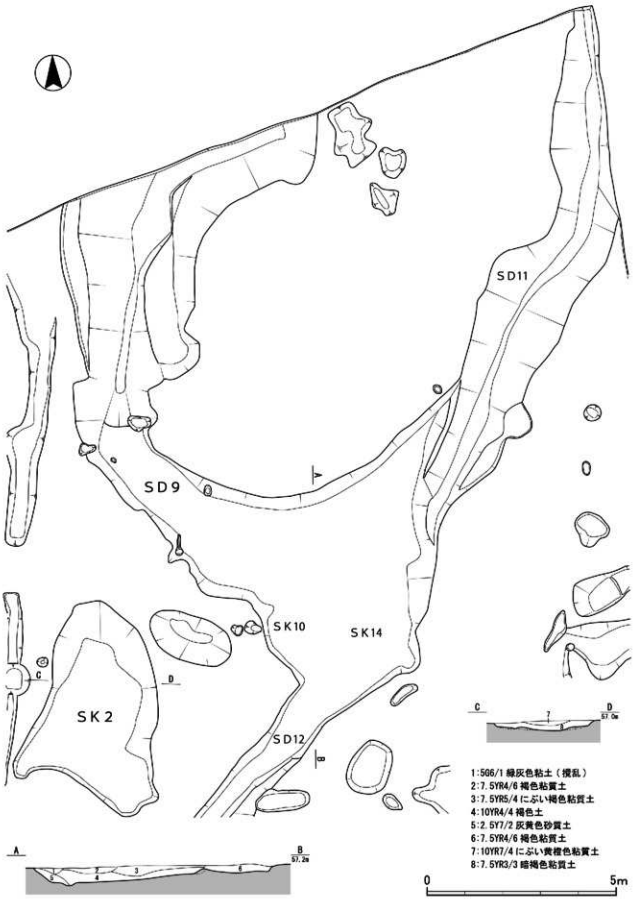
第２次調査西区北端部で検出した。他の遺構との重複もあり、周溝の一部を確認したに止まるが、周溝の内側で直径９ｍほどの円墳と推測した。調査区北側に深い谷が迫り、それに向っての傾斜が始まる地点に位置することから、当初から北側はなく、馬蹄状を呈する周溝であったと考えられる。周溝は、墳丘側が急傾斜となり、１号墳と同様な形状を呈するが、残存部で見るかぎり１号墳に見られるような周溝外側の平面上の乱れはない。深さは墳丘側で検出面から40㎝を測り、他のものと比べ良好な残存である。北東側と北西側では、周溝底が深く抉れてお



第８図　西山２号墳（ＳＤ８）・西山３号墳（ＳＤ７）遺構図（１：100）



第９図　西山４号墳（ＳＤ15）遺構図（１：100）・遺物出土状況図（１：40）



第10図　西山５号墳（ＳＤ９）・ＳＫ２遺構図（１：100）

り、北西側では東に回り込み、北東側ではＳＤ11となり、そのまま谷へ落ち込む様相を呈する。おそらくＳＤ12からＳＫ14を経由してＳＤ11に至る流路があり、ＳＤ12もそれを利用して掘削されたものと仮定したい。元来、この筋は水が流れ易い状態にあったためにと、水流が周溝に流入し、それが二筋に分かれて周溝を侵食したものと推測される。したがって、北側は周溝本来の形状を示していない。南側もＳＫ14と重複するが、それより後出のため土層で観察でき、周溝幅は、4.5ｍを測る。埋土の主体は褐色土であるが、それより先に墳丘側に灰黄色砂質土の堆積があり、墳丘からの崩落と考えられる。その後の埋没は、外側から内へと進み、最も内側は攪乱土となり、ここでも最終埋没は近代以降に下る。

周溝が比較的深いにもかかわらず、遺物の出土は須恵器・土師器の小片に止まり、埋納等は確認できない。ＳＤ11から須恵器杯蓋の天井部（344）などが出土しているが、前述した状況から周溝に属する可能性が高い。（森川）

西山６号墳（ＳＤ54：第11図）

第２次調査東区西側で検出した方墳の周溝と考えられる溝である。他の古墳と同様に盛土部分は全て削平され、周溝のみを残す。周溝幅は均一にちかく、約１ｍである。周溝内側では東西8.3ｍ、南北8.5ｍの規模で、ほぼ正方形を呈する。検出面からの深さは北溝で25㎝、西溝で18㎝、南溝で８㎝、東溝で13㎝を測り南溝が浅く北溝が深い。埋土は灰色の強い褐色土である。深い北側では下層を有し、にぶい黄橙～黄褐色粘質土となるのに対し、南溝には下層が露呈する様子がない。地形も段丘縁の北側へ向かうにつれて若干の登り傾斜となっており、南溝が浅いのは削平によるものではなく、本来から浅かったものと考えられる。

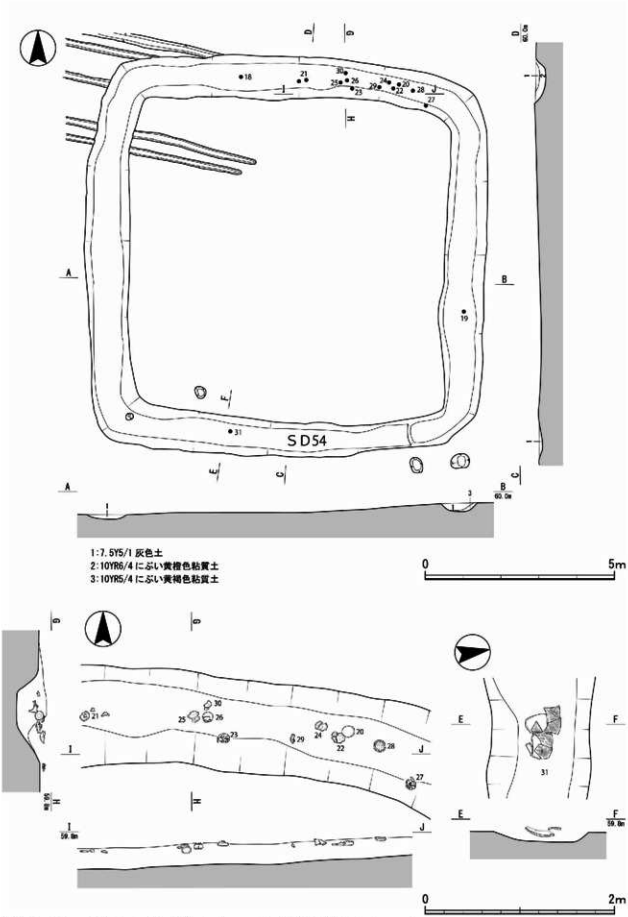
東西両溝からは埋納と思われる遺物の出土はなく、土師器高杯の脚片（19）が出土したに止まる。南溝では、中央やや西寄りで須恵器甕の体部片（31）が集中して出土した。接合の結果、体部1/5ほどしか復元できなかったが、出土状況から埋納されたものと考えられる。下方の破片は内側を上に、上方の破片は内側を下に向けて出土し、全体として何かを包み込むような状態にも見える。溝底部からは６㎝浮いた状態ではあるが、周溝掘削後、若干の時間を経て埋納されたものと考えられる。

北溝では、溝の東端から中央にかけて12個体（18・20～30）の遺物が不整列・断続的に連なって出土した。西端のものは土師器壺（18）であるが、細片に分かれ、残存率も悪いため、他のものと同一範疇で考えるべきではないかもしれない。他は全て須恵器で、杯蓋１個、高杯蓋２個、壺１個、有蓋高杯２個、杯部片３個、脚部片２個である。その内、杯蓋（20）、高杯蓋（22）、有蓋高杯（24・25）が完形またはほぼ完形であるが、出土状況は正立（20・25）、倒立（22）、横転（24）があり様々である。また、壺（21）は細片に分かれていたが接合の結果、完形となった。他のものも杯部と脚部が分離しているものの、それぞれの残存状況は良好である。これらの出土高は揃っており、溝底部から15㎝ほど浮いた状態である。このため遺物上端は検出面と同等またはそれ以上の位置となり、遺物上部は後世の攪乱を受けている。これらの状況から、蓋が被せられた壺や高杯が溝内に埋納、または墳丘に設置されたものが転落したものと推測される。その時期は、周溝掘削からある程度経過した頃である。

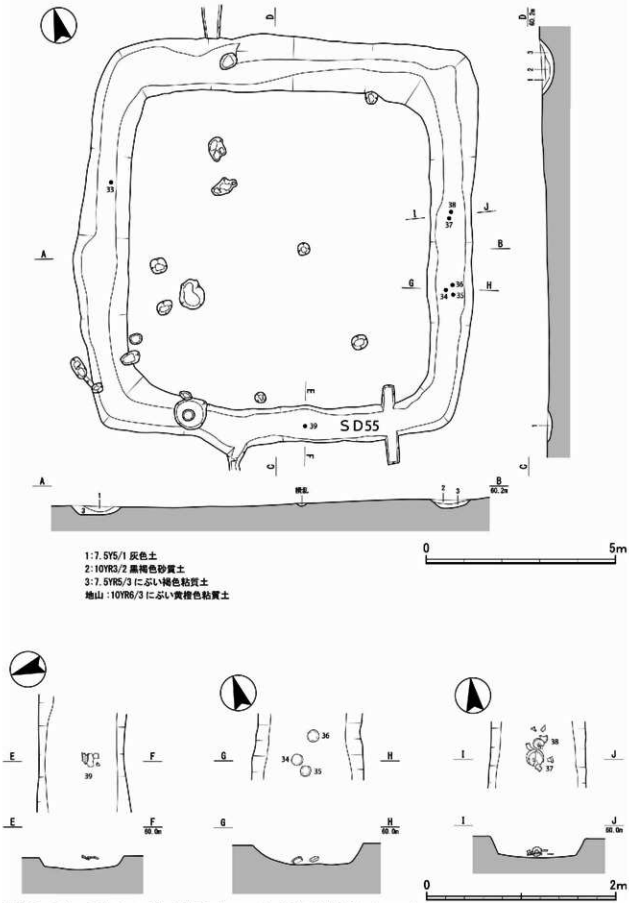
西山７号墳（ＳＤ55：第12図）

西山６号墳の東側で検出した方墳の周溝と考えられる溝である。他の古墳と同様、盛土部分は全て削平され、周溝のみを残す。規模は周溝内側で東西7.9ｍ、南北8.3ｍ、周溝幅は約0.9～1.5ｍで、６号墳と同様に北溝の幅が広く南溝が狭い傾向がある。検出面からの深さは北溝で37㎝を測るが、南溝では10㎝程度である。埋土は最上層が灰色土で、攪乱と類似する。浅い南溝はこの層のみである。最も深い北溝では、この下に２層を数えるが、自然埋没の様相を呈する。これらから、南溝が浅いのは、６号墳と同様、削平によるものではなく、本来浅かったものと考えられる。

東溝の２ヶ所で埋納と考えられる須恵器が出土している。一つ目は、いずれも完形の須恵器で、正立状態の杯蓋１個体（34）と、倒立状態の杯身２個体（35・36）が溝底に接して置かれていた。蓋を容器とすれば、いずれも伏せるかたちとなる。周溝掘削後に何らかの祭祀が行われたことを彷彿させる。な



第11図　西山６号墳（ＳＤ54）遺構図（１：100）・遺物出土状況図（１：40）



第12図　西山７号墳（ＳＤ55）遺構図（１：100）・遺物出土状況図（１：40）

お、この杯身２個体には、両者ともに底部外面に４～５本の直線が焼成前に刻まれている。

その北側に２m離れて須恵器甕（38）と須恵器無蓋高杯（37）が接するように出土している。甕は横倒し、高杯は倒立で、幾つかの破片に分かれている。接合の結果、ほぼ完形に復元できたが、原位置を保っている可能性は低い。出土位置は溝底にほぼ接しており、周溝掘削後に溝底に置かれたか、古墳完成後まもなく、墳丘から転落したものか判断できない。西溝からは、土師器甕（33）の口縁部片、南溝からは須恵器甕（39）が1/4の残存状態で出土しているが、本来の状況を推測できる状態ではない。ただし、甕の西側では須恵器甕か壺の体部片が多数出土している。接合を試みたが、完形からほど遠い結果であった。なお、北溝からは特筆すべき遺物は出土していない。（鈴木）

西山８号墳（ＳＤ53：第13図）

ＳＤ53は、ほぼ正方形に巡る溝で、溝の内側で南北約8.3m、東西約9.1mを測る方墳の周溝と考えられる。北側の10号墳周溝ＳＤ58とは１m未満の間隔で近接する。検出面から溝の最深部までは、四辺とも約35cm、各辺の溝幅は各辺値で約1.3mから1.8mを測りほぼ均一である。北辺から東辺にかけて、溝と重なる形で攪乱溝が巡る。この溝はＳＤ53が近代以降においても完全に埋没せず、その窪みを踏襲したものと考えられる。当初、ＳＫ56との重複部において、この溝をＳＤ53と誤認して掘削したため、本来ＳＫ56に伴う遺物が多く混入する結果を招いた。ＳＫ56完掘後にその底部からＳＤ53が検出でき、したがって、この部分は強い削平を受けている。主体的な埋土は灰黄褐色粘質土で、四辺の全てで認められる。なお、西辺と南辺の埋土最上層の灰色土も近世以降の可能性がある。

西溝の南部では、ほぼ底に接して、土師器壺（41）と須恵器鉢（61）が南北に接して出土した。土圧で潰れているものの成立状態で並べられたものと推測される。特に須恵器鉢は、盌形土器と称される出土例の稀なもの[9]である。南辺では２個体の須恵器甕（58・59）が口縁部を欠いた状態で出土しているが、溝底から浮いた位置である。この位置は前述した近世以降の埋没を推測できる層にかかっている。周溝の埋没が進んだ時期に墳丘から転落したものか、墳丘削平時の災いであろうか。さらに残存度の悪い甕（60）がもう１個体あり、東溝から出土した破片と接合している。その東溝からは比較的多くの遺物が出土したが、多くはＳＫ56からの混入である。須恵器の蓋杯・壺が出土しているが、原位置を保ったものはなく、遺物の残存度も悪い。ただし、壺（57）は底部を除きほぼ完形に接合でき、近接する西山10号墳周溝出土遺物とも接合している。故意に破砕されたものが飛び散ったのか、墳丘削平時の災いか。

一方、西山10号墳と近接する北溝からは、特筆すべき遺物の出土はない。ただ、土師器甕（42）の口縁部から体部上半片が溝底に接して出土している。（森川）

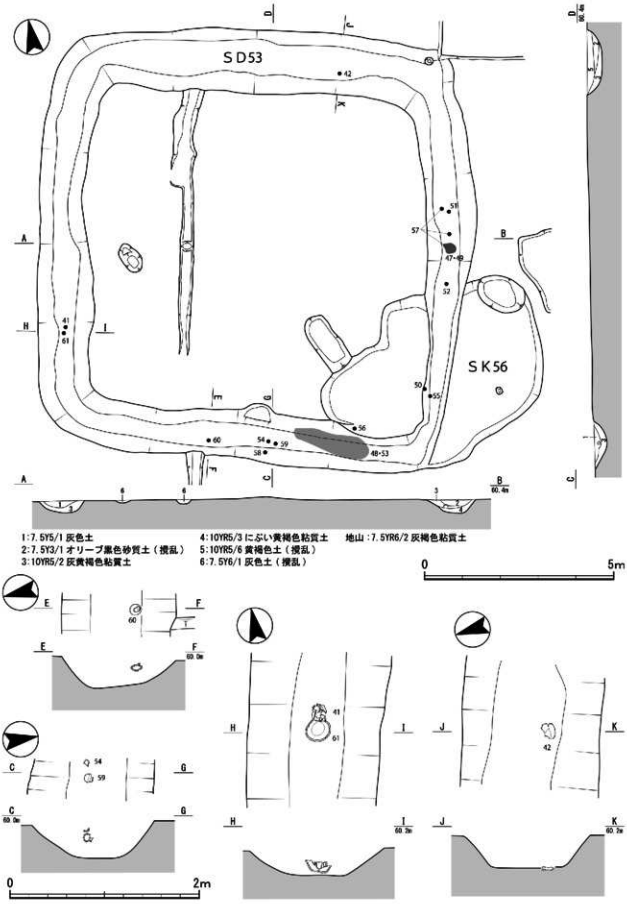
西山９号墳（ＳＤ52：第15図）

８号墳から７m南に位置する方形に巡る溝で、方墳の周溝と考えられる。規模は周溝内側で約６mを測り、近隣の古墳と比較すると小型のものである。周溝内側は４辺とも直線的であるのに対し、外側は隅がやや丸味を呈し、外側に弧状に張り出す部分もある。したがって周溝幅は一定ではなく、0.5～1.4mを測るが、概ね１m前後である。検出面からの深さは約15cmで、削平が進んだ結果とはいえ近隣のものより浅い。なお、埋土は褐色粘質土１層を数えるのみである。

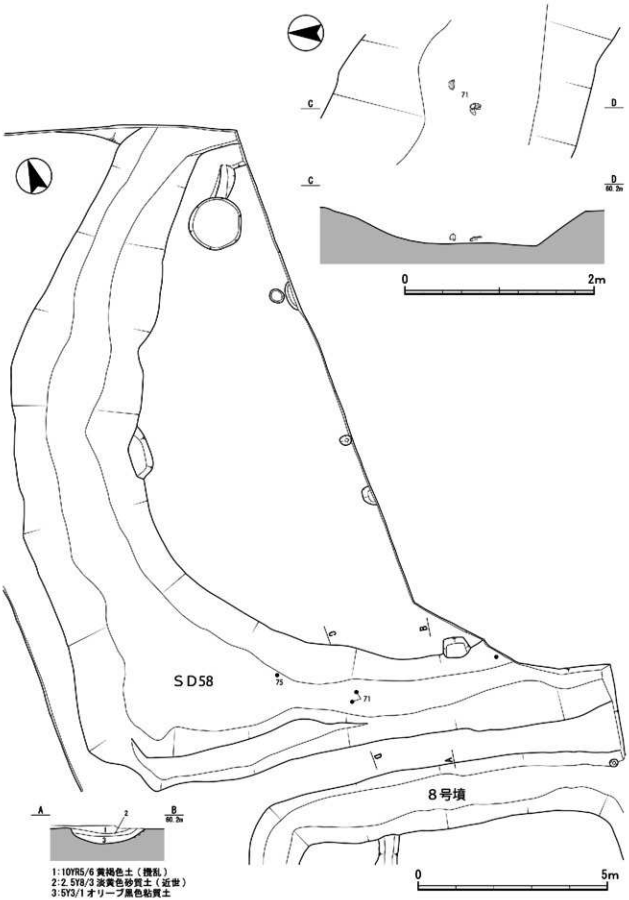
南東溝の中央部と東隅の２ヶ所から、完形の土師器の椀がそれぞれ１個体出土した。底から若干浮いた状態ではあるが、周溝掘削後まもなくの埋納と考えられる。埋納状況は南西溝のもの（64）が正立、東隅のもの（63）が倒立で、正反対の様相を示す。その意味するところは不明であり、墳丘からの転落の可能性も考えるべきかもしれない。

西山10号墳（ＳＤ58：第14図）

第２次調査東区北端の段丘縁で周溝を検出した。検出時点での形状は外側が方墳、内側が円墳の形状を呈する。深さは検出面から50cmを測り、近隣のものより深い。埋土は３層に分かれるが、上部２層は攪乱または近世以降の堆積である。最下層は厚さ20cmの黒色土系の埋土で、この層は北部には存在せず、底まで近世以降の埋土が主体となる。全体的に周溝が深いためか、完全に埋没したのは近代以降である。



第13図　西山８号墳（ＳＤ53）遺構図（１：100）・遺物出土状況図（１：40）



第14図　西山10号墳（ＳＤ58）遺構図（１：100）・遺物出土状況図（１：40）

調査時には上層２層を「上層」、最下層を「下層」として２分割で掘削し、それぞれ区別して遺物を取り上げている。周溝北端部は段丘縁と同化するが、その延長上は麓の集落から段丘上へ登る里道に繋がっている。このことから、周溝が完全に埋没する時期を待たずに溝の窪みを里道として利用し、大きく東へ回り込んで段丘上に登りつめ、畑作等に寄与していたものと判断できる。下層出土遺物にも時期差があることから、この里道の利用が古墳時代後期まで遡る可能性もあり、周溝の形状も早い段階から改変された可能性も高い。

以上により、周溝形状を注視すると、南側は８号墳（ＳＤ53）と並ぶように周溝外側が直線状で、それから直角に北に折れ直進する。これを重視して、周溝外辺で一辺12.5ｍの方墳と考えたい。西辺は送電線の基礎のため不明、北辺は、段丘縁で傾斜も始まっていることに加え、後世の改変も加わり本来の形状が残存していない。周溝幅は南辺が本来の幅を残しているものとし、幅２ｍである。

須恵器蓋杯・鼎・壺・甕等、比較的多くの遺物が出土しており、全て南側に分布する。近世の攪乱が北部では溝底まで及んでいることの影響かもしれない。南側に分布する遺物も完形で出土したものはなく、原位置を保つものはない。接合の結果、比較的残存度の良好なものもが多いが、第14図に出土状況を示した須恵器杯身（71）は接合の結果、完形に復元できている。（鈴木）

西山11号墳（ＳＤ67・68・ＳＫ303：第16～18図）

直径12.5ｍ（周溝を含めず）の円墳で、第３次調査区南壁際で周溝北半を、第６次調査区西端付近で周溝南半と主体部ＳＫ303を確認した。周溝は、北西部分が５ｍほど土橋状に途切れ、その東側は幅3.5ｍと広く、西側は幅1.5～1.9ｍで細い。深さは20～35㎝である。埋土は自然堆積したとみられる粘質土で、基本的に上から褐色土、黒褐色土、（明）褐色土に分層できた。遺物は、周溝北半部の中～上層に集中していた。

遺物は、飛鳥時代の土器が大量に含まれるが、土師器甕・須恵器（蓋杯・高杯・鼎・壺・横瓶）など、合計コンテナケース14箱分ほど出土した。飛鳥時代になって古墳北方に建てられた竪穴建物や掘立柱建物で使われた土器が、ある程度埋没していた周溝の凹みへ捨てられたものと推測される。

主体部は、周溝で囲まれた範囲のほぼ中央で１基認められた。長さ3.1ｍ×幅0.54ｍの平面隅丸方形で、検出面からの深さは18㎝。埋土は炭化物粒や白色粘土小塊を含む。幅が非常に狭いことから、木棺痕跡のみを検出した可能性があると考え、外側へトレンチを延ばし、最終的には大規模に断ち割ったが、何も確認されなかった。主体部の内側からは、15㎝大の円礫が、東端から３個、西端近くの底面から１個出土した。棺を固定するためのものと推測される。主体部から遺物は出土しなかった。

西山12号墳（ＳＤ63：第19図）

東西9.6ｍ×南北9.3ｍの方墳で、周溝のみ残存していた。周溝は概ね幅1.6ｍ、深さ20㎝の断面逆台形を呈する。埋土は基本的に褐色粘質土である。

遺物としては、西溝から土師器甕（133）や須恵器壺（135）が、北溝から砥石、北東隅の周溝から須恵器高杯（134）などが出土した。

西山13号墳（ＳＤ206：第20図）

南半分が完全に削平を受けているため全容は不明だが、直径12.3ｍ（推定）の円墳。周溝の規模は、状態の良い場所で、幅1.2ｍ、深さ20㎝である。埋土は基本的に褐色粘質土である。

土師器の小破片が６点出土した。

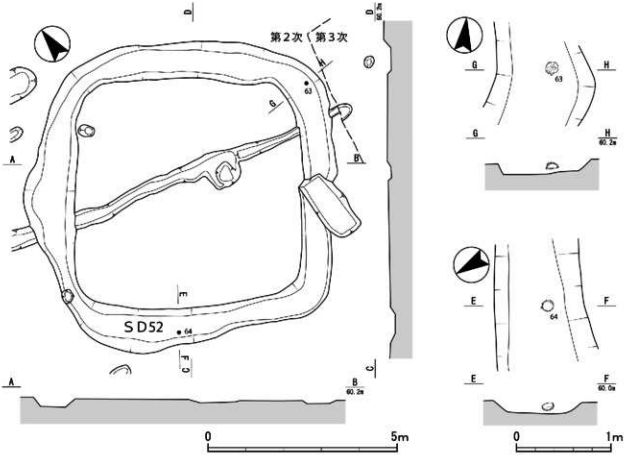
西山14号墳（ＳＤ86：第21・22図）

一辺11.8ｍの方墳で、周溝のみ残存していた。周溝は概ね幅2.0ｍ、深さ50㎝の断面逆台形を呈する。埋土は基本的に褐色粘質土である。

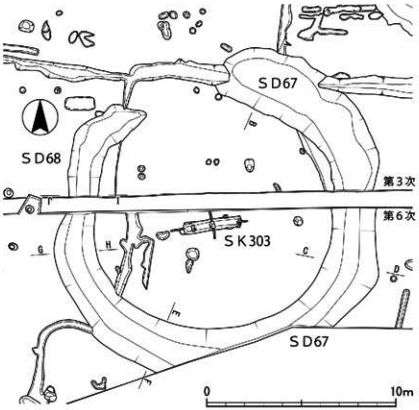
遺物としては、北溝で土師器高杯や須恵器甕、東溝で土師器高杯（137）や須恵器蓋（140）、南溝で土師器甕、南西隅で須恵器甕が出土した。北溝の土師器高杯（139）は、中央付近の底直上から正位置で出土した。

西山15号墳（ＳＤ87・89・90：第23図）

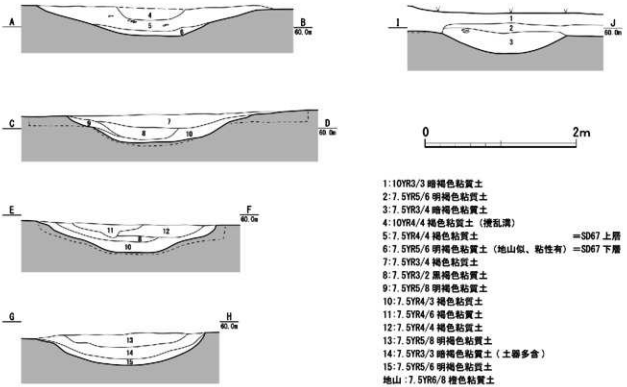
東西7.6ｍ×南北7.5ｍの方墳で、周溝のみ残存していた。周溝は場所によって様相が異なり、北溝は幅1.7ｍ、深さ35㎝の断面逆台形を呈するのに対し、東溝は幅0.8ｍ、深さ20㎝、南溝は幅1.1ｍ、深さ30㎝で、どちらも断面U字形を呈し、北溝より鋭角である。西溝については、第４次調査範囲では不連続



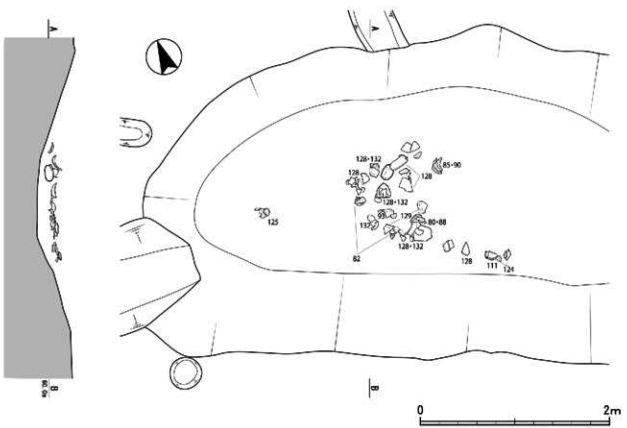
第15図　西山９号墳（ＳＤ52）遺構図（１：100）・遺物出土状況図（１：40）



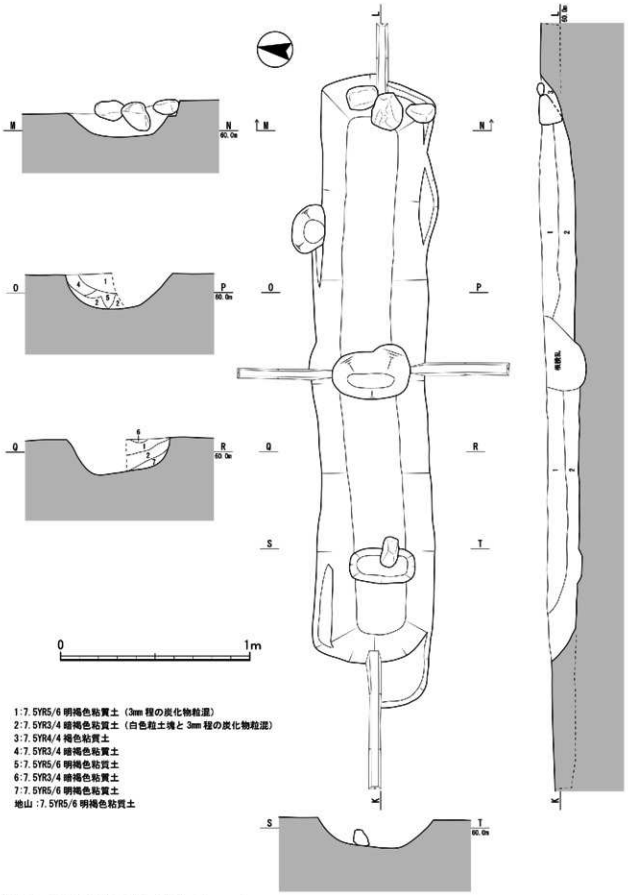
第16図　西山11号墳（ＳＤ67・68・ＳＫ303）遺構図（１：200）



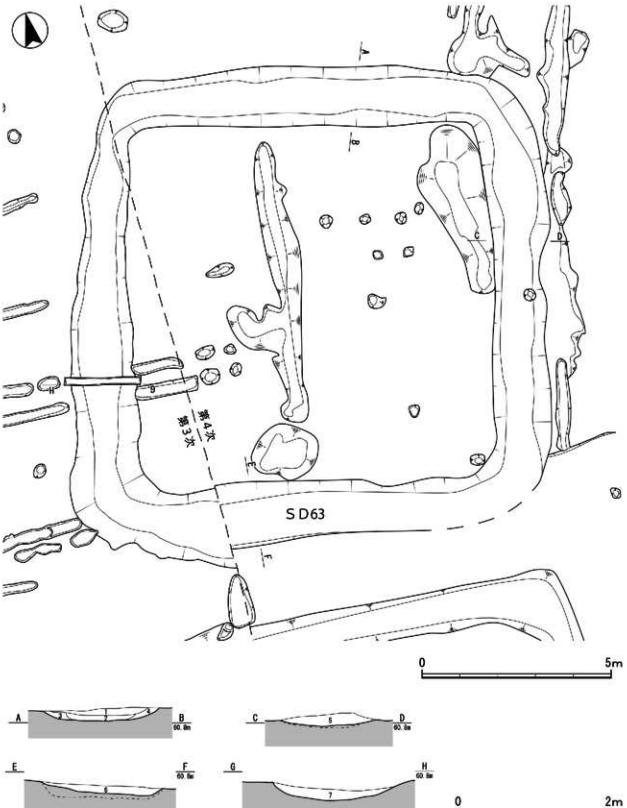
1:10YR3/3 暗褐色粘質土
2:7.5YR5/6 明褐色粘質土
3:7.5YR3/4 暗褐色粘質土
4:10YR4/4 褐色粘質土（撹乱溝）
5:7.5YR4/4 褐色粘質土　　＝SD67 上層
6:7.5YR5/6 明褐色粘質土（地山似、粘性有）＝SD67 下層
7:7.5YR3/4 褐色粘質土
8:7.5YR3/2 黒褐色粘質土
9:7.5YR5/8 明褐色粘質土
10:7.5YR4/3 褐色粘質土
11:7.5YR4/6 褐色粘質土
12:7.5YR4/4 褐色粘質土
13:7.5YR5/8 明褐色粘質土
14:7.5YR3/3 暗褐色粘質土（土器多含）
15:7.5YR5/6 明褐色粘質土
地山 :7.5YR6/8 橙色粘質土



第17図　西山11号墳　土層図（1：50）・遺物出土状況図（1：40）

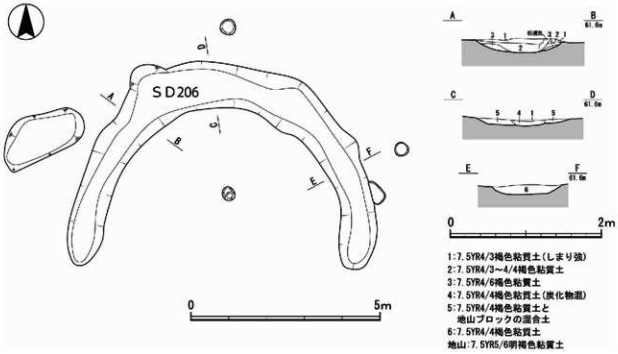


第18図　西山11号墳主体部　遺構図（1：20）

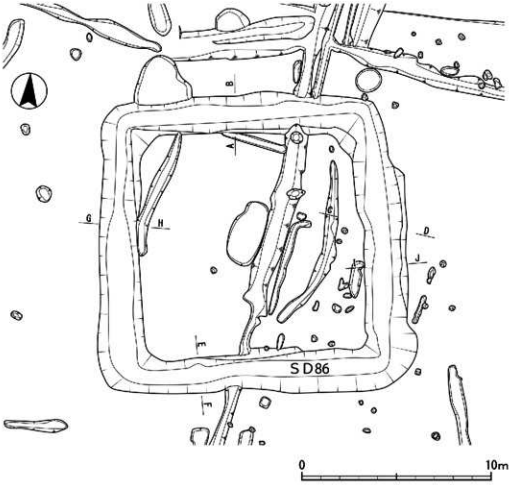


1:7.5YR4/4 褐色粘質土
2:7.5YR4/3 褐色粘質土
3:7.5YR4/6 褐色粘質土
4:7.5YR5/6 明褐色粘質土
5:7.5YR4/4 褐色粘質土（～1mmの炭化粒混）
6:7.5YR5/6 明褐色粘質土（地山似）
7:7.5YR4/6 褐色粘質土（しまり良）
地山:7.5YR5/6 明褐色粘質土

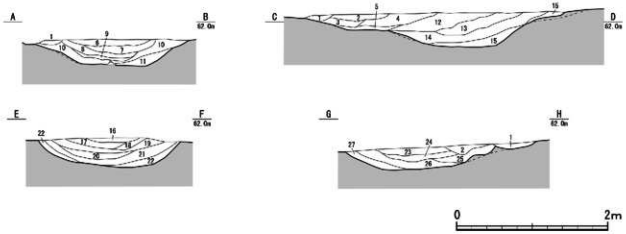
第19図　西山12号墳（ＳＤ63）遺構図（1：100）・土層図（1：50）



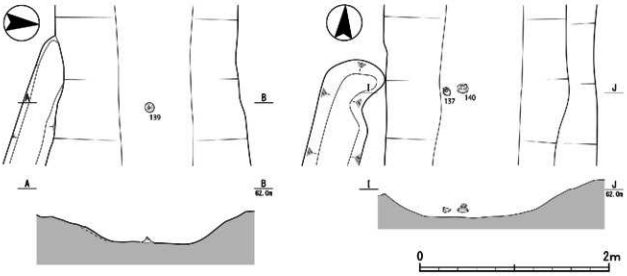
第20図　西山13号墳（ＳＤ206）遺構図（１：100）・土層図（１：50）



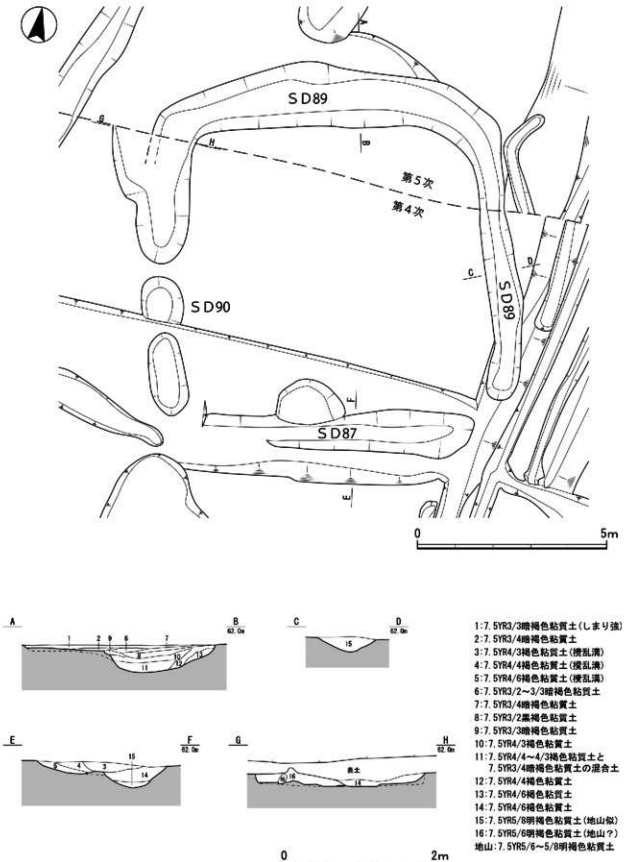
第21図　西山14号墳（ＳＤ86）遺構図（１：200）



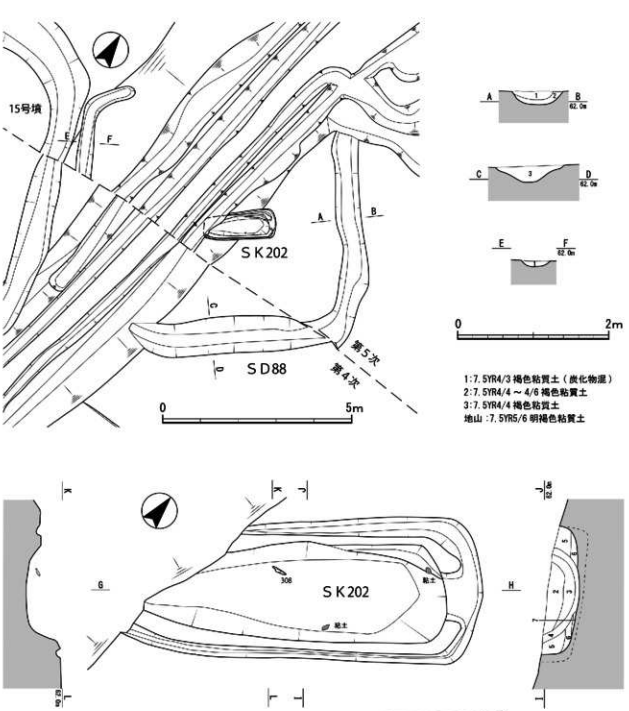
1:7.5YR4/6褐色粘質土
2:7.5YR5/6明褐色粘質土(やや灰)
3:7.5YR5/6明褐色粘質土(やや灰:2層似)
4:7.5YR5/6明褐色粘質土(やや灰)
5:7.5YR4/6明褐色粘質土(やや茶)
6:7.5YR5/6明褐色粘質土
7:7.5YR4/4褐色粘質土
8:7.5YR4/4褐色粘質土(7・9層よりやや淡)
9:7.5YR4/4褐色粘質土
10:7.5YR4/6褐色粘質土
11:7.5YR5/8明褐色粘質土(地山似)
12:7.5YR5/6明褐色粘質土
13:7.5YR4/6褐色粘質土
14:7.5YR4/4褐色粘質土
15:7.5YR4/6褐色粘質土
16:7.5YR4/6褐色粘質土
17:7.5YR4/4褐色粘質土
18:7.5YR4/6褐色粘質土(16層よりやや暗)
19:7.5YR4/6褐色粘質土(やや黄)
20:7.5YR4/6褐色粘質土
21:7.5YR4/6褐色粘質土(20層よりやや淡)
22:7.5YR5/6明褐色粘質土(地山似)
23:7.5YR5/6明褐色粘質土
24:7.5YR5/6明褐色粘質土(23層よりやや黄)
25:7.5YR4/6褐色粘質土
26:7.5YR4/6褐色粘質土(炭混、25層より淡)
27:7.5YR5/8明褐色粘質土(地山似)



第22図　西山14号墳　土層図（1：50）・遺物出土状況図（1：40）



第23図　西山15号墳（ＳＤ87・89・90）遺構図（1：100）・土層図（1：50）



第24図　西山16号墳（ＳＤ88・ＳＫ202）遺構図（１：100）・土層図（１：50）、主体部詳細図（１：20）

で溝底高も一定せず、北壁付近で幅広になるなど不定形で、第５次調査で確認できた形状と齟齬が認められる。これは、周溝理土と地山とが非常に似通っていたため、第４次調査の際に、上層の影響を受けた地山を周溝理土と誤認し掘りすぎた可能性がある。

遺物としては、北溝中央付近の中位（８・９層）でガラス玉（143）、東溝で土師器高杯（141）、南溝で須恵器直口壺（142）などが出土した。南溝は、掘削後の形状と断面観察により、攪乱溝が重複していることが判明した。直口壺の出土層位（３層）は攪乱溝の範疇になるが、本来、15号墳に属していたものと推測される。

西山16号墳（ＳＤ88・ＳＫ202：第24図）

概ね東西6.5m×南北6.0mの方墳。中央から西側にかけての広い範囲が近世の攪乱溝によって破壊されているが、周溝と主体部が確認された。

周溝は場所によって残存状態が異なり、北西隅付近は幅0.4m、深さ７cm、東溝は幅0.6m、深さ15cmでどちらも断面逆台形を呈する。南溝は幅0.9m、深さ20cmで、断面形状は他よりも鋭角である。埋土は基本的に褐色系の粘質土であるが、近接する15号墳とは明確に異なる色調であった。周溝からの出土遺物はない。

主体部は、周溝で囲まれた範囲の中央やや南寄りに位置する。近世の攪乱溝によって西端が破壊されているため、全容は不明だが、掘形は長さ1.9m以上×幅0.7mの平面隅丸方形を呈する。深さは約20cm。掘形内部には、丸味を帯びた断面形状の木棺痕跡が認められた。長さ1.6m以上、幅0.5mで、木棺痕跡の下面は掘形床面に接している。木棺痕跡の周囲では、土壙墓で木棺固定用に認められたものと同質の粘土が確認されたが、量は非常に少ない。

頭位については、掘形と木棺の幅が若干広いことから東側と推測される。

遺物としては、木棺痕跡内側の中央やや北寄りから鉄製品が１点出土した。

西山17号墳（ＳＤ84：第25図）

一辺6.5mほどの方墳で、周溝のみ残存していた。南溝で周溝が一部途切れているが、残存状態が悪いためと思われる。周溝は、状態の良い北西隅付近で幅1.0m、深さ30cmほどである。埋土は（明）褐色粘質土である。

遺物としては、西溝や南東隅付近の周溝から土師器の甕が少量出土した。

西山18号墳（ＳＤ201：第27図）

一辺6.3mほどの方墳で、周溝のみ残存していた。周溝が北東隅で途切れているが、一次調査で掘りすぎたためと推測される。周溝は、幅1.0m、深さ20cmほどで、埋土は基本的に褐色系の粘質土である。

遺物としては、北西隅で土師器甕（145）が溝底面から10cmほど浮いた状態で出土した。他に、土師器（高杯・小型壺？）、須恵器片がある。

西山19号墳（ＳＤ203：第28図）

攪乱溝による破壊や西側の谷への土の流出により、全容は不明であるが、東西8.1m以上×南北10.5mの方墳である。周溝は、幅2.0m、深さ30cmほどの規模で、埋土は基本的に褐色粘質土である。

遺物としては、東溝の北端付近で須恵器甕（147）が溝底面から10cmほど浮いた状態で出土した。他に土師器（甕・高杯・椀？）がある。

西山20号墳（ＳＤ196：第29図）

北東側の谷へ土が流出してしまったためか北溝は検出されなかったが、一辺10.5mほどの方墳と推測される。周溝は、幅2.0m、深さ30cmほどの規模で、埋土は基本的に褐色粘質土である。

遺物としては、南西隅付近で須恵器樽形甕（150）が出土した。他に、土師器の小片が少量ある。

西山21号墳（ＳＤ195：第30・31図）

10.5m×10.0mの方墳。北隅は周溝が途切れるが、谷へ土が流出してしまったためと推測される。周溝は概ね幅1.5m、深さ30cmの規模で、埋土は基本的に褐色粘質土である。

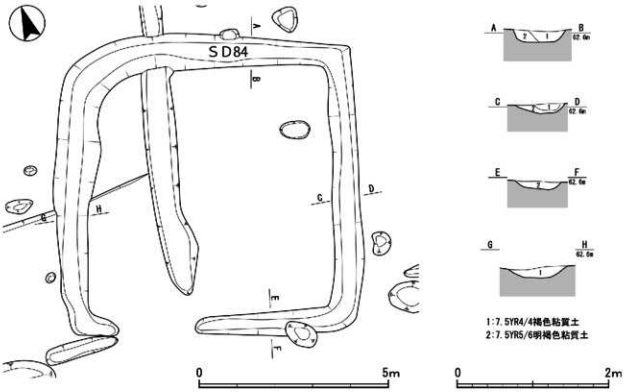
遺物としては、四周すべての溝から埴輪が出土した。埴輪は、溝底から10～15cmほど浮いた位置で、バラバラに割れていた。本来は墳丘に据えてあったものであろう。他に土師器甕もある。

西山22号墳（ＳＤ194：第32図）

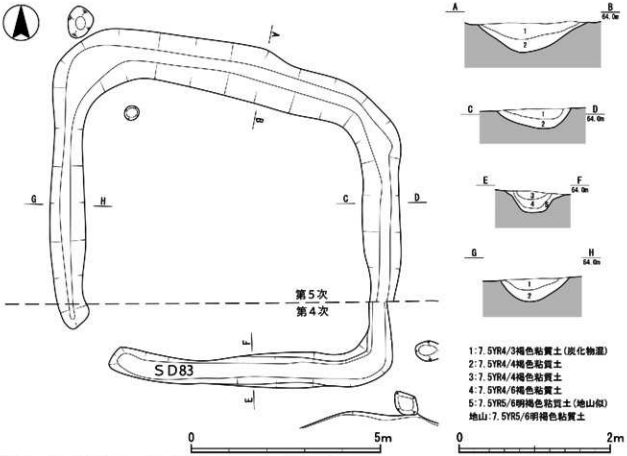
5.9m×5.3mの方墳で、周溝のみ残存していた。周溝は概ね幅0.8m、深さ15cmの断面逆台形を呈する。埋土は基本的に褐色粘質土である。

遺物としては、土師器の小片が少量出土した。

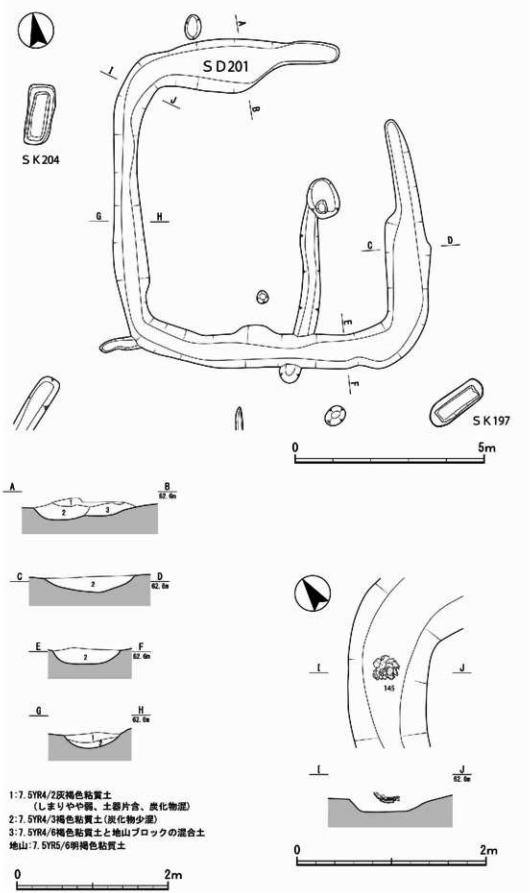
西山23号墳（ＳＤ83：第26図）



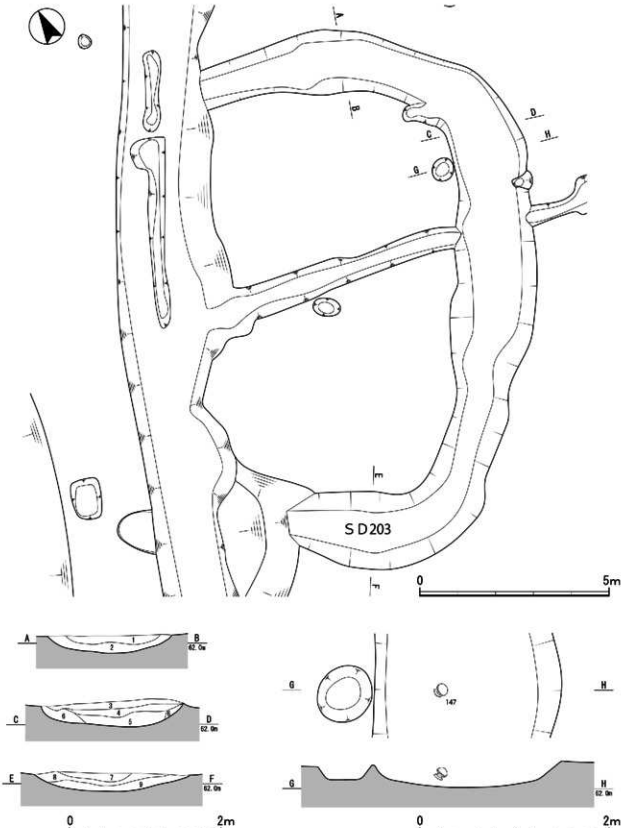
第25図　西山17号墳（ＳＤ84）遺構図（１：100）・土層図（１：50）



第26図　西山23号墳（ＳＤ83）遺構図（１：100）・土層図（１：50）

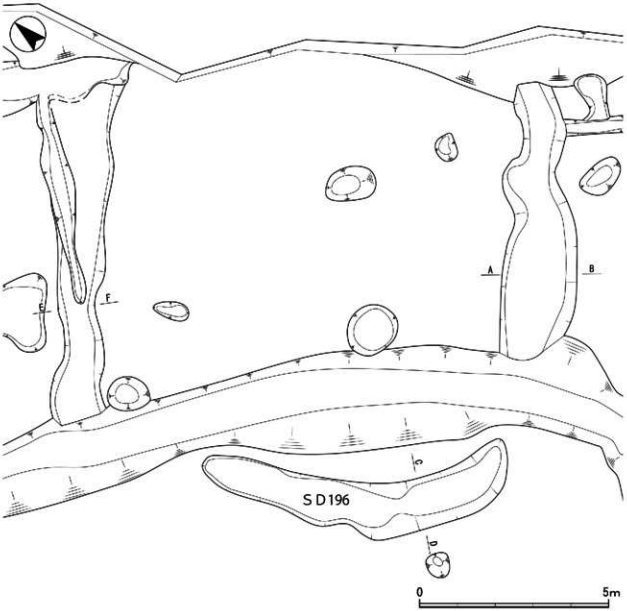


第27図　西山18号墳（ＳＤ201）遺構図（１：100）・土層図（１：50）・遺物出土状況図（１：40）



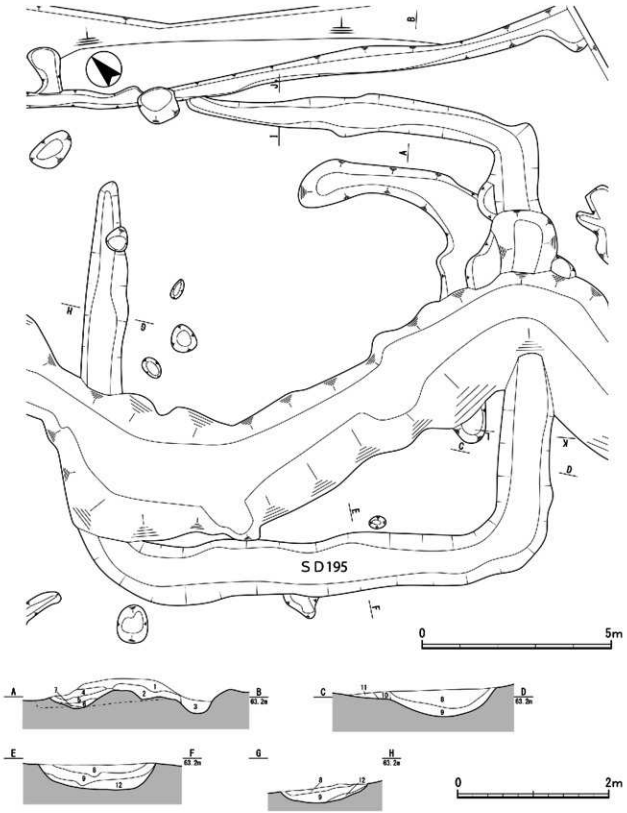
1:7.5YR4/3褐色粘質土(土器片含)
2:7.5YR4/4褐色粘質土
3:7.5YR4/3褐色粘質土(しまりやや強)
4:7.5YR4/2～4/3灰褐～褐色粘質土
5:7.5YR4/4褐色粘質土
6:7.5YR4/6褐色粘質土
7:7.5YR3/3暗褐色粘質土(土器片含、炭化物混)
8:7.5YR4/3褐色粘質土(炭化物少混)
9:7.5YR5/4にぶい褐色粘質土(地山ブロック少混)
地山:7.5YR5/6明褐色粘質土

第28図　西山19号墳（ＳＤ203）遺構図（１：100）・土層図（１：50）・遺物出土状況図（１：40）



1:7.5YR4/4～4/6褐色粘質土(しまりやや強)
2:7.5YR4/3褐色粘質土
3:7.5YR4/6褐色粘質土
4:7.5YR5/4にぶい褐色粘質土
5:7.5YR4/2灰褐色粘質土(しまりやや弱、炭化物混)
6:7.5YR4/3褐色粘質土(炭化物少混)
7:7.5YR4/6褐色粘質土(地山ブロック少混)
8:7.5YR4/2灰褐色粘質土(撹乱溝)
9:7.5YR4/3～4/4褐色粘質土(炭化物混)
地山:7.5YR5/6明褐色粘質土

第29図　西山20号墳（ＳＤ196）遺構図（1：100）・土層図（1：50）



1:10YR5/6黄褐色シルト
2:10YR5/6黄褐色粘質土(撹乱)
3:10YR3/4暗褐色シルト(撹乱)
4:10YR4/6褐色粘質土
5:7.5YR4/6褐色粘質土(埴輪含)
6:7.5YR5/6明褐色粘質土(炭化物混、埴輪片含)
7:7.5YR4/6褐色粘質土
8:7.5YR4/3褐色粘質土(炭化物混、埴輪片含)
9:7.5YR4/4褐色粘質土
10:7.5YR4/6褐色粘質土
11:7.5YR4/6～4/4褐色粘質土
12:7.5YR4/6明褐色粘質土(礫混)
地山:5～7.5YR5/6明赤褐色粘質土

第30図　西山21号墳（ＳＤ195）遺構図（１：100）・土層図（１：50）

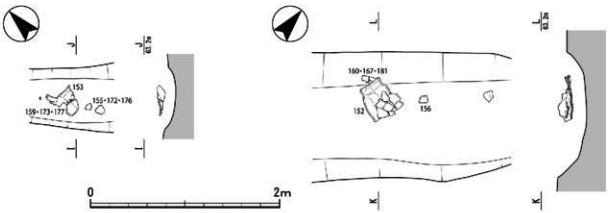
東西7.3m×南北6.0～7.1mの歪な四角形を呈する方墳で、周溝のみ残存していた。周溝は、幅0.8～1.4m、深さ25～35cmである。南東隅については、第３次調査では検出されなかったが、第４次調査では調査区南壁まで西溝がのびていたため、第３次調査区を再度調査したところ、南西隅が明確に途切れることを確認した。埋土は基本的に褐色粘質土で、堆積方向に偏りは認められない。

遺物としては、北溝と西溝から土師器椀（211・212）が出土した。

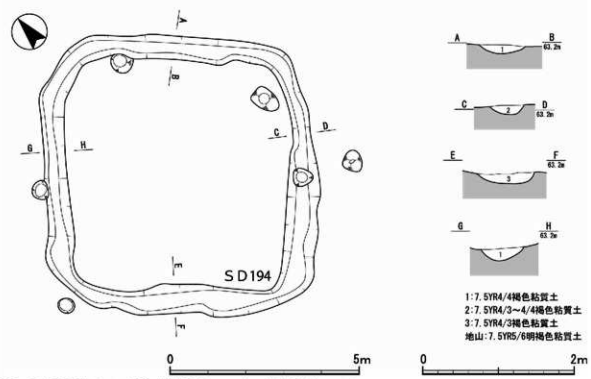
西山24号墳（ＳＤ80・ＳＫ81：第33～35図）

一辺8.5mほどの方墳で、周溝と主体部が確認された。周溝は幅0.5～1.2m、深さは最大30cmで、北西隅の残存状態は悪い。埋土は基本的に褐色粘質土ある。

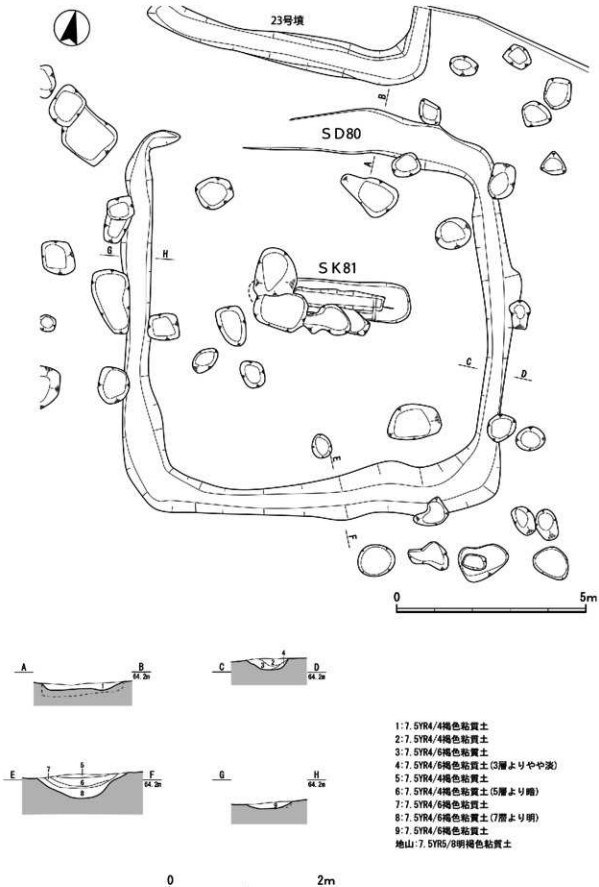
主体部は、周溝で囲まれた範囲のほぼ中央に位置する。西側から南側にかけて大きく攪乱を受けているため、全容は不明だが、掘形は長さ（東西）3.1m以上×幅1.0mの平面隅丸方形を呈する。攪乱穴の西には、僅かに黒い土の広がりが認められた。明確な遺構として検出することはできなかったが、主体部の残欠もしくは地山への影響範囲とすれば、掘



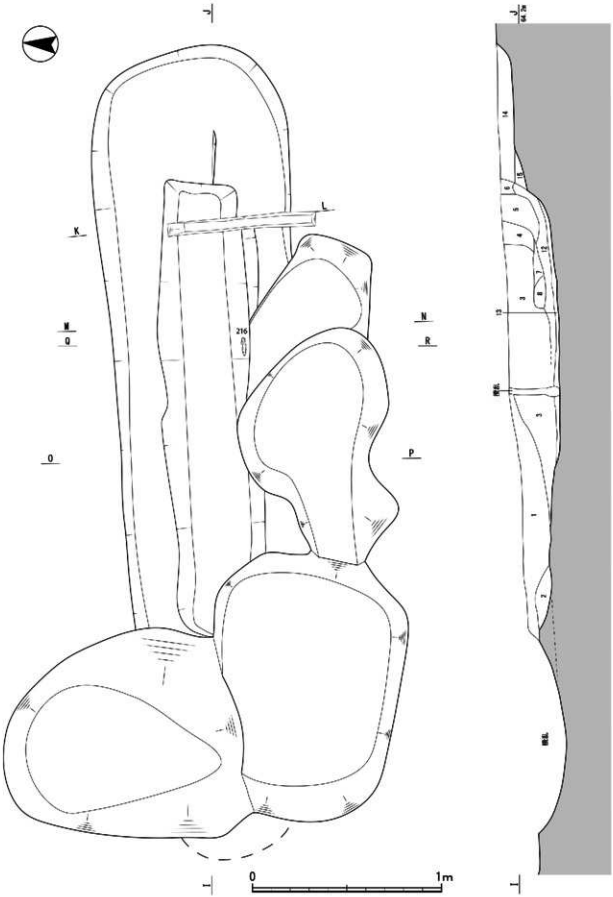
第31図　西山21号墳　遺物出土状況図（１：40）



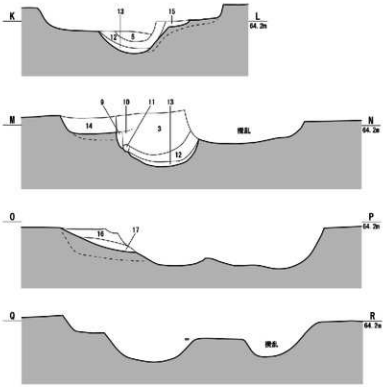
第32図　西山22号墳（ＳＤ194）遺構図（１：100）**・土層図**（１：50）



第33図　西山24号墳（ＳＤ80・ＳＫ81）遺構図（1：100）・土層図（1：50）



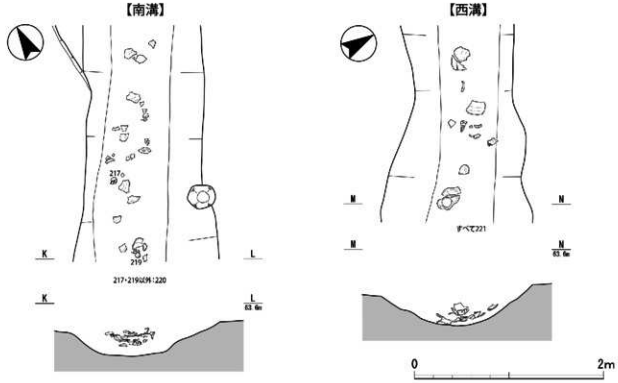
第34図　西山24号墳主体部　遺構図（1：20）・土層図（1：20）



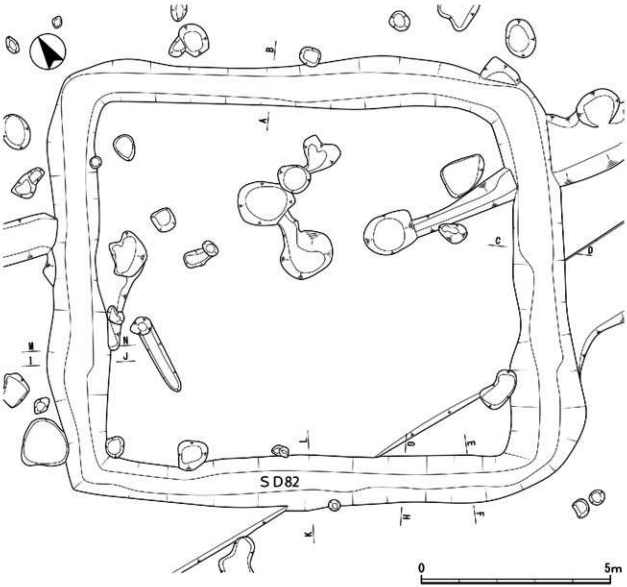
1:7.5YR4/4 褐色粘質土
（～3mm の粘土粒混、～5mm 炭化物粒少混）
2:7.5YR4/6 褐色粘質土
3:7.5YR4/6 褐色粘質土（～5mm 炭化物粒少混）
4:7.5YR5/6 明褐色粘質土
5:7.5YR4/6 褐色粘質土
6:7.5YR4/6 褐色粘質土（5 層より暗）
7:7.5YR4/6 褐色粘質土（3 層似）
8:2.5Y6/3 にぶい黄粘土
9:7.5YR4/6 褐色粘質土（やや暗）
10:7.5YR4/4 褐色粘質土
11:7.5YR5/6 明褐色粘質土
12:7.5YR4/6 褐色粘質土＋7.5YR3/4 暗褐色粘質土粒
（～4mm の炭化物粒多混）
13:7.5YR5/8 明褐色粘質土（地山似、粘性強）
14:7.5YR4/6 褐色粘質土
15:7.5YR5/8 明褐色粘質土
（地山似、しまりやや弱、やや濁）
16:7.5YR5/8 明褐色粘質土
（地山に酷似、しまりやや弱、炭粒少混）
17:7.5YR4/6 褐色粘質土
地山 :7.5YR5/8 明褐色粘質土

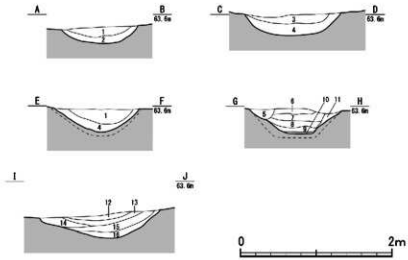
0　1m

第35図　西山24号墳主体部　土層図・断面図（1：20）



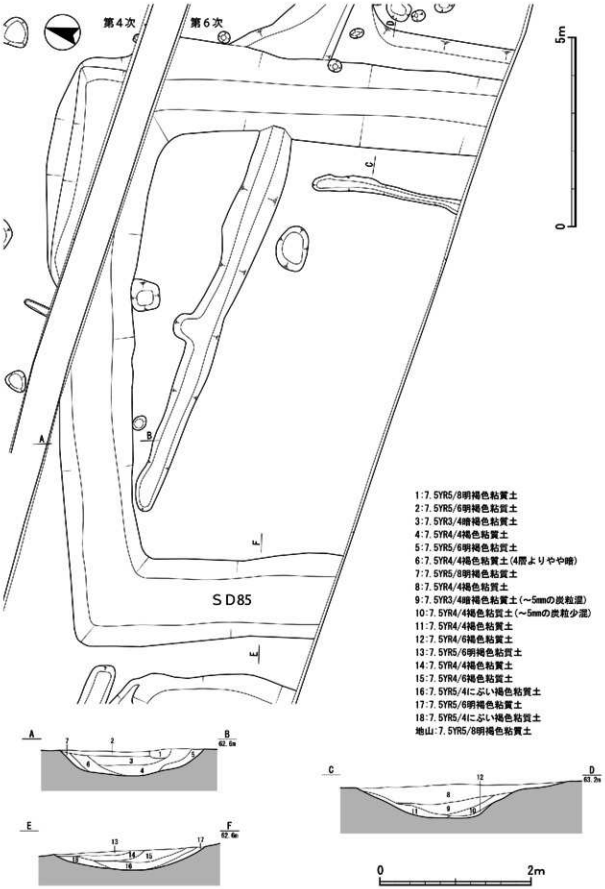
第36図　西山25号墳　遺物出土状況図（1：40）





1:7.5YR4/4褐色粘質土
2:7.5YR4/6褐色粘質土
3:7.5YR4/6褐色粘質土
4:7.5YR5/6明褐色粘質土
5:7.5YR4/4褐色粘質土
6:7.5YR4/4褐色粘質土(粘性強)
7:7.5YR4/4褐色粘質土(6層よりやや暗)
8:7.5YR3/4暗褐色粘質土
9:7.5YR4/6褐色粘質土
10:7.5YR5/6明褐色粘質土
11:7.5YR4/6褐色粘質土
12:7.5YR3/4明褐色粘質土(粘性強)
13:7.5YR4/6褐色粘質土
14:7.5YR5/6明褐色粘質土
15:7.5YR4/4褐色粘質土
16:7.5YR5/6明褐色粘質土

第37図　西山25号墳（ＳＤ82）遺構図（1：100）・土層図（1：50）



第38図　西山26号墳（ＳＤ85）遺構図（1：100）・土層図（1：50）

形の長さは約4.3mとなる。掘形内部の中央付近で木棺痕跡が確認された。長さ約2.4m、幅0.4mで、断面形状は丸味を帯びる。検出面からの深さは、掘形が約10cm、木棺痕跡は更に深く約25cmである。

遺物としては、北溝から須恵器甕、南溝から須恵器把手付椀（213）、主体部から鉄製刀子１点が出土した。刀子（216）は木棺痕跡内側の南中央付近から、切っ先が西側を向いた状態で出土した。

西山25号墳（ＳＤ82：第36・37図）

長辺（東西）10.9m×短辺（南北）9.3mの方墳で、周溝のみ残存していた。周溝は概ね幅1.4m、深さ30cmほどで、埋土は基本的に褐色粘質土である。西溝の土層では、墳丘側（東）から土が流れ込んだ状況を観察できた。

遺物としては、西溝から須恵器甕（221）が、南溝から須恵器の高杯（219）・甕（220）、土師器高杯（217）、東溝の上層から須恵器蓋（218）などが出土した。須恵器甕（221）は、破片が周溝中央から墳丘側にかけての溝底直上に集中して出土していることから、築造後、間もなく墳丘上から転落したものと考えられる。

西山26号墳（ＳＤ85：第38図）

第４次調査区南壁際から第６次調査区にかけて周溝が検出された方墳。さらに調査区外へ続くため全容は不明であるが、規模は一辺15.5mほどと推測される。周溝は、幅2.0m、深さ45cmである。埋土は基本的に褐色系の粘質土で、自然堆積による。特に標高の低い側にある西溝土層では、墳丘崩落土の流入が顕著に見て取れる。

遺物としては、西溝から須恵器甕と土師器片が少量出土した。図化していないが、須恵器甕は外面に平行タタキ、内面に当具痕ナデ消しが認められる体部片である。

西山27号墳（ＳＤ79：第39図）

東西7.5～8.2m×南北7.8mの歪な四角形を呈する方墳で、周溝のみ残存していた。周溝は、幅1.0～1.5m、深さ15～40cm。埋土は基本的に褐色粘質土で、南溝周辺は見極めが難しいほど地山に似た土である。堆積方向に偏りは認められない。

遺物としては、南溝中央やや西寄りで土師器台付甕２個体（225・226）が、周溝外（南）側から倒れ込んだような状態で出土した。他に、須恵器壺や土師器の小片がある。

西山28号墳（ＳＤ73：第40図）

東西10.9m×南北10.7mの方墳で、周溝のみ残存していた。周溝は幅1.0～1.9m、深さ20cmである。埋土は基本的に褐色粘質土である。28号墳南溝と29号墳北溝はほぼ平行しているため、両者の造営時期は非常に近いのではないかと推測される。

遺物としては、西溝から土師器高杯（227）が出土したのみである。

西山29号墳（ＳＤ72：第41図）

西辺がやや短いが、概ね一辺9.7mの方墳で、周溝のみ残存していた。北溝は28号墳の南溝と並行している。周溝は幅0.4～0.7m、深さ15～45cmの規模で、埋土は基本的に褐色粘質土である。

遺物は出土しなかった。

西山30号墳（ＳＤ76～78：第42図）

ＳＤ76を北溝、ＳＤ77を西溝、ＳＤ78を南溝とする方墳。東溝の位置には方向性を同じくする31号墳の西溝がある。南東隅部分で31号墳周溝埋土との差異を入念に観察したが、新旧関係を判断することはできなかった。規模は概ね一辺5.0m で、周溝の幅は0.7～1.3m、深さは7～15cmで、残存状況は悪い。埋土は褐色系の粘質土である。

遺物としては、北溝中央付近から土師器高杯１個体（228）が出土したのみである。

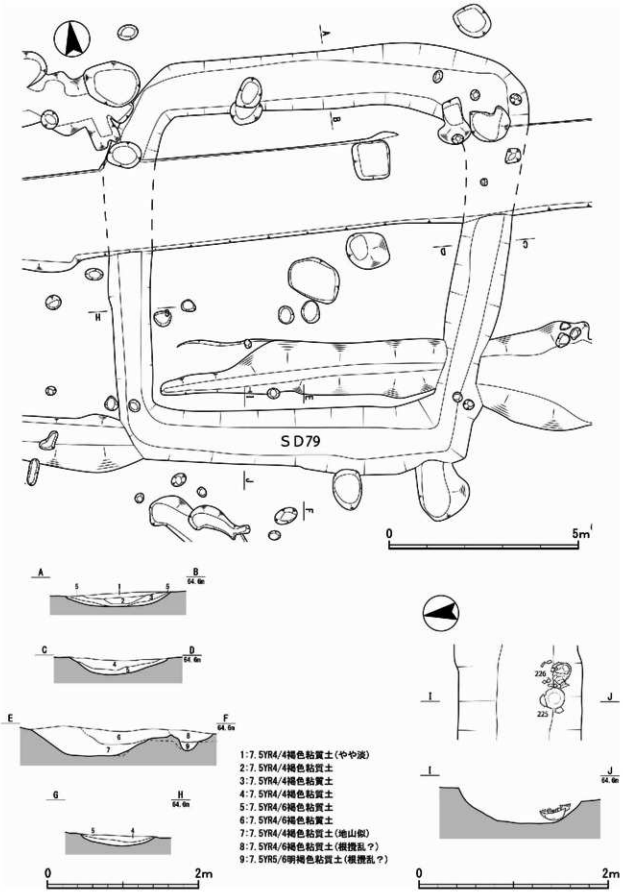
西山31号墳（ＳＤ75：第44図）

南隅が調査区外へ続くため調査していないが、一辺12.0mの方墳で、周溝のみ残存していた。周溝の規模は、残存状態が良好な北西溝で幅3.0m、深さ50cmである。埋土は基本的には褐色もしくは明褐色粘質土で、中位に暗褐色土層が広範囲に確認できた。墳丘盛土の崩壊による自然堆積がおさまって安定した時期に、表土化した土と考えられる。

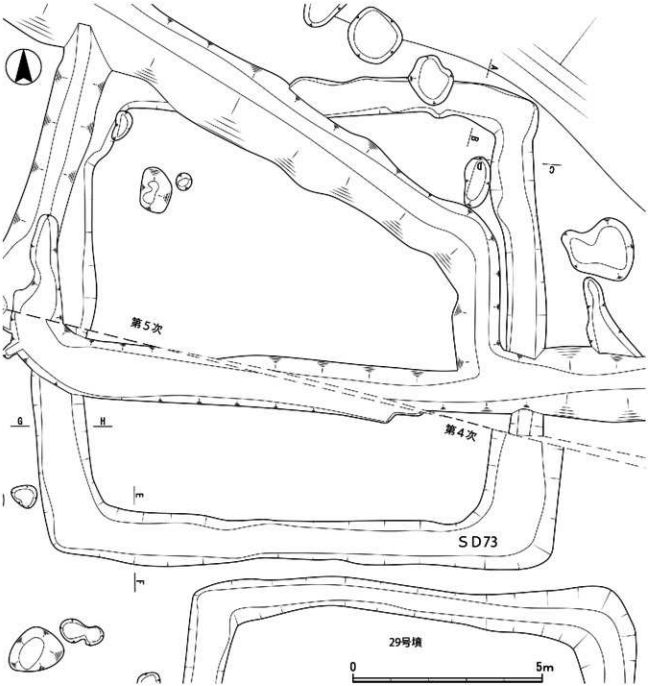
その暗褐色土層の直上層から山茶碗（231）が出土した。また、立木の根の隙間の周溝埋土から須恵器蓋杯（230）が、南東溝から土師器の壺や甕の小破片が少量出土した。

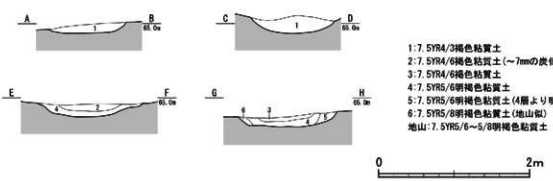
西山32号墳（ＳＤ176：第45・46図）

東西12.4～13.2m×南北14.0mのやや歪な四角形を呈する方墳で、周溝のみ残存していた。周溝は、

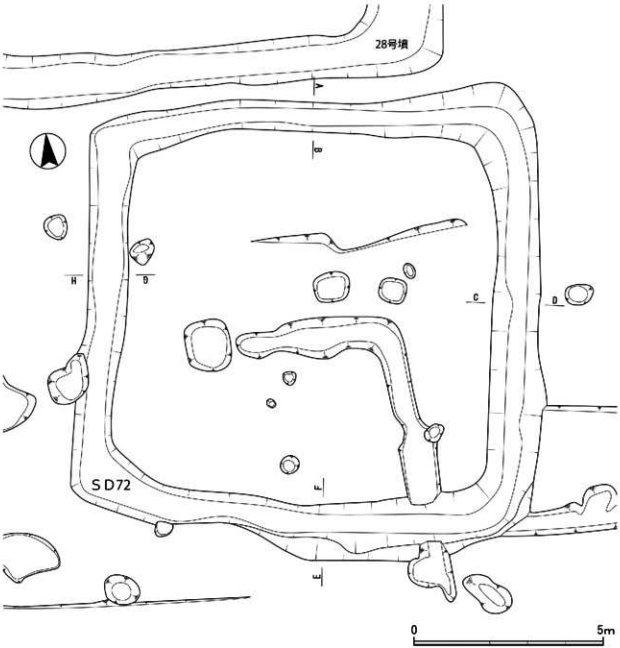


第39図　西山27号墳（ＳＤ79）遺構図（１：100）・土層図（１：50）・遺物出土状況図（１：40）

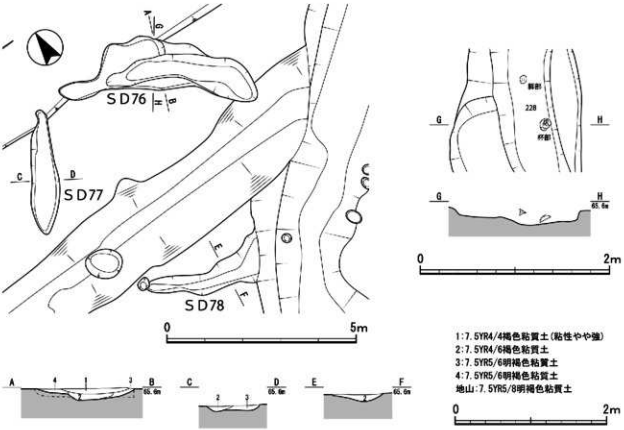




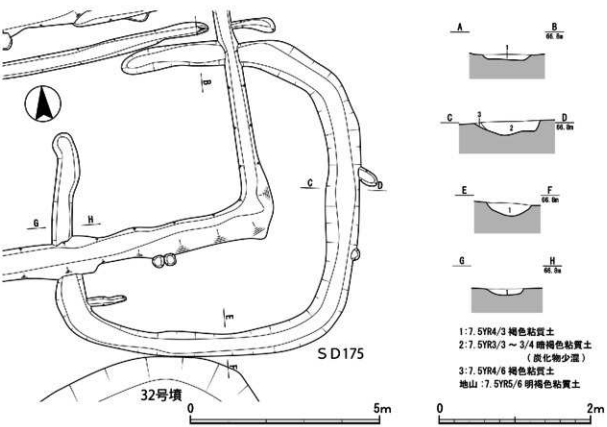
第40図　西山28号墳（ＳＤ73）遺構図（１：100）・土層図（１：50）



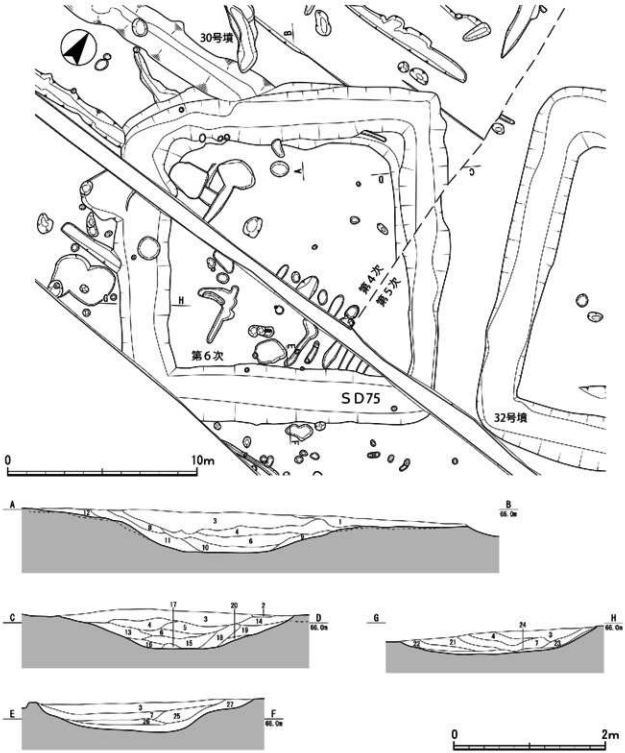
第41図　西山29号墳（ＳＤ72）遺構図（１：100）・土層図（１：50）



第42図　西山30号墳（ＳＤ76～78）遺構図（１：100）・土層図（１：50）・遺物出土状況図（１：40）

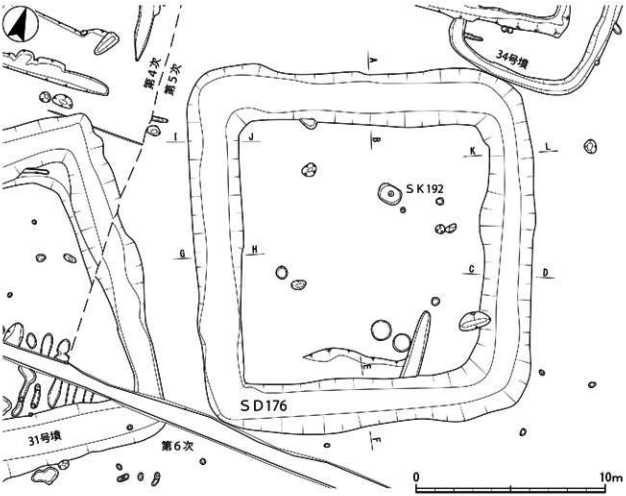


第43図　西山34号墳（ＳＤ175）遺構図（１：100）・土層図（１：50）



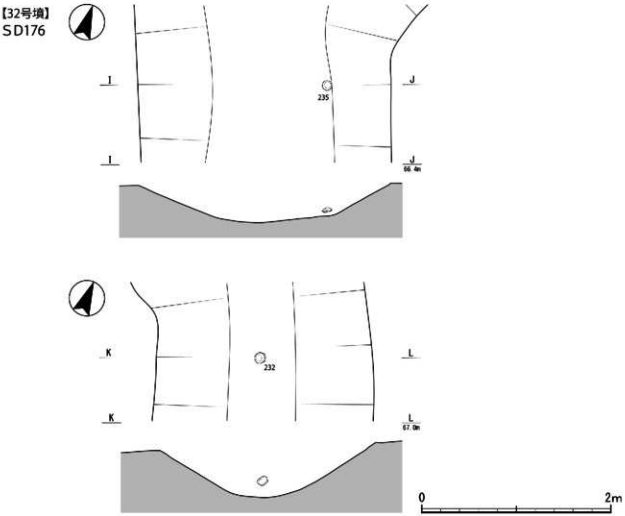
1:7.5YR4/6褐色粘質土
2:7.5YR5/6明褐色粘質土
3:7.5YR4/6褐色粘質土
4:7.5YR4/4褐色粘質土
5:7.5YR4/4褐色粘質土(4層より淡)
6:7.5YR3/4暗褐色粘質土
7:7.5YR3/3暗褐色粘質土
8:7.5YR4/4褐色粘質土
9:7.5YR5/8明褐色粘質土(地山ブロック)
10:7.5YR4/4褐色粘質土
11:7.5YR4/6褐色粘質土
12:7.5YR5/8明褐色粘質土(地山よりやや暗)
13:7.5YR4/4褐色粘質土
14:7.5YR4/6褐色粘質土
15:7.5YR4/4褐色粘質土
16:7.5YR4/4褐色粘質土
17:7.5YR4/6褐色粘質土
18:7.5YR4/4褐色粘質土
19:7.5YR4/6褐色粘質土
20:7.5YR5/8明褐色粘質土(地山ブロック)
21:7.5YR3/4暗褐色粘質土
22:7.5YR4/6褐色粘質土
23:7.5YR4/4褐色粘質土
24:7.5YR5/6明褐色粘質土(地山似、しまり弱)
25:7.5YR3/4暗褐色粘質土
26:7.5YR4/4褐色粘質土
27:7.5YR4/6褐色粘質土(地山よりやや暗、しまり弱)
地山:7.5YR5/6明褐色粘質土

第44図　西山31号墳（ＳＤ75）遺構図（１：200）・土層図（１：50）

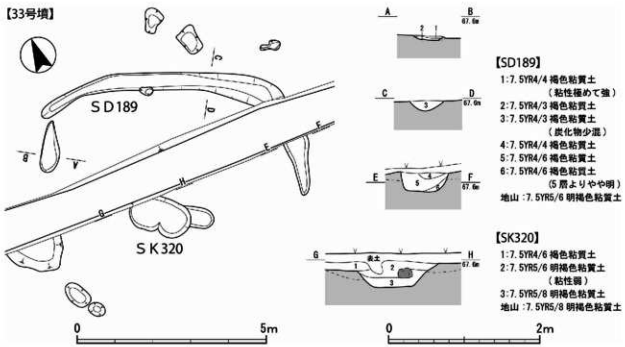


1:7.5YR5/6明褐色粘質土
2:7.5YR4/3褐色粘質土
3:7.5YR3/4暗褐色粘質土
4:7.5YR4/4褐色粘質土
5:7.5YR4/4褐色粘質土
6:7.5YR5/4にぶい褐色粘質土
(地山風化土、しまり悪)
7:7.5YR5/4にぶい褐色粘質土
(地山風化土、しまり悪)
8:7.5YR4/3褐色粘質土
9:7.5YR3/3暗褐色粘質土
10:7.5YR4/4褐色粘質土
11:7.5YR3/4暗褐色粘質土
12:7.5YR3/4暗褐色粘質土
13:7.5YR4/4褐色粘質土
14:7.5YR4/4褐色粘質土
15:7.5YR4/6褐色粘質土(地山似)
16:7.5YR3/4暗褐色粘質土
17:7.5YR4/6褐色粘質土
18:7.5YR3/4暗褐色粘質土
19:7.5YR3/3暗褐色粘質土
20:7.5YR4/6褐色粘質土
21:7.5YR5/6明褐色粘質土
22:7.5YR5/8明褐色粘質土
23:7.5YR4/6褐色粘質土
24:7.5YR3/2黒褐色粘質土
25:7.5YR3/3暗褐色粘質土
26:7.5YR3/3暗褐色粘質土
27:7.5YR4/3褐色粘質土(26層より暗)
28:7.5YR5/6明褐色粘質土
29:7.5YR4/6褐色粘質土
地山:7.5YR5/4にぶい褐色粘質土

第45図　西山32号墳（ＳＤ176）遺構図（1：200）・土層図（1：50）



第46図　西山32号墳　遺物出土状況図（1：40）



第47図　西山33号墳（ＳＤ189）・ＳＫ320遺構図（1：100）・土層図（1：50）

幅2.5m、深さ50cmほど。埋土は基本的には褐色もしくは明褐色粘質土であるが、中位には31号墳と同じような暗（黒）褐色土層が広範囲に確認できた。また、その黒色系の土層よりも下層（溝底面よりも10～20cmほど上）には、人頭大の礫が大量に混じっていた。溝の中心よりも墳丘側に集中していたことから、墳丘に葺かれていた石が崩落したものと考えられる。

遺物としては、北西隅付近から須恵器の杯身（235）・杯蓋・壺が、北東隅付近の東溝から土師器小型壺（232）や須恵器甕などが出土した。

西山33号墳（ＳＤ189：第47図）

第４次調査区南壁際から第６次調査区にかけて検出された平面「コ」字形を呈する溝。残存状態が非常に悪いため、途切れている北西隅の形状が歪だが、一辺６mほどの方墳の北半部と判断した。周溝は幅0.6m、深さ10～25cmの規模で、埋土は褐色粘質土である。遺物は出土しなかった。

なお、土坑ＳＫ320については、墳丘想定範囲の中央付近という非常に良い位置にあるものの、平面形が歪で、木棺痕跡も認められず、副葬品等もないなど、積極的に主体部とする根拠は得られなかった。

西山34号墳（ＳＤ175：第43図）

東西6.6m×南北7.0mの方墳で、周溝のみ残存していた。周溝は幅0.5～0.7m、深さ15cmほどの断面逆台形を呈し、残存状態が悪いためか北西隅が途切れている。埋土は基本的に褐色粘質土である。

遺物としては、北溝から土師器高杯が、南西隅付近の周溝から土師器片が出土した。

西山35号墳（ＳＤ177：第48・49図）

北西側の谷へ土が流出してしまったためか北溝は検出されなかったが、一辺14.2mほどの方墳と推測される。周溝は、幅2.0～2.6m、深さ60cmほどである。南溝中央部分は溝が浅く、外側からせりだす島状の高まりが認められた。埋土は基本的に褐色粘質土だが、比較的上層で暗褐色粘質土が広範囲に認められた。31・32号墳で認められた暗褐色粘質土と同じ性質の土であろう。

遺物としては、南溝の島状の高まりの先端付近から土師器壺（246）と鉄製鉋（249）が重なって出土したことが注目される。ほかに、西溝から土師器壺（243）が、南西隅の周溝上層から須恵器甕の小片１点が、南溝から土師器高杯（240・241）が出土した。

西山36号墳（ＳＤ178：第50図）

長辺5.6m以上×短辺4.5m以上のＬ字溝として検出した。残存状態は非常に悪いが、溝の形状・埋土や周辺の古墳との位置関係から方墳の残欠と判断した。周溝は状態の良い場所で、幅1.0m、深さ30cmほどで、埋土は基本的に褐色粘質土である。

なお、土坑ＳＫ190については、Ｌ字溝との位置関係から主体部を想定させるが、歪な平面形や埋土の状態から主体部ではないと判断した。

遺物は出土しなかった。

西山37号墳（ＳＤ169：第51図）

西溝の大半は検出されず、西辺がやや短くやや歪な形を呈しているが、概ね一辺6.5mの方墳である。周溝は、比較的状態の良い場所で幅1.0m、深さ25cmである。埋土は基本的に褐色粘質土である。

遺物は出土しなかった。

西山38号墳（ＳＤ172：第52図）

長辺4.5m以上×短辺4.3m以上のＬ字溝として検出した。残存状態は非常に悪いが、溝の形状・埋土や周辺遺構との位置関係から方墳と判断した。周溝は状態の良い場所で、幅0.8m、深さ25cmほどである。埋土は褐色粘質土である。

遺物は出土しなかった。

西山39号墳（ＳＤ160：第53図）

長辺5.1m以上×短辺4.7m以上のＬ字溝として検出した。残存状態は非常に悪いが、溝の形状・埋土や周辺の古墳との位置関係から方墳と判断した。周溝は状態の良い場所で、幅0.7m、深さ20cmほどである。埋土は褐色粘質土である。

遺物は出土しなかった。

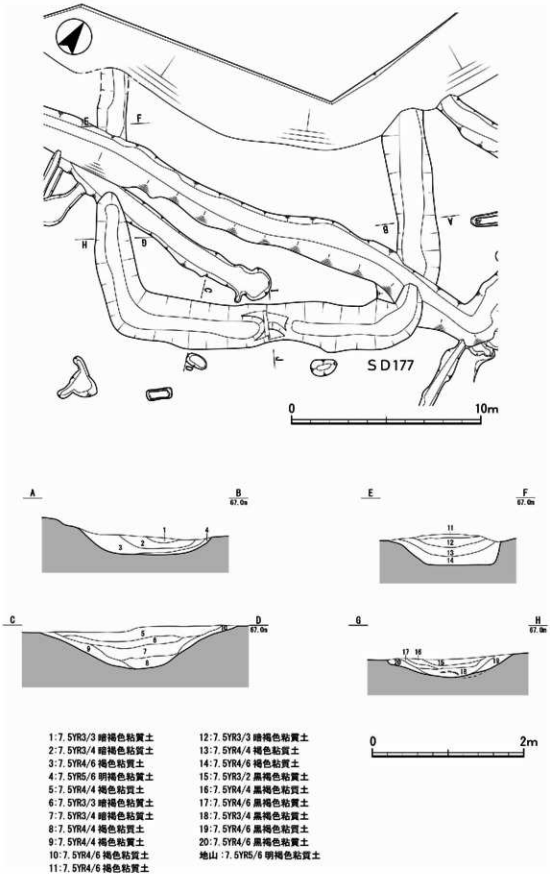
西山40号墳（ＳＤ157：第54図）

長辺6.0m程度×短辺4.5m以上のＬ字溝として検出した。残存状態は非常に悪いが、溝の形状・埋土や周辺遺構との位置関係から方墳と判断した。周溝の規模は状態の良い場所で、幅0.5m、深さ10cmほどである。埋土は基本的に褐色粘質土である。

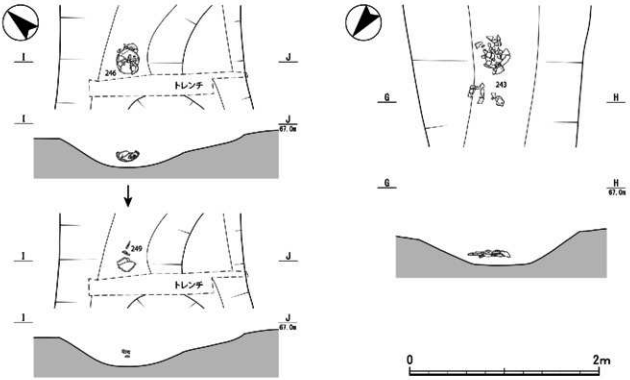
遺物は出土しなかった。

西山41号墳（ＳＤ155・156：第55図）

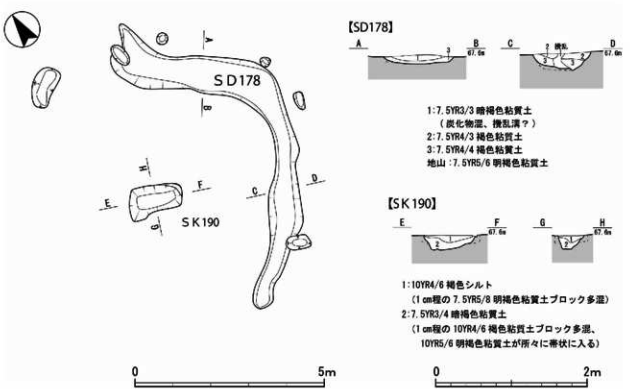
残存状態が悪く、周溝は途切れがちであるが、概



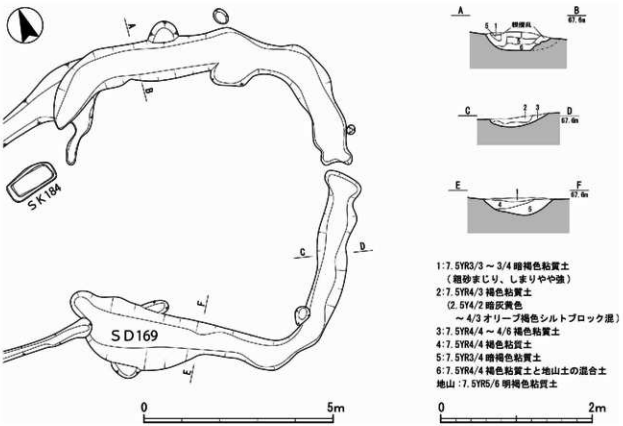
第48図　西山35号墳（ＳＤ177）遺構図（１：200）・土層図（１：50）



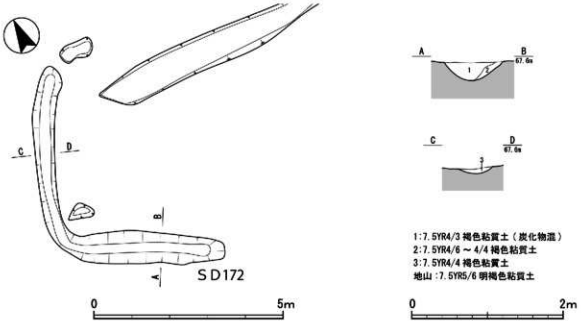
第49図　西山35号墳　遺物出土状況図（1：40）



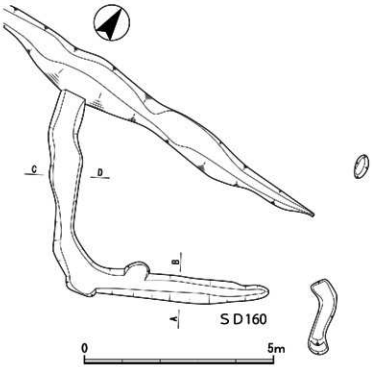
第50図　西山36号墳（ＳＤ178）遺構図（1：100）・土層図（1：50）

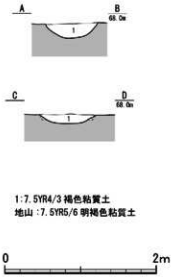


第51図　西山37号墳（ＳＤ169）遺構図（1：100）・土層図（1：50）

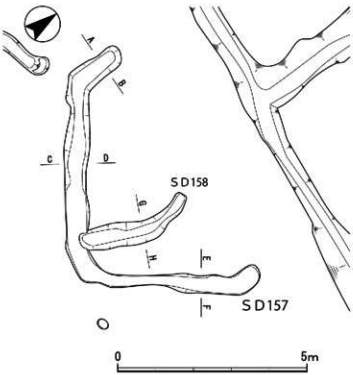


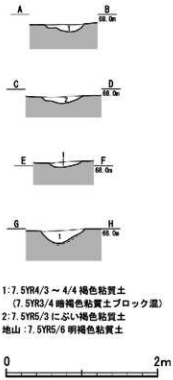
第52図　西山38号墳（ＳＤ172）遺構図（1：100）・土層図（1：50）



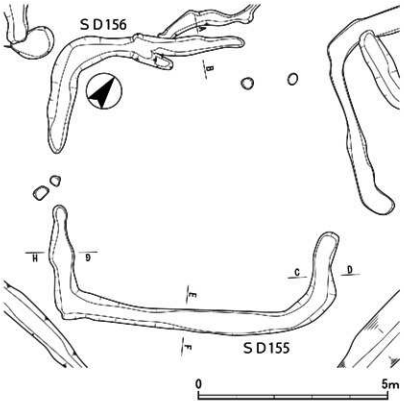


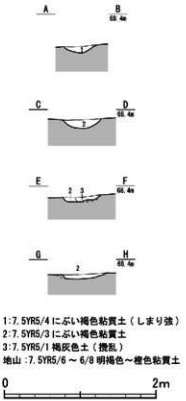
第53図　西山39号墳（ＳＤ160）遺構図（１：100）・土層図（１：50）



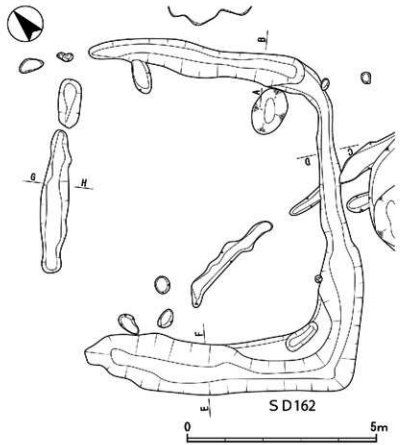


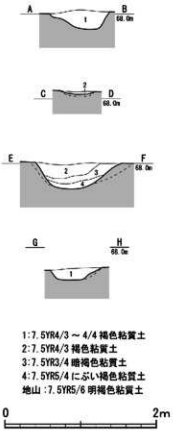
第54図　西山40号墳（ＳＤ157）遺構図（１：100）・土層図（１：50）





第55図　西山41号墳（ＳＤ155・156）遺構図（１：100）・土層図（１：50）





第56図　西山42号墳（ＳＤ162）遺構図（１：100）・土層図（１：50）

ね一辺6.5mの方墳である。周溝の規模は、比較的状態の良い場所で幅0.7m、深さ10cmである。埋土はにぶい褐色粘質土である。

遺物としては、東隅の周溝から土師器の破片が出土した。

西山42号墳（ＳＤ162：第56図）

残存状態が悪く、周溝が途切れがちであるが、長辺7.0m×短辺6.6mの方墳である。周溝の規模は、比較的状態の良い場所で幅1.3m、深さ35cmである。埋土は褐色系の粘質土である。

遺物としては、南隅の周溝から須恵器杯身（251）と土師器片が出土した。

西山43号墳（ＳＤ167・168：第57図）

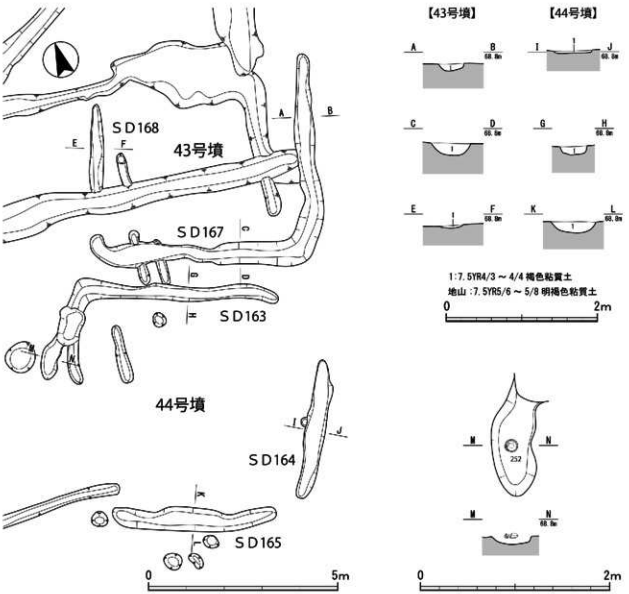
残存状態が悪く、周溝が途切れがちであるが、東西5.0mの方墳である。周溝の規模は、比較的状態の良い場所で幅0.5m、深さ15cmである。埋土は基本的に褐色粘質土である。

遺物は出土しなかった。

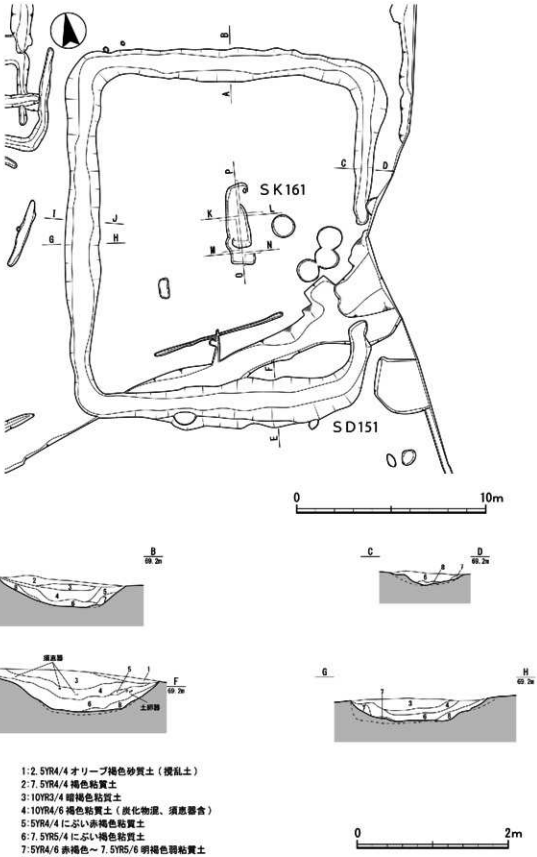
西山44号墳（ＳＤ163～165：第57図）

残存状態が悪く、周溝は途切れがちであるが、東西6.5m×南北5.5mほどの方墳である。周溝は、比較的状態の良い場所で幅0.6m、深さ15cmである。埋土は基本的に褐色粘質土である。

遺物としては、西溝から須恵器杯身（252）が1



第57図　西山43・44号墳（ＳＤ163～165・167・168）遺構図（1：100）・土層図（1：50）・遺物出土状況図（1：40）



1:2.5YR4/4 オリーブ褐色砂質土（撹乱土）
2:7.5YR4/4 褐色粘質土
3:10YR3/4 暗褐色粘質土
4:10YR4/6 褐色粘質土（炭化物混、須恵器含）
5:5YR4/4 にぶい赤褐色粘質土
6:7.5YR5/4 にぶい褐色粘質土
7:5YR4/6 赤褐色～7.5YR5/6 明褐色弱粘質土
8:5YR4/4 にぶい赤褐色粘質土
（10YR5/6 黄褐ブロック多混、炭化物混、麻落土）
地山 :7.5YR5/8 明褐色粘質土

第58図　西山45号墳（ＳＤ151）・ＳＫ161遺構図（１：200）・土層図（１：50）

個体出土した。

西山45号墳（ＳＤ151：第58・59図）

東西13.5m×南北16.2mの方墳で、周溝に囲まれた範囲のほぼ中央に主体部の可能性がある土坑ＳＫ161が確認された。南西隅から東溝中央付近は近現代の攪乱溝（道路か）によって破壊され、東方向への谷状地形となっている。周溝は状態の良い南溝で幅2.5m、深さ55cmである。場所によって様相が異なり、北溝は幅1.7m、深さ35cmの断面逆台形を呈する。埋土は基本的に褐色粘質土で、墳丘側から、土が流れ込んだ堆積状況が認められた。

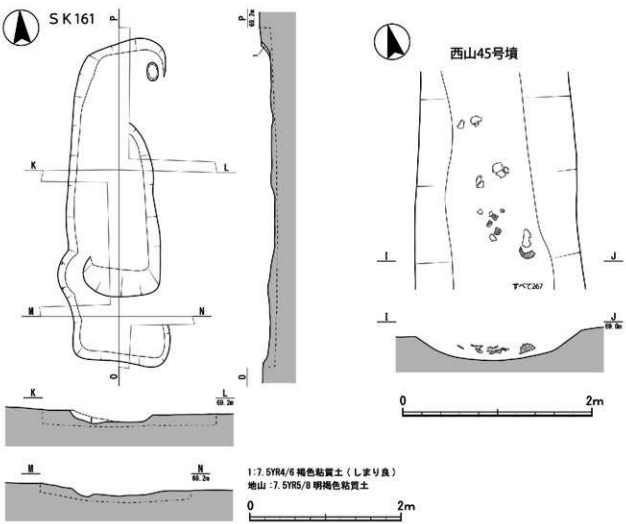
ＳＫ161は、表土除去の際、攪乱との認識から、重機により掘削されたため、本来の形状ではない可能性があるが、掘りあがりの状況は、長辺4.3m×短辺1.3mの長方形で、中央の2.3m×1.0mほどの範囲がさらに窪む。僅かに残っていた埋土は褐色粘質土で、他の古墳主体部や木棺墓の埋土に似ている。

遺物は比較的多く、西溝から土師器壺・須恵器壺（267）、南西隅から須恵器甕、南溝から須恵器（杯蓋・提瓶・小型甕）などが出土した。

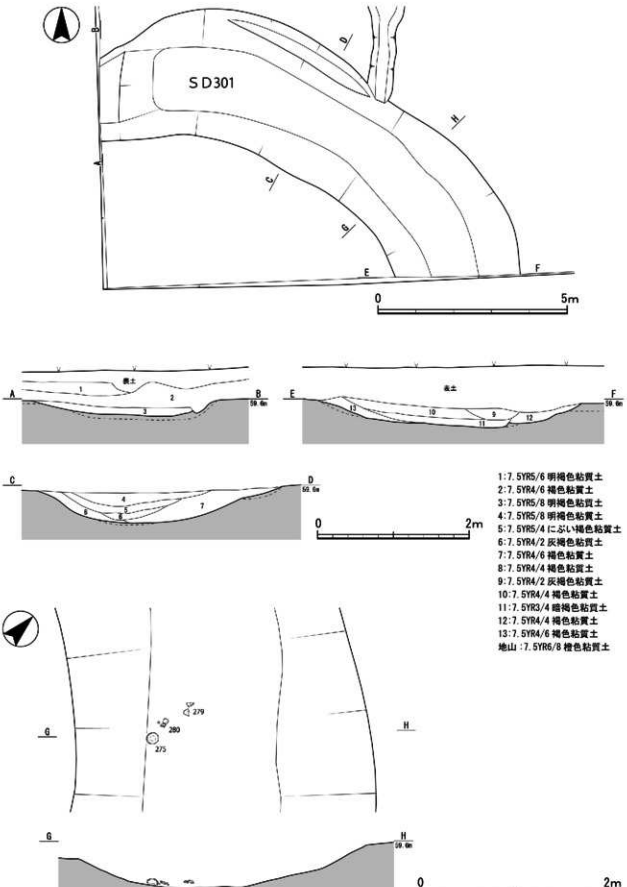
西山46号墳（ＳＤ301：第60図）

第６次調査区南西端で検出された周溝。大半が調査区外へ続くため全容は不明であるが、11号墳と同規模の径12.5mほどの円墳と推測される。周溝の規模は幅3.0m、深さ40cmで、調査区西壁付近のみ幅2.1m、深さ13cmと細く浅くなる。埋土は基本的に褐色系の粘質土である。

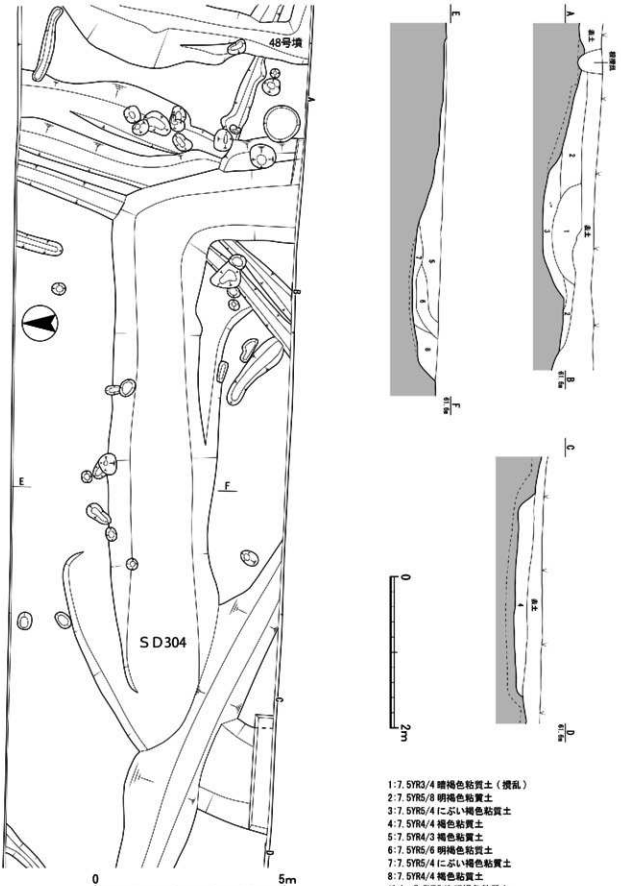
遺物としては、須恵器（蓋杯・甕）、土師器（椀・甕）などが出土した。西半では飛鳥時代の遺物が多く出土したが、東半からは本来の古墳遺物とみられる須恵器蓋杯（275・279・280）が溝底直上近くで出土した。



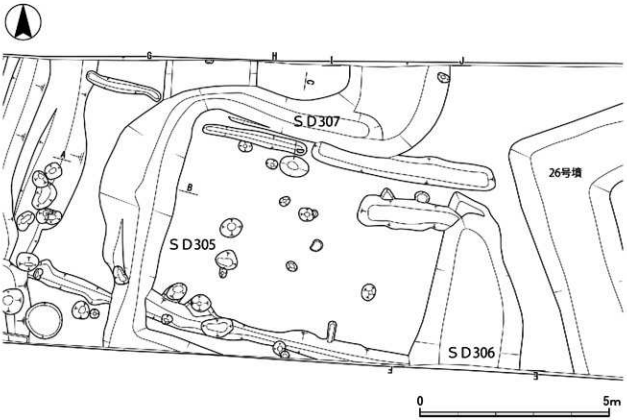
第59図　西山45号墳　遺物出土状況図（１：40）、ＳＫ161遺構図（１：50）

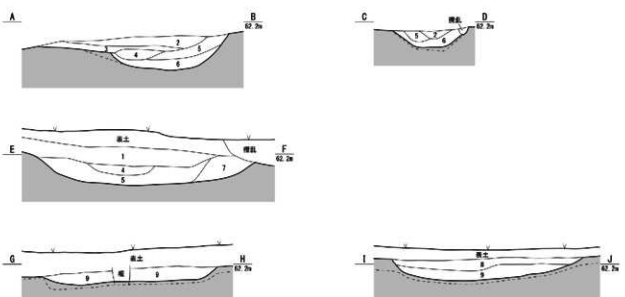


第60図　西山46号墳（ＳＤ301）遺構図（１：100）・土層図（１：50）・遺物出土状況図（１：40）



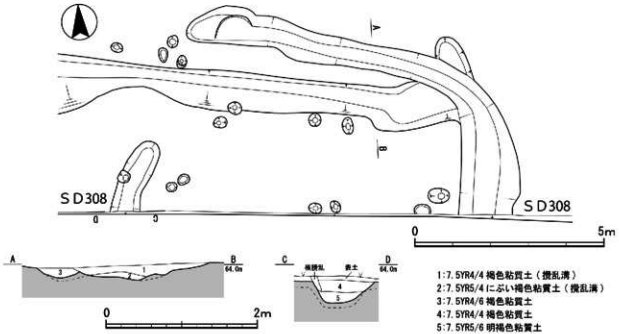
第61図　西山47号墳（ＳＤ304）遺構図（１：100）・土層図（１：50）



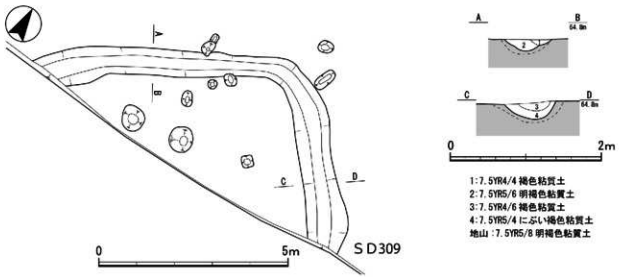


1:10YR6/4 にぶい黄橙色土（≠ＳＤ306 埋土）
2:10YR5/2 灰黄褐色粘質土
3:10YR4/2 灰黄褐色粘質土
4:10YR3/1 黒褐色粘質土
5:10YR4/1 褐灰色粘質土
6:10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土
7:10YR6/6 明黄褐色粘質土
8:2.5YR5/3 黄褐色粘質土
9:2.5YR4/2 暗灰黄色粘質土

第62図　西山48号墳（ＳＤ305～307）遺構図（１：100）・土層図（１：50）

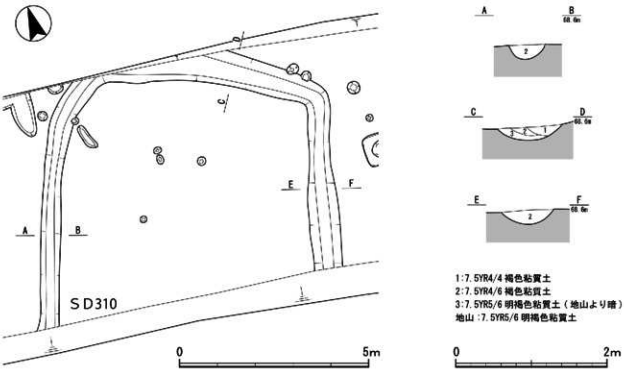


第63図　西山49号墳（ＳＤ308）遺構図（１：100）・土層図（１：50）

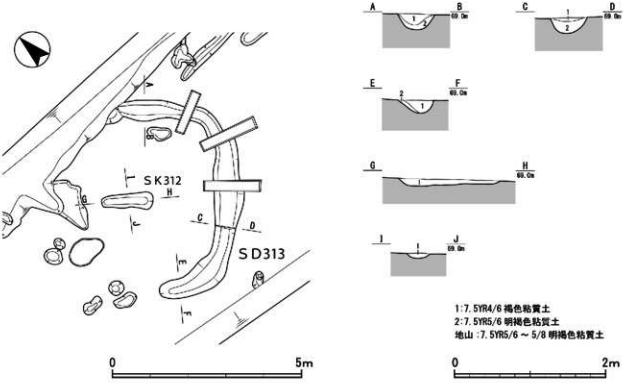


第64図　西山50号墳（ＳＤ309）遺構図（１：100）・土層図（１：50）

第65図　西山51号墳（ＳＤ311）遺構図（１：100）・土層図（１：50）



第66図　西山52号墳（ＳＤ310）遺構図（１：100）・土層図（１：50）



第67図　西山53号墳（ＳＤ313）・ＳＫ312遺構図（１：100）・土層図（１：50）

西山47号墳（ＳＤ304：第61図）

第６次調査区で検出された方墳。大半が調査区外へ続くため、全容は不明であるが、一辺13.0ｍほどと推測される。周溝は幅2.7ｍ、深さ30㎝の規模で、埋土は基本的に褐色系の粘質土である。

遺物としては、北溝中央付近から須恵器甕（284）と土師器椀（283）、東溝調査区壁付近から須恵器甕（285・286）が出土した。隣接する48号墳東溝からは、この285・286と同一個体とみられる破片が出土している。

西山48号墳（ＳＤ305～307：第62図）

第６次調査区で検出された方墳。北溝の形状が不自然に北へ曲がるため、別遺構の重複を想定し精査したところ、周溝よりも新しい溝が重複しているように思われたが、確定には至らなかった。北東隅は周溝がつながらず、土橋状になる。規模については、南溝が調査区外へ続くため全容は不明であるが、東西7.1ｍ×南北6.0ｍほどの長方形で、西溝は幅1.0～2.0ｍ、深さ50㎝、北溝は幅0.9ｍ、深さ20㎝、東溝は幅3.0ｍ、深さ30㎝である。埋土は基本的に褐色系の粘質土である。

遺物としては、西溝から須恵器甕、北溝から須恵器杯蓋片、東溝から須恵器蓋杯（287・288）が出土した。北溝ＳＤ307出土の杯蓋片は東溝ＳＤ306出土品（288）と接合し、同一個体と判明した。

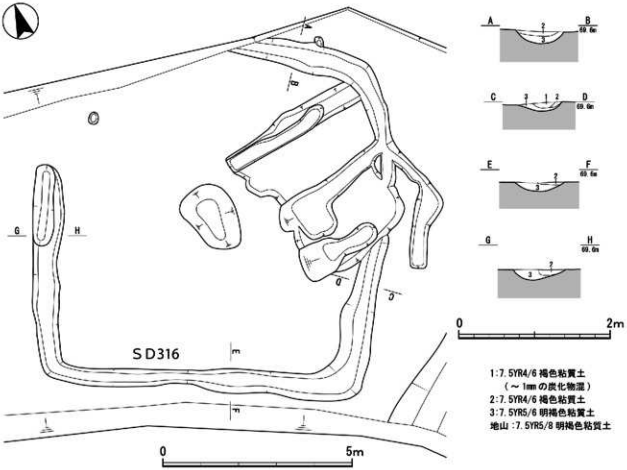
西山49号墳（ＳＤ308：第63図）

第６次調査区で検出された方墳。南半が調査区外へ続くため、全容は不明であるが、一辺8.0ｍほどと推測される。西溝は北側が途切れる。規模は西溝の幅0.7ｍ、深さ30㎝、東溝の幅1.4ｍ、深さ40㎝である。埋土は基本的に褐色系の粘質土である。

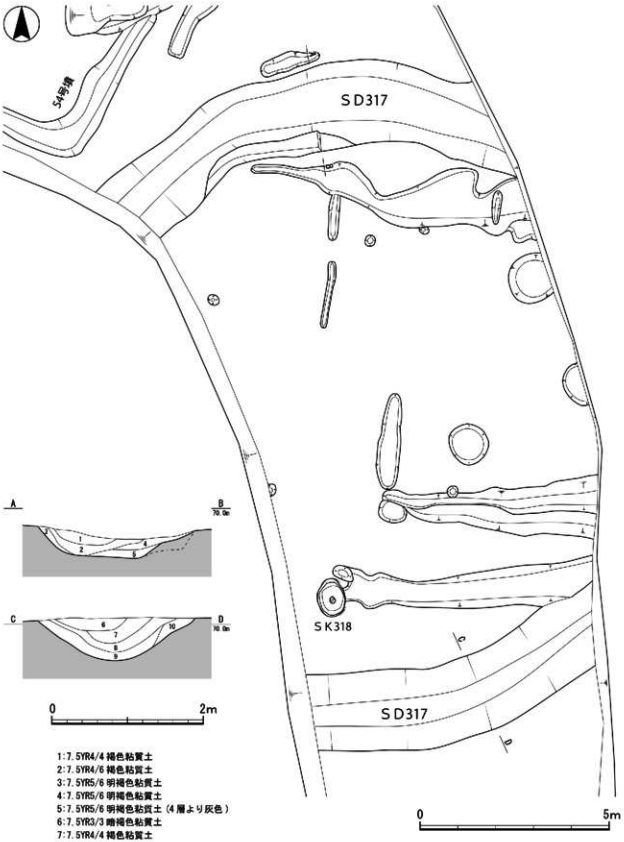
遺物は出土しなかった。

西山50号墳（ＳＤ309：第64図）

第６次調査区で検出された方墳。南半が調査区外へ続くため、全容は不明であるが、一辺は6.3ｍ以上である。北溝は幅0.7ｍ、深さ15㎝、東溝は幅0.9



第68図　西山54号墳（ＳＤ316）遺構図（１：100）**・土層図**（１：50）



1:7.5YR4/4 褐色粘質土
2:7.5YR4/6 褐色粘質土
3:7.5YR5/6 明褐色粘質土
4:7.5YR5/6 明褐色粘質土
5:7.5YR5/6 明褐色粘質土（4層より灰色）
6:7.5YR3/3 暗褐色粘質土
7:7.5YR4/4 褐色粘質土
8:7.5YR4/6 褐色粘質土
9:7.5YR4/6 褐色粘質土
10:7.5YR5/6 明褐色粘質土
地山:7.5YR5/8 明褐色粘質土

第69図　西山55号墳（ＳＤ317）遺構図（１：100）・土層図（１：50）

m、深さ20cmの規模である。埋土は褐色系の粘質土である。

遺物としては、北溝から器種不明の土師器片が出土した。

西山51号墳（ＳＤ311：第65図）

第６次調査区で検出された２条の溝。埋土と地山の区別が非常に難しく、部分的には誤認した可能性もあるが、方墳の北東隅と考えられる。大半は調査区外へ続くため、全容は不明であるが、北溝は幅0.9m以上、東溝は幅0.8m、深さは共に20cmの規模である。埋土は褐色粘質土である。

遺物は出土しなかった。

西山52号墳（ＳＤ310：第66図）

第６次調査区で検出された方墳。南溝が調査区外へ続くため、全容は不明であるが、一辺は6.7mほどと推測される。周溝の幅は西溝0.5m、北溝0.9m、東溝は幅0.8mで、深さ20cmである。埋土は褐色系の粘質土である。

遺物は出土しなかった。

西山53号墳（ＳＤ313・ＳＫ312：第67図）

第６次調査区で検出された方墳。北隅は攪乱溝に破壊され、南西隅は検出されなかったため、全容は不明だが、一辺4.2mほどと推測される。周溝埋土と地山の区別が非常に難しかったため、トレンチを入れながら検出し掘削した。周溝の幅は0.5m、深さは20cmである。埋土は褐色系の粘質土である。

ＳＫ312は、周溝に囲まれた範囲のほぼ中央で検出された。長さ1.3m×幅0.3mの略隅丸長方形を呈する。主体部とするには小さすぎるが、深さが10cmしかないため、棺痕跡の底面の深い部分のみが確認できた可能性がある。埋土は褐色粘質土である。

遺物は周溝ＳＤ313とＳＫ312のどちらからも出土しなかった。

西山54号墳（ＳＤ316：第68図）

第６次調査区の北東隅で検出された方墳。北溝の西半が調査区外へ続くため、全容は不明であるが、一辺は8.2～8.0mと推測される。周溝は幅0.6～0.7m、深さ10～15cmの規模である。西溝北半は途切れる。埋土は褐色系の粘質土である。周溝に囲まれた範囲の中央で土坑が検出されたが、主体部ではなく現代の攪乱である。

遺物は出土しなかった。

西山55号墳（ＳＤ317：第69図）

第６次調査区北東隅で検出された２条の弧を描く溝。幅９mの調査区に収まりきらないが、直径14.0mの円墳である。周溝は幅2.0m、深さ55cmで、埋土は褐色系の粘質土である。周溝に囲まれた範囲の中央やや南寄りで南北に細長い土坑が検出されたが、現代の攪乱で主体部ではない。

遺物としては、北溝から須恵器小壺（290）と土師器片、南溝から須恵器甕が出土した。

b　木棺墓など

丘陵平坦面東半分で、可能性が想定されるものを含めて20基確認した。すべて古墳周溝の外側に位置し、古墳と重複関係にあるものは無い。

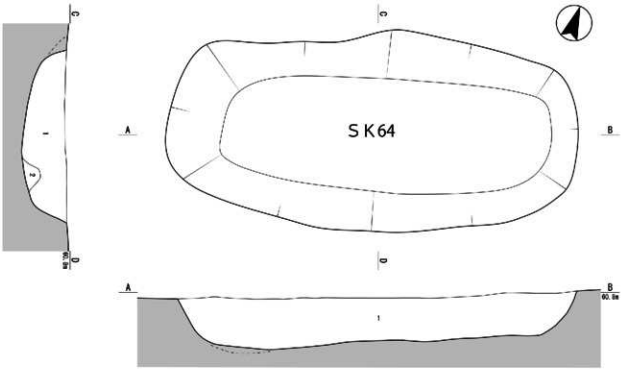
ＳＫ64（第70図）　第３次調査で検出された長さ2.2m×幅1.0mの平面隅丸長方形を呈する土坑。検出面からの深さは25cm。調査時点で、墓壙の可能性を想定し、土層観察をしながら掘削したが、棺痕跡は認識できず、遺物も出土しなかった。その後の調査で数多く見つかった木棺墓と形態的特徴が似ていることから、その可能性を想定しておきたい。

ＳＫ92（第71図）　平面形は長さ3.2m×0.72m（北側）～幅0.88m（南側）の隅丸長方形を呈し、深さは24cmである。南半では木棺痕跡とみられる細長い窪み（長さ1.3m～×幅0.5m）を検出した。埋土は、基本的に明褐色粘質土で、木棺痕跡とみられる土層（第４層）には炭化物が少量含まれる。木棺形状は認識しづらいが、割竹形で想像するような半円形というよりも底部は丸みを持つがやや平らな印象をうける。

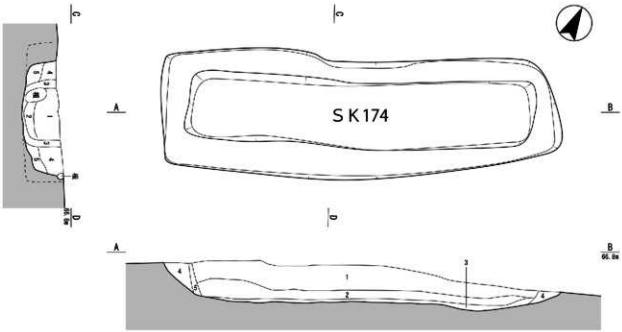
遺物としては鉄製品（291～300）がある。南半部では棺痕跡内の東側に刀子１点と剣１点、西側に刀１点と剣１点があり、いずれも切っ先は北を向いていた。北半部では鎌２点と斧１点が床面近くにかたまっていた。

頭位については、鉄製品の刀剣類の切っ先方向と墓壙掘形の幅からみて、南側と考えられる。

ＳＫ152（第72図）　平面形は長さ2.32m×幅1.18mの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは28cmである。木棺痕跡は長さ2.08m×幅0.58mの長方形で、最上層（第１層）除去後に確認できた。木棺内埋土

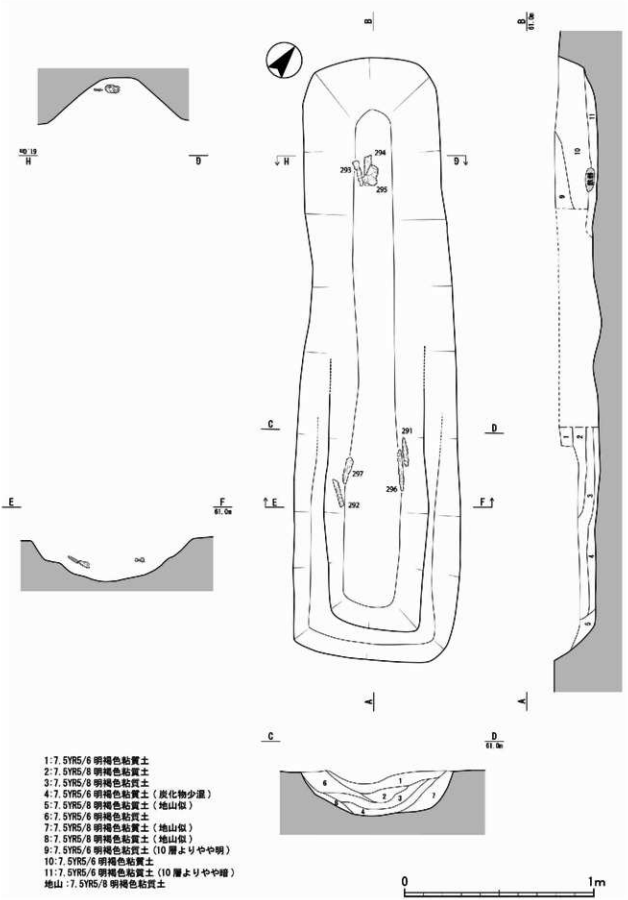


1:7.5YR4/6 褐色粘質土
2:7.5YR5/6 明褐色粘質土
地山 :7.5YR5/8 明褐色粘質土

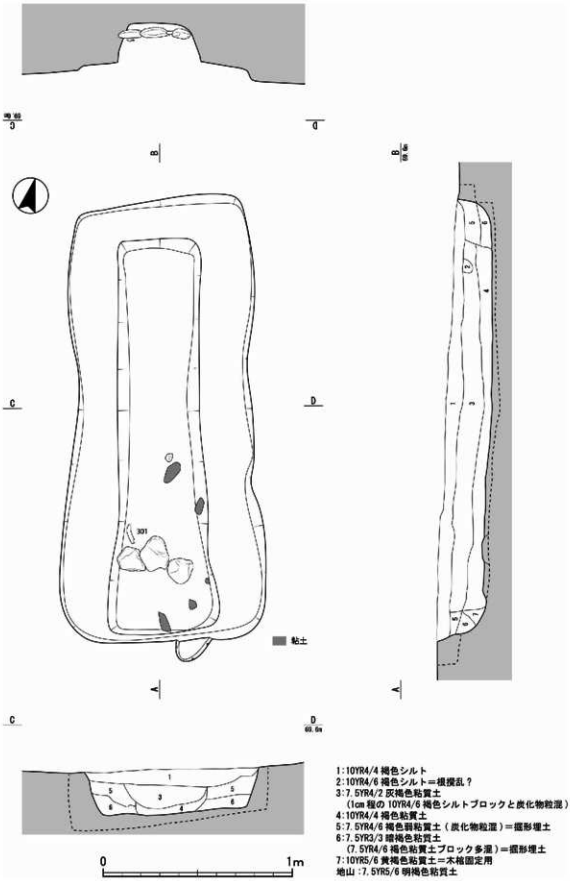


1:10YR4/6 褐色粘質土
（炭化物と 1cm 程の 7.5YR5/6 明褐色砂質土ブロック混）
2:7.5YR4/6 褐色粘質土
3:7.5YR4/4 褐色粘質土（他より粘性強）＝木棺痕跡
4:10YR3/4 暗褐色粘質土
5:7.5YR5/4 にぶい褐色粘質土
地山 :7.5YR5/6 明褐色粘質土

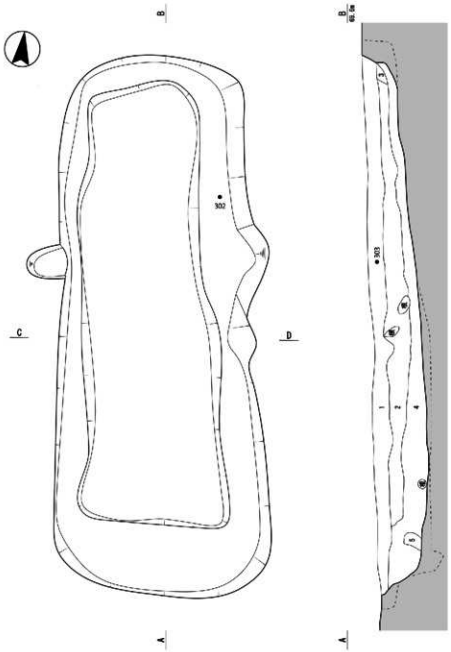
第70図　ＳＫ64・174遺構図（１：20）



第71図　ＳＫ92遺構図・遺物出土状況図（１：20）

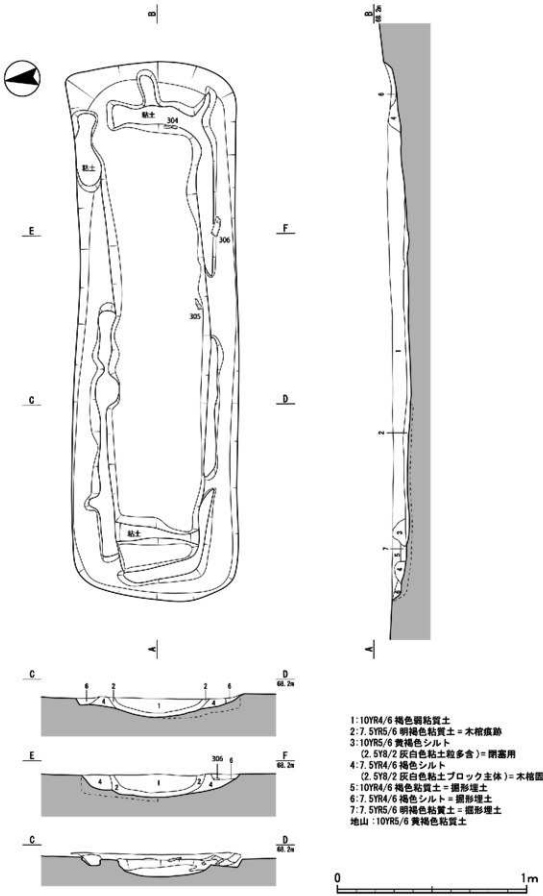


第72図　ＳＫ152遺構図・遺物出土状況図（１：20）

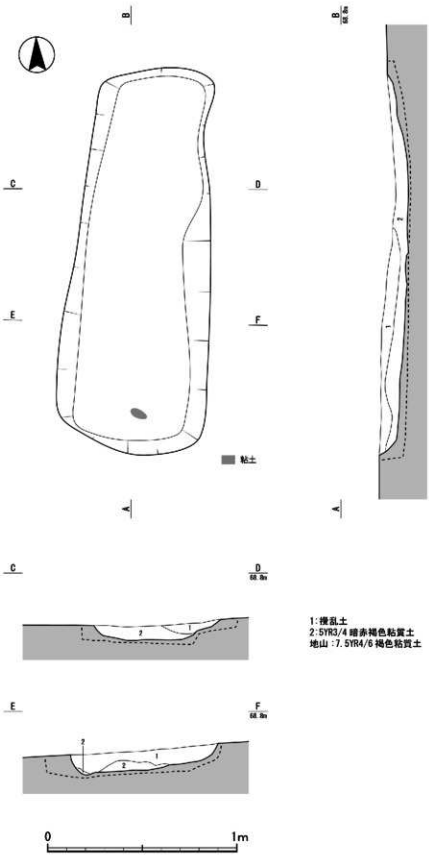


1:10YR4/6 褐色弱粘質土
2:7.5YR4/4 褐色粘質土
3:7.5YR4/6 褐色弱粘質土
4:5YR4/4 にぶい赤褐色シルト
(2 層よりしまり強)
5:7.5YR4/2 灰褐色シルト＝根撹乱
地山 :7.5YR5/6 明褐色弱粘質土

第73図　ＳＫ154遺構図（１：20）



第74図　ＳＫ159遺構図・遺物出土状況図（1：20）



第75図　ＳＫ170遺構図（１：20）

はやや黒味を帯びる混じり土で、床面では部分的に木棺固定用とみられる粘土も確認された。南端から80cmほどの床面に礫３個が横一列に置かれており、棺台もしくは枕石と考えられる。石材は東から流紋岩・花崗岩・チャートである[6]。

遺物は礫付近から出土した鉄鎌（301）１点のみである。

ＳＫ154（第73図）　平面形は長さ2.85m×幅0.98～1.15mの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは30cmである。調査時の所見によると、全体的に根による攪乱が著しいため明瞭ではないとしながらも、色調と土の締まり具合から第２層の範囲を木棺痕跡と判断している。木棺痕跡は長さ2.36m×幅0.8mの長方形で、埋土は褐色粘質土である。土層観察壁では木棺固定用の土を想定しているが平面的には検出できていない。

遺物としては、鉄鏃が２点出土した。このうち302は根攪乱からの出土で、本来の位置ではない。

ＳＫ159（第74図）　平面形は長さ2.85m×幅0.87mの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは12cmである。内部には木棺固定用とみられる灰白色粘土を含む土（第４層）が井桁状に置かれ、小口部分には閉塞用とみられる土（第５層）も観察できた。木棺は長さ2.14m×幅0.52mの平面長方形で、腐食土とみられる土層（第２層）の断面形状は観察場所によって異なるが、底部は若干丸みを帯びる。

遺物としては、棺内から土師器片と鉄製品２点（刀子304・鉄鏃305）、棺外から砥石（306）が出土した。土師器片は非常に細片であるため、埋土に混入したものとみられる。

ＳＫ170（第75図）　長さ2.02m×幅0.58～0.78mの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは15cmである。根による攪乱が著しく、木棺痕跡は確認できなかったが、埋土に灰白色粘土が僅かに混じる場所が確認された。遺物も出土しなかったが、規模・形状と、木棺固定用として特徴的な粘土が含まれることから、木棺墓と推定した。

ＳＫ174（第70図）　平面形は長さ2.1m×幅0.77mの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは20cmである。木棺痕跡は長さ1.85m×幅0.36mの長方形で、断面はU字形を呈する。木棺腐植土はやや黄色味を帯び、粘性が強い。

遺物としては鉄製鉈（307）１点のみである。

ＳＫ179（第76図）　平面形は長さ2.64m×幅0.7mの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは16cmである。木棺痕跡は長さ1.8m×幅0.4mの長方形で、断面はU字形を呈する。木棺腐食土は褐色で、粘性がかなり強い。木棺の両脇には固定用の粘質土、小口部分には閉塞用とみられる粘土が認められる。

遺物としては棺内埋土から土師器片が出土したが、細片であるため混入品と考えられる。

ＳＫ181（第77図）　平面形は長さ2.3m×幅1.13mの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは15cmである。木棺痕跡は長さ1.56m×幅0.43mの長方形で、断面は底部が平らなU字形を呈する。木棺腐食土とみられる褐色土は粘性が強く、木棺の両脇には固定用の粘質土が認められる。

遺物は出土しなかった。

ＳＫ183（第77図）　平面形は長さ1.36m×幅0.52mの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは22cmである。木棺痕跡は長さ1.08m×幅0.38mの長方形で、木棺腐食土とみられる明褐色粘質土は、底部が平らな断面U字形を呈する。

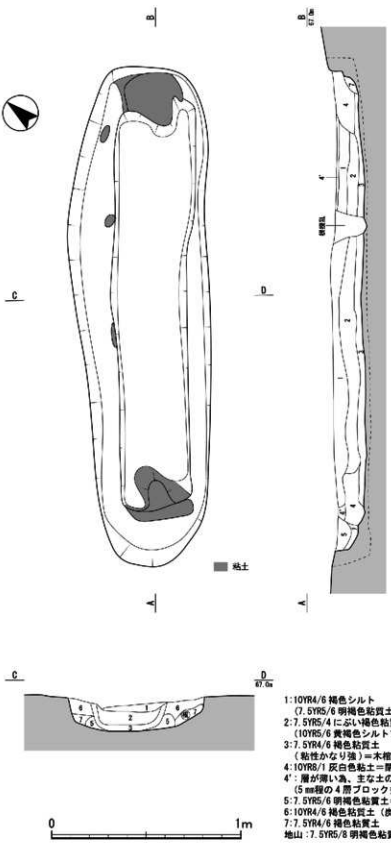
遺物は出土しなかった。

ＳＫ184（第78図）　平面形は長さ1.35m×幅0.65mの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは12cmである。木棺痕跡は長さ1.1m×幅0.45mの長方形で、断面は底部が平らなU字形を呈する。閉塞用や固定用粘土はないが、木棺腐食土とみられる粘性の強い褐色粘質土は観察できた。

遺物は出土しなかった。

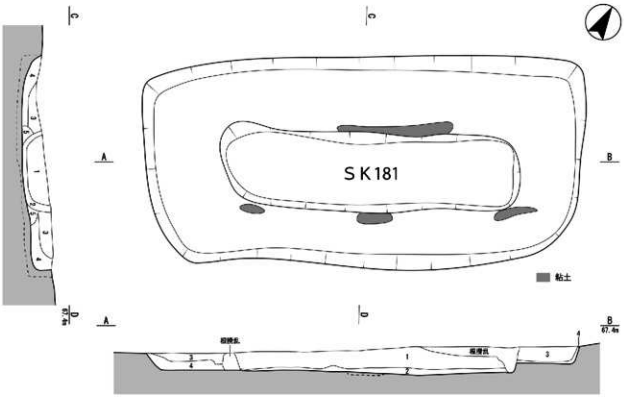
ＳＫ185（第79・80図）　平面形は長さ2.73m×幅1.32mの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは20cmである。木棺腐食土は確認されなかったが、木棺固定用や閉塞用の土が観察でき、墓壙内に２つの棺を南北に並べて埋葬していたことが判明した。北棺は長さ1.81m×幅0.4m、南棺は長さ1.9m×幅0.4mで、深さはともに20cmである。

遺物としては、北棺内東側埋土から勾玉２個（315・316）、北棺西端から南棺との間にかけての位置で砥石・叩き石（309～314）が、その下から鉄鏃・鑿などの鉄製品（329～339）が出土した。さらに、棺の



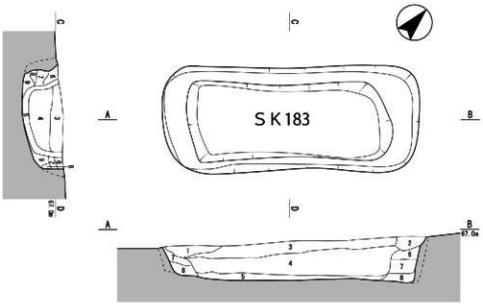
1:10YR4/6 褐色シルト
（7.5YR5/6 明褐色粘質土ブロック多混）
2:7.5YR5/4 にぶい褐色粘質土
（10YR5/6 黄褐色シルトブロック少混）
3:7.5YR4/6 褐色粘質土
（粘性かなり強）＝木棺痕跡
4:10YR8/1 灰白色粘土＝閉塞用
4':層が薄い為、主な土の色・質は不明
（5 mm程の 4 層ブロック多混）＝礫上粘土の崩落？
5:7.5YR5/6 明褐色粘質土＝木棺固定用
6:10YR4/6 褐色粘質土（炭化物混）
7:7.5YR4/6 褐色粘質土
地山:7.5YR5/8 明褐色粘質土

第76図　ＳＫ179遺構図（１：20）



1:7.5YR4/4 褐色シルト
2:7.5YR4/6 褐色粘質土
（1 層より粘性強）＝木棺痕跡
3:7.5YR4/4 褐色シルト
4:7.5YR4/3 褐色粘質土
（7.5YR5/4 にぶい褐色粘質土ブロック多混）
5:7.5YR3/4 暗褐色粘土＝木棺固定用
地山 :7.5YR5/6 明褐色粘質土

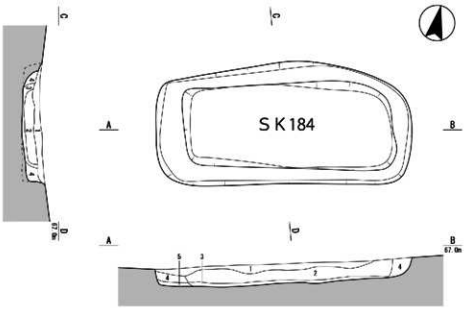
0 1m



1:7.5YR3/4 暗褐色シルト
2:2.5Y4/6 オリーブ褐色シルト
3:7.5YR4/4 褐色粘質土
（1cm 程の 7.5YR5/8 明褐色シルトブロック混）
4:10YR4/6 褐色粘質土（炭化物混）
5:7.5YR5/6 明褐色粘質土＝木棺痕跡
6:7.5YR5/4 にぶい褐色シルト
7:7.5YR5/6 明褐色粘質土＝木棺固定用
8:10YR4/6 褐色粘質土（1cm 程の地山ブロック混）
地山 :7.5YR5/8 明褐色粘質土

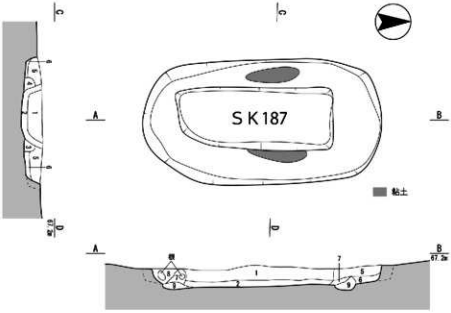
0 1m

第77図　ＳＫ181・183遺構図（１：20）



1:10YR4/6 褐色シルト
2:10YR3/4 暗褐色粘質土
3:7.5YR4/6 褐色粘質土（2層より粘質強）＝木棺痕跡
4:10YR4/6 褐色粘質土＝掘形埋土
5:7.5YR5/6 明褐色粘質土
（1cm 程の 7.5YR5/4 にぶい褐色シルト多混、炭化物多混）
＝掘形埋土

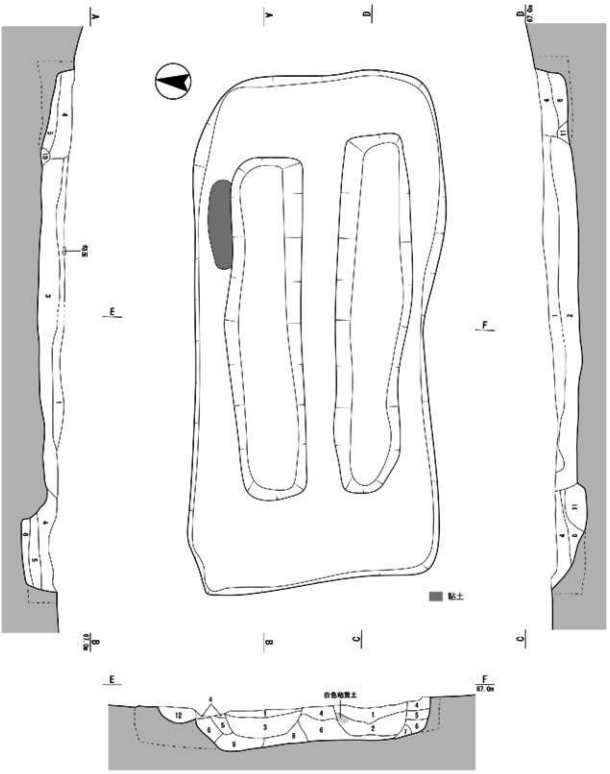
0　1m



1:7.5YR4/4 褐色粘質土
（1cm 程の 7.5YR5/6 明褐色粘土ブロック多混）
2:7.5YR5/4 にぶい褐色粘質土＝木棺痕跡
3:10YR4/6 褐色粘質土＝木棺固定用
4:7.5YR4/4 褐色粘質土
（1cm 程の 7.5YR5/6 明褐色粘質土ブロック混）＝木棺固定用
5:7.5YR5/6 明褐色粘質土
（3mm 程の 7.5YR4/3 褐色シルトブロック混）
6:7.5YR5/4 にぶい褐～ 7.5YR5/6 明褐色粘質土
7:7.5YR5/8 明褐色粘質土＝小口閉塞土
8:7.5YR4/4 褐色粘質土（1cm 程の鉄分粒混）
9:10YR4/6 褐色粘質土
（5mm 程の 10YR3/4 暗褐色粘質土ブロック
と 7.5YR5/8 明褐色粘質土ブロックと炭化物混）
地山 :7.5YR5/8 明褐色粘質土

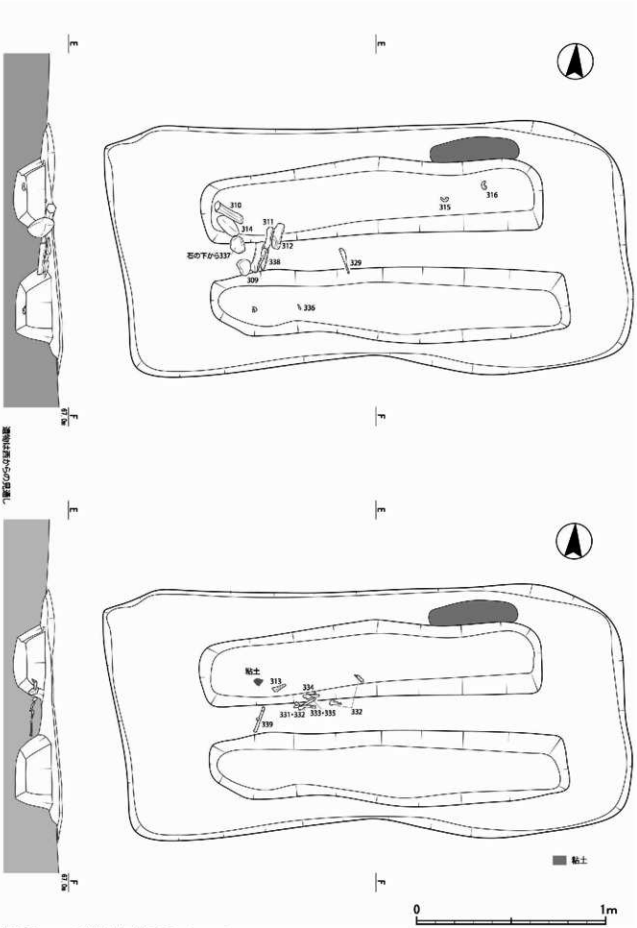
0　1m

第78図　ＳＫ184・187遺構図（１：20）

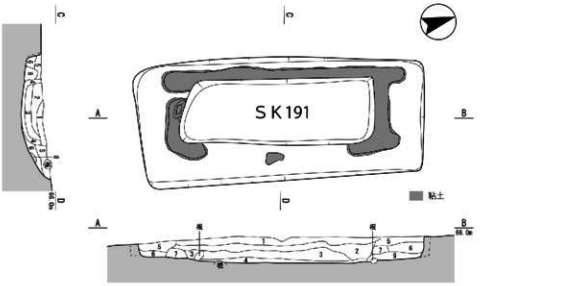


1:5YR4/4にぶい赤褐色粘質土＝南棺埋土
2:10YR4/6褐色粘質土（白色粘土少含）＝南棺埋土
3:7.5YR4/6褐色粘質土＝北棺埋土
4:7.5YR5/6明褐色粘質土＝掘形埋土
5:7.5YR4/6褐色粘質土＝掘形埋土
6:7.5YR5/6明褐色粘質土＝掘形埋土
7:10YR5/6黄褐色粘質土＝南棺側面固定土
8:5YR4/4にぶい赤褐色粘質土＝北棺側面固定土
9:10YR5/6黄褐色粘質土＝北棺側面固定土
10:7.5YR5/6明褐色粘質土（粘性強）＝北棺閉塞土
11:10YR4/6褐色粘質土（粘性強）＝南棺閉塞土
12:7.5YR5/6明褐色シルト＝後世の土

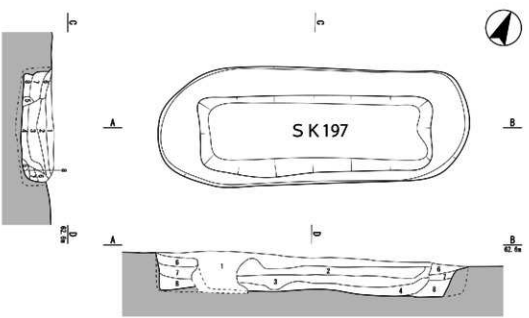
第79図　ＳＫ185遺構図（１：20）



第80図　ＳＫ185遺物出土状況図（１：20）

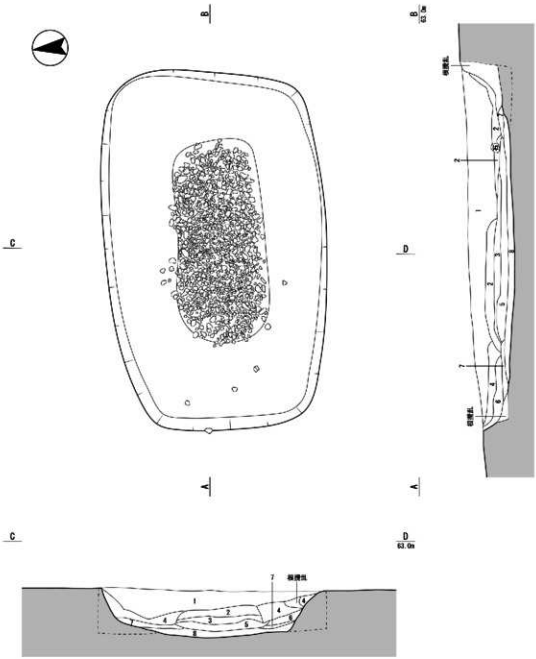


1:10YR4/6 褐色粘質土（1cm 弱の 7.5YR6/8 橙色シルトブロック多混）
2:7.5YR4/6 褐色粘質土
（1 ～ 3cm の 2.5Y6/6 明黄褐色粘質土ブロックと 1cm 程の 7.5YR5/8 明褐色シルトブロック混）
3:7.5YR5/6 明褐色粘質土
4:7.5YR4/6 ～ 10YR4/6 褐色粘質土（1 ～ 3 層より粘性弱）= 木棺痕跡
5:10YR4/6 褐色粘質土（炭化物少混）= 掘形埋土
6:10YR4/6 褐色粘質土（1cm 程の 7.5YR5/8 褐色シルトブロック多混）= 掘形埋土
7:10YR5/6 黄褐色粘土（1cm 程の 2.5Y7/3 浅黄色粘土ブロック多混）= 閉塞用
8:10YR5/6 黄褐色粘土（1cm 程の 2.5Y7/3 浅黄色粘土ブロック多混）= 棺固定用
9:7.5YR4/4 褐色粘質土 = 掘形埋土
地山 :7.5YR5/8 明褐色粘質土



1:7.5YR4/6 褐色シルト（～ 1cm の 7.5YR5/8 明褐色粘質土ブロック多混）= 撹乱
2:7.5YR5/6 明褐色粘質土（0.5 ～ 2cm の 7.5YR4/6 褐色粘質土ブロック多混）
3:7.5YR4/4 褐色粘質土（2 層より暗）
4:10YR4/6 褐色粘質土
5:7.5YR5/6 明褐色粘土 = 木棺固定用
6:7.5YR4/6 褐色シルト = 掘形埋土
7:7.5YR5/6 明褐～ 4/6 褐色粘質土 = 掘形埋土
8:5YR4/4 にぶい赤褐色粘質土 = 掘形埋土
地山 :7.5YR5/8 明褐色粘質土

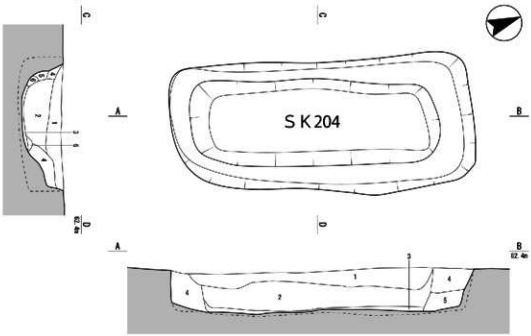
第81図　ＳＫ191・197遺構図（1 ：20）



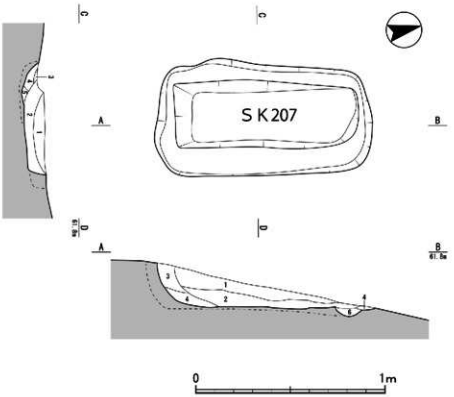
1:7.5YR5/6 明褐～4/6 褐色シルト（根の影響大）
2:7.5YR4/6～10YR4/6 褐色粘質土
（1cm 程の白色砂粒少混、少し赤みを帯びる）
3:7.5YR4/6 褐～7.5YR3/4 暗褐色粘質土（粘性強）
4:7.5YR4/4 褐色粘質土
5:礫＋7.5YR5/6 明褐色粘質土
6:5YR4/4 にぶい赤褐色粘質土
7:7.5YR3/4 暗褐色粘質土
8:7.5YR4/6 褐色粘質土
（1cm 程の 10YR5/6 黄褐色シルトブロック混）
地山:7.5YR5/8 明褐色粘質土

0 1m

第82図　ＳＫ200遺構図（1：20）

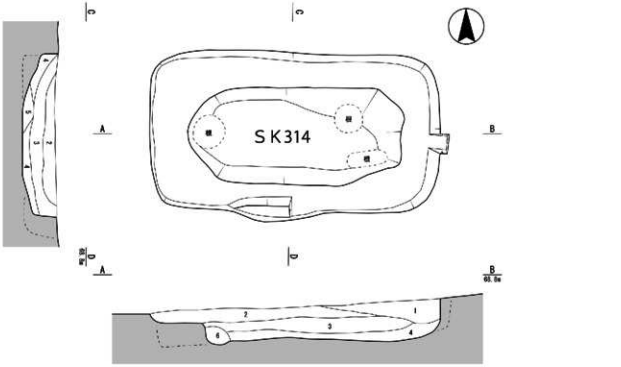


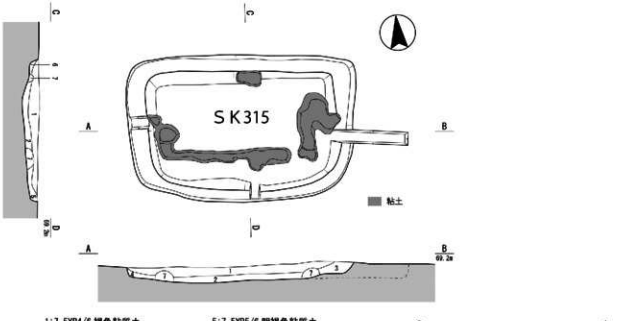
1:7.5YR3/4 暗褐色シルト
2:7.5YR4/6 褐色粘質土
（1～2cm 程の 7.5YR3/4 暗褐色粘質土ブロック混）
3:7.5YR5/6 明褐色粘質土
4:7.5YR4/6 褐色粘土
5:7.5YR4/4 にぶい赤褐色
6:10YR4/6 褐色粘質土
地山 :7.5YR5/8 明褐色粘質土



1:7.5YR4/4 褐色粘質土
2:10YR4/6 褐色粘質土
（～1cm 程の炭化物混）
3:5YR4/4 にぶい赤褐色粘質土
4:7.5YR5/6 明褐～4/6 褐色粘質土
5:7.5YR4/6～10YR4/6 褐色粘質土
（粘性強）＝木杭固定用
6:10YR5/6 黄褐色粘質土
地山 :7.5YR5/8 明褐色粘質土

第83図　ＳＫ204・207遺構図（1：20）





第84図　ＳＫ314・315遺構図（１：20）

埋土をふるい掛けした際に、臼玉12点（317～328）を発見した。内訳は北棺内埋土３点、南棺内２点、棺外７点である。

ＳＫ187（第78図）　平面形は長さ1.26m×幅0.66mの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは21cmである。木棺痕跡は長さ0.82m×幅0.33mの長方形で、断面は底部が平らなU字形を呈する。木棺腐食土とみられる褐色土の両脇には固定用の粘質土が、小口の片側には閉塞用らしき粘質土も認められた。

遺物は出土しなかった。

ＳＫ191（第81図）　平面形は長さ1.52m×幅0.66mの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは15cmである。内部には木棺固定用と閉塞用とみられる黄褐色粘土が確認できた。木棺痕跡は長さ1.0m×幅0.35mの平面長方形で、木棺腐食土とみられる土層（第４層）の断面形状は、底部が平らなU字形を呈する。

遺物は出土しなかった。

ＳＫ197（第81図）　平面形は長さ1.65m×幅0.62mの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは20cmである。内部には木棺固定用とみられる明褐色粘土が確認できた。木棺痕跡は長さ1.22m×幅0.42mの平面長方形で、断面形状は底部が平らなU字形を呈する。

遺物としては、土師器と須恵器の細片が少量出土したが、埋土に混入したものとみられる。

ＳＫ200（第82図）　今回の調査で唯一、底部中央に礫敷きのある墓。平面形は長さ1.9m×幅1.17mの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは25cmである。

礫は土坑のほぼ中央（長さ1.08m×幅0.48mの範囲）に敷かれていた。礫は最下層の褐色粘質土（第８層）の上の明褐色粘質土（第５層）に置かれ、上面中央部は縦方向にわずかに窪んでいる。礫は直径１～３cmくらいのチャート・花崗岩・粘板岩・砂岩などである[8]。礫の範囲を区画したり、面や辺を揃えるといった恣意的な配置や石材の使い分けは見て取れないが、長辺の端には比較的大きめ、中央は小さめの礫が主体となる。調査時の所見によると、礫の上層にある第２・３層は埋葬主体に関わる層であり、木棺痕跡が認められないことから土壙墓としたほうがよいかもしれない。

遺物は出土しなかった。

ＳＫ204（第83図）　平面形は長さ1.6m×幅0.7mの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは21cmである。木棺痕跡は長さ1.3m×幅0.46mの長方形で、断面は底部が平らなU字形を呈する。

遺物は出土しなかった。

ＳＫ207（第83図）　平面形は長さ1.16m×幅0.6mの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは25cmである。木棺痕跡は長さ0.97m×幅0.36mの長方形で、断面は底部が平らなU字形を呈する。

遺物は出土しなかった。

ＳＫ314（第84図）　平面形は長さ1.52m×幅0.82mの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは20cmである。埋土は上層に炭化物が認められ、東半最上層は特に多く、全体が黒色を呈していた。床面中央の非常に浅い窪み（1.12×0.5m、深さ２～３cm）はしまりの弱い地山類似土が認められた範囲である。炭化物を含んでいないため木棺痕跡かは不明である。

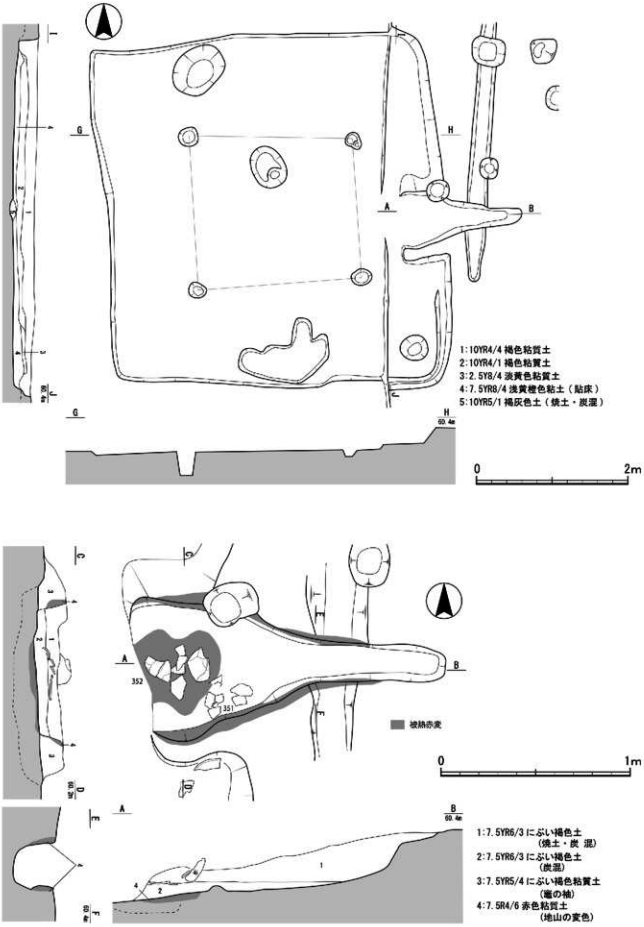
遺物としては土師器の小片が１点出土した。

ＳＫ315（第84図）　平面形は長さ1.2m×幅0.76mの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは８cmである。埋土の観察では木棺痕跡を認識できなかったが、床面の木棺固定用らしき帯状粘土（幅６cm、高さ４cm程度）の内側に木棺が設置されていたとすれば、規模は長さ57cm×幅34cmと非常に小さい。

遺物は出土しなかった。　（山中・水橋）

c　竪穴建物

ＳＨ59（第85図）　第２次調査区東端で検出し、一辺約4.5mの方形を呈する。調査区端での検出で、検出面からの深さが西側で５cm程度、埋土も浅黄橙色を呈する特異なもののため、攪乱坑を疑った。しかし、調査区壁に焼土を確認したため東へ拡張したところ、東辺中央に竈を伴う竪穴建物であることが判明し、当初検出時に現れた浅黄橙色の粘質土は貼床との判断に至った。貼床は厚さ10cm前後で、南側が厚い傾向にある。東側では住居の残存が良く、埋土の状況が確認できる。埋土は貼床上に２層に分かれて堆積する。上層は褐色粘質土、下層は褐～浅黄色の粘質土である。上層が両端で溝状に下がり、周溝が巡る様子を示す。下層堆積後も周溝が存続した状況を示すため、下層上面も住居の床面として機能した時期があったものと思われる。なお、竈付近で



第85図　ＳＨ59遺構図（１：50）・竈詳細図（１：20）

は貼床が途切れ、焼土や炭が混じる層がレンズ状に堆積するが、下層はこの層を覆っている。これらから、この住居の床面は少なくとも３回の改修が行われていることになる。なお、周溝は拡張した東南部分で平面でも確認できたが、従来検出の住居壁より10cmほど外側に位置している。元来この住居の規模は一回り大きなものであったが、残存が浅かった西側では正確に検出できなかった結果としたい。

住居内には直径17～25cmの円形を呈する柱穴が４基あり、主柱穴と考えられる。西側の２基は床面から30cmの深さを有するが、東側の２基は10cm程度しかない。土坑も２基検出しているが、南側のものは不整形で深さも５cm程度で、貼床が欠落した範囲を示すものと思われる。北側のものは円形で、深さも30cmを測る深いものであるが、貯蔵穴と判断する根拠を得ない。

竈は東辺中央に設置され、両袖と煙道が残存するが、焚口や天井部は欠損している。床面より若干窪めて燃焼室が形成され、床や袖は４cm程度被熱のため赤変する。なお、煙道部も赤変するが、やや弱く２cm程度の赤変で、床面は赤変していない。その煙道は住居壁から１mまで確認した。竈床全体は、煙道に向けて緩やかな傾斜をもつが、焚口から1.3mで急激に10cm以上昇し、それから先端までは深さ４cmを確認するに止まる。竈の埋土は、同質の土であるが、炭と焼土が混じる上層と炭のみの下層に分かれる。下層上面に接して、20cm程度の石が置かれていた。支柱石と考えられるが、特に固定された様子はない。焼土の混じる上層が天井部の崩落を含み、下層が竈使用に伴う堆積とすれば、支柱石はその都度据え直されて使用されていたようだ。また、支柱石付近で土師器甕片が多数出土した。接合の結果、長胴甕の底部であることが分かった。竈に据えられていたものかもしれない。（森川）

d　土坑

ＳＫ２（第10図）　第２次調査西区北部で検出した長径5.0m、短径2.9mの不整三角形に近い形態を呈する。検出面からの深さは北端部約20cm、南端部７cm程度で南側が浅い。しかし土坑底部は傾斜しておらず、本来は均一な深さであったものと考えられる。埋土は上下２層に分かれるが、上層は土坑中央部に所在することから、土坑周囲から自然に埋没した様子がうかがえる。遺物は残1/6ほどの須恵器杯身（340）が出土したに止まる。

ＳＫ10（第10図）　ＳＫ14と重複し、それと比べ埋土の色がやや淡い部分を長径１mほどの不整円形の土坑として検出したが、掘削の結果ＳＫ14と一体的な状況となった。したがって、独立した遺構ではなくＳＫ14の埋土の相違と判断できる。遺物は須恵器の甕片が出土するのみである。

ＳＫ14（第10図）　西山５号墳周溝（ＳＤ９）と重複して検出され、西山５号墳に先行する土坑である。全体の形状は不明であるが、直径約4.0mの不整円形を呈するものと考えられる。南端はＳＤ12と重複するが、前後関係は不明である。検出面からの深さは概ね20cm程度である。遺物は土師器片、須恵器片が出土するのみである。隣接する遺構全体の形状からすれば、ＳＤ12からの流水がＳＫ14を経由し、ＳＤ９に至り枝分かれし谷へ流れ落ちた痕跡と考えられなくもない。そうであるならば、本来の形状は大きく損なわれている可能性もあり、遺構の性格等は不明である。

ＳＫ17（第９図）　第２次調査西区西部で検出した。痕跡程度の残存で、北側は攪乱溝により消滅している。土師器の小片が出土したのみであるが、周囲の遺構配置状況から西山４号墳周溝ＳＤ15の一部と判断した。

ＳＫ56（第13図）　８号墳周溝ＳＤ53と重複して検出された長径6.0m×短径4.5mの不整形を呈する土坑である。既述したように、検出時点ではＳＤ53に切られる土坑と誤認して調査を進めた。底部は緩やかに傾斜し、検出面からの深さは最深部で30cm程度である。比較的多くの遺物が出土したが、完形ちかくまで復元できるのはなく、土坑の性格も不明である。

ＳＫ57　第２次調査東区で検出した直径1.0mの円形を呈する土坑である。深さは検出面から20cm程度の浅いもので、埋土は褐色土である。しかし、底から２cmほどは濁黄色の固く締まった粘土となる。この層は土坑そのものの構成要素と考えられるが、その意図は不明である。遺物は、小型の土師器甕（341）が出土した。内外面とも非常に雑な作りで、

平底である。　　（森川）

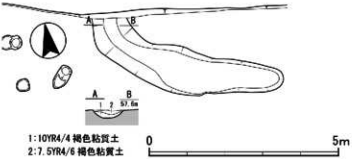
e　溝

ＳＤ１（第86図）　第２次調査西区北端で検出した。調査区外から南下し、直角ちかく屈曲して４ｍほど東進して途絶える溝である。幅1.0ｍ、深さは調査区北端が最も深く検出面から20cmを測り、東進するにつれて深さを減じる。したがって、本来はさらに東進していた可能性がある。埋土は上下２層に分かれ、いずれも褐色粘質土であるが、上層の色彩が濃い。遺物は、土師器壺の小片と磨滅が激しく不明瞭であるが、弥生時代に遡る壺か甕の口縁部らしき小片が出土したのみである。古墳の周溝や方形周溝墓の一部の可能性もあるが、調査区外すぐ北側には急峻な谷が迫っており、これらの立地が困難である。

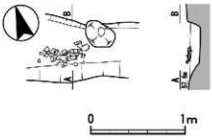
ＳＤ３（第87図）　第２次調査西区東端付近で検出した幅0.6ｍの東西に延びる溝である。東端は攪乱により消滅しているが、全長は４～５ｍ程度である。深さは検出面から14cm程度で、埋土はにぶい褐色の粘質土で他の遺構とやや異なる。溝の西寄りで土師器甕または壺の小片がまとまって出土した。出土位置は全て検出面近くで、底からは浮いた状態である。接合を試みたが成果は乏しく、口縁部形態から少なくとも２個体が混在していることが判明したに止まる（342・343）。溝の埋没が進んだ後に混入したことは分かるが、埋納かどうかは定かでない。

ＳＤ４　第２次調査西区北端で検出した。一応溝としたが、全体の形状は不明で、場合によっては直径２ｍの土坑の可能性もある。検出面からの深さは２～３cm程度で浅く、遺構とするに疑問もある。重複するＳＤ５と埋土の差異が確認できなかった。ＳＤ５が近世に下るものであるならば、それに切られることになるが、底部に段差等はない。古墳時代の須恵器杯片が出土しているものの、ＳＤ４もＳＤ５と同様に近世に下るものかもしれない。

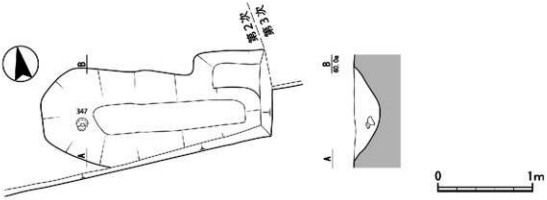
ＳＤ５　調査区外から南進する溝である。10ｍ以上を検出したが、深さが検出面から10cm未満の浅いもののため、南端は削平されている可能性がある。幅は0.4～1.5ｍで一様ではないが、並行する２条溝が重複しているためである。埋土は褐色粘質土で他の遺構と大差はないが、近世と考えられる土師器片が出土しているため近世以降の時期が想定される。



第86図　ＳＤ１遺構図（１：100）



第87図　ＳＤ３遺物出土状況図（１：40）



第88図　ＳＤ51遺物出土状況図（１：40）

ＳＤ11（第10図）　西山５号墳周溝ＳＤ９の谷側の部分が不自然に深くなる部分をＳＤ11とした。流水がＳＤ９を抉り、そのまま谷へ流れ落ちている。ＳＤ９との埋土の差は不明で、ＳＤ９掘削と流水によるＳＤ11の形成には大きな時期差は無いものと推測される。須恵器提瓶や蓋の破片等が比較的多く出土しているが、本来は西山５号墳に伴うものと考えられる。（森川）

ＳＤ12（第10図）　第２次調査西区北部で検出した幅約1.1mの溝である。北端はＳＫ14と重複し、前後関係は不明である。ＳＫ14から７mほど南西へ延び、突然止まる。検出面からの深さは15cmほどで須恵器の壺片が出土したのみである。埋土は他の遺構と同様に褐色粘質土であるが、ＳＫ14を経由してＳＤ９・11へ流れ下る流水によって形成された溝の可能性もある。

ＳＤ13　第２次調査西区北部で検出した溝である。幅約１m、調査区外から２mほど西進したところで、消滅する。したがって、深さは東側ほど深くなり、15cmほどを測る。調査区外には谷が迫っており、このまま谷へ落ち込むものと考えられる。そうした場合、遺構とするに疑問もあり、遺物も須恵器壺片が出土したのみで、谷へ流れ込む流路の痕跡かもしれない。

ＳＤ16　第２次調査西区で検出した弧状を呈する溝である。幅0.7m、検出面からの深さ15cmを測る。東端は切株により不明確ではあるものの両端とも削平により消滅しているものと考えられ、円墳周溝の残欠の可能性もある。土師器小片が出土しているが時期を特定できず、古墳時代より遡る可能性もある。

ＳＤ18　第２次調査西区で検出した溝である。幅0.6m、検出面からの深さ10cm未満の浅いものであるため、両端が削平されている可能性もある。東西長4.1mを確認し、西端はやや拡張気味となっている。須恵器蓋杯蓋（346）が出土しており、方墳周溝の一部可能性も残るが、連動する溝は検出されていない。

ＳＤ51（第88図）　第２次調査東区南東隅で検出した。検出時は調査区外東方へ続く溝としたが、掘削の結果、調査区際で止まる土坑となった。長さ2.4m、幅1.0mを測る長円形を呈し、検出面からの深さは40cmを測る深いものである。埋土は褐色土で、古墳周溝埋土と同様である。土坑西端部から須恵器有蓋高杯（347）がほぼ完形で出土した。高杯は底ちかくの土坑西壁に倒立で張り付くような状態で、この状況から原位置を保っているとは思えない。

（森川）

6　飛鳥時代の遺構

調査区中央部（第３次付近）で竪穴建物２棟、掘立柱建物３棟、土壙墓１基、土坑などを検出した。掘立柱建物のうち２棟については、遺物が出土していないため時期を確定することはできないが、他遺構との位置関係や方向性からこの時期と判断した。

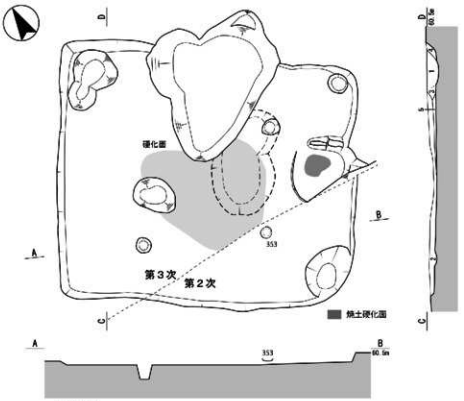
a　竪穴建物

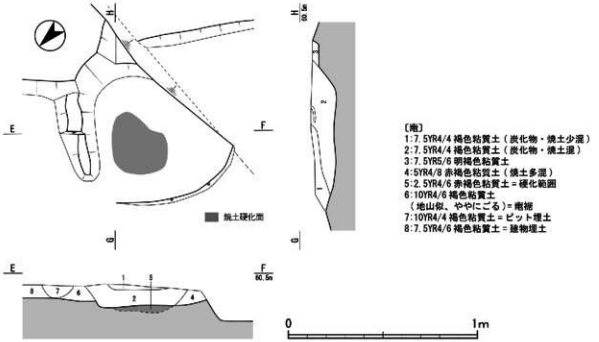
ＳＨ60（第89図）　第２次東区拡張部と第３次調査区にまたがって検出された、長辺3.9m×短辺3.4mの方形を呈する竪穴建物。検出面からの深さは10cmほどで、壁周溝は確認されなかった。北東壁の中央から住居中央にかけて攪乱穴によって大きく破壊されている。

住居内部からは主柱穴、南東壁のほぼ中央で竈、南隅で貯蔵穴とみられる土坑、住居中央で硬化面が検出された。主柱穴は住居東側と西側で１個ずつ検出されたが、残りの二つは確認されなかった。主柱穴の規模は、西側は直径約20cm、住居床面からの深さ約19cm、東側は直径20cm、深さ11cmである。竈は、第３次調査区内では幅0.9m以上×奥行0.6mほどの規模で、向かって左側の袖は高さ10cmほど残存していた。袖構築土は黄色味の強い褐色粘質土で、袖の内側には赤褐色の焼土硬化面が一辺30cmほどの範囲で確認された。右袖は第２次調査区と第３次調査区の境付近に存在していたと思われるが、調査で確認することはできなかった。竈の奥は住居外側へ15cmほど張り出しており、煙道の残欠と推測される。貯蔵穴とみられる土坑は、0.7×0.5mの楕円形を呈し、床面からの深さは約30cmである。

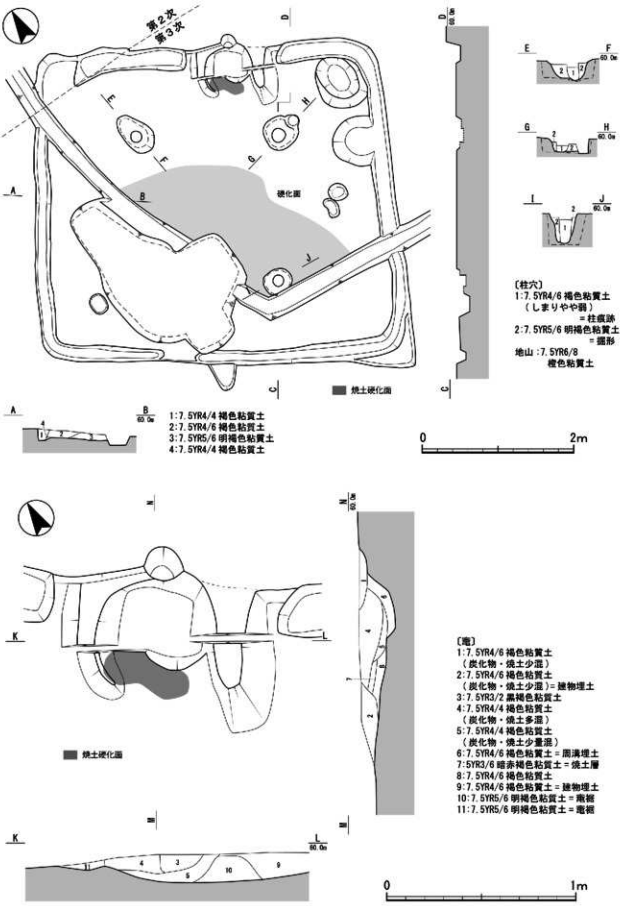
主に竈の周辺から、土師器の杯・皿・甕、須恵器の杯身・甕などが出土した。

ＳＨ66（第90図）　第２次東区拡張部と第３次調査区にまたがって検出された、長辺4.8m×短辺4.1mの方形を呈する竪穴建物。検出面からの深さは10

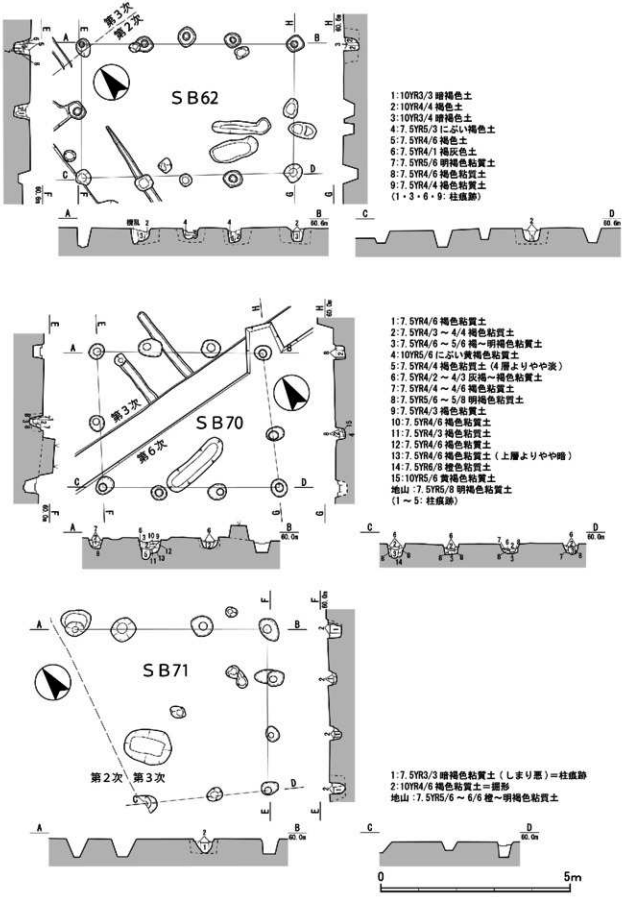




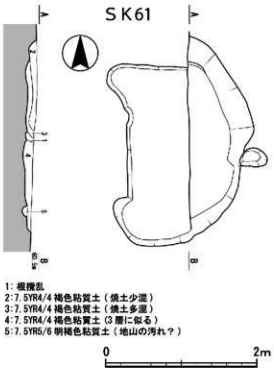
第89図　ＳＨ60遺構図（１：50）・竈詳細図（１：20）

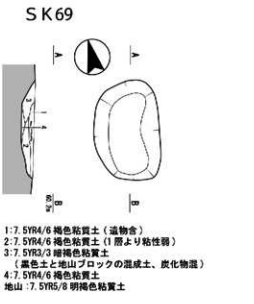


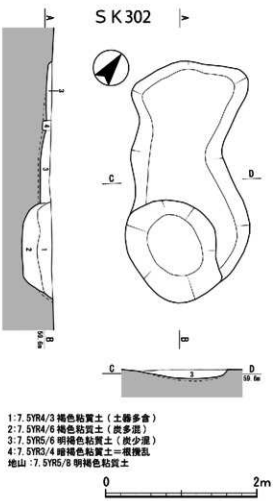
第90図　ＳＨ66遺構図（１：50）・竈詳細図（１：20）

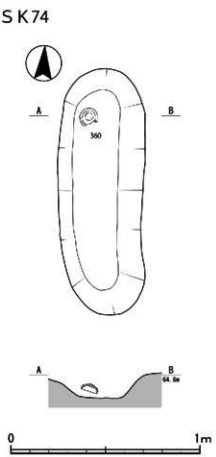


第91図　ＳＢ62・ＳＢ70・ＳＢ71遺構図（1：100）









第92図　ＳＫ61・ＳＫ69・ＳＫ302遺構図（１：50）、ＳＫ74遺物出土状況図（１：20）

cm未満。壁周溝は幅20～25cm、床面からの深さは最大9cmで、概ね四周に巡るが、南西壁中央付近で約0.4mほど途切れる。

建物内部からは主柱穴、北東壁のほぼ中央で竈、東隅で貯蔵穴とみられる土坑、住居中央で硬化面が検出された。

主柱穴は、攪乱土坑によって大きく壊されている西側を除き、3個確認した。一辺0.4m四方の隅丸方形や0.6×0.35mの楕円形を呈するもので、柱痕跡は直径15cmほどである。床面からの深さは20～60cmとばらつきが大きい。

竈は、袖の基底部で幅1.1m×奥行0.8mほど、袖は高さ15cmほど残存していた。袖構築土は明褐色粘質土で、袖の内側には赤褐色の焼土硬化面が確認された。竈の奥は住居外側へ15cmほど張り出しており、煙道の残欠と推測される。なお、竈構築土を取り除くと壁周溝が検出された。

貯蔵穴とみられる土坑は、0.7×0.6mの楕円形を呈し、床面からの深さは約30cmである。

竈周辺を中心に、住居埋土や周溝、主柱穴などから土師器甕と須恵器の壺瓶類の破片が出土した。出土量は少なく、コンテナケースに1箱に満たない。須恵器の壺瓶類1片は11号墳（ＳＤ67）出土品と接合したことが注目される。

b　掘立柱建物

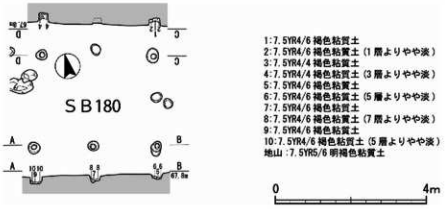
第2次東区拡張部と第3次調査区の境付近で掘立柱建物が3棟検出された。互いに重複関係には無く、竪穴建物とも重複しない。

ＳＢ62（第91図）　第2次調査東区東端から第3次調査区にかけて検出した。桁行4間（北辺5.64m）×梁行2間（西辺3.54m）である。主軸方位はN53°Wで、隣接する竪穴建物ＳＨ60と似た方向性を示す。柱掘形は直径30～45cmの略円形を呈する。柱痕跡は直径15～24cm。柱間は桁行の中央2間が狭く1.10～1.26mで、両側は1.60～1.67m、梁行方向が1.70～1.78mである。柱通は悪い。西隅の柱穴から土師器甕の小片が1点出土した。（森川・水橋）

ＳＢ70（第91図）　第3次調査区と第6次調査区の境界で検出した。桁行3間（南辺4.66m）×梁行2間（東辺3.54m）の側柱建物。隅柱の中心を結んだ平面形はやや平行四辺形に歪み、その線よりも外側に妻柱や間柱が並ぶ傾向が見て取れる。北辺の方位はN56°W。柱掘形は直径42～60cmの略円形を呈するものが多く、柱痕跡は直径18～28cm。柱間は1.32～1.69mで、中央が広い。梁行方向の東辺は柱間が北から2.18～1.38mで、妻柱が中央から南へ大きく外れている。

遺物は、柱穴から土師器甕の小片が1点出土した。

ＳＢ71（第91図）　北辺3間（5.06m）×東辺3間（4.28m）の側柱建物の可能性がある柱穴群。調査中に攪乱とした小穴や、検出できていない柱穴があるため確定できないが、北辺と東辺の柱穴は明瞭で、建物想定線は東隅の柱穴で直角に折れる。北辺の方位はN53°Wで、ＳＢ70と似ていることから同時期に建っていたものと考えられる。柱掘形は直径30～60mの略円形を呈するもので、柱痕跡は直径14～22cm。柱間は東辺が1.32～1.49mであるのに対し、北辺は1.24～2.14mと差が大きい。妻柱や間柱の中心



第93図　ＳＢ180遺構図（1：100）

は、隅柱の中心を結んだ線よりも、外側へ外れている。

遺物は出土しなかった。　（水橋）

c　土坑・土壙墓

ＳＫ61（第92図）　第２次と第３次調査区の境界で検出した。平面形状や土層からみて、複数の土坑が重複しているようである。南北2.7m×東西1.7mの不整方形を呈し、検出面からの深さは15cm。埋土に焼土塊を多く含み、他の遺構埋土と比べ異質である。須恵器・土師器の小片が出土したが、土坑の深さの割に、比較的多くの遺物が出土したといえる。

（森川・水橋）

ＳＫ69（第92図）　ＳＨ66とＳＢ70の間で検出された土坑。長さ1.3m×幅0.9mの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは15cmである。埋土には炭粒が混じる。

遺物としては、土師器甕や須恵器の杯身・甕が少量出土した。11号墳周溝出土品と接合した須恵器杯身がある。

ＳＫ74（第92図）　長さ1.3m×幅0.45mの平面隅丸長方形を呈する土坑。床面の幅は0.2mで、断面は逆台形を呈する。検出面からの深さは13cm。北側の床面上数cmの位置で完形の須恵器杯（360）が１点出土した。規模・形状や遺物の出土状況からみて土壙墓と考えられる。

ＳＫ302（第92図）　検出時には１つの土坑と認識したが、完掘状況と土層の観察から、２つの土坑の重複と判断した。

略長方形土坑（長さ3.0m×幅0.5m×深さ15cm）よりも楕円形土坑（長さ1.4m×幅1.2m×深さ40cm）が新しい。

遺物としては、土師器甕、須恵器（蓋杯・甕）などがコンテナケースに1/3程度出土した。　（水橋）

7　時期不明の遺構

ＳＢ180（第93図）　Ｐ・Ｑ103付近で検出された柱穴群。古墳時代や飛鳥時代の遺構埋土と大差なく、略方形にくくることもできる配置であるが、柱穴と認識できたものは５個で、掘立柱建物とするには足りない。仮に掘立柱建物として記述するならば、東西２間（3.25m）×南北１間（2.4m）となる。主軸方位はＥ10°Ｓ。柱掘形は直径0.3mほどの略円形を呈する。柱痕跡は直径15cmほどで、柱間は東西方向が1.55-1.70m、南北方向が約2.4mである。

遺物が出土していないため、時期を確定することはできない。　（水橋）

【註】

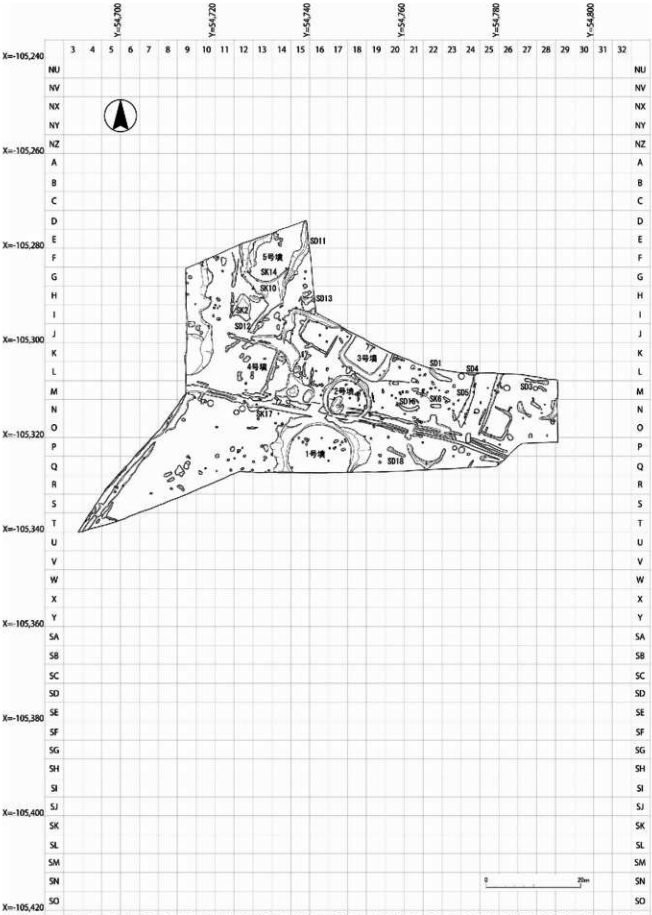
①Ａの北はＮＹとするところを、調査中に誤ってＮＺを使用したため、新たな混乱を避けるべく、そのまま報告することとした。

②概報段階では、土層観察等で棺の痕跡を確認できたものを「木棺墓」、確認できなかったものを「土壙墓」と表記した。しかし、「土壙墓」としたものも、平面形は「木棺墓」と同じく隅丸長方形を呈し、大きな相違点は認められない。土の識別が難しく、単に観察できないだけとも考えられるため、本報告ではどちらも「木棺墓」とした。

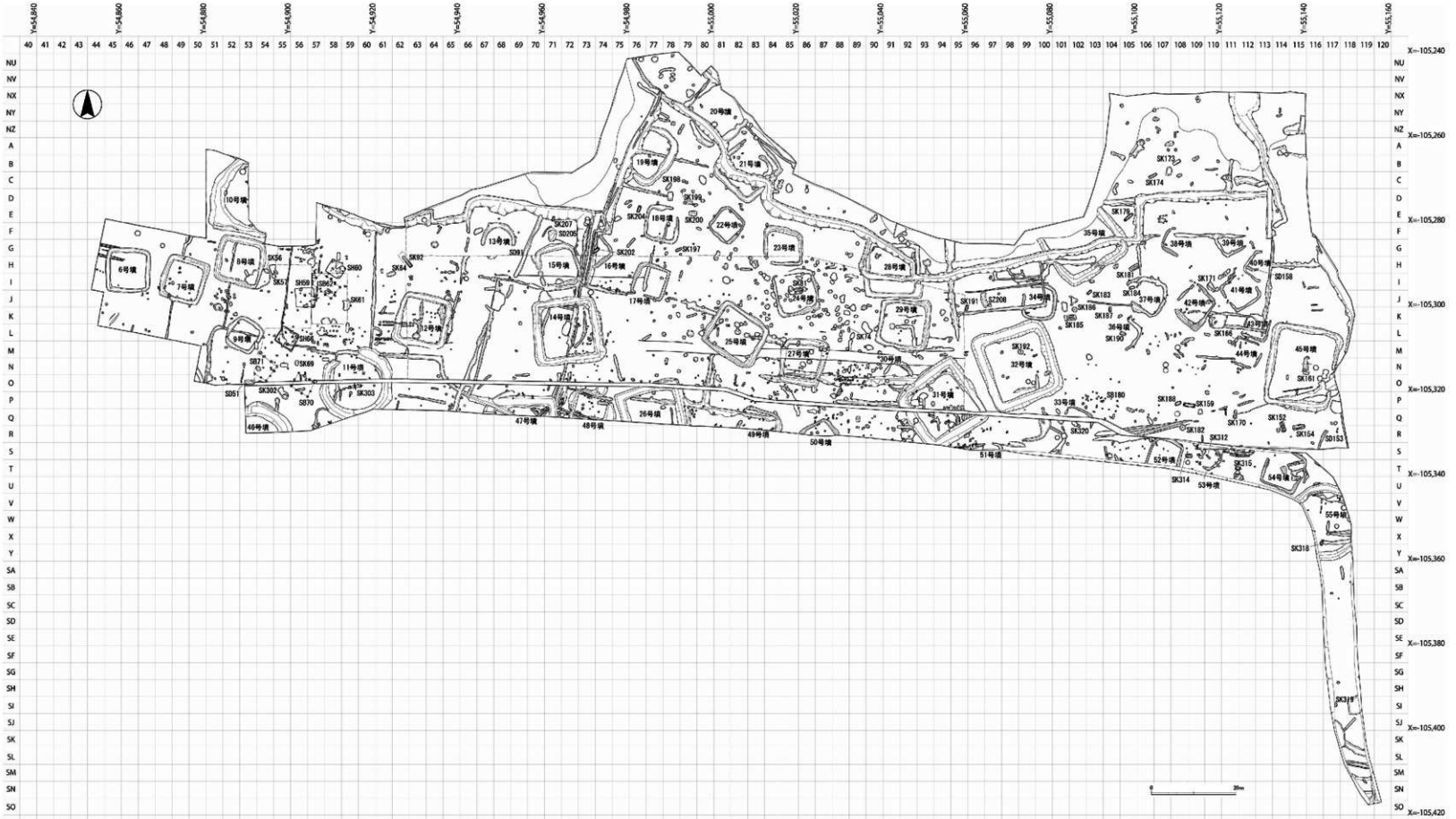
③辻川哲朗「近江地域における百済系土器の一様相」『紀要　26』財団法人滋賀県文化財保護協会、2013年。

④石材については三重県立博物館の津村善博氏にご教示いただいた。ＳＫ152出土の石材３点は、いずれも細かい礫が付着しており、石自体が多数の石で構成される礫岩から採取もしくは自然に外れたものである。

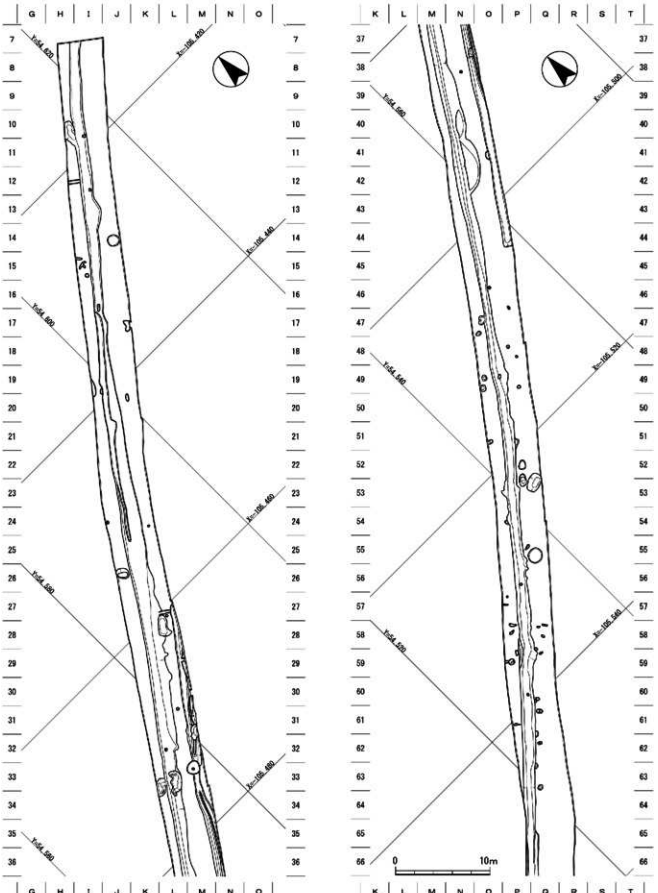
⑤津村氏のご教示によると、ＳＫ200の礫敷は、遺跡が立地する段丘壁を構成する礫層と同様の、身近で採取できた礫で構成されている。



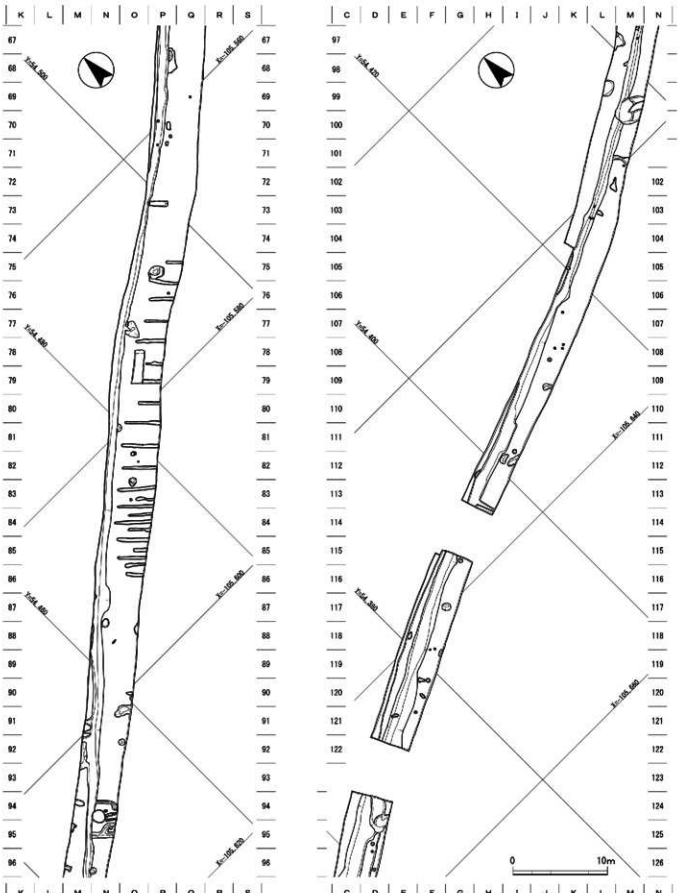
第94図　第２～６次調査区　遺構全体図１（1：800）



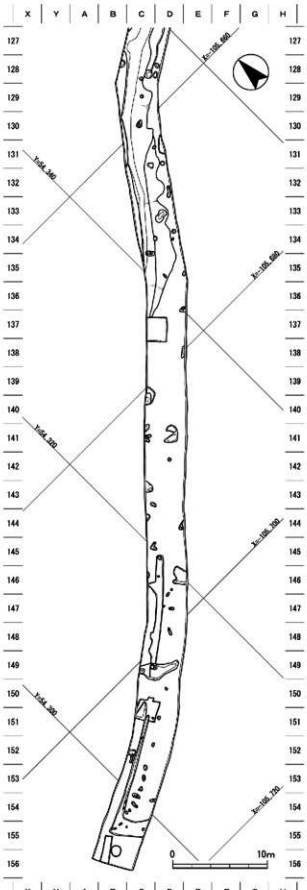
第95図　第２～６次調査区　遺構全体図２（1：800）



第96図　第７次調査区平面図１（１：400）



第97図　第７次調査区平面図２（１：400）



第98図　第７次調査区平面図３（1：400）

第１表　北山Ｃ遺跡・西山古墳群　遺構一覧表（１／４）

遺構番号（報告）	遺構番号（調査時）	調査次数	主なグリッド	性格	時代	規模 長さ(m)	規模 幅(m)	規模 深さ(cm)	備考(切合い、特徴等)	主な出土遺物
西山１号墳	SD 19	2（西）	O14～Q18	円墳	古墳	直径13.2m（推定） 周溝：幅1.0～4.0m 深3.10～50cm			周溝の残存状況は比較的良好だが、幅は極めて不均一。	土師器(壺)、須恵器(壺)
西山２号墳	SD 8	2（西）	M16～N19	円墳	古墳	直径6.2m（推定） 周溝：幅1.0～1.4m 深5.20～30cm			周溝の最終埋没は近代以降か？	須恵器(杯身)
西山３号墳	SD 7	2（西）	J18～L20	方墳	古墳	7.5×5.6～m 周溝：幅1.0～2.0m 深5.20cm			周溝の内側は底面まで、外側はやや張状に張り出す傾向あり。	須恵器(杯身)
西山４号墳	SD 15	2（西）	J12～N15	円墳	古墳	直径12m（推定） 周溝：幅3.3m、深5.30cm			西側は削平により消滅。	須恵器(蓋杯・壺・甕)
西山５号墳	SD 9	2（西）	F12～G14	円墳	古墳	直径9m（推定） 周溝：幅4.5m、深5.40cm			当初から北側には周溝が無かった可能性あり。SK14より新。	土師器・須恵器小片
西山６号墳	SD 54	2（東）	G45～I47	方墳	古墳	8.5×8.3m 周溝：幅1.0m 深5.5～25cm				土師器(高杯・壺) 須恵器(蓋・有蓋高杯・甕)
西山７号墳	SD 55	2（東）	H46～J50	方墳	古墳	7.9×8.3m 周溝：幅0.9～1.5m 深5.10～35cm				土師器(壺・甕) 須恵器(蓋杯・高杯・器・壺・甕)
西山８号墳	SD 53	2（東）	G51～I54	方墳	古墳	8.3×9.1m 周溝：幅1.3～1.8m 深5.35cm			SK56より古。 須恵器は110号墳周溝下層出土品と接合。	土師器(壺・甕・高杯)、 須恵器（平底蓋・蓋杯・高杯・器・壺・甕）
西山９号墳	SD 52	2（東）	K52～M54	方墳	古墳	12.6m 周溝：幅0.5～1.4m 深5.15cm			比較的小型	完形の土師器椀２個
西山10号墳	SD 58	2（東）	C51～F54	方墳	古墳	直径15.m（周溝含む推定値） 周溝：幅2.0(～3.5)m 深5.50cm			周溝の形状は後世の改変による。 下層出土須恵器がSK56出土品と接合。	土師器(壺) 須恵器(蓋杯・器・壺・甕)
西山11号墳				円墳	古墳	直径12.5m以上 推定13.0m				
	SD 67	3	M59～O61	周溝	古墳	10.6	3.5	35	SD66・68出土品と接合する遺物あり。	土師器(甕)、製塩土器 須恵器(甕・壺・提瓶・横瓶・高杯・蓋杯)
	SD 68	3	N～O58	周溝	古墳	6.2	1.9	20	SK61・SD67出土品と接合する遺物あり。	土師器(甕) 須恵器(甕・壺・高杯・蓋杯)
	SD 67	6	P58～61	周溝	古墳	26.8	2.4	35	西側に遺物集中する。	土師器(甕・杯) 須恵器(蓋杯・椀・高杯・器・壺)
	SK 303	6	O59・60	主体部	古墳	3.1	0.54	18	木棺痕跡は不明瞭。	剥片（サヌカイト）
西山12号墳	SD 63	3・4	J62～M65	方墳	古墳	9.6×9.3m 周溝：幅1.6m、深5.20cm				土師器(甕)、鉢か 須恵器(壺・直口壺・無蓋高杯)
西山13号墳	SD 206	5	F～G67～69	円墳	古墳	直径12.3m（推定） 周溝：幅1.2m、深5.20cm				土師器片
西山14号墳	SD 86	4	J70～N74	方墳	古墳	11.8×11.8m 周溝：幅2.0m、深5.50cm				土師器(甕・高杯) 須恵器(甕・器)
西山15号墳				方墳	古墳	7.6×7.5m				
	SD 87	4	I71・72	周溝	古墳	7.2	1.1	30		須恵器(直口壺)
	SD 89	4・5	G70～H72	周溝	古墳	15.7	1.7	35	東側は幅0.8m、深5.20ｃｍ。	土師器(高杯)、ガラス玉
	SD 90	4	H70	周溝	古墳	7.4	1.4	15	西溝、残存状態は非常に悪い。	なし
西山16号墳	SD 88	4・5	F～H74	方墳	古墳	6.5×6.0m 周溝：幅0.9m、深5.20cm				なし
	SK 202	5	G73・74	主体部	古墳	1.9～	0.7	20	木棺痕跡あり。 （長さ：1.6m～×幅0.5m）	鉄製品、土師器片
西山17号墳	SD 84	4	H76～J77	方墳	古墳	6.5×6.5m 周溝：幅1.0m、深5.30cm				土師器(甕)
西山18号墳	SD 201	5	F77～G78	方墳	古墳	6.3×6.3m 周溝：幅1.0m、深5.20cm				土師器(直ラ・高杯)
西山19号墳	SD 203	5	C76～N278	方墳	古墳	10.5×8.1～m 周溝：幅2.0m、深5.30cm				土師器(甕・高杯) 須恵器(器)
西山20号墳	SD 196	5	NX79～NZ82	方墳	古墳	10.5×(10.5)m 周溝：幅2.0m、深5.30cm				須恵器(椀形鐙)
西山21号墳	SD 195	5	A81～C84	方墳	古墳	10.5×10.0m 周溝：幅1.5m、深5.30cm			土師から埴輪出土。 墳丘側から落ちふんだような状況。	埴輪(円筒・家形)
西山22号墳	SD 194	5	E86～G82	方墳	古墳	5.9×5.3m 周溝：幅0.8m、深5.15cm				土師器片
西山23号墳	SD 83	4・5	F84～H86	方墳	古墳	7.3×7.1m 周溝：幅1.4m、深5.35cm				土師器(椀)
西山24号墳	SD 80	4	H4～K87	方墳	古墳	8.5×8.5m 周溝：幅1.2m、深5.30cm				須恵器(壺・把手付椀)
	SK 81	4	H85～J86	主体部	古墳	(4.3)	1.0	10	木棺痕跡あり。 （長さ：2.4m～×幅0.4m×深5.25cm）	鉄製品（刀子）
西山25号墳	SD 82	4	J81～N83	方墳	古墳	10.9×9.3m 周溝：幅1.4m、深5.30cm				土師器(高杯・壺) 須恵器(壺・器・高杯)
西山26号墳	SD 85			方墳	古墳	15.5×12.1～m 周溝：幅2.0m、深5.50cm				
	SD 85	4	O77・78	周溝	古墳	6.2	1.6～	50		なし
	SD 85	6	P75～Q79	周溝	古墳	31	2.0	45		土師器片、須恵器(壺)
西山27号墳	SD 79	4	L85～O87	方墳	古墳	8.2×7.8m 周溝：幅1.5m、深5.40cm				土師器(甕)、須恵器(壺)
西山28号墳	SD 73	4・5	G90	方墳	古墳	10.9×10.7m 周溝：幅1.9m、深5.20cm				土師器(高杯)

第２表　北山Ｃ遺跡・西山古墳群　遺構一覧表（２／４）

遺構番号（報告）	遺構番号（調査時）	調査次数	主なグリッド	性格	時代	規模 長さ(m)	規模 幅(m)	規模 深さ(cm)	備考(切合い、特徴等)	主な出土遺物
西山29号墳	SD 72	4	J99～M93	方墳	古墳	9.7×9.7m 周溝：幅0.7m、深さ45cm				なし
西山30号墳				方墳	古墳	5.0×5.0m				
	SD 76	4	N91・92	周溝	古墳	5.3	1.3	15	31号墳との新旧関係不明。	上師器(高杯)
	SD 77	4	N91	周溝	古墳	3.3	0.7	7		なし
	SD 78	4	O91	周溝	古墳	3.1～	0.7	10		なし
西山31号墳	SD 75			方墳	古墳	12.0×11.6m 周溝：幅3.0m、深さ50cm				
	SD 75	4・5	P91～N94～P96	周溝	古墳	—	3.0	50	30号墳との新旧関係不明。	須恵器(杯蓋)、山茶碗(碗)
	SD 75	6	Q92～96	周溝	古墳	—	2.9	40		上師器(甕・壺)
西山32号墳	SD 176	5	L96～O101	方墳	古墳	14.0×13.2m 周溝：幅2.5m、深さ50cm			上から褐・黒・褐・暗褐色土。盛土層が上に入り盛り土の石、礫等が落ちたような状況。	上師器(小型鉢・壺・甕) 須恵器(壺・甕・蓋杯)
西山33号墳	SD 189			方墳	古墳	6.2～×2.9～m 周溝：幅0.6cm 深さ25cm(調査区壁で)				
	SD 189	5	P101～Q103	周溝	古墳	—	0.4	10		なし
	SD 189	6	Q～R103	周溝	古墳	—	0.6	壁25		なし
西山34号墳	SD 175	5	I99～K101	方墳	古墳	7.0×6.6m 周溝：幅0.7m、深さ15cm			32号墳周溝SD176と接する。	上師器(高杯)
西山35号墳	SD 177	5	G100～105	方墳	古墳	14.2×11.4～m 周溝：幅2.6m、深さ60cm			上から褐色土・黒色土・褐色土。	上師器(高杯・壺・甕) 須恵器(甕) 鉄製品(鉸)、硯石
西山36号墳	SD 178	5	K～M105	方墳	古墳	5.6～×4.5～m 周溝：幅1.0m、深さ30cm				なし
西山37号墳	SD 169	5	I106～K107	方墳	古墳	6.5×6.5m 周溝：幅1.0m、深さ25cm				なし
西山38号墳	SD 172	5	F107～G108	方墳	古墳	4.5×4.3～m 周溝：幅0.8m、深さ25cm				なし
西山39号墳	SD 160	5	G110～112	方墳	古墳	5.1～×4.7～m 周溝：幅0.7m、深さ20cm				なし
西山40号墳	SD 157	5	G～I112	方墳	古墳	6.0～×4.5～m 周溝：幅0.5m、深さ10cm			SD158より古。	なし
西山41号墳				方墳	古墳	6.5×6.5m				
	SD 155	5	J111～113	周溝	古墳	11.2	0.6	10		上師器片
	SD 156	5	I・J111	周溝	古墳	7.1	0.7	10		なし
西山42号墳	SD 162	5	J108～K110	方墳	古墳	7.0×6.6m 周溝：幅1.3m、深さ35cm				上師器片 須恵器(杯身)
西山43号墳				方墳	古墳	5.0～×5.0m				
	SD 167	5	L112・113	周溝	古墳	10.7	0.5	15		なし
	SD 168	5	K112	周溝	古墳	2.3～	0.3	5		なし
西山44号墳				方墳	古墳	6.5×5.5m				
	SD 163	5	L111～M113	周溝	古墳	7.6	0.4	10		須恵器(杯身)
	SD 164	5	M～N113	周溝	古墳	3.7	0.5	3		なし
	SD 165	5	N111・112	周溝	古墳	4.3	0.6	15		なし
西山45号墳	SD 151	5	L114～P117	方墳	古墳	16.2×13.5m 周溝：幅2.5m、深さ55cm				上師器(高杯・壺・甕) 須恵器(杯蓋・壺・甕・提瓶)
	SK 161	5	N115・116	土体部？	古墳？	4.3	1.3	15		なし
西山46号墳	SD 301	6	P53～R55	円墳	古墳	直径12.5m(推定) 周溝：幅3.0m、深さ40cm			調査区西壁付近のみ周溝が細く浅くなる。	上師器(椀・甕) 須恵器(蓋杯・甕)
西山47号墳	SD 304	6	P67～71	方墳	古墳	13.0×2.8～m 周溝：幅2.7m、深さ30cm				上師器(椀)、須恵器(甕)
西山48号墳				方墳	古墳	7.1×6.0m 周溝：幅0.9～3.0m 深さ 5 0cm			北東隅は土橋状になる。	
	SD 305	6	O・Q72	周溝	古墳	—	1.0～2.0	50		須恵器(甕)
	SD 306	6	O・Q74	周溝	古墳	—	3.0	30		須恵器(蓋杯)
	SD 307	6	O73・74	周溝	古墳	—	0.9	20		須恵器(蓋杯)
西山49号墳	SD 308	6	Q82～84	方墳	古墳	一辺6.0m 周溝：幅0.7～1.4m 深さ30～40cm			北西隅は周溝が途切れる。	なし
西山50号墳	SD 309	6	R86～88	方墳	古墳	一辺6.3m以上 周溝：幅0.7～0.9m 深さ15～20cm				上師器片
西山51号墳	SD 311	6	S96・97	方墳	古墳	一辺7.4m以上 東溝：幅0.8m、深さ20cm			埋土と地山の区別非常に難しい。	なし
西山52号墳	SD 310	6	S106～108	方墳	古墳	一辺約6.7m 周溝：幅0.5～0.9m 深さ20cm				なし
西山53号墳	SD 313	6	S・T110	方墳	古墳	一辺約4.2m 周溝：幅0.5m、深さ30cm			埋土と地山の区別非常に難しい。	なし
	SK 312	6	S110	土体部？	古墳	1.3	0.2	10	土体部遺跡の残欠の可能性あり。	なし
西山54号墳	SD 316	6	T113～115	方墳	古墳	8.2×8.0m 周溝：幅0.6～0.7m 深さ10～15cm			西溝北半は周溝が途切れる。	なし
西山55号墳	SD 317	6	U～V117	円墳	古墳	直径14.0m 周溝：幅2.0m、深さ35cm				上師器片 須恵器(甕・小壺)

第３表　北山Ｃ遺跡・西山古墳群　遺構一覧表（３／４）

遺構番号（報告）	遺構番号（調査時）	調査次数	主なグリッド	性格	時代	規模 長さ(m)	規模 幅(m)	規模 深さ(cm)	備考(切合い、特徴等)	主な出土遺物
SD 1	SD 1	2（西）	L22・23	溝	古墳	5.0	1.0	20	古墳周溝とするには地形的に困難。	土器片
SK 2	SK 2	2（西）	H-112	土坑	古墳	5.0	2.9	7～20		
SD 3	SD 3	2（西）	M27・28	溝	古墳	4.0～5.0	0.6	14		土師器(壺か甕)
SD 4	SD 4	2（西）	L24	溝？	近世？	2.3	0.5	2～3	SD 5 より古だが、埋土に差異はない。	須恵器片
SD 5	SD 5	2（西）	O23～L24	攪乱溝	近世	11.5～	1.5	10		土師器片(近世)
SK 6	SD 6	2（西）	M21・22	土坑	弥生	1.2	0.7	50		完形の土師器Ｓ字甕
—	SK 10	2（西）	H13	—	—	—	—	—	SK14の埋土と判断。	須恵器片
SD 11	SD 11	2（西）	E-F15	溝	古墳～	15.0～	2.3	20	5号墳周溝から谷へのびるミズミチ？	須恵器(蓋・提瓶？)
SD 12	SD 12	2（西）	I-J13	溝	古墳～	7.2～	1.1	15	SK14と重複するが新旧不明。ミズミチ？	須恵器(甕)
SD 13	SD 13	2（西）	H15・16	溝	古墳～	2.6～	1.2	15	谷へ流れ込む流路か？	須恵器(甕)
SK 14	SK 14	2（西）	H13・14	土坑	古墳？	直径4.07		20	5号墳より古, SD12とは新旧不明。	土師器片, 須恵器片
SD 16	SD 16	2（西）	N20・21	溝	古墳？	4.3	0.7	15	円形周溝か？ 古墳時代以前の可能性もあり。	土師器小片
—	SK 17	2（西）	N12・13	周溝	古墳	2.2	1.0	10	4号墳周溝と判断。	土師器
SD 18	SD 18	2（西）	P20	溝	古墳	4.1	0.6	10		須恵器(杯蓋)
SD51	SD 51	2（東）	O53	土坑	古墳	2.4	1.0	40	溝として調査, 古墳周溝と同じ埋土。	須恵器(高杯)
SK 56	SK 56	2（東）	I53・54	土坑	縄文	6.0	4.5	30	8号墳周溝より新 （調査時は古と認識）	須恵器(杯身)
SK 57	SK 57	2（東）	I54・55	土坑	古墳	直径1.0		20		土師器片・須恵器片
SH 59	SH 59	2（東）	I56～J57	竪穴建物	古墳	4.5	4.5	5	東壁に竈, 貼床・主柱穴あり。 少なくとも3回の改修。	土師器(鉢・甕)
SH 60	SH 60	2（東）・3	H58～I59	竪穴建物	縄文	3.9	3.4	10	南東壁に竈, 周溝なし。柱穴３個。	土師器(甕・皿) 須恵器(甕・杯身)
SK 61	SK 61	2（東）・3	J・K59	土坑	縄文	2.7	1.7	15	複数土坑か。	土師器(甕・鉢) 須恵器(杯蓋)
SB 62	SB 62	2（東）・3	I57～J58	掘立柱建物	縄文	桁行４間(5.64m)×梁行２間(3.54m) 主軸方位：N53° W 柱間：桁行方向1.10～1.67m, 梁行方向1.70～1.78m 柱穴：直径30～45cm, 深さ28～52cm 柱痕跡：直径15～24cm				土師器(甕)
SK 64	SK 64	3	I61	木根痕？	古墳？	2.2	1.0	25	古墳時代の木根痕の可能性あり。	なし
—	SD 65	3・4・6	M57～P65	攪乱溝	近世以降		0.8	11		土師器, 須恵器 近世陶磁器
SH 66	SH 66	2・3	L55～M56	竪穴建物	縄文	4.8	4.1	10	北壁に竈, 周溝あり。柱穴３個。 SD67凹土あと後分する遺物あり。	土師器(甕) 須恵器(杯蓋類)
SK 69	SK 69	3	N56	土坑	縄文	1.3	0.9	15	埋土に炭粒混じる。	土師器(甕) 須恵器(甕・杯蓋)
SB 70	SB 70	3・6	N56 O56・57	掘立柱建物	縄文？	桁行３間(南辺4.66m)×梁行２間(東辺3.54m) 主軸方位：N56° W 柱間：桁行方向1.32～1.69m, 梁行方向1.38～2.18m 柱穴：直径42～60cm, 深さ20～36cm 柱痕跡：直径18～28cm				土師器(甕)
SB 71	SB 71	3	M～O54・N55	掘立柱建物	縄文？	北辺３間(5.06m)？×東辺3間(4.28m) 主軸方位：N53° W(北辺)。 柱間：北辺方向1.24～2.14m, 東辺方向1.32～1.49m 柱穴：直径30～60cm, 深さ22～48cm 柱痕跡：直径14～22cm				なし
SK 74	SK 74	4	I,88	土壙墓	縄文	1.3	0.45	13		須恵器(杯蓋)
SD91	SD 91	4・5	I70～J69	溝	不明	5.8～	1.0	10		なし
SK 92	SK 92	4	H62・63	木根痕	古墳	3.2	0.88	24	木根痕跡あり。 （長さ1.3m×幅0.5m）	鉄製品(刀・剣・刀子・斧・鎌)
SK 152	SK 152	5	Q-R114	木根痕	古墳	2.32	1.18	28	木根痕跡あり。 （長さ：2.08m×幅0.58m）	土師器片, 鉄製品(鎌)
SD 153	SD 153	5	R117～S116	溝	不明	4.9	0.66	11		なし
SK 154	SK 154	5	Q-R115	木根痕	古墳	2.85	1.15	30	木根痕跡あり。 （長さ2.36m×幅0.8m）	鉄製品(鏃)
SD 158	SD 158	5	H112・113	溝	不明	3.2	0.6	20	SD157より新。	なし
SK 159	SK 159	5	P108・109	木根痕	古墳	2.85	0.87	12	木根痕跡あり。 （長さ2.14m×幅0.52m）	土師器片 鉄製品(刀子・鏃), 砥石
SK 166	SK 166	5	L111	土坑	不明	1.1	0.7	29	SD163より新。	なし
SK 170	SK 170	5	Q111	木根痕	古墳	2.02	0.58 ～0.78	15		なし
SK 171	SK 171	5	I-J111	土坑	不明	2.4	1.05	25		なし
SK 173	SK 173	5	R108	土坑	不明	1.94	0.72	7		なし

第４表　北山Ｃ遺跡・西山古墳群　遺構一覧表（４／４）

遺構番号（報告）	遺構番号（調査時）	調査次数	主なグリッド	性格	時代	規模			備考（切合い、特徴等）	主な出土遺物
						長さ（m）	幅（m）	深さ（cm）		
SK 174	SK 174	5	C106・107	木棺墓	古墳	2.1	0.77	20	木棺痕跡あり。（長さ1.85m×幅0.36m）	鉄製品（鏃）
SK 179	SK 179	5	E105	木棺墓	古墳	2.64	0.7	16	木棺痕跡あり。（長さ1.8m×幅0.4m）	土師器片
SB 180	SB 180	5	P103～Q104	掘立柱建物？	不明	長辺２間（約3.25m）×短辺１間（約2.4m） 主軸方位：E10°S（南辺） 柱間：長辺方向1.55～1.70m 柱穴：直径30cm、深さ25cm 柱痕跡：直径15cm				なし
SK 181	SK 181	5	H105・106	木棺墓	古墳	2.3	1.13	1 S	木棺痕跡あり。（長さ1.56m×幅0.43m）	なし
SK 182	SK 182	5	H108	築し穴	（縄文）	楕1.4		100	小穴：直径16cm×深さ15cm	なし
SK 183	SK 183	5	J103	木棺墓	古墳	1.36	0.52	22	木棺痕跡あり。（長さ1.09m×幅0.38m）	なし
SK 184	SK 184	5	I105	木棺墓	古墳	1.35	0.65	12	木棺痕跡あり。（長さ1.1m×幅0.45m）	なし
SK 185	SK 185	5	K101・102	木棺墓	古墳	2.73	1.32	20	木棺痕跡あり。（北：長さ1.81m×幅0.4m、南：長さ1.90m×幅0.4m）	鉄製品（鎌・鑿・鑿？） 碧玉・滑石・勾玉・臼玉
SK 186	SK 186	5	K102	築し穴	（縄文）	楕1.25		80	小穴：直径15cm×深さ35cm	なし
SK 187	SK 187	5	J-K104	木棺墓	古墳	1.26	0.66	21	木棺痕跡あり。（長さ0.82m×幅0.33m）	なし
SK 188	SK 188	5	P108	土坑	不明	1.6	0.88	7	木棺墓ではない	なし
SK 190	SK 190	5	I.105	土坑	不明	1.4	0.86	37	墓壙ではない	なし
SK 191	SK 191	5	J-K95	木棺墓	古墳	1.52	0.66	15	木棺痕跡あり。（長さ1.0m×幅0.35m）	なし
SK 192	SK 192	5	M99	築し穴	（縄文）	1.3	0.95	70	小穴：直径25cm×深さ40cm	なし
—	SK 193								ＳＫ183に重複付与→欠番に	
SK 197	SK 197	5	G78・79	木棺墓	古墳	1.65	0.62	20	木棺痕跡あり。（長さ1.22m×幅0.42m）	土師器片、生焼け須恵器片
SK 198	SK 198	5	C・D78	土坑	不明	2.0	0.87	24		なし
SK 199	SK 199	5	D79	土坑	不明	1.2	0.58	15		なし
SK 200	SK 200	5	E79	墓壙	古墳	1.9	1.17	25	礫敷遺構（長さ1.08m×幅0.48m）	なし
SK 204	SK 204	5	E76	木棺墓	古墳	1.6	0.7	21	木棺痕跡あり。（長さ1.3m×幅0.46m）	なし
SD 205	SD 205	5	F70・71	溝	不明	3.35	0.35	13		なし
SK 207	SK 207	5	E71	木棺墓	古墳	1.16	0.6	25	木棺痕跡あり。（長さ0.97m×幅0.36m）	なし
SZ 208	SZ 208	5	J96・97	土坑	不明	3.62	1.3	42		なし
SK 302	SK 302	6	O・P55	土坑	墓壙	3.2	1.2	40	二つの土坑の重複。	土師器（甕）、須恵器（蓋杯・瓶）
SK 314	SK 314	6	S108・109	木棺墓	古墳	1.52	0.82	20	中央に踏みあり。（長さ1.12m×幅0.5m、深さ約3cm）	土師器片
SK 315	SK 315	6	T111・112	木棺墓	古墳	1.2	0.76	8	底面に白色粘土帯あり。	なし
SK K318	SK 318	6	X・Y116	築し穴	（縄文）	1.0	0.75	100	小穴：直径18cm×深さ30cm	なし
SK 319	SK 319	6	S117	築し穴	（縄文）	1.05	0.6～	90	小穴：直径27cm（推定）×深さ40cm	なし
SK 320	SK 320	6	Q102	土坑	不明	1.53	0.94	10	33号墳主体部の可能性を想定したが決め手なし。	なし

第５表　掘立柱建物一覧表

遺構名	次数	地区		ピット	ピットの遺物など	間（m）×間（m）	方位	備考
SB62	2	I	57	1	土師器甕１	桁行４間（約5.64m）×梁行２間（約3.54m）	N53° W	
	2	I	57	2	なし			
	2	I	58	1	なし			
	2	I	58	2	なし			
	2	I	58	3	なし			
	2	I	58	4	なし			
	2	J	58	1	なし			
	2	J	58	2	なし			
	2	J	58	3	なし			
SB70	3	N	56	1	なし	桁行３間（約4.66m）×梁行２間（約3.54m）	N56° W	
	3	O	56	1	なし			
	3	O	56	2	なし			
	6	O	56	3	土師器甕１			
	6	O	56	4	なし			
	3	O	57	1	なし			
	6	O	57	1	なし			
	6	O	57	1	なし			
	6	P	57	1	なし			
SB71	3	N	54	1	なし	北辺３間？（約5.06m）×東辺３間（約4.28m）	N53° W	
	3	N	55	1	なし			
	3	N	55	2	なし			
	3	O	54	1	なし			
	3	O	54	2	なし			
SB180	5	P	103	—	なし	長辺２間（約3.25m）×短辺１間（約2.4m）	E 10° S（南辺）	建物か不明
	5	P	104	—				
	5	Q	104	—				

Ⅳ　遺物

弥生時代から鎌倉時代の遺物がコンテナケースに82箱分ほど出土した。大半は古墳時代中後期と飛鳥時代の土師器や須恵器で、埴輪や鉄製品、砥石・勾玉などもある。遺構出土遺物については、出土した遺構の時代順に遺構ごとに記述し、建物と認定できなかった小穴や包含層、表土出土遺物は遺構外として最後に一括した。

1　弥生時代（第99図）

ＳＫ６（１）　図示できたものはＳ字状口縁台付甕のみである。受け口状に直立する口縁部の端部が外反し、Ｓ字状を呈する。口縁端部内面に面をもち、外面には櫛による刺突列点文を施す。脚部の開きは少なく、端部は僅かに内に巻き込む。櫛状のハケメを右下がりに施すが、後に頸部から左下がりに、最後に横方向に横線状に施す。（森川）

2　古墳時代（第100～118図）

a　古墳

西山１号墳（２）　図示できたものは須恵器壺のみである。底部外面を強くロクロケズリし、後に意味は不明であるが、ヘラ状工具痕を多く残す。外面は還元不良で酸化焼成となる。

第99図　出土遺物実測図１（１：４）

西山２号墳（３）　図示できたものは須恵器杯身のみである。口縁部は比較的高く立ち上がり、端部内面は弱い沈線状となる。しかし、口径は大きく、底部外面のロクロケズリも底部1/2程度である。

西山３号墳（４）　図示できたものは須恵器杯身のみである。口縁部は高く立ち上がり、端部内面には緩慢となった段が残る。

西山４号墳（５～17）　全て須恵器で、杯蓋（５～９）・杯身（10～15）・鼎（16）・甕（17）がある。

杯蓋は丸味のある形態であるが、天井部と口縁部の境の稜は弱い。７は稜の下を沈線状に凹ませることにより稜を際立たせている。８は稜が消失し、沈線のみが巡る。９は口径が大きく、無蓋高杯かもしれないが、蓋とした。

杯身も丸味のある形態であるが、11はやや扁平である。口縁端部の段は退化し、10は凹線状、11・12は面になる。14は段や面が無く、尖り気味の端部で、器壁が他のものより薄い。逆に15は体部の器壁が非常に厚く、受部の基部が沈線状に窪む。

16は口縁部に比べ体部がやや小さい。口縁端部に凹線状の段をもち、突帯と波状文を各１条巡らす。体部上半にも鋭利な工具による沈線を３条巡らし、その間に下段から上段の順に波状文を施している。体部外面上半をヘラケズリし、下半は板状工具による弱いナデであるが一部はヘラケズリ状となる。内面は強い指頭圧痕が明瞭で、口縁部との境に棒状工具による掻き取り状のナデが施されている。

西山６号墳（18～31）　土師器は壺（18）と高杯（19）がある。18は頸部と体部の接合ができなかったが、同一個体と判断できるものである。内面のナデは工具による強いものであるが、ヘラケズリとするには弱いものである。頸部外面に細く弱い沈線が認められる。文様とするには弱く、工具痕としておく。19の外面にはヘラケズリが施され、面取状になる。

須恵器には杯蓋（20）・壺（21）・高杯（22～30）・甕（31）がある。20は口縁部と天井部の境に稜をもつ杯蓋で、口縁端部は弱い段状になり、天井部の

大半をロクロケズリする。

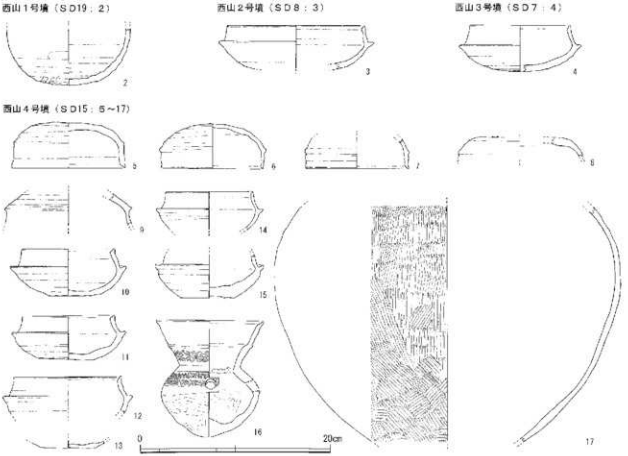
22・23は高杯の蓋で口縁部と天井部の境の稜線は沈線に退化している。杯部外面はロクロケズリで調整されるが、25はロクロケズリの範囲が狭いためか、脚が接合されている現状では確認できず、28は一部がヘラケズリ状となる。25の脚端部外面は棒状工具で強くナデることにより回線となり、28の受部直下のロクロナデは板状工具による強いものである。脚の透孔は三角形で３方に施されるが、27は４方、30は形状、方数とも不明である。高杯全体的には焼成不良のものが多く、28は瓦質に焼けている。

31の内面のナデは、上半に板状工具痕が明瞭である。

なお、29は口縁部、受部ともに小片で接合もできず、口径は推定値である。

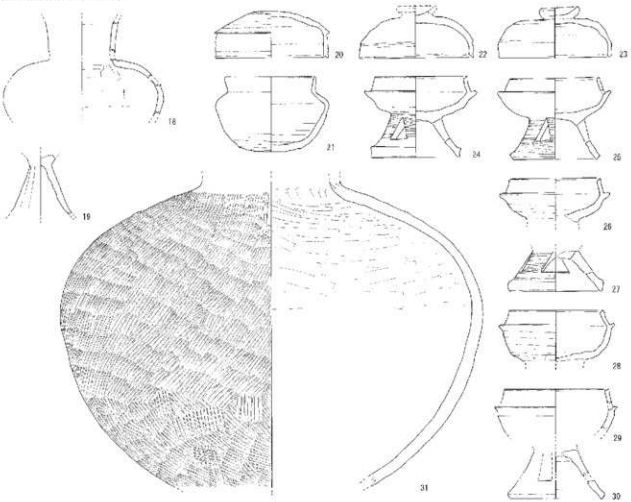
西山７号墳（32～40）　土師器は、壺（32）・甕（33）がある。壺は全体をナデで調整するが、体部最大径内側を特に強くナデる。甕は磨滅が激しく不明瞭な部分が多い。土師器としては高温に過ぎる焼成であるが、須恵器の酸化焼成とするに及ばない。須恵器甕の形態を呈し、調整も外面タタキのようにも見え、須恵器の可能性もある。

須恵器には杯蓋（34）・杯身（35・36）・高杯（37）・甕（38・39）・甕（40）がある。杯蓋は口縁部と天井部の境に稜をもち、口縁端部内面は段を有する。比較的扁平な天井部で、左回転のロクロでケズリを施す。杯身も口縁端部に段を有するが、両者とも鋭利な仕上げである。また、両者とも底部外面にヘラ記号が焼成前に施され、35は４本、36は６本の並行線である。37は無蓋高杯で一対の環状把手をもつ。脚は短脚で透孔を３方に鋭利な工具で外から内へ空けるが、内側は空けた角を面取りする。杯部外面には２条の低い突帯とその下に波状文を右回転で施文する。突帯間と下段突帯の下端に強いロクロナデを施すことにより突帯を明瞭にしている。38の口縁部外面にも突帯が１条巡り、その上下に波状文を施す。突帯上端に棒状工具による沈線を施すことにより突帯を明瞭にしている。体部外面にも棒状工具による

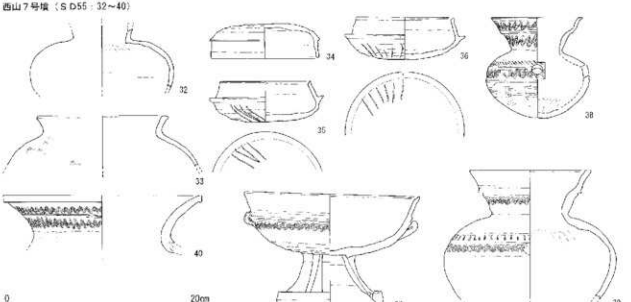


第100図　出土遺物実測図２（１：４）

西山6号墳（SD54：18～31）



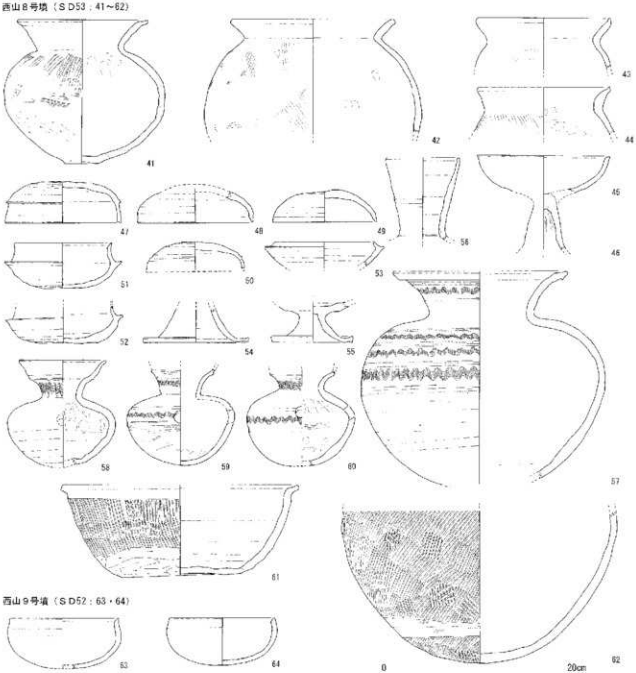
西山7号墳（SD55：32～40）



第101図　出土遺物実測図3（1：4）

沈線を２条＋３条巡らし、その間に波状文を、上段沈線上には櫛による刺突文を施文する。体部外面下半はカキメとナデで調整するが、一部にヘラケズリが見られ、各所にヘラ状工具のあたりが認められる。39は大型甕に分類とすべきであろうか。形体や文様構成は38と共通するが、口縁部の波状文は１条である。文様帯を区画する棒状工具による沈線は38よりも浅く、沈線というよりは強いナデとすべきものである。刺突文は器壁に対して斜行に刺突する。39の口縁部外面にも沈線を１条施し、その上下に波状文を巡らせる。沈線は非常に回転の弱いロクロで施文されたもので、ロクロの使用が疑われる。また、頸部施される板状工具によるナデは、ロクロ不使用で、何単位にか分けて施している。

西山８号墳（41～62）　土師器には壺（41）・甕（42～44）・高杯（45・46）がある。45・46は同一個体の可能性が高いが接合できなかった。41のハケメは粗く、掻き取るような調整で、Ｓ字状口縁台付甕



第102図　出土遺物実測図４（１：４）

に近いものである。

須恵器には杯蓋（47～50）・杯身（51～53）・高杯（54・55）・壺（56・57）・鼈（58～60）・鉢（61）・甕（62）がある。

杯蓋は、天井部と口縁部の境に稜をもつもの（47）と不明瞭なもの（48～50）で型式差があり、後者はＳＫ56からの混入と考えられる。

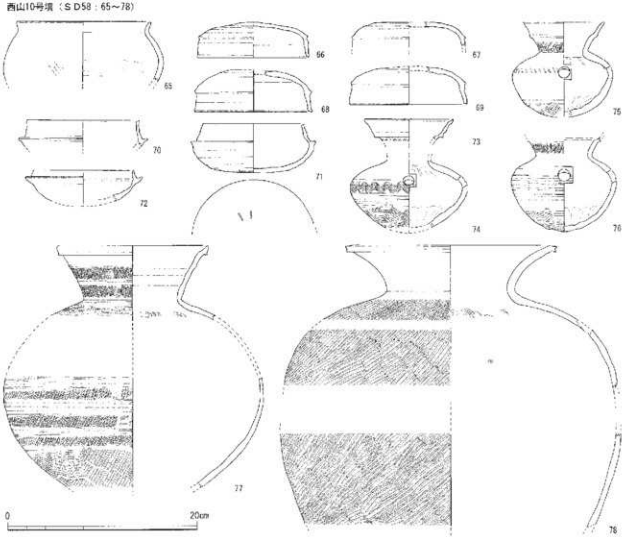
杯身においても53の口縁部は低く内傾し、やはりＳＫ56からの混入である。51・52ともに底部外面をロクロケズリで調整するが、52はそれでも器壁が非常に厚い。51は還元不良で、一部瓦質に焼けている。

高杯は両者とも無蓋高杯と推測され、透孔は設けられていない。やはりＳＫ56からの混入とすべきであろう。

壺の内、56も同様に混入と考えられ、頸部に棒状工具による２条の凹線を施す。57は２本一組の沈線間に波状文を施すもので、頸部に１条、体部上半に３条を描く。沈線は同一工具によるものと考えられるが、頸部のものは強く深い。体部外面下半をロクロケズリするが、非常に弱いもので工具ナデに近い。

鼈はいずれも体部径に対して頸部径が小さいもので、58は特に顕著である。波状文は頸部と体部に施されるが、58は体部の波状文が認められない。頸部屈曲部には稜をもつが、その上下に弱い凹線を施すことにより稜を浮き立たせている。59ではその凹線の後に波状文を施したことが観察できる。体部波状文の上下にも沈線が施され、文様帯を区画している。沈線は棒状工具によるものであるが、59は浅く雑なもので、58には波状文と同様に施文されない。59・60の底部外面の調整は、工具による不定方向のナデであるが、工具の当たりが弱い。58は、ロクロによるナデで比較的に工具痕が明瞭であるが、ロクロケ

西山10号墳（ＳＤ58：65～78）



第103図　出土遺物実測図５（１：４）

ズリとするには浅く弱い。なお、60の体部最大径内面には鋭利な工具による強いナデの痕跡が認められる。

61は鉢としたが、平底に外反する短い口縁部をもつ特異な器形である。日本では20個体ほどの出土しかなく、百済系とされ、韓国では「盌」と称されているもの[8]である。内面はロクロナデで調整されるが、下半は弱く雑な調整で底部は不定方向のナデである。外面は上半を平行タタキ、下半はロクロケズリと思われるが、ロクロ回転が非常に弱く、ヘラケズリと迷うところである。焼成もやや不良で、一部瓦質に焼けている。

62の残存部は縦に半裁された状態である。底部ちかくの外面にタタキの後に工具による強いナデが巡る。

西山９号墳（63～64）　両者とも土師器の椀で、口縁端部を僅かに外反させる。磨滅により調整は不明確であるが、ナデ中心の調整と思われる。

西山10号墳（65～78）　土師器は壺（65）のみで、須恵器には杯蓋（66～69）・杯身（70～72）・鼓（73～76）・壺（77）・甕（78）がある。杯蓋は、比較的扁平な天井部と口縁部の境には稜、口縁端部には段をもつ。杯身の口縁端部にも弱い段がある。72は短い口縁部で、端部は尖り気味である。他のものと形態が大きく異なり混入と考えられる。鼓のうち74は体部に比べ細い頸部で、75もそれに近い形態である。74は棒状工具による沈線を２条巡らし、沈線間に波状文を施す。下段の沈線は浅くナデ状で、その付近の調整は棒状工具による強いロクロナデであり、一見、弱い多条沈線のようにも見える。しかし、底部外面のタタキより先行する調整であり、文様との連動は考え難い。75の波状文は口縁部のみで、体部には櫛による刺突文である。76も同様であるが、体部に文様はなく、カキメで調整するに止める。

壺（77）と甕（78）は口縁部に突帯をもち、壺は突帯間に波状文を２段に施す。両者とも外面はタタキ、内面はナデで調整するが、一部に同心円文を残す。13はタタキの後カキメを加える。

（１～10号墳：森川）

西山11号墳（79～132）　主体部からは何も出土しなかったが、周溝からは、土師器（鉢・甕・鍋）、須恵器（蓋杯・高杯・鼓・壺・横瓶・提瓶・甕）、製塩土器が出土した。一基の古墳としては最も多い量（コンテナケース約14箱分）ではあるが、新旧の遺物が混在している。

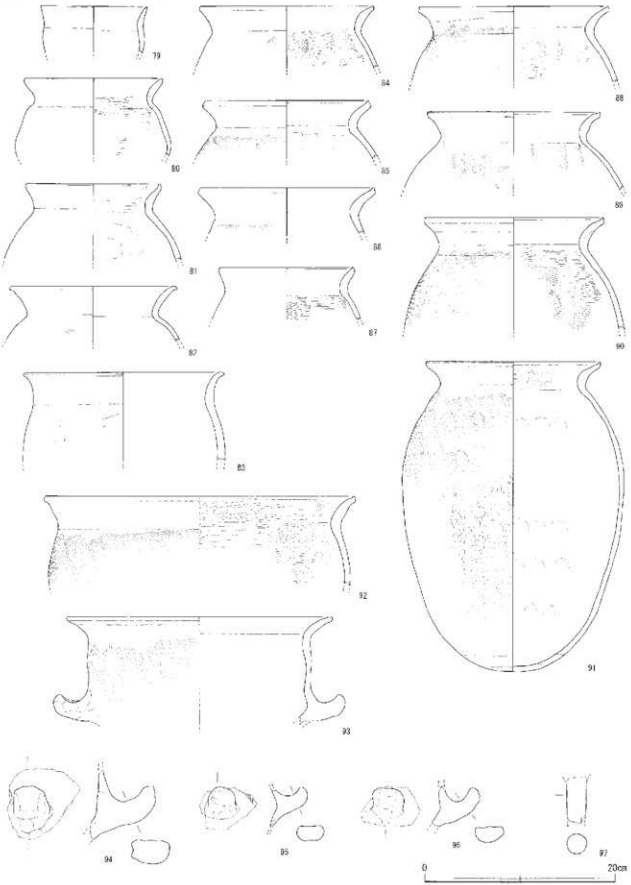
古墳よりも明らかに新しい遺物としては、土師器では、いわゆる「伊勢型」甕（84～92）がある。古墳時代中後期頃には出現する甕であるが、飛鳥時代以降に特徴的な頸部の肥厚が認められる。97は知多式製塩土器で、棒状の脚部は７世紀以降の特徴である[9]。また、須恵器についても、蓋杯（103・104・107～118）・壺（121）・高杯（122～127）・横瓶（128・129）・提瓶（132）・甕（130・131）は新しい一群である。周辺で飛鳥時代の竪穴建物や掘立柱建物が確認されていることから、そこで使用された土器が周溝に捨てられた、もしくは流れ込んだものであろう。

これらの明らかに新しい混入品を除き、古墳に本来伴っていたと考えられる遺物を挙げると、土師器（79～83）と須恵器（98～102・105・106・119）がある。79は土師器鉢、80～83は甕である。98～102は須恵器杯蓋で、天井部は丸く、稜は明瞭、口縁部は外に開き気味で直立し、口縁端部は内面が僅かに窪む。102は生焼けで、99・102は瓦質に焼けている。105・106は杯身。底部は丸みをもち、たちあがりはやや内傾し、口縁端部は内面が僅かに窪む形状である。蓋杯のロクロケズリの範囲は、稜や受け部端から1.6～2.0cmにまで及ぶ。119は大型鼓で、頸部と肩部に櫛描波状文が施され、肩部の文様帯は沈線で区画されている。底部外面には平行タタキとヘラ記号「×」が認められる。

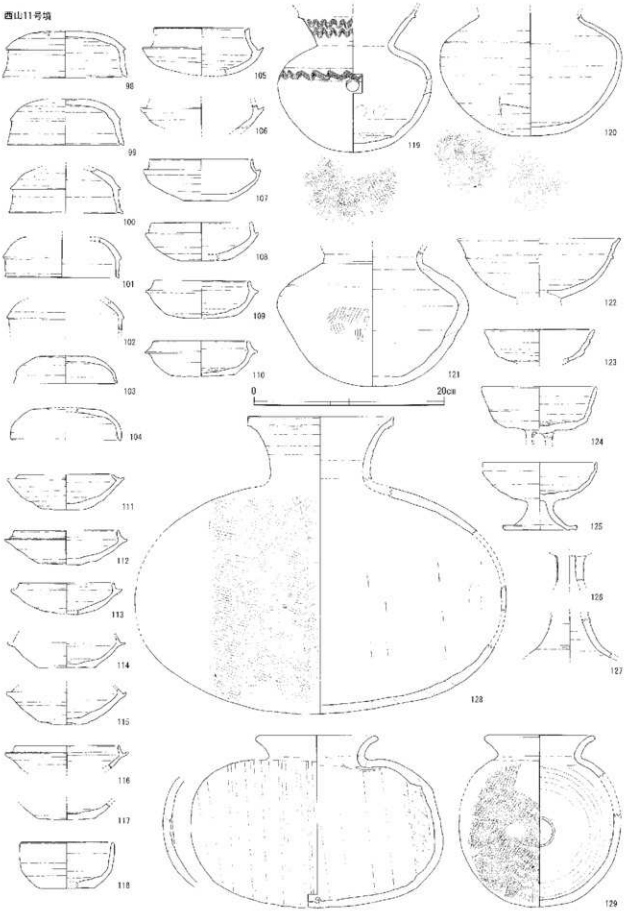
西山12号墳（133～136）　土師器甕（133）、須恵器の無蓋高杯（134）と直口壺（135）、砥石（136）である。土師器甕（133）と須恵器直口壺（135）は、周溝の埋没過程で混入したとみられる飛鳥時代の遺物である。134は須恵器の無蓋高杯で、杯部に環状把手１個が残る。杯部は比較的深く、口縁部はやや外反気味に直立し、口縁部内面が薄く段状になる。杯部外面には突帯と櫛描波状文が施される。脚部は欠損しているが、杯部底外面に残る切り込み線からみて透孔は４方にあけられていた。

西山14号墳（137～140）　土師器の高杯（137・139）と甕（138）、須恵器鼓（140）がある。土師器の高

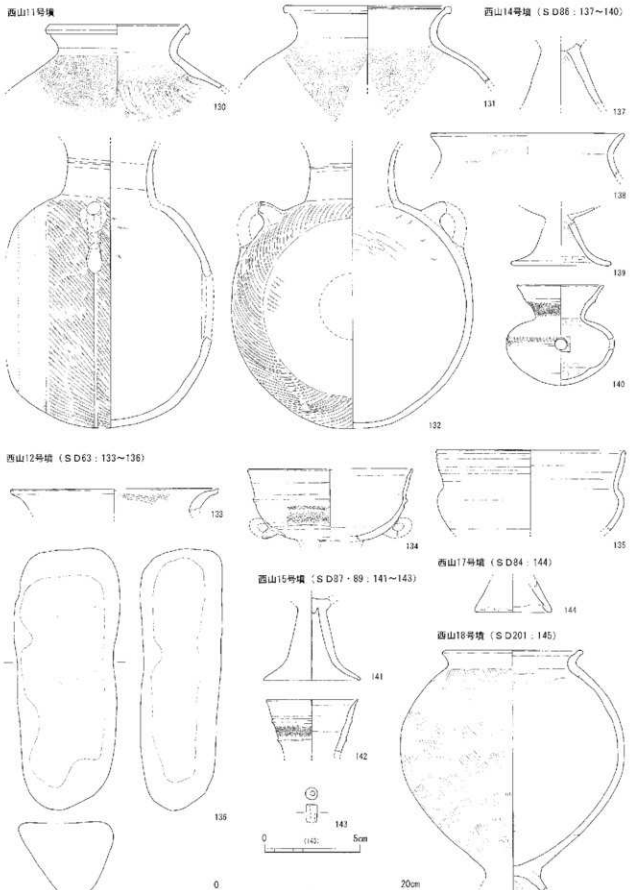
西山11号墳（SD67・68：79～132）



第104図　出土遺物実測図６（１：４）



第105図　出土遺物実測図７（１：４）



第106図　出土遺物実測図８（１：４、143は１：２）

杯はどちらも脚部の破片だが、137は大型高杯である。138は砂粒を多く含む胎土で、口縁部が「く」字状を呈する甕である。140は小型甕で、頸部と肩部に櫛描波状文が施され、肩部の文様帯は沈線で区画されている。肩部の櫛描波状文は、列点文風に見えるが、工具が跳ねた結果であろう。

西山15号墳（141～143）　土師器高杯（141）、須恵器直口壺（142）、ガラス玉（143）である。141は土師器高杯の脚部で、内部は工具で丁寧に整えられており、やや古い様相が認められる。142は須恵器直口壺の口頸部で、口縁部内面は一段薄く仕上げられ、頸部外面には２条の突帯と櫛描波状文が施されている。胎土は極めて精良である。143はガラス製の玉で、不透明の青緑色を呈している。高アルミナのソーダ石灰ガラスが二次加工されたものと考えられる。

西山17号墳（144）　土師器甕の台部で、端部は内側に折り返されている。

西山18号墳（145）　土師器のいわゆる「宇田型」台付甕（以下、宇田甕と略す。）で、口縁部にＳ字甕の雰囲気を残す古相のもの。

西山19号墳（146～149）　土師器甕（146）・須恵器鼎（147）・鉄鏃（148・149）がある。146は台付甕の下半部で、台の端面は折り返さない。147は小型鼎で、頸部は細く、体部は肩が張る形状である。頸部と肩部に櫛描波状文が施されている。肩部の文様帯は２条沈線で作りだされた突帯で区画されており、櫛描波状文の上下端は沈線によって消されている。体部外面には平行タタキが認められる。

西山20号墳（150）　須恵器樽形鼎の体部で、櫛描波状文などの装飾は施されていない。

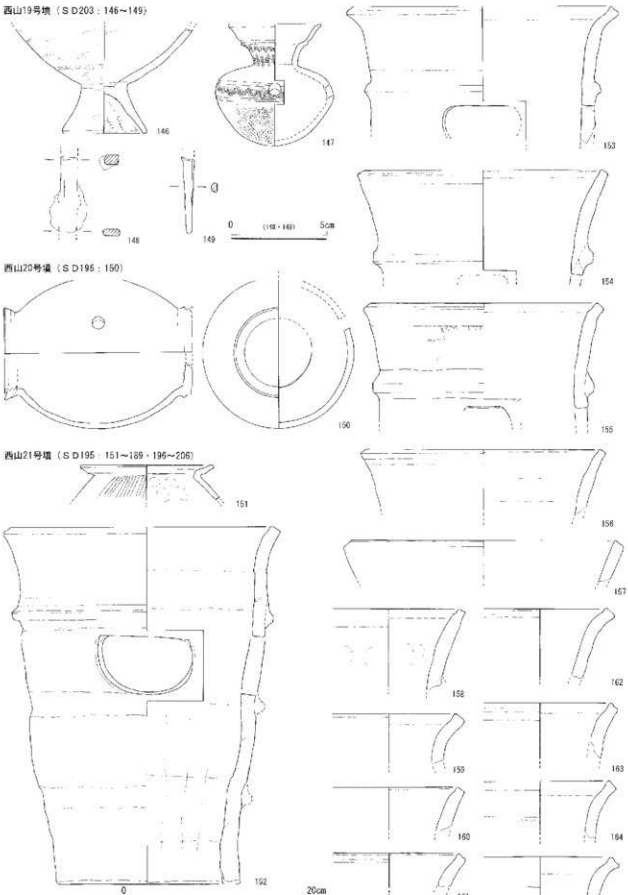
西山21号墳（151～206）　土師器甕（151）と埴輪（152～206）がある。151はいわゆるＳ字甕で、口縁部の屈曲が非常に僅かなＤ類[7]である。埴輪には、円筒埴輪（152～195）と形象埴輪（196～206）があり、円筒埴輪には朝顔形のものは認められない。なお、埴輪は周辺包含層などからも出土しているが、本来この21号墳に伴うものと推定できるため、あわせて記述する（190～195、208～210）。円筒埴輪は外側に断面台形を呈する突帯（タガ）が付されており、全体像が判る唯一の152では、３突帯で４段に区分されている。透孔は、上辺が直線的な略円形で２段目に設けられている。内外面ともに風化が著しいため、成形・調整痕跡を確認しにくいが、外面にはタテハケが認められ、底部では粘土紐の継ぎ目が明瞭なものがある。焼成は土師質で、黒斑が認められる。

形象埴輪のうち、形状が推測できるものはすべて家形である。屋根は外面に綾杉文の線刻が施されていることから、編んだ植物材を表現したものと思われる。壁には縦方向のハケメが施され、平側に開口部が１箇所設けられている。器台部と身舎の境には床突帯が貼り付けられている。

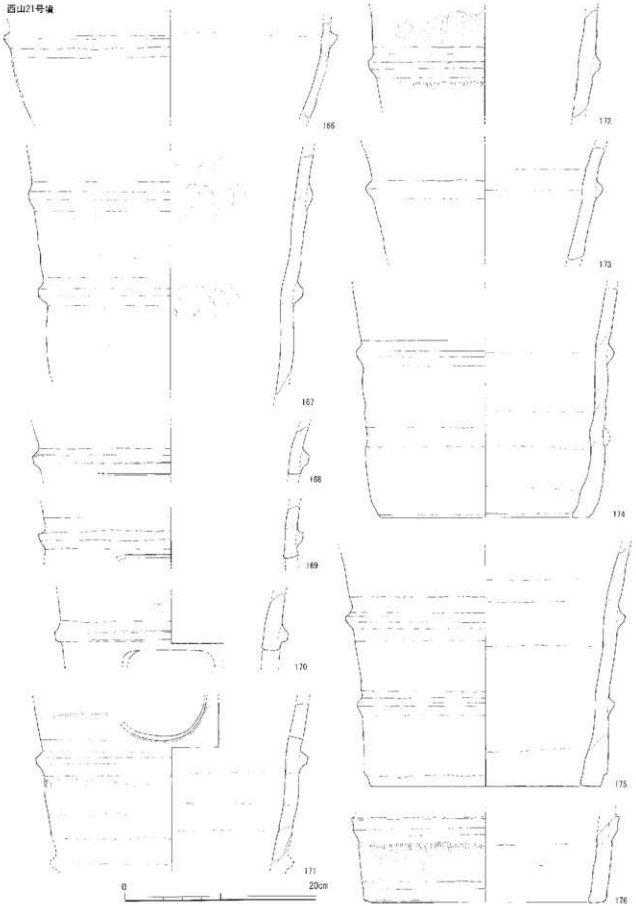
西山23号墳（211・212）　どちらも灰褐色を呈する粗製の土師器椀で、212の底部外面には木葉痕が認められる。口縁部は、211が内傾面をもち、212は小さく外へ折れる形状である。

西山24号墳（213～216）　周溝から出土した須恵器の把手付椀（213）と甕（214・215）、主体部から出土した鉄製刀子（216）がある。213は、口径に比べて器高が低い椀で、把手は欠損している。把手の上部にも蕨状の装飾痕跡が認められる。外面には稜状の突帯と沈線との間に櫛描波状文が施されている。214・215は外面に細かな格子タタキ、内面はナデ消しが認められる体部片で、器壁は薄い。

西山25号墳（217～221）　土師器高杯（217）、須恵器の鼎（218）・高杯（219）・甕（220）・壺（221）のほか、土師器甕の破片などがある。217は高杯の脚部。接合部付近の形状から、杯部は椀形を呈すると推測される。218は小型鼎で、口縁部と頸部に櫛描波状文、肩部には沈線２条と櫛描波状文の文様帯があり、その上部に櫛描刺突文が施されている。外面下半は平行タタキの痕跡が認められる。219は短脚の無蓋高杯で、杯部と脚部の接点はないが同一個体である。杯部は比較的深く、口縁部は直立し、口縁部内面には段が認められる。杯部外面には断面三角形状の突帯２条と櫛描波状文が施される。脚部は４方向に透孔が開けられており、端部は玉縁状を呈する。220は、外面のまばらな平行タタキが特徴的な甕で、内側はナデのため不明瞭だが無文当具痕がみてとれる。口縁部の形状は、単純口縁の直下に断面三角形状の突帯が巡るもので、体部は扁球形であ

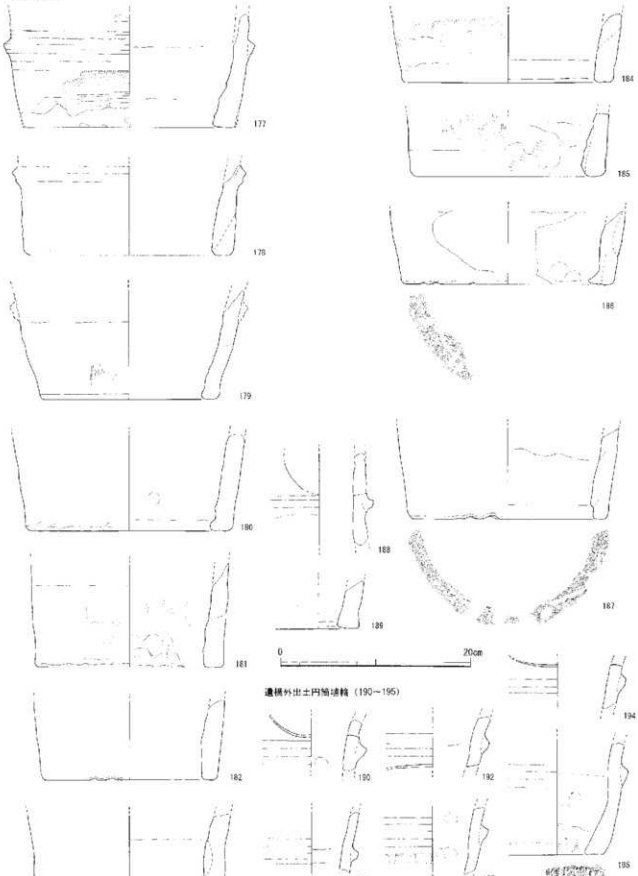


第107図　出土遺物実測図９（１：４、148・149は１：２）

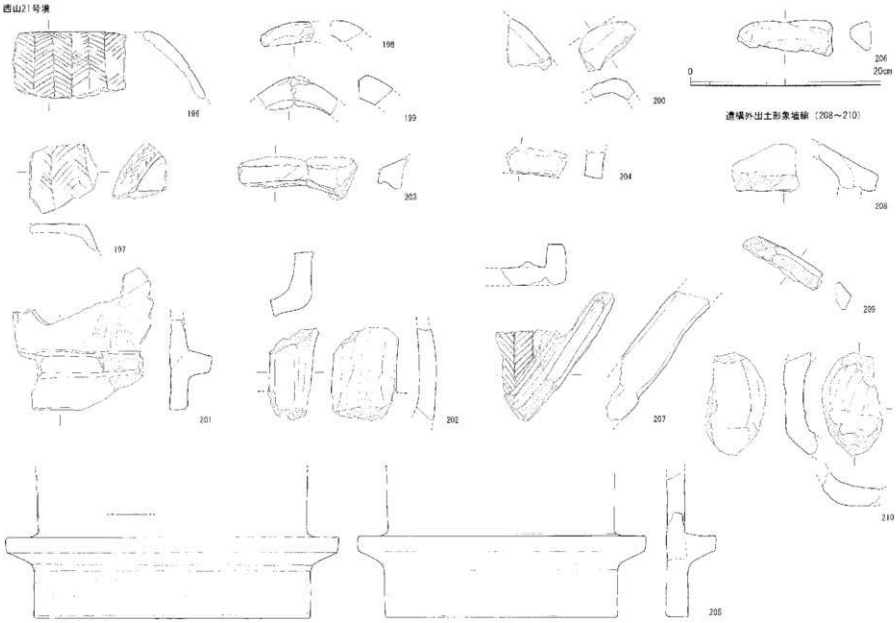


第108図　出土遺物実測図10（1：4）

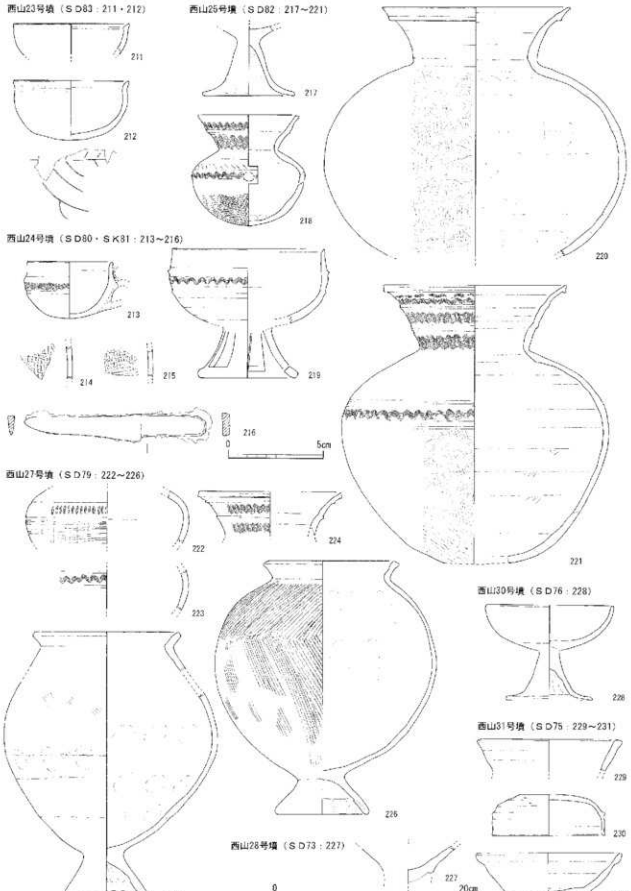
西山21号墳



第109図　出土遺物実測図11（1：4）



第110図　出土遺物実測図12（1：4）



第111図　出土遺物実測図13（１：４、216は１：２）

る。221は丁寧に作られた壺で、口頸部に突帯２条と櫛描波状文３条、肩部には２条一対の沈線によって区画された文様帯に櫛描波状文が施されている。

西山27号墳（222～226）　土師器甕（225・226）、須恵器壺（222～224）がある。225は口縁部の断面が「く」字形を呈する台付甕で、Ｓ字甕に似た胎土である。226は宇田甕である。222は壺の体部片で、２条の沈線の間に櫛描刺突文が施され、下半にはカキメが認められる。223は大型甕らしき壺の体部片で、文様帯には櫛描波状文が施される。224は猿投窯産の壺の口頸部で、突帯２条と櫛描波状文２条が巡る。

西山28号墳（227）　土師器高杯の杯底部で、脚が外れて接合面が見えている。

西山30号墳（228）　土師器の椀状杯高杯である。

西山31号墳（229～231）　土師器壺（229）、須恵器杯蓋（230）、山茶碗（231）がある。229は壺の口縁部。230は、天井部の頂部は扁平で、稜は小さいが明瞭、口縁部は直立し、口縁端部は端面がやや窪む形状の蓋杯である。231は、周溝がかなり埋まった後の層位から出土した尾張系山茶碗の碗である。藤澤良祐氏による山茶碗編年[7]の第６型式に比定される。

西山32号墳（232～238）　土師器の小型鉢（232）・高杯（233）、須恵器の蓋杯（234・235）・壺（236・237）・甕（238）がある。232は口縁部が短く外反する小型鉢、233は有稜高杯で、どちらも鮮やかな赤橙色を呈する。234は杯蓋で、天井部は欠損し、稜は小さく丸みを帯び、口縁部はやや短く、口縁端部は傾斜面をなして外端はやや尖る。235は杯身で、底部は丸みを帯び、口縁部は若干内傾ぎみに立ち上がり、端部は内側が下がって段をなす。底部外面から受け部にかけての位置にヘラ記号「|||」がある。236は壺の底部で、外面にヘラ記号「×」がある。237は壺の体部で、肩部直下に文様帯があり、小さめの突帯間に櫛描波状文が施されている。口頸部は欠損しているが、頸の付け根は細い。鑑の可能性もある。238は焼成の甘い灰白色の甕で、外面に幅の広い平行タタキ、内面は当具痕ナデ消しが認められる。韓式系土器と呼ぶべきものであろうか。

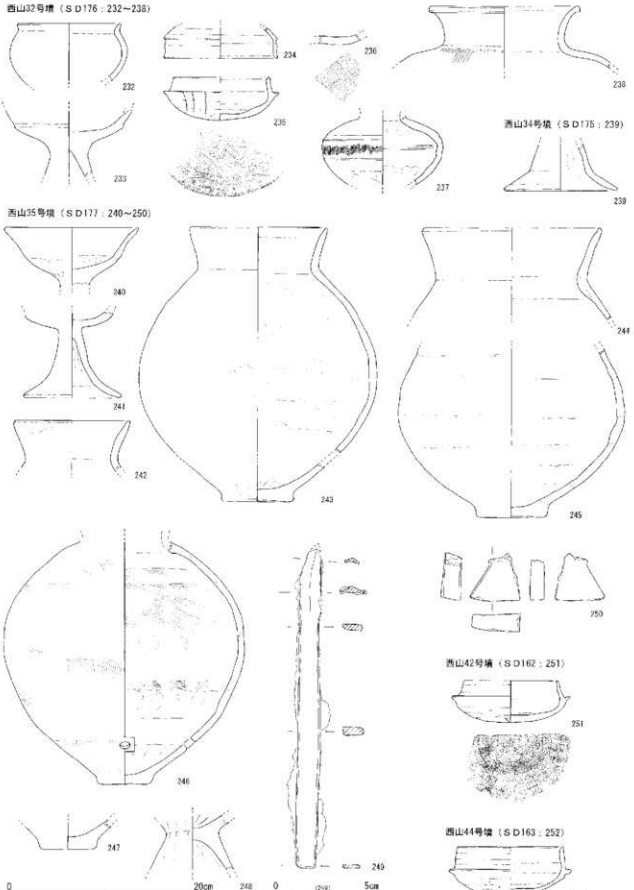
西山34号墳（239）　土師器高杯の脚部である。

西山35号墳（240～250）　土師器の高杯（240・241）・壺（242～247）・甕（248）、鉄製品の鉋（249）、砥石（250）がある。240は高杯の杯部で、腰が僅かに張り、口縁部はやや外反しながら開く。241は有稜高杯の杯底部から脚部で、杯部は粘土接合面で剥離したもの。242～244は装飾のない壺で、部分的にベンガラらしき赤色顔料が認められる。245・246は器壁の風化が著しい壺で、246の体部下半には穿孔が１箇所認められる。

西山42号墳（251）　須恵器の杯身で、底部は丸みを帯び、口縁部は全体に薄く、やや内傾して立ち上がる。口縁端部先端は更に薄く、直下の内側は僅かに段をなす。ロクロケズリの範囲は広い。猿投窯の製品であろう。

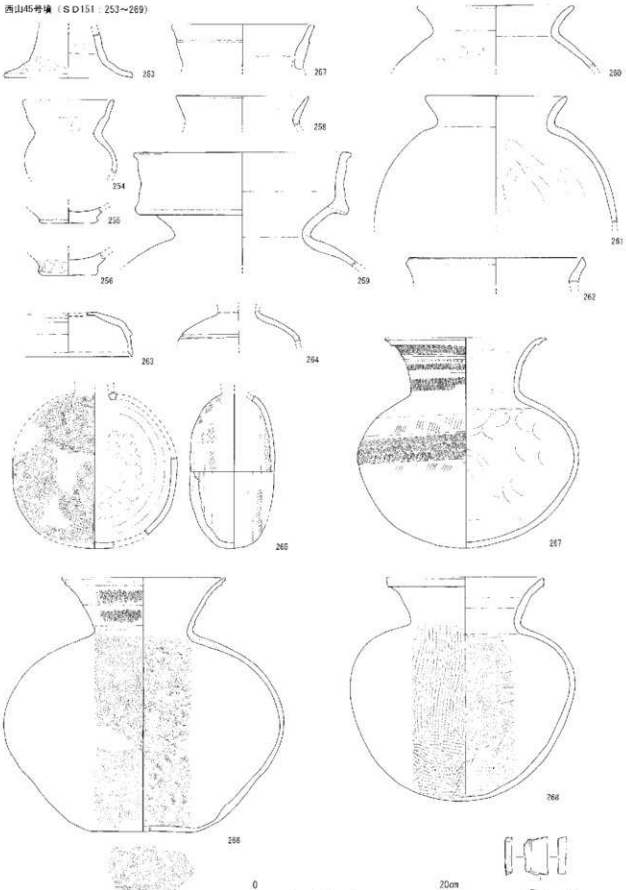
西山44号墳（252）　須恵器の杯身で、底部は丸みを帯び、受け部との境目は明瞭に窪む。口縁部はほぼ垂直に高く立ち上がり、内端部はわずかに窪み、丸みをもっている。底部外面のロクロケズリの範囲は非常に広く、胎土は精良である。

西山45号墳（253～269）　土師器の高杯（253）や壺・甕（254～262）、須恵器の杯蓋（263）・壺（264）・提瓶（265）や壺・甕（266～268）、砥石（269）がある。253は大型高杯の脚部。254・257・259は口縁部が有段となる壺で、254は小型品。258・262は壺の口縁部。259は直立する二重口縁をもつ大型壺で、口縁上端部はやや外へ張り出す面をもち、口縁下段部外面も斜め下方向へ突出する。262・261は口縁部が「く」の字状を呈する甕の口縁部で、255・256は壺の底部である。263は細片化した須恵器の杯蓋片で、稜から口縁部の長さは図上復元である。天井部は丸く、稜は明瞭、口縁端部は内面が段状に窪む。264は小型壺の頸から肩部にかけての破片で、肩部には１条の沈線が巡る。265は体部が扁平で、細い頸が取りつく提瓶である。266は薄造りの甕。口縁部は、単純口縁の直下に断面三角形状の突帯が巡るもので、頸部にかけて突帯３条と櫛描波状文２条が施されている。体部外面は非常に細かい平行タタキ、内面は当具ナデ消しが認められる。267は赤紫色で胎土が非常に緻密な壺。内外面ともに丁寧にナデられているため成形痕跡は不明瞭だが、内面は無文当具痕、外面は平行タタキが認められる。口頸

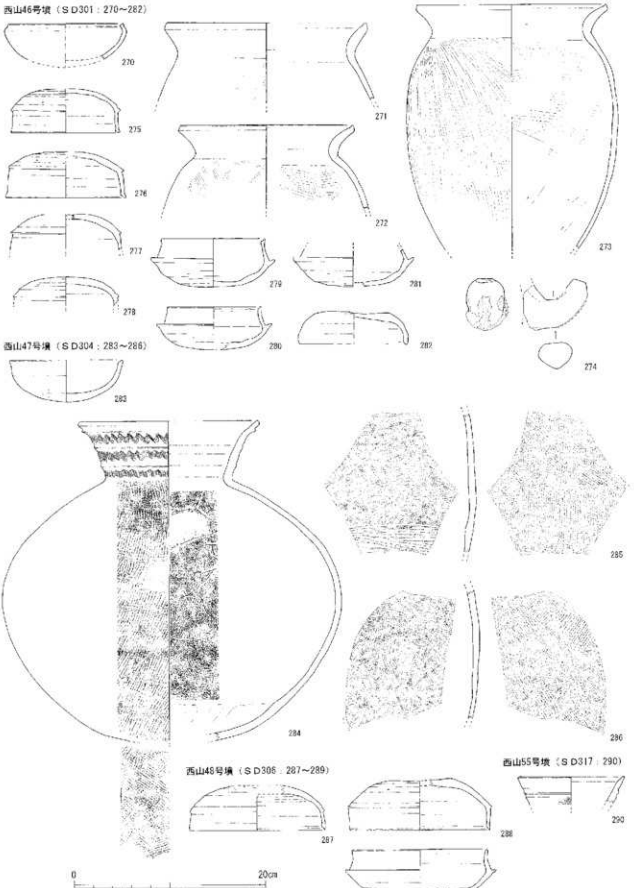


第112図　出土遺物実測図14（１：４、249は１：２）

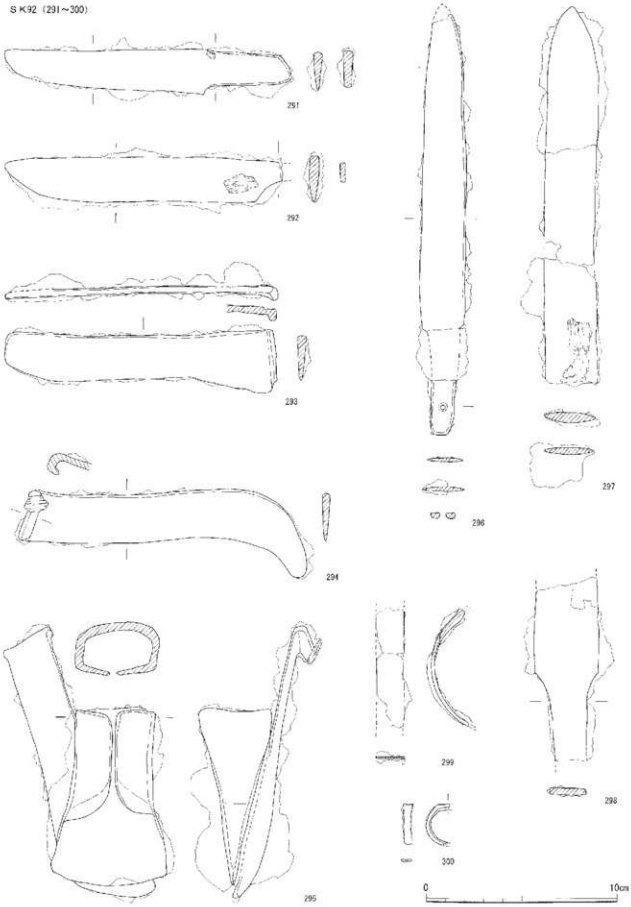
西山45号墳（ＳＤ151：253～269）



第113図　出土遺物実測図15（１：４）



第114図　出土遺物実測図16（１：４）



第115図　出土遺物実測図17（1：2）

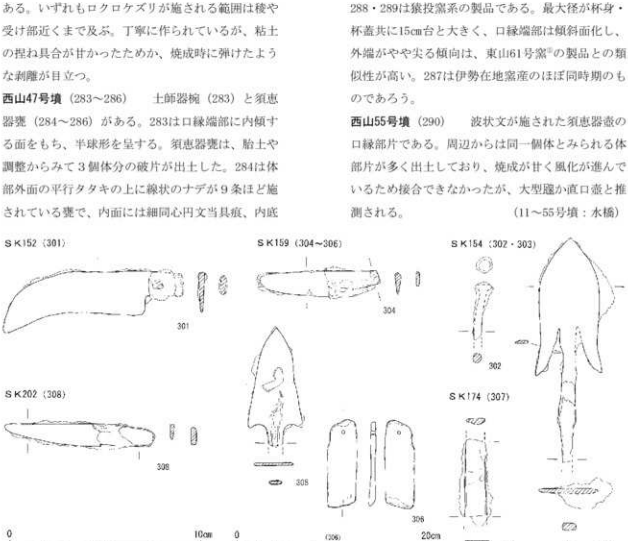
部には突帯や沈線と櫛描波状文（上から１条＋１条＋２条）、肩部には沈線で区画された文様帯に３条の櫛描波状文が施されている。268は装飾のない淡い青灰色の小型甕で、内面は当具痕ナデ消し、外面全面に平行タタキが認められる。

西山46号墳（270～282）　周溝西半から出土した須恵器・土師器（271～274・282）は、いずれも飛鳥時代に属するもので、前述の11号墳と同様、近接する古代の建物に伴うものと考えられる。周溝東半から出土した遺物のうち、270は口縁端部に内傾する面をもつ赤橙色の土師器椀である。須恵器杯蓋（275～278）は、天井部は丸く、稜は明瞭、口縁部は直立気味で、口縁端部は内面がやや窪む形状である。杯身（279～281）は、底部は丸みをもち、たちあがりはやや内傾し、口縁端部は内面が窪む形状である。いずれもロクロケズリが施される範囲は稜や受け部近くまで及ぶ。丁寧に作られているが、粘土の捏ね具合が甘かったためか、焼成時に弾けたような剥離が目立つ。

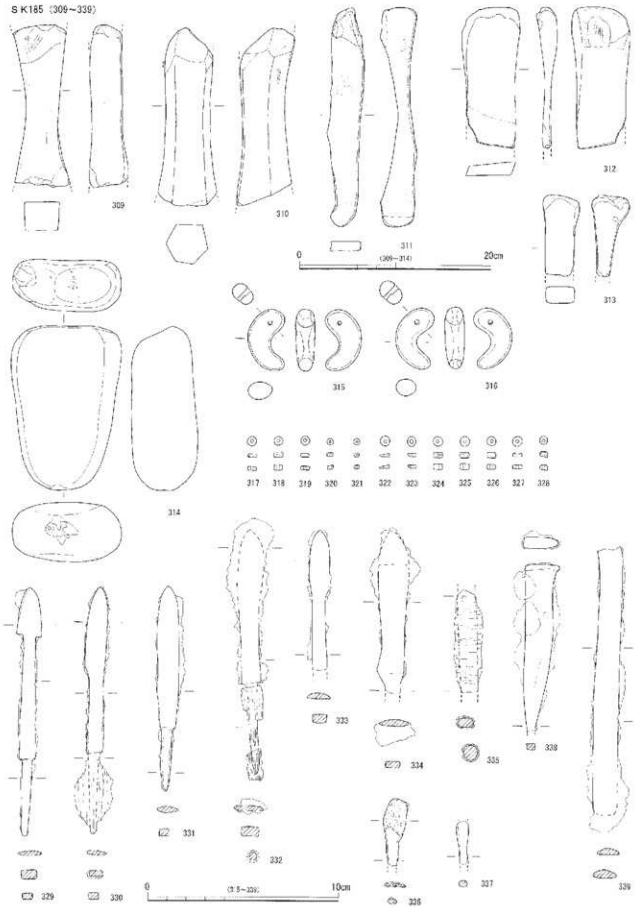
西山47号墳（283～286）　土師器椀（283）と須恵器甕（284～286）がある。283は口縁端部に内傾する面をもち、半球形を呈する。須恵器甕は、胎土や調整からみて３個体分の破片が出土した。284は体部外面の平行タタキの上に線状のナデが９条ほど施されている甕で、内面には細同心円文当具痕、内底面には無文当具痕がのこる。頸部には突線と櫛描波状文が３条施されている285・286は同一個体とみられる甕の体部片で、外面には平行タタキ、内面には細同心円文当具痕が認められる。285の内面には当具痕の上からヘラミガキ風の工具痕やナデ消しの痕跡も認められる。285・286の同一個体とみられる破片は、48号墳の西溝ＳＤ305からも出土している。僅か２個の小片であり、47号墳のほうが量的にも破片の大きさでも勝っているが、調査時、大雨のたびに大量の土砂が上方から流れ込んできた現地の状況からすると、本来、上方に位置する48号墳に伴っていた可能性も十分考えられる。

西山48号墳（287～289）　須恵器蓋杯（287～289）のほか、47号墳出土品と同一個体とみられる甕の小片がある。杯蓋（287・288）と杯身（289）のうち、288・289は猿投窯系の製品である。最大径が杯身・杯蓋共に15cm台と大きく、口縁端部は傾斜面化し、外端がやや尖る傾向は、東山61号窯[8]の製品との類似性が高い。287は伊勢在地窯産のほぼ同時期のものであろう。

西山55号墳（290）　波状文が施された須恵器壺の口縁部片である。周辺からは同一個体とみられる体部片が多く出土しており、焼成が甘く風化が進んでいるため接合できなかったが、大型甕か直口壺と推測される。（11～55号墳：水橋）



第116図　出土遺物実測図18（１：２、306は１：４）



第117図　出土遺物実測図19（1：4、315～339は1：2）

b　木棺墓など

ＳＫ92（291～300）　すべて鉄製品で、刀子（291）・刀（292）・剣（296～298）・刀装具（299・300）・鎌（293・294）・斧（295）がある。剣には鎬はなく、鞘とみられる木質が部分的に残る。鎌には直刃鎌（293）と曲刃鎌（294）があり、293は刃の向きから直刃鎌としたが、先端はややはね上がる。刀装具は棺内の南側埋土から出土した。299は柄金具、300は吊金具と推測される。

ＳＫ152（301）　鉄鎌としたが、曲刃の刀子のような形状である。柄部に木質が若干残存している。

ＳＫ154（302・303）　鉄鏃である。同一個体の可能性はあるが、接合できない。

ＳＫ159（304～306）　刀子（304）・鉄鏃（305）・砥石（306）がある。鉄製品には木質が付着しており、鉄鏃基部の木質は根挟みの部品の可能性がある。砥石（306）は粒子の細かい砂岩製で孔が１個穿たれている。先端の破面にも若干の使用痕が認められる。

ＳＫ174（307）　両端が大きく破損している棒状の鉄製品で、鉈とみられる。

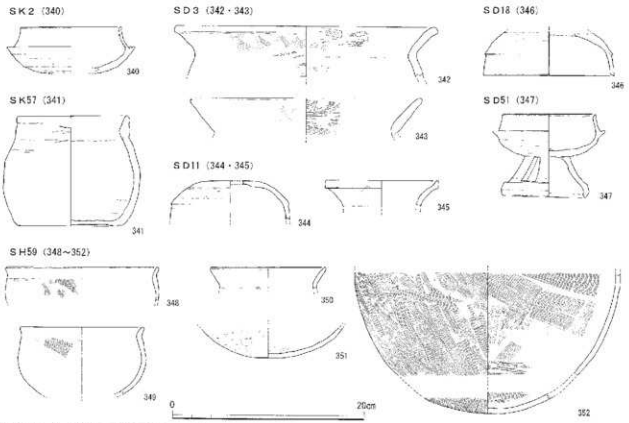
ＳＫ185（309～339）　砥石５個（309～313）・叩き石１個（314）・勾玉２個（315・316）・臼玉12個（317～328）、鉄鏃（329～337）・鑿（338）・鑿？（339）がある。砥石は砂岩・流紋岩・泥岩製があり、よく使いこまれている。叩き石はホルンフェルス製で、両端の使用痕は鉄分が付着しているようにみえる。勾玉は、両側から穿孔されている。鉄鏃は頭部の長いものが多い。全体に錆化が進み、残存状態は良好とは言えないが、茎部に木質が残るもの（330・332・336）や巻かれた樹皮が残るもの（335）もある。339は鑿とみられるが、刃部と柄部の境はＸ線写真でも不明瞭である。

ＳＫ202（308）　刀子である。柄部に木質が比較的よく残る。　（山中・水橋）

c　竪穴建物

ＳＨ59（348～352）　図示したものは全て土師器で、鉢（348・349）と甕（350～352）である。348の口縁端部外面には沈線が巡る。351は底部外面をヘラケズリするのに対し、352が底部までハケメで調整する。　（森川）

d　土坑



第118図　出土遺物実測図20（１：４）

ＳＫ57（341）　土師器の鉢であるが、甕とすべきかもしれない。球状の体部に短く直立する口縁部をもつが、底部は扁平の特異な器形を呈する。全体的に厚い器壁であるが、薄い円形の底部を雑に接合するため、体部と底部の一体感に欠ける。口縁部の接合も雑で、この部分が肥厚する。調整も全体的に雑な仕上げで、外面には粘土紐接合痕やヘラ状工具痕が多く残る。なお、胎土も粗いものである。

ＳＫ２（340）　図示できたものは須恵器の杯身のみである。高い口縁部で端部内面には緩慢な段を残す。底部外面は受部近くまでロクロケズリする。

（森川）

e　溝

ＳＤ11（344・345）　両者とも須恵器であるが、いずれも小片である。344は須恵器の杯蓋で、天井部外面を丁寧にロクロケズリする。345は提瓶の口縁部と思われるが確証はない。頸部に沈線が１条確認できる。

ＳＤ18（346）　図示できたものは須恵器杯蓋のみである。

ＳＤ51（347）　短脚の有蓋高杯である。杯部外面をロクロケズリ、他をロクロナデで調整するが、脚部外面下端付近は弱いカキメ状を呈する。（森川）

3　飛鳥時代（第118・119図）

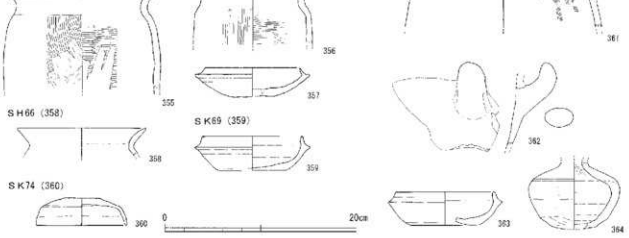
ＳＨ60（353～357）　土師器の杯・皿・甕、須恵器の杯身がある。土師器の杯（353）は底部外面をヘラケズリし、口縁部外面に凹線状の沈線が巡る。355・356はともに長胴甕と思われ、355は体部下半外面をヘラケズリする。両者とも頸部外面に非常に強いヨコナデを施す。357は須恵器の杯身で、口縁部の立ち上がりは非常に小さい。（森川・水橋）

ＳＨ66（358）　口縁部が「く」の字を呈する土師器甕である。表面の剥落が激しいため、調整は不明で、口縁端部など細部は本来の形を留めていない可能性がある。小型丸底甕かと思われる。図化できなかったが、長胴甕の可能性のある破片もあり、ハケメが細かいことから飛鳥時代を大きく下ることはないと推測される。

ＳＫ69（359）　須恵器の杯身。口縁部の立ち上がりは非常に小さい。H号墳出土品と接合した。

ＳＫ74（360）　須恵器の杯。稜の名残のような非常に不明瞭な沈線らしき凹みが微かに巡るため、蓋として図示したが、杯身として使用したものであろう。

ＳＫ302（361～364）　361は土師器甕で細かいハケメが認められる。362は甕か鍋の把手である。363は須恵器杯身で、ＳＫ69出土品と近似する。364は壺とみられる須恵器小壺で、肩部はやや張り、１条の沈線が巡る。（水橋）



第119図　出土遺物実測図21（１：４）

4　遺構外出土遺物（第120図）

土師器（365・366）、須恵器（367～377）、土製品（378）、金属製品（379・380）がある。

365は、32号墳もしくは34号墳の周溝上の包含層から出土した土師器甕で、口縁部は「く」の字を呈する。366は土師器高杯で、杯部の形状は不明だが、脚部はやや屈曲するようにみえる。

367～371は須恵器杯身。同一個体とみられる367・368は、体部が厚く、腰に丸みがあるため、古そうに見えるが、口縁部は薄く、ヘラケズリの範囲は狭い。産地は不明である。372は櫛描波状文が施された無蓋高杯。脚部の透孔は３方にあく。

373・374は須恵器小壺で、別個体だが、どちらも蓋の可能性がある。373は口縁部片で、口縁帯に櫛描波状文が施されている。374は頸部から体部にかけての破片で、頸部と肩部に櫛描波状文が施されている。肩部の文様帯は２条一対の沈線で区画されている。

375～377は須恵器甕。375は口縁部片で、頸部に突帯で区画された文様帯があり、櫛描波状文が施されている。胎土は粗い。産地は不明である。377は非常に薄作りの体部片で、外面に格子タタキ、内面には無文当具痕が認められる。焼成は甘く、やや瓦質である。産地は不明である。

378は土錘。全体が細長く、孔径も小さい。（水橋）

379は端部が折り返された鉄製品で刀装具の可能性がある。380は復元すると菱形となる可能性があり、金銅張りなどの痕跡は認められないが留金具と想定できる。（山中）

【註】

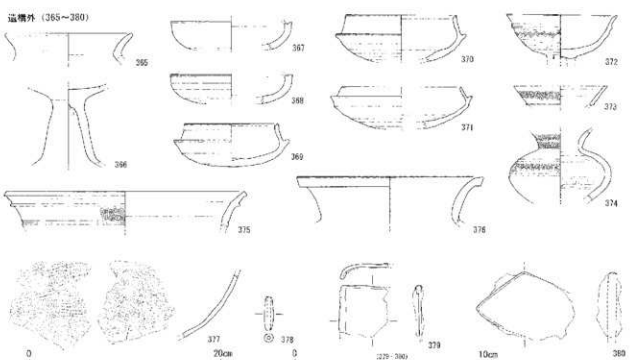
①辻川哲朗「近江地域における百済系土器の一様相」『紀要26』財団法人滋賀県文化財保護協会、2013年。

②森泰通「東海地方における古代土器製塩覚え書き2009－内陸部から出土する製塩土器の意味を考えるために－」『東海土器製塩研究』考古学ファーラム、2010年。同「製塩土器」『新修豊田市史　資料編　考古Ⅱ　弥生・古墳』愛知県豊田市、2015年。

③赤塚次郎「第Ⅴ章　考察」『廻間遺跡』財団法人愛知県埋蔵文化財センター、1990年。

④藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第３号　三重県埋蔵文化財センター、1994年。

⑤名古屋大学大学院文学研究科考古学研究室『東山61号窯発掘調査報告書』2010年。



第120図　出土遺物実測図22（１：４、379・380は１：２）

第６表　北山Ｃ遺跡・西山古墳群　出土遺物観察表（１／９）

報告番号	実測番号	種類	器種等	地区	遺構名	出土遺構 出土位置	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備　考
1	034-01	土師器	甕	M22	SK6	SK6	ハケメ	やや密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	口径完形	口縁部：刺突列点文
2	033-01	須恵器	壺	P14	1号墳	SD19 No.1	底部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	密	良	にぶい赤橙 5YR5/4	底部完存	ロクロ右回転 外面酸化地成
3	029-04	須恵器	杯身	L18	2号墳	SD8	底部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	やや粗	良好	灰白 N7/	受部1/4残	ロクロ右回転
4	029-03	須恵器	杯身	K17	3号墳	SD7	底部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	やや粗	良好	灰白 7.5Y7/1	受部1/6残	ロクロ左回転
5	026-01	須恵器	杯蓋	M14	4号墳	SD15 No.17	天井部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	やや粗	良好	灰 7.5Y6/1	完形	ロクロ左回転
6	026-02	須恵器	杯蓋	L15	4号墳	SD15 No.10・11	天井部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	密	良	灰 10Y6/1	口縁部小片 天井部完存	ロクロ左回転 笠張痕
7	028-05	須恵器	杯蓋	L15	4号墳	SD15 No.4	ロクロナデ	やや密	良好	青灰 5PB6/1	口縁部 1/10	
8	029-01	須恵器	杯蓋	L15	4号墳	SD15 No.3	天井部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	密	良好	灰白 7.5Y7/1	天井部1/6	ロクロ左回転
9	028-06	須恵器	杯蓋？	L15	4号墳	SD15 No.1	杯蓋外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	密	良	灰 7.5Y6/1	受部1/6	ロクロ右回転
10	026-03	須恵器	杯身	M14	4号墳	SD15 No.15	底部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	やや粗	やや不良	明オリーブ灰 2.5GY7/1	口径完形	ロクロ左回転 やや瓦質に焼ける
11	028-01	須恵器	杯身	L15	4号墳	SD15 No.2・7・9	底部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	やや粗	良好	青灰 5B6/1	口縁部1/4 受部3/8	ロクロ左回転
12	028-03	須恵器	杯身	L15	4号墳	SD15 No.6	底部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	密	良好	青灰 5B6/1	口縁部1/6	
13	029-02	須恵器	杯	L15	4号墳	SD15 No.13	底部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	密	良好	灰 10Y6/1	底部1/4	ロクロ左回転 笠張痕
14	028-04	須恵器	杯身	L15	4号墳	SD15 No.12	底部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	密	良好	灰 10Y6/1	口縁部小片 受部1/6	笠張痕 13と同一個体の可能性あり
15	028-02	須恵器	杯身	L15	4号墳	SD15 No.5・8・10	底部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	密	良	灰白 10Y7/1	受部1/3	ロクロ左回転
16	026-04	須恵器	鉢	M15	4号墳	SD15 No.16	底部外面ヘラケズリ 他はロクロナデ	やや密	良好	灰白 5Y7/1	口縁部1/2 体部完存	波状文３条
17	027-01	須恵器	甕	K14	4号墳	SD15 No.14	外面タタキ，内面ナデ	やや密	良好	灰 N6/	体部1/8	
18	012-04	土師器	壺	G46	6号墳	SD54 No.1	ナデ	密	良好	明赤褐 2.5YR5/6	頸部1/8	
19	012-05	土師器	高杯	147	6号墳	SD54 No.2	外面ヘラケズリ 内面未調整	密	良好	橙 2.5YR6/8	脚柱部1/4	
20	013-02	須恵器	杯蓋	G47	6号墳	SD54 No.7	天井部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	やや密	良好	青灰 5PB6/1	完形	ロクロ右回転 笠張痕
21	015-03	須恵器	壺	G46	6号墳	SD54 No.15	天井部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	やや密	良好	暗青灰 5B4/1	口径完形	ロクロ右回転
22	016-01	須恵器	高杯蓋	G47	6号墳	SD54 No.8	脚端のため調整不明瞭	密	良好	暗青灰 5B4/1	口径完形	
23	015-01	須恵器	高杯蓋	G46	6号墳	SD54 No.11	天井部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	粗	良好	灰 N6/	口縁部1/2	ロクロ左回転
24	013-01	須恵器	有蓋高杯	G47	6号墳	SD54 No.9	杯蓋外面ロクロケズリ 脚部外面カキメ 他はロクロナデ	やや密	良好	暗青灰 5B4/1	口縁部1/3 脚部完存	ロクロ左回転 透孔三角形３方
25	016-02	須恵器	有蓋高杯	G46	6号墳	SD54 No.13	脚部外面カキメ 他はロクロナデ	やや密	不良	灰白 2.5Y7/1	受部1/2 脚部完存	透孔三角形３方
26	015-02	須恵器	有蓋高杯	G46	6号墳	SD54 No.12	底外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	やや粗	良好	青灰 5B6/1	杯蓋完存	ロクロ左回転
27	012-01	須恵器	高杯	G47	6号墳	SD54 No.3	脚部外面カキメ 他はロクロナデ	密	やや不良	灰 N4/	脚部1/2残	透孔三角形４方 脚端が鋭しい
28	015-04	須恵器	有蓋高杯	G47	6号墳	SD54 No.6	底部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ 脚端が鋭して調整不明瞭	密	不良	灰白 7.5Y7/1	口縁部1/2残	
29	012-02	須恵器	高杯	G47	6号墳	SD54 No.10	脚端のため不明	密	やや不良	灰 N4/	口縁部・受部小片	
30	012-03	須恵器	高杯	G46	6号墳	SD54 No.14	ロクロナデ 脚端が鋭して調整不明瞭	密	やや不良	灰 N4/	脚部1/8 基部1/4残	透孔形状不明
31	014-01	須恵器	壺	145	6号墳	SD54 No.4	外面タタキ，内面ナデ	密	良好	灰白 N7/	体部1/5残	
32	011-02	土師器	壺	J48	7号墳	SD55	ナデ	密	良好	明赤褐 2.5YR5/8	頸部1/3	
33	010-01	土師器	甕	H48	7号墳	SD55 No.3	外面タタキ 脚端が鋭して調整不明瞭	やや粗	良好	浅黄橙 10YR8/3	口縁部1/4	酸化焼成の須恵器？
34	008-01	須恵器	杯蓋	150	7号墳	SD55 No.13	天井部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	やや粗	良好	暗青灰 5B4/1	完形	ロクロ左回転
35	008-02	須恵器	杯身	150	7号墳	SD55 No.12	底部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	やや粗	良好	灰 N4/	完形	ロクロ左回転 底部外面：ヘラ記号
36	008-03	須恵器	杯身	150	7号墳	SD55 No.14	底部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	やや粗	良好	にぶい赤橙 5YR5/4	完形	ロクロ左回転 底部外面：ヘラ記号
37	010-02	須恵器	高杯	150	7号墳	SD55 No.4・6・9・10	杯蓋外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	やや粗	良好	褐灰 N3/	杯蓋1/3 脚部1/2	杯蓋：波状文 透孔３方
38	008-04	須恵器	鉢	150	7号墳	SD55 No.5・7・8・11	体部外面下半カキメ 底部外面ナデ 他はロクロナデ	密	良好	灰 N6/	口縁部 1/5欠損	波状文３条＋刺突文
39	011-01	須恵器	鉢	J49	7号墳	SD55 No.2	底部外面ナデ 他はロクロナデ	やや密	やや不良	灰 5Y6/1	口縁部1/4	波状文２条＋刺突文
40	031-01	須恵器	甕	1次T1	7号墳	溝状遺構	ロクロナデ	やや粗	良好	青灰 5B6/1	口縁部1/6	波状文２条
41	004-04	土師器	壺	H51	8号墳	SD53 No.12	体部外面上半ハケメ 下半ヘラケズリ 内面ナデ	やや粗	良	浅黄 2.5Y8/3	口縁部 若干欠損	
42	007-01	土師器	甕	G53	8号墳	SD53 No.8	外面ハケメ，内面ナデ	やや粗	良好	灰白 10YR8/2	口縁部1/4残	

第７表　北山Ｃ遺跡・西山古墳群　出土遺物観察表（２／９）

報告番号	実測番号	種類	器種等	地区	遺構名	出土遺構 出土位置	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備　考
43	007-03	土師器	甕	I53	８号墳	SD53	消滅のため調整不明瞭 外面ハケメ	密	良好	橙 7.5YR7/6	口縁部1/4残	
44	007-02	土師器	甕	I52	８号墳	SD53	ハケメ	密	良好	に呂い橙 7.5YR7/4	口縁部1/4残	
45	007-04	土師器	高杯	H54	８号墳	SD53	消滅のため調整不明瞭 ナデ	密	良好	赤 10R5/6	口縁部小片 杯下半1/4残	
46	007-05	土師器	高杯	I52	８号墳	SD53	外面ナデ、内面未調整	密	良好	橙 2.5YR6/8	脚基部完存	
47	001-02	須恵器	杯蓋	H54	８号墳	SD53 No.1	天井部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	やや粗	良好	青灰 5PB6/1	口縁部2/3残	ロクロ右回転
48	006-03	須恵器	杯蓋	I53	８号墳	SD53 No.3	天井部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	密	良好	灰 N6/	口縁部1/5残	
49	006-02	須恵器	杯蓋	H54	８号墳	SD53 No.1	天井部外面未調整 他はロクロナデ	やや粗	良好	暗青灰 5PB4/1	口縁部小片 天井部完存	
50	006-06	須恵器	杯蓋	I54	８号墳	SD53 No.2	天井部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	やや粗	良好	暗青灰 5PB4/1	天井部完存	ロクロ右回転 焼都産
51	001-03	須恵器	杯身	H54	８号墳	SD53 No.7	底部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	やや粗	不良	淡黄 2.5Y8/4	口縁部1/3 受部1/2残	ロクロ右回転 一部瓦質、還元不良
52	004-03	須恵器	杯身	H54	８号墳	SD53 No.2	底部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	やや粗	良好	褐N 4/	受部以下完存	ロクロ右回転
53	006-05	須恵器	杯身	I53	８号墳	SD53 No.3	ロクロナデ	密	良好	青黒 5PB2/1	口縁部1/2残	
54	006-04	須恵器	高杯	I53	８号墳	SD53 No.16	ロクロナデ	やや粗	良好	暗青灰 5PB4/1	脚端部小片 脚柱部1/3残	
55	004-02	須恵器	高杯	I54	８号墳	SD53 No.6	ロクロナデ	やや密	良好	灰白 7.5Y7/1	脚端部2/3残	短脚
56	004-01	須恵器	壺	I53	８号墳	SD53 No.4	ロクロナデ	密	良好	褐灰 10YR6/1	口縁部2/3残	頸部：凹線２条
57	005-01	須恵器	壺	H54	８号墳	SD53 No.1・3・14	体部外面下半ロクロケズリ 他はロクロナデ	やや粗	良好	褐灰 7.5YR5/1	口縁部 若干欠損	頸～体部上半：波状文４条 SD58下層出土品と接合
58	006-01	須恵器	壺	I53	８号墳	SD53 No.9・1	体部内面上半未調整 下半ナデ 他はロクロナデ	やや粗	良好	灰 N5/	口縁部1/6 体部5/6残	頸部：波状文
59	002-01	須恵器	壺	I53	８号墳	SD53 No.13	体部外面下半ナデ 他はロクロナデ	やや密	良好	緑黒 5G2/1	口縁部欠損	頸～体部：波状文２条
60	002-02	須恵器	壺	I52	８号墳	SD53 No.10	体部外面下半ナデ 内面下半未調整 他はロクロナデ	やや粗	良	灰白 7.5Y7/1	口縁部欠損	頸～体部：波状文２条 還元不十分
61	001-01	須恵器	鉢	H51	８号墳	SD53 No.11	体部外面上半タタキ 下半ロクロケズリ 内面ロクロナデ	密	やや不良	灰 7.5YR/1	口径完形	器形上部 ロクロ右回転
62	003-01	須恵器	甕	I53	８号墳	SD53	外面タタキ、内面ナデ	密	良好	灰 N4/	体部下半 1/2残	
63	024-02	土師器	椀	L54	９号墳	SD52 No.1	消滅のため調整不明瞭 内面ナデ	密	良好	橙 2.5YR6/8	口径完形	
64	024-03	土師器	椀	M52	９号墳	SD52 No.2	消滅のため調整不明瞭 内面ナデ	やや密	良好	橙5YR7/8	完形	
65	019-03	土師器	壺	F53	10号墳	SD58下層	ナデ	やや粗	良好	明黄褐 10YR7/6	口縁部小片 体部1/6	
66	017-01	須恵器	杯蓋	F52	10号墳	SD58下層	底部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	密	良好	灰 N6/	口縁部1/10	ロクロ右回転
67	017-04	須恵器	杯蓋	E51	10号墳	SD58下層	天井部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	やや密	良好	青灰 5B6/1	天井部1/8	ロクロ右回転
68	017-03	須恵器	杯蓋	F53	10号墳	SD58 No.1	天井部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	やや密	良好	青灰 5PB5/1	口縁部1/2	ロクロ右回転
69	017-02	須恵器	杯蓋	E51	10号墳	SD58下層	天井部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	やや密	良好	青灰 5B6/1	口縁部1/8	ロクロ右回転
70	017-05	須恵器	杯身	F52	10号墳	SD58下層	ロクロナデ	密	良好	青灰 5PB5/1	口縁部1/8	
71	017-06	須恵器	杯身	F52	10号墳	SD58 No.2・3	底部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	密	良好	灰 N4/	完形	ロクロ左回転 底部外面：ヘラ記号
72	019-01	須恵器	杯身	E52	10号墳	SD58下層	底部外面未調整 他はロクロナデ	密	良好	青灰 5B6/1	受部1/8	
73	022-01	須恵器	壺	E51	10号墳	SD58上層	ロクロナデ	密	良好	灰白 7.5Y7/1	口縁部1/4	波状文
74	018-02	須恵器	壺	F52	10号墳	SD58下層	底部外面タタキ 他はロクロナデ	密	良好	灰白 N7/	体部上半完存	波状文
75	018-01	須恵器	壺	F52	10号墳	SD58 No.4	底部外面タタキ 他はロクロナデ	密	良好	灰 N6/	口縁部1/2 体部上半完存	波状文＋櫛突文
76	019-02	須恵器	壺	E51 F52	10号墳	SD58下層	体部外面下半カキメ 底部外面タタキ 他はロクロナデ	やや密	良好	灰白 N7/	頸部1/4	波状文
77	021-01	須恵器	壺	E52	10号墳	SD58下層	外面カキメ＋タタキ 内面ナデ	やや密	良好	灰 7.5Y6/1	頸部1/7 体部1/4	波状文２条
78	020-01	須恵器	甕	E51	10号墳	SD58下層	外面タタキ 内面ナデ	やや密	良好	灰白 5Y7/1	口縁部1/2	
79	312-01	土師器	鉢	N58	11号墳	SD68	消滅のため不明	密	良好	橙 5YR7/6	口縁部2/12	
80	308-02	土師器	甕	M60	11号墳	SD67 No.16	内面ハケメ	やや密	良好	橙 7.5YR7/6	口縁部2/12	
81	311-02	土師器	甕	O58	11号墳	SD68	口縁部内面ハケメ 内面ナデ	やや密	良好	に呂い黄橙 10YR7/2	口縁部1/12	
82	308-05	土師器	甕	M60	11号墳	SD67 No.8・12	外面ハケケ	やや粗	良好	橙 7.5YR6/6	口縁部1/12	
83	613-02	土師器	甕	O58	11号墳	SD67 西溝	消滅のため不明瞭。 内面ナデ、外面ケズリ	粗	良好	橙 7.5YR7/6	口縁部2/12	
84	308-03	土師器	甕	M60	11号墳	SD67	内面ハケメ	密	良好	明黄褐 10YR7/6	口縁部3/12	

第８表　北山Ｃ遺跡・西山古墳群　出土遺物観察表（３／９）

報告番号	実測番号	種類	器種等	地区	遺構名	出土遺構 出土位置	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備　考
85	309-02	土師器	甕	M60	11号墳	SD67 №2	外面ハケメ	密	良好	明黄褐 10YR6/6	口縁部3/12	
86	311-01	土師器	甕	O58	11号墳	SD68	外面ハケメ	やや密	良好	に示い黄橙 10YR7/4	口縁部5/12	
87	611-01	土師器	甕	O58	11号墳	SD67	磨滅のため不明瞭 内面ハケメ	密	良好	に示い橙 7.5YR7/3	口縁部8/12	
88	308-01	土師器	甕	M60	11号墳	SD67 №16	ハケメ （内径8.8/cm、外7.8/cm）	やや密	やや不良	明黄褐 10YR7/6	口縁部3/12	
89	613-01	土師器	甕	P57	11号墳	SD67 西トレンチ	磨滅のため不明瞭 内外面ハケメ	やや密	良好	橙 7.5YR7/6	口縁部3/12	
90	309-01	土師器	甕	M60	11号墳	SD67 №2	内外面ハケメ	密	良好	に示い黄橙 10YR7/4	口縁部6/12	
91	610-01	土師器	長胴甕	O57	11号墳	SD67 上層	磨滅のため不明瞭 口縁部内・外面ハケメ	やや密	良好	に示い橙 7.5YR7/4	4/12	
92	310-01	土師器	甕	N61	11号墳	SD67	内外面ハケメ	やや密	良好	橙 7.5YR7/6	口縁部3/12	
93	310-02	土師器	鍋	M60	11号墳	SD67 №10	外面ハケメ	やや密	良好	明黄褐 10YR7/6	口縁部2/12	把手１
94	613-03	土師器	鍋・甕	P58	11号墳	SD67 上層	オサエ・ナデ	やや粗	良好	に示い黄橙 10YR7/4	把手部	
95	312-02	土師器	鍋・甕	O58	11号墳	SD68	オサエ・ナデ	密	良好	黄橙 10YR8/6	把手部	
96	613-04	土師器	鍋・甕	P57	11号墳	SD67 西トレンチ	オサエ・ナデ	粗	良好	浅黄橙 10YR8/4	把手部	
97	306-04	製塩土器	—	M60	11号墳	SD67	ユビオサエ	密	良好	に示い橙 7.5YR6/4	—	知多式
98	609-02	須恵器	杯蓋	P58	11号墳	SD67中層	天井部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	やや粗	良好	灰白 7.5Y7/1	9/10	
99	312-06	須恵器	杯蓋	O58	11号墳	SD68壁	天井部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	密	良好	灰白 N7/	2/3	
100	612-01	須恵器	杯蓋	P57	11号墳	SD67	天井部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	やや密	良好	灰 N6/	口縁部3/12	
101	303-02	須恵器	杯蓋	M60	11号墳	SD67	磨滅のため不明	やや粗	不良	に示い黄 2.5Y6/3	口縁部4/12	
102	303-03	須恵器	杯蓋	M60	11号墳	SD67	磨滅のため不明	やや粗	不良	灰 N4/	稜部1/12	
103	302-03	須恵器	杯蓋	N61	11号墳	SD67第2層	天井部外面ヘラオコシ 他はロクロナデ	やや密	良好	灰白 10Y7/1	11/12	
104	312-04	須恵器	杯蓋	N58	11号墳	SD68	天井部降灰のため不明 他はロクロナデ	密	良好	灰白 5Y7/1	1/3	
105	609-01	須恵器	杯身	O57	11号墳	SD67 上層	底部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	やや密	良好	灰白 N7/	口縁部9/12	
106	609-03	須恵器	杯身	P57	11号墳	SD67 西トレンチ	底部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	密	良好	灰 7.5Y6/1	受部9/12	
107	301-01	須恵器	杯身	N60 O58	11号墳	SD67 SD68	底部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	密	良好	灰 10Y6/1	4/12	尾張産
108	302-05	須恵器	杯身	M60	11号墳	SD67	底部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	やや密	良好	灰白 5Y7/1	口縁部3/12	
109	303-01	須恵器	杯身	M60 N56	11号墳	SD67 SK69	底部外面ヘラオコシ 他はロクロナデ	やや密	良好	灰白 5Y7/1	4/12	
110	312-05	須恵器	杯身	O58	11号墳	SD68	底部外面ヘラオコシ 他はロクロナデ	密	良好	灰白 7.5Y7/1	1/2	
111	302-04	須恵器	杯身	N60	11号墳	SD67 №19	底部外面ヘラオコシ 他はロクロナデ	粗	良好	暗緑灰 7.5GY4/1	7/12	
112	302-07	須恵器	杯身	N60	11号墳	SD67	底部外面ヘラオコシ 他はロクロナデ	やや粗	良好	灰 5Y6/1	11/12	
113	302-06	須恵器	杯身	M60	11号墳	SD67	底部外面ヘラオコシ 他はロクロナデ	粗	良好	灰 10Y5/1	3/12	
114	312-08	須恵器	杯身	N58	11号墳	SD68	底部外面ヘラオコシ 他はロクロナデ	密	良好	灰白 N7/	1/2	
115	312-03	須恵器	杯身	O58	11号墳	SD68	底部外面ヘラオコシ 他はロクロナデ	密	良好	灰 7.5Y6/1	底部完存	
116	612-04	須恵器	杯身	P58	11号墳	SD67 上層	ロクロナデ	やや密	良好	灰 10Y6/1	口縁部2/12	
117	312-07	須恵器	杯身？	N58	11号墳	SD68	底部外面ヘラオコシ 他はロクロナデ	密	良好	灰白 7.5Y7/1	底部5/12	
118	612-02	須恵器	杯	P57	11号墳	SD67 西トレンチ	外面ヘラオコシ、 他はロクロナデ	やや密	やや不良	灰白 7.5Y7/1	4/12	
119	611-02	須恵器	壺	P57 P58	11号墳	SD67 西トレンチ	底部外面平行タタキ ＋ケズリ＋ナデ 他はロクロナデ	やや密	良好	灰 7.5Y6/1	7/12	線部：突帯＋櫛描波状文２条 肩部：沈線２・櫛描波状文 底部：ヘラ記号？
120	314-01	須恵器	壺	N58	11号墳	SD68	体部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	密	良好	灰白 7.5Y7/1	胴体部1/2	肩部：沈線２条 体部・底部：ヘラ記号
121	305-01	須恵器	壺	N61 N58	11号墳	SD67第2層 SD68	体部外面平行タタキ 他はロクロナデ	やや密	良好	灰 5Y5/1	1/2	
122	313-01	須恵器	高杯	N58 N60	11号墳	SD68 SD67	杯底外面ロクロケズリ？ 他はロクロナデ	密	良好	灰白 7.5Y7/1	1/2	
123	301-02	須恵器	高杯	N58 N60	11号墳	SD68 SD67	杯底外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	やや密	やや不良	灰白 2.5Y8/2	口縁部2/12	
124	302-02	須恵器	無蓋高杯	N60	11号墳	SD67 №20	杯底部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	やや粗	良好	灰 7.5Y5/1	杯部9/12	透孔２方
125	302-01	須恵器	無蓋高杯	M60	11号墳	SD67 №1	ロクロナデ	やや粗	良好	灰白 5Y7/1	6/12	
126	612-05	須恵器	高杯	P58	11号墳	SD67 上層	ロクロナデ	やや密	良好	灰 10Y6/1	—	透孔２方

第９表　北山Ｃ遺跡・西山古墳群　出土遺物観察表（４／９）

報告番号	実測番号	種類	器種等	地区	遺構名	出土遺構出土位置	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備　考
127	612-03	須恵器	高杯	Q58	11号墳	SD67 溝ロッ	ロクロナデ	密	やや不良	灰白 2.5Y8/2	脚部	脚部：沈線
128	304-01	須恵器	横瓶	M60	11号墳	SD67Na4・8・12・15・18	体部外面平行タタキ 口縁部ロクロナデ	やや粗	良好	灰白 5Y7/1	体部2/5	体部外面中央：沈線
129	307-01	須恵器	横瓶	M60	11号墳	SD67 Na11・14	体外ヘラ状ユビ痕 他はロクロナデ等	やや密	良好	黄灰 2.5Y6/1	2/3	体部：穿孔・孔縁粘痕 頸部接合部付近：亀裂修復痕
130	305-02	須恵器	壺	N61 O60	11号墳	SD67	体部外面タタキ・カキメ 内面当具痕	やや密	やや不良	灰白 5Y7/1	口縁部1/12	
131	313-02	須恵器	壺	O58	11号墳	SD68	体部外面縦格子タタキ 内面同心円文当具痕	密	良好	灰白 2.5Y7/1	口縁部4/12	
132	306-01	須恵器	提瓶	M60	11号墳	SD67Na6・7・9・13・15	体部外面平行タタキ 他はロクロナデ	密	良好	灰白 2.5Y7/1	1/3	頸部：沈線２条 把手２
133	401-01	土師器	甕	L62	12号墳	SD63	口縁部内面ハケメ	密	良好	黄褐 10YR6/4	口縁部1/12	
134	401-03	須恵器	無蓋高杯	K65	12号墳	SD63	杯底外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	密	良好	灰白 N7/	4/12	櫛描波状文、把手１穴 透孔４方
135	401-02	須恵器	直口壺	L62	12号墳	SD63	ロクロナデ	やや粗	良好	灰 10Y5/1	口縁部1/12	頸部：沈線
136	409-01	石製品	紡石	J64	12号墳	SD63		—	—	灰黄 2.5Y6/2	完存	
137	407-05	土師器	高杯	L74	14号墳	SD86 No2	外面ミガキヤ	密	良好	橙 7.5YR6/6	脚柱部のみ	
138	408-03	土師器	甕	N73	14号墳	SD86下層	外面ハケメ	やや密	良好	橙 7.5YR6/6	口縁部1/12	
139	408-02	土師器	高杯	I72	14号墳	SD86下層 No3	外面ナデヤ 内面工具ナデ	やや粗	良好	に赤・黄橙 10YR7/4	脚部1/1完存	
140	408-01	須恵器	鉢	L74	14号墳	SD86下層 No.1	底部ユビオサエ 他はロクロナデ	密	良好	灰 7.5Y4/1	5/12	頸部：櫛描波状文 体部：沈線２・櫛描列点文
141	408-05	土師器	高杯	H72	15号墳	SD89	脚部外面磨滅のため不明 内面工具ナデ	やや密	良好	橙 7.5YR6/6	脚部7/12	
142	408-04	須恵器	直口壺	I72	15号墳	SD87第1層	ロクロナデ	密	良好	灰白 5Y7/2	口縁部2/12	頸部：突帯２・櫛描波状文
143	519-02	ガラス製品	玉	G71	15号墳	SD89		—	—	青灰 5BG5/1	完存	
144	407-04	土師器	台付甕	I76	17号墳	SD84	ナデ・ユビオサエ	やや密	良好	橙 7.5YR7/6	底部4/12	
145	515-03	土師器	台付甕	E77	18号墳	SD201 No2	外面ハケメ 内面ナデ・工具痕	やや粗	良好	に赤・黄橙 10YR6/4	1/2	外面煤付着
146	515-02	土師器	台付甕	N278	19号墳	SD203	外面ハケメ、内面ナデ	やや粗	良好	橙 7.5YR7/6	脚部2/3	
147	505-01	須恵器	鉢	A78	19号墳	SD203 No.1	底部外面平行タタキ 内面オサエ	密	良好	灰5Y6/	9/10	頸部：突帯＋櫛描波状文 肩部：沈線＋櫛描波状文
148	552-10	鉄製品	鉄鏃	C77	19号墳	SD203 No.1		—	—	—	頸部のみ	
149	552-11	鉄製品	鉄鏃	C77	19号墳	SD203 No.1		—	—	—	小片	
150	506-01	須恵器	椀形鉢	Y79	20号墳	SD196西	ロクロナデ	密	良好	黄灰 2.5Y5/1	1/2	図上復元
151	514-04	土師器	甕	C84	21号墳	SD195	外面ハケメ（3本/cm）	やや粗	良好	に赤・黄橙 10YR6/4	口縁部2/12	
152	535-01	須輪	円筒	D83	21号墳	SD195 No4	磨滅のため不明	粗	良好	橙 7.5Y7/6	1/2	透孔１箇所 黒斑
153	525-01	須輪	円筒	A84	21号墳	SD195 No.1	外面磨滅、内面ヨコナデ	粗	良好	橙 5YR6/8	口縁部6/12	透孔１箇所
154	523-01	須輪	円筒	C84	21号墳	SD195	磨滅のため不明	粗	良好	橙 7.5YR6/6	口縁部2/12	透孔１箇所 黒斑
155	522-01	須輪	円筒	A83 A84	21号墳	SD195 No2	外面タテハケ 内面ヨコナデ	粗	良好	明黄褐 10YR6/6	口縁部5/12	透孔１箇所
156	528-01	須輪	円筒	D83	21号墳	SD195 下層・No6	外面タテハケ 内面ヨコナデ	やや粗	良好	橙 7.5YR6/6	口縁部3/12	黒斑
157	536-02	須輪	円筒	A82	21号墳	SD195	磨滅のため不明	粗	良好	橙 7.5YR7/6	口縁部2/12	
158	528-02	須輪	円筒	D83	21号墳	SD195	外面タテハケ？ 内面ヨコナデ	やや粗	良好	橙 7.5YR6/6	口縁部小片	
159	522-03	須輪	円筒	A84	21号墳	SD195 No.1	ヨコナデ	やや粗	良好	橙 5YR7/6	口縁部小片	
160	529-02	須輪	円筒	D83	21号墳	SD195 No3	磨滅のため不明	やや粗	良好	橙 5YR6/6	口縁部小片	
161	526-07	須輪	円筒	C84	21号墳	SD195	ヨコナデ	やや粗	粗	明黄褐 10YR7/6	口縁部小片	
162	530-02	須輪	円筒	D82	21号墳	SD195	磨滅のため不明	粗	良好	橙 5YR6/6	口縁部小片	
163	523-02	須輪	円筒	C84	21号墳	SD195	磨滅のため不明	粗	良好	橙 7.5YR6/6	口縁部小片	
164	523-03	須輪	円筒	C84	21号墳	SD195	外面タテハケ 内面磨滅	粗	良好	明褐 7.5YR5/6	口縁部小片	黒斑
165	530-01	須輪	円筒	D82	21号墳	SD195上層	ヨコナデ	粗	良好	橙 5YR6/6	口縁部小片	
166	528-03	須輪	円筒	D83	21号墳	SD195	磨滅のため不明	やや粗	良好	橙 7.5YR6/6	体部2/12	
167	527-01	須輪	円筒	D83	21号墳	SD195 No5	磨滅のため不明瞭	やや粗	良好	橙 7.5YR7/6	体部	底部：植物（植物）？痕 黒斑
168	533-01	須輪	円筒	C81	21号墳	SD195	外面磨滅、内面ナデ	やや粗	良好	に赤・橙 7.5YR6/4	体部1/12	透孔１箇所
169	530-03	須輪	円筒	D82	21号墳	SD195	磨滅のため不明	粗	良好	橙 5YR6/6	突帯部2/12	

第10表　北山Ｃ遺跡・西山古墳群　出土遺物観察表（５／９）

報告番号	実測番号	種類	器種等	地区	遺構名	出土遺構出土位置	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備　考
170	524-03	須輪	円筒	C84	21号墳	SD195	外面タテハケ 内面ヨコナデ	やや粗	良好	橙 7.5YR6/6	体部片	透孔１箇所
171	529-01	須輪	円筒	C82 D82	21号墳	SD195上層	外面タテハケ？ 内面ヨコナデ	粗	良好	橙 5YR6/6	体部1/4	透孔１箇所
172	521-01	須輪	円筒	A84	21号墳	SD195 No2	外面タテハケ 内面磨滅	粗	良好	にぶい黄橙 10YR6/4	突帯部3/12	
173	520-02	須輪	円筒	A84	21号墳	SD195 No1	磨滅のため不明	粗	良好	橙 5YR7/6	突帯部1/12	
174	534-01	須輪	円筒	D82	21号墳	SD195	外面磨滅 内面オサエ・ナデ	やや粗	良好	橙 7.5YR6/6	体～底部 1/12	
175	531-01	須輪	円筒	C81	21号墳	SD195	磨滅のため不明	粗	良好	橙 7.5YR7/6	体～底部 3/12	黒斑
176	521-02	須輪	円筒	A84	21号墳	SD195 No2	外面タテハケ 内面磨滅	粗	良好	橙 7.5YR7/6	底部6/12	黒斑
177	520-01	須輪	円筒	A84	21号墳	SD195 No1	外面タテハケ 内面磨滅	やや粗	良好	にぶい黄橙 10YR7/3	底部3/12	
178	524-02	須輪	円筒	A83	21号墳	SD195	ヨコナデ？	粗	良好	橙 7.5YR7/6	底部3/12	黒斑
179	525-02	須輪	円筒	A83	21号墳	SD195	外面タテハケ 内面磨滅	粗	良好	橙 7.5YR6/6	底部2/12	
180	532-01	須輪	円筒	C81	21号墳	SD195	磨滅のため不明	やや粗	良好	橙 7.5YR7/6	底部3/12	
181	527-02	須輪	円筒	D83	21号墳	SD195 No3	ナデ	やや粗	良好	橙 7.5YR7/6	底部5/12	
182	532-02	須輪	円筒	C81	21号墳	SD195	磨滅のため不明	やや粗	良好	橙 7.5YR7/6	底部3/12	
183	536-01	須輪	円筒	C81	21号墳	SD195	磨滅のため不明	粗	良好	橙 7.5YR7/6	底部5/12	
184	529-03	須輪	円筒	D82	21号墳	SD195	外面タテハケ？ 内面磨滅	粗	良好	橙 5YR6/6	底部3/12	
185	522-02	須輪	円筒	A84	21号墳	SD195	外面タテハケ 内面ヨコハケ	やや粗	良好	黄橙 7.5YR7/8	底部3/12	
186	533-02	須輪	円筒	C81	21号墳	SD195	外面磨滅 内面オサエ・ナデ	やや粗	良好	明黄褐 10YR7/6	底部2/12	黒斑
187	537-01	須輪	円筒	A82	21号墳	SD195	磨滅のため不明	やや粗	良好	橙 7.5YR7/6	底部6/12	黒斑
188	524-01	須輪	円筒	B84	21号墳	SD195	外面ハケ？ 内面ナデ	粗	良好	明黄褐 10YR6/6	体部片	透孔１箇所
189	530-04	須輪	円筒	D83	21号墳	SD195	磨滅のため不明	やや粗	良好	橙 7.5YR6/6	底部小片	
190	526-01	須輪	円筒	C84	—	攪乱	内面ナデ	やや粗	良好	橙 5YR7/6	体部小片	透孔１箇所 黒斑
191	526-03	須輪	円筒	C83	—	攪乱	外面磨滅 内面ナデ	やや粗	良好	橙 7.5YR7/6	体部小片	
192	526-05	須輪	円筒	C83	—	攪乱	内面ナデ	やや粗	良好	橙 7.5YR6/6	体部小片	透孔１箇所
193	526-02	須輪	円筒	C84	—	攪乱	外面タテハケ 内面ナデ	やや粗	良好	橙 7.5YR7/6	体部小片	
194	526-04	須輪	円筒	C83	—	攪乱	内面ナデ	やや粗	良好	明黄褐 10YR7/6	体部小片	透孔１箇所
195	526-06	須輪	円筒	C83	—	攪乱	外面磨滅 内面ナデ	粗	良好	橙 7.5YR7/6	底部小片	底部：樹物（植物）？痕
196	541-01	須輪	家形	D81	21号墳	SD195	磨滅のため明瞭 内面剥離	やや粗	良好	橙 5YR6/6	小片	家の屋根 棧状又の痕別
197	541-03	須輪	家形	B81	21号墳	SD195	磨滅のため明瞭 内面剥離	やや密	良好	橙 7.5YR7/6	小片	家の屋根 棧状又の痕別
198	540-07	須輪	家形	C81	21号墳	SD195	磨滅のため不明	やや密	良好	橙 5YR6/6	小片	家の軒？
199	540-06	須輪	家形	D82	21号墳	SD195	ナデ	やや密	良好	にぶい橙 7.5YR7/4	小片	家の軒？
200	540-03	須輪	家形	D81	21号墳	SD195	磨滅のため不明	やや密	良好	橙 7.5YR7/6	小片	家の屋根
201	539-01	須輪	家形	B81	21号墳	SD195下層	磨滅のため明瞭 タテハケ？	やや粗	良好	橙 7.5YR6/6	小片	家の壁
202	539-02	須輪	家形	B81	21号墳	SD195下層	ナデ	やや粗	良好	橙 5YR6/6	小片	家の壁？
203	539-04	須輪	家形？	B81	21号墳	SD195下層	磨滅のため不明	やや密	良好	橙 7.5YR7/6	小片	器材
204	539-03	須輪	家形	C81	21号墳	SD195	ナデ	密	良好	にぶい橙 7.5YR7/4	小片	家の台？
205	538-01	須輪	家形	C81	21号墳	SD195	磨滅のため明瞭 ヨコナデ？	やや密	良好	橙 7.5YR7/6	突帯3/4	家の台
206	540-05	須輪	形象	D82	21号墳	SD195	オサエ・ナデ	やや密	良好	橙 7.5YR7/6	小片	
207	541-02	須輪	家形	西区	—	周溝上の表土	オサエ・ナデ	やや密	良好	橙 7.5YR7/6	小片	家の屋根 棧状又の痕別
208	540-01	須輪	家形	西区	—	表土	外面磨滅，内面ナデ	やや密	良好	橙 7.5YR7/6	小片	家の屋根？
209	540-02	須輪	家形	西区	—	周溝上の表土	ナデ	やや密	良好	橙 7.5YR7/6	小片	家の屋根？
210	540-04	須輪	形象	西区	—	包含層	外面磨滅，内面ナデ	やや密	良好	橙 5YR6/6	小片	
211	508-02	土師器	椀	F85	23号墳	SD83	ヨコナデ	やや粗	良好	灰黄 2.5Y6/2	口縁部3/12	
212	508-03	土師器	椀	F85	23号墳	SD83	ナデ？	やや粗	良好	灰白 5Y7/1	8/12	底部：木葉痕

第11表　北山C遺跡・西山古墳群　出土遺物観察表（6／9）

報告番号	実測番号	種類	器種等	地区	遺構名	出土遺構出土位置	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備　考
213	402-07	須恵器	把手付椀	K86	24号墳	SD80	外面下半ケズリ後ナデ	やや密	良好	暗灰N3/	11/12	櫛描波状文 把手上端状態欠損
214	402-08	須恵器	甕	H86	24号墳	SD80	外面格子タタキ 内面ナデ	密	良好	灰7.5Y6/1	体部小片	
215	402-09	須恵器	甕	I85	24号墳	SD80下層	外面格子タタキ 内面ナデケ	密	良好	灰7.5Y6/1	体部小片	
216	411-01	鉄製品	刀子	J85	24号墳	SK81		—	—	—	完存	
217	407-03	土師器	高杯	M81	25号墳	SD82 №6	工具ナデ	やや密	良好	にぶい黄橙10YR6/4	底部7/12	
218	407-01	須恵器	蓋	M83 N83	25号墳	SD82上層	底部外面平行タタキ 内面ナデエ	やや密	良好	灰N4/	6/12	摘部：櫛描波状文2、体部：沈線2＋櫛描列点文＋波状文
219	407-02	須恵器	高杯	M81	25号墳	SD82 №1	ロクロナデ	密	良好	灰N6/	杯部6/12 脚部10/12	櫛描波状文、透孔4方
220	405-01	須恵器	甕	M81	25号墳	SD82 №2～10	外面縦心な平行タタキ 内面ナデ	やや密	良好	灰白5Y7/1	1/2	
221	406-01	須恵器	壺	L80	25号墳	SD82 №11～20	外面平行タタキ、内面同心円文当板ナデ消し	やや密	良好	灰白5Y6/1	2/3	摘部：突帯2＋櫛描波状文3 体部：沈線2＋櫛描列点文
222	402-05	須恵器	壺	O86	27号墳	SD79	外面下半カキメ	やや粗	良好	灰白7.5Y7/1	体部1/12	沈線2条の間：櫛描列点文
223	402-06	須恵器	壺	N85	27号墳	SD79	外面下半タタキ後ロクロナデ	やや密	良好	灰白5Y7/1	体部小片	沈線2条の間：櫛描列点文
224	402-04	須恵器	壺	L86	27号墳	SD79	ロクロナデ	やや密	良好	灰5Y6/1	口縁部1/12	櫛描波状文2条
225	404-01	土師器	台付甕	N86	27号墳	SD79	外面ハケメマ 内面ナデ	粗	良好	にぶい黄橙10YR6/4	5/12	内面炭化物付着
226	403-01	土師器	台付甕	N86	27号墳	SD79 №1	外面ハケメ（5本/cm） 内面ユビオサエ後ナデ	やや粗	良好	橙7.5YR6/6	6/12	
227	508-01	土師器	高杯？	H90	28号墳	SD73	磨滅のため不明	粗	良好	浅黄2.5YR/3	基部	
228	414-01	土師器	高杯	N92	30号墳	SD76	磨滅のため不明	密	—	明赤褐5YR5/8	（完存）	洗浄後線刻化
229	608-05	土師器	壺	Q96	31号墳	SD75	ヨコナデ	粗	良好	明赤褐5YR5/6	口縁部3/12	
230	402-02	須恵器	杯蓋	O93	31号墳	SD75	天井部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	やや密	良好	灰N5/	5/12	
231	402-03	山茶碗	碗	N93	31号墳	SD75	底部外面赤切り痕、杯部内面一方向ナデ	やや粗	良好	灰白2.5Y8/2	11/12	高台：短脚状 内面煤付
232	513-01	土師器	小型鉢	L100	32号墳	SD176下層	磨滅のため不明	やや粗	良好	明褐7.5YR5/6	10/12	
233	513-02	土師器	高杯	P97	32号墳	SD176上層	磨滅のため不明	やや粗	良好	橙5YR6/8	基部	
234	504-04	須恵器	杯蓋	M96	32号墳	SD176下層	天井部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	やや粗	良好	灰N5/	口縁部5/12	
235	504-03	須恵器	杯身	M96	32号墳	SD176下層	底部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	やや密	良好	灰N5/	完存	受け部下：ヘラ記号
236	504-06	須恵器	壺	M96	32号墳	SD176 黒土中	ヨコナデ	やや密	良好	灰白5.5Y7/1	底部小片	底部：ヘラ記号
237	504-05	須恵器	壺	L97	32号墳	SD176 黒土中	下半外面ケズリ 内面オサエ 他はロクロナデ	密	良好	灰白5Y7/1	体部2/3	頸部：突帯＋櫛描波状文
238	504-07	須恵器	甕	L98	32号墳	SD176 黒土中	外面粗い平行タタキ 内面ナデ	やや密	やや不良	にぶい黄2.5Y6/3	口縁部2/12	
239	509-05	土師器	高杯	5ハンチ	34号墳	SD175	磨滅のため不明	やや粗	良好	橙7.5YR7/6	脚部3/12	
240	514-02	土師器	高杯	H104	35号墳	SD177 黒層中	磨滅のため不明	粗	良好	橙7.5Y6/6	杯部	
241	510-01	土師器	高杯	H104	35号墳	SD177 黒色土	磨滅のため不明	やや密	良好	橙7.5YR7/6	脚部11/12	
242	510-02	土師器	壺	I103	35号墳	SD177 黒色中	ヨコナデ	密	良好	褐10YR4/1	口縁部6/12	赤色顔料付着
243	512-01	土師器	壺	H101 I103	35号墳	SD177 №1～3他	磨滅のため不明瞭 外面ハケメマ 内面板ナデ	密	良好	にぶい黄橙10YR7/4	1/6	赤色顔料付着
244	510-03	土師器	壺	I103	35号墳	SD177 黒土中	ヨコナデ	やや密	良好	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部1/12	赤色顔料付着
245	513-03	土師器	壺	I104	35号墳	SD177下層	磨滅のため不明瞭 内外面ナデ	やや粗	良好	浅黄2.5Y7/3	底部完存	
246	511-01	土師器	壺	H103	35号墳	SD177 №1～3他	磨滅のため不明瞭 内外面ハケメ	やや密	良好	明黄褐10YR7/6	5/12	体部下半：穿孔1
247	514-01	土師器	壺	F104	35号墳	SD177	ナデ	やや粗	良好	にぶい黄橙10YR7/4	底部6/12	
248	514-03	土師器	甕	E103	35号墳	SD177 下層	ナデ	やや粗	良好	にぶい黄橙10YR7/4	台部	
249	551-07	鉄製品	ヤリがんな 鞘	H103	35号墳	SD177 №4・5		—	—	—	切先欠損	
250	518-03	石製品	砥石？	I103	35号墳	SD177 黒土中		—	—	にぶい黄橙10YR6/4	小片	砂岩
251	504-01	須恵器	杯身	L109	42号墳	SD162	底部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	やや密	良好	灰7.5Y6/1	1/2	底部：ヘラ記号
252	504-02	須恵器	杯身	M111	44号墳	SD163 №1	底部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	やや粗	良好	灰白5Y7/1	4/5	
253	509-02	土師器	高杯	M114	45号墳	SD151	ヨコナデ	やや粗	良好	にぶい橙5YR6/4	脚部2/12	
254	509-03	土師器	小型壺	M114	45号墳	SD151	ヨコナデ	やや密	良好	橙7.5YR7/6	口縁部3/12	
255	508-05	土師器	甕・壺	L116	45号墳	SD151	オサエ・ナデ	やや粗	良好	橙7.5YR6/6	底部完存	

第12表　北山C遺跡・西山古墳群　出土遺物観察表（７／９）

報告番号	実測番号	種類	器種等	地区	遺構名	出土遺構 出土位置	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備　考
256	508-04	土師器	甕・壺	P114	45号墳	SD151	オサエ・ナデ	やや粗	良好	灰白 2.5Y8/2	底部5/12	
257	509-01	土師器	壺	N113	45号墳	SD151	ヨコナデ	やや粗	良好	明黄褐 10YR7/6	口縁部1/12	
258	507-02	土師器	甕	P115	45号墳	SD151	磨滅のため不明	やや粗	良好	明黄褐 10YR7/6	口縁部1/12	
259	507-04	土師器	壺	P115	45号墳	SD151	磨滅のため不明	やや粗	良好	浅黄橙 10YR8/4	口縁部2/12	
260	507-03	土師器	甕	L114	45号墳	SD151	体部外面オサエ・ナデ 他は磨滅のため不明	やや密	良好	橙 5YR6/6	口縁部1/12	
261	508-06	土師器	甕	O113	45号墳	SD151	磨滅のため不明瞭	やや粗	良好	明黄褐 10YR7/6	口縁部3/12	
262	507-01	土師器	甕	M117	45号墳	SD151	磨滅のため不明	やや粗	良好	にぶい黄橙 10YR7/6	口縁部1/12	
263	503-03	須恵器	杯蓋	P115	45号墳	SD151	天井部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	粗	良好	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部小片	図上復元
264	503-02	須恵器	壺	L116	45号墳	SD151	ロクロナデ	密	良好	灰 5Y6/1	体上部2/12	刻部：沈線1条
265	503-01	須恵器	提瓶	P115	45号墳	SD151	外面平行タタキ 内面オサエ 他はロクロナデ	やや密	良好	灰 5Y5/1	4/5	
266	501-01	須恵器	甕	O113 P114	45号墳	SD151	外面細い平行タキ	密	良好	暗灰 N3/	口縁部1/12 頸～底部3/12	頸部：突帯3＋櫛描波状文2
267	502-01	須恵器	壺	M113 N114	45号墳	SD151 No.1～5	外面平行タタキ後丁寧なナデ、内面当具痕ナデ消し	密	良好	オリーブ黒 5Y3/1	11/12	頸部：突帯＋櫛描波状文 刻部：沈線＋櫛描波状文
268	502-02	須恵器	壺	P115 P116	45号墳	SD151 第1層	外面平行タタキ 内面当具痕ナデ消し	やや密	良好	灰黄 2.5Y7/2	11/12	調査時第7層 一括SD出第4層
269	516-04	石製品	紡石	M114	45号墳	SD151		—	—	にぶい黄 2.5Y6/3	小片	砂岩 粒度：#330細目
270	602-03	土師器	椀	R55	46号墳	SD301	磨滅のため不明瞭 オサエ・ナデ	やや密	良好	明赤褐 5YR5/8	口縁部5/12	
271	603-01	土師器	甕	Q53	46号墳	SD301	内面ハケメ（7本/cm） 外面粗いハケ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部3/12	
272	603-02	土師器	甕	Q54	46号墳	SD301	ハケメ（内外4本/cm）	やや粗	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/12	
273	604-01	土師器	甕	Q54	46号墳	SD301	ハケメ（内外4本/cm） 底部内面ケズリ	やや粗	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部4/12	
274	602-02	土師器	把手	Q54	46号墳	SD301	オサエ・ナデ	やや密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	把手	
275	601-01	須恵器	杯蓋	Q55	46号墳	SD301 No.1	天井部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	やや密	良好	灰白 5Y7/1	口径完存	
276	601-03	須恵器	杯蓋	Q55	46号墳	SD301	天井部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	やや粗	良好	褐灰 10YR5/1	10/12	天井部：自然釉灰
277	601-05	須恵器	杯蓋	Q55	46号墳	SD301	天井部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	やや粗	良好	褐灰 10YR6/1	稜部3/12	天井部：自然釉灰
278	602-01	須恵器	杯蓋	Q55	46号墳	SD301	天井部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	やや粗	良好	灰 5Y6/1	受部3/12	
279	601-02	須恵器	杯身	Q55	46号墳	SD301 No.2-3	底部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	やや密	良好	黄灰 2.5Y6/1	11/12	底部：ヘラ記号?
280	601-04	須恵器	杯身	Q55	46号墳	SD301 No.2	底部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	やや密	良好	灰白 5Y7/1	口縁部1/12	
281	601-07	須恵器	杯身	Q55	46号墳	SD301	底部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	やや粗	良好	灰 N4/	稜部5/12	
282	601-06	須恵器	杯蓋	Q54 O57	46号墳	SD301 SD67上層	天井部外面ヘラオコシ 内面ナデ 他はロクロナデ	やや粗	良好	灰白 7.5Y7/1	7/12	
283	606-03	土師器	椀	P70	47号墳	SD304	磨滅のため不明瞭 底部外面ケズリ	密	良好	明赤褐 5YR5/6	2/3	
284	607-01	須恵器	壺	P69 P70	47号墳	SD304	外面平行タタキ 内面細同心円文当具痕	やや密	良好	灰 N4/	7/12	外面：ナデ消し痕 頸部：突帯3＋櫛描波状文3
285	606-02	須恵器	壺	Q71	47号墳	SD304	外面は平行タタキ 内面は細同心円文当具痕 ＋ナデ＋工具痕	密	良好	黒褐 10YR3/1	体部片	
286	606-01	須恵器	壺	Q71 s-7	47号墳	SD304	外面は平行タタキ 内面は細同心円文当具痕	密	良好	黄灰2.5Y6/1 黒褐2.5Y3/1	体部片	
287	608-03	須恵器	杯蓋	Q74	48号墳	SD306	天井部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	やや粗	良好	灰 N6/	口縁部3/12	
288	608-01	須恵器	杯蓋	Q74	48号墳	SD306	天井部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	やや密	良好	褐灰黄 2.5Y5/2	天上部1/2	SD307付上品と接合 尾張産
289	608-02	須恵器	杯身	P74	48号墳	SD306	底部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	密	良好	黄灰 2.5Y4/1	天上部3/4	内面：自然釉灰 尾張産
290	608-04	土師器	壺 蓋?	U116	55号墳	SD317	ロクロナデ	密	やや不良	にぶい黄橙 10YR6/4	口縁部1/12	頸部：突帯＋櫛描波状文
291	413-01	鉄製品	刀子	H63	SK92	SK92 No.4		—	—	—	完存	柄部：本質残存
292	413-03	鉄製品	刀	H63	SK92	SK92 No.7		—	—	—	刃部完存	本質残存
293	412-01	鉄製品	鎌	H63	SK92	SK92 No.1		—	—	—	完存	直刃鎌
294	412-03	鉄製品	鎌	H63	SK92	SK92 No.2-3		—	—	—	完存	茎（295）と融着 曲刃鎌
295	412-02	鉄製品	斧	H63	SK92	SK92 No.2-3	鍛造	—	—	—	完存	鎌（294）と融着
296	413-02	鉄製品	剣	H63	SK92	SK92 No.5-6・7		—	—	—	切先欠損	鞘本質残存 柄部有機質付着
297	413-04	鉄製品	剣	H63	SK92	SK92 No.6		—	—	—	欠損あり	本質残存

第13表　北山Ｃ遺跡・西山古墳群　出土遺物観察表（８／９）

報告番号	実測番号	種類	器種等	地区	遺構名	出土遺構 出土位置	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備　考
298	413-05	鉄製品	剣	H63	SK92	SK92 No6-7付近		—	—	—	欠損あり	297と同一個体
299	413-06	鉄製品	刀装具？	H63	SK92	SK92 棺内南		—	—	—	小片	布機質残存 柄金具？
300	413-07	鉄製品	刀装具？	H63	SK92	SK92 棺内南		—	—	—	小片	鳥金具？
301	551-01	鉄製品	鎌？	R114	SK152	SK152 No1		—	—	—	完存	柄部：木質残存
302	551-03	鉄製品	鉄鏃	R115	SK154	SK154 No2		—	—	—	小片	
303	551-02	鉄製品	鉄鏃	R115	SK154	SK154 No1		—	—	—	茎部欠損	
304	551-04	鉄製品	刀子	P109	SK159	SK159 No1		—	—	—	完存	柄部：木質残存
305	551-05	鉄製品	鉄鏃	P109	SK159	SK159 No3		—	—	—	刃部のみ	茎部付近：木質残存 （樹皮ルの表品？）
306	519-01	石製品	紡石	P109	SK159	SK159 No2	穿孔 1	—	—	灰 5/	完存	砂岩 粒度：＃1000研磨目
307	551-06	鉄製品	鞍（ちがいし）	C106	SK174	SK174		—	—	—	小片	木質はない 柄巻痕跡が錆膨として残る
308	552-07	鉄製品	刀子	G74	SK202	SK202 No1		—	—	—	完存	茎部：木質残存
309	517-01	石製品	紡石	K101	SK185	SK185 No7		—	—	黄橙 10YR8/6	—	流紋岩 粒度：＃1000研磨目
310	516-02	石製品	紡石	K101	SK185	SK185 No3		—	—	黄橙 10YR8/6	—	流紋岩 粒度：＃1000研磨目
311	518-01	石製品	紡石	K101	SK185	SK185 No6		—	—	灰 N5/	—	砂岩？ 粒度：＃1000研磨目
312	517-02	石製品	紡石	K101	SK185	SK185 No5		—	—	灰 7.5Y5/1	—	砂岩 粒度：＃1000研磨目
313	518-02	石製品	紡石	K101	SK185	SK185 No18		—	—	明褐 7.5YR5/6	破損	凝灰質泥岩 粒度：＃1000研磨目
314	516-01	石製品	叩き石	K101	SK185	SK185 No4	金属付着	—	—	灰白 5Y7/1	完存	ホルンフェルス
315	519-03	石製品	勾玉	L102	SK185	SK185 No1	両側穿孔	—	—	青灰 5B5/1	完存	
316	519-04	石製品	勾玉	K102	SK185	SK185 No2	両側穿孔	—	—	青灰 10BG3/1	完存	
317	519-05	石製品	臼玉	K101	SK185	SK185 北棺内北東		—	—	オリーブ灰 5GY6/1	完存	
318	519-06	石製品	臼玉	K101	SK185	SK185 北棺内北東		—	—	緑灰 10G6/1	完存	
319	519-07	石製品	臼玉	K102	SK185	SK185 北棺内南東		—	—	明緑灰 10G7/1	完存	
320	519-08	石製品	臼玉	K101	SK185	SK185 南棺内北東		—	—	緑灰 10G6/1	完存	
321	519-09	石製品	臼玉	K102	SK185	SK185 南棺内南東		—	—	明緑灰 10GY7/1	完存	
322	519-10	石製品	臼玉	K101	SK185	SK185 堀形北東		—	—	明青灰 10BG7/1	完存	
323	519-11	石製品	臼玉	K101	SK185	SK185 堀形北東		—	—	青灰 5BG6/1	完存	
324	519-12	石製品	臼玉	K101	SK185	SK185 堀形北東		—	—	緑灰 10G6/1	完存	
325	519-13	石製品	臼玉	K101	SK185	SK185 堀形北東		—	—	緑灰 10G6/1	完存	
326	519-14	石製品	臼玉	K101	SK185	SK185 堀形北東		—	—	青灰 5BG6/1	完存	
327	519-15	石製品	臼玉	K101	SK185	SK185 堀形北東		—	—	青灰 5BG6/1	完存	
328	519-16	石製品	臼玉	K102	SK185	SK185 堀形南東		—	—	明緑灰 10GY7/1	完存	
329	552-01	鉄製品	鉄鏃	K101	SK185	SK185 No9	有頭鏃	—	—	—	頭部完存	
330	552-04	鉄製品	鉄鏃	K101	SK185	SK185 No13	有頭鏃	—	—	—	完存	茎部：木質残存
331	552-03	鉄製品	鉄鏃	K101	SK185	SK185 No13		—	—	—	完存	
332	552-06	鉄製品	鉄鏃	K101	SK185	SK185 No16-17		—	—	—	完存	茎部：木質残存、樹皮巻
333	551-09	鉄製品	鉄鏃	K101	SK185	SK185 No14	有頭鏃	—	—	—	切先・茎部欠損	
334	552-05	鉄製品	鉄鏃	K101	SK185	SK185 No15		—	—	—	欠損あり	
335	551-10	鉄製品	鉄鏃	K101	SK185	SK185 No14		—	—	—	茎部片	樹皮巻
336	552-09	鉄製品	鉄鏃？	K101	SK185	SK185 No20		—	—	—	小片	木質残存
337	552-08	鉄製品	鉄鏃	K101	SK185	SK185 No10		—	—	—	茎部のみ	
338	551-08	鉄製品	鑿（ちのみ）	K101	SK185	SK185 No8		—	—	—	完存？	
339	552-02	鉄製品	鑿（ちのみ）？	K101	SK185	SK185 No12		—	—	—	先欠相	
340	029-05	須恵器	杯	H12	SK2	SK2	底部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	密	良好	灰白 7.5Y7/1	受部1/6残	ロクロ右回転
341	009-02	土師器	鉢	I55	SK57	SK57	底部外面未調整 他は簡単なナデ	粗	良好	浅黄橙 7.5YR8/4	口縁部1/2欠相	全体的に雑な仕上げ

第14表　北山C遺跡・西山古墳群　出土遺物観察表（9／9）

報告番号	実測番号	種類	器種等	地区	遺構名	出土遺構 出土位置	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備　考
342	030-01	土師器	甕	M27	SD3	SD3 No.1	ハケメ	粗	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/6残	
343	030-02	土師器	甕	M27	SD3	SD3 No.1	ハケメ	粗	良好	明黄褐 10YR7/6	口縁部 1/12残	
344	032-02	須恵器	壺	G15	SD11	SD11	天井部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	密	良好	灰白 2.5Y7/1	天井部1/6残	ロクロ左回転
345	031-03	須恵器	提瓶	G15	SD11	SD11	ロクロナデ	密	良好	青灰 5B5/1	口縁部1/6残	胴部：沈線
346	032-01	須恵器	杯蓋	P29	SD18	SD18	杯部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	密	良好	灰白 7.5Y7/1	口縁部1/4残	ロクロ右回転
347	024-01	須恵器	高杯	O53	SD51	SD51 No.1	杯部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	やや密	良好	灰白 N7/	脚部1/2欠損	透孔3方
348	022-03	土師器	鉢	J57	SH59	SH59 竈	外面ハケメ（10本/1cm） 内面ナデ	密	良	黄橙 7.5YR6/8	口縁部1/5	口縁端部外面：沈線 内面：黒斑状
349	022-04	土師器	鉢	J57	SH59	SH59 竈	外面ハケメ 煤跡のため調整不明瞭	密	良好	橙 7.5YR7/6	口縁部1/6	
350	022-02	土師器	甕	J57	SH59	SH59	外面ハケメ	密	良好	明黄褐 10YR7/6	口縁部1/4	口縁外面：一部黒斑
351	022-05	土師器	甕	J57	SH59	SH59 No.4・5・7	底部外面ヘラケズリ 底部内面ナデ	やや密	良好	にぶい橙 7.5YR7/3	底部完存	
352	023-01	土師器	甕	J57	SH59	SH59 No.7	ハケメ（8本/1cm）	密	良好	明黄橙 10YR7/6	体部1/8	
353	025-03	土師器	杯	I 58	SH60	SH60 No.1	底部外面ヘラケズリ 内面ナデ	密	良好	橙 5YR6/8	底部3/4 口縁部1/3	口縁部外面：凹線
354	025-01	土師器	甕	H59	SH60	SH60 竈	煤跡のため不明	やや粗	良好	橙 2.5YR6/8	底部完存 口縁部3/4	
355	025-02	土師器	甕	I 59	SH60	SH60	体部外面下半ヘラケズリ 内面ナデ 他はハケメ（5本/1cm）	やや密	良好	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部1/12	
356	025-04	土師器	甕	I 58	SH60	SH60	ハケメ（5本/1cm）	密	良好	にぶい橙 7.5YR7/4	頸部1/8 口縁部小片	
357	025-05	土師器	杯身	H58	SH60	SH60	底部外面未調整 他はロクロナデ	密	良好	灰 N4/	受部1/8 口縁部小片	
358	301-03	土師器	甕	I.55	SH66	SH66	煤跡のため不明	やや密	良好	橙 7.5YR6/6	口縁部1/12	
359	313-03	須恵器	杯身	N56	—	SK69	底部外面ヘラオコシ 他はロクロナデ	密	良好	灰白 5Y7/1	1/6	109に接合して収蔵
360	402-01	須恵器	杯	L88	SK74	SK74	底部外面板状圧痕、 他はロクロナデ	やや密	良好	オリーブ灰 5GY5/1	底部完存	
361	605-01	土師器	甕	P55	SK302	SK302 第1・2層	内外面ハケメ	粗	良好	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部4/12	
362	605-04	土師器	把手	P55	SK302	SK302 第1・2層	体部は内面ヨコナデ 外面ケズリ 把手部はオサエ・ナデ	粗	良好	にぶい橙 7.5YR7/4	把手のみ	
363	605-02	須恵器	杯身	P55	SK302	SK302 第1・2層	底部外面ヘラオコシ 内面ナデ、 他はロクロナデ	やや密	良好	灰白 7.5Y7/1	1/4	
364	605-03	須恵器	蓋	P55	SK302	SK302	底部外面ケズリ、 他はロクロナデ	やや密	良好	灰 5Y6/1	1/4	胴部：沈線1条
365	515-01	土師器	甕	K99	—	包含層 盛土	ナデ	やや密	良好	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部1/12	32号墳の94号墳の周溝上
366	509-04	土師器	高杯	L109	—	包含層	煤跡のため不明	やや粗	良好	橙 7.5YR7/6	脚柱部	
367	410-01	須恵器	杯身	O84	—	表土	底部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	やや密	良好	灰 7.5Y4/1	受部2/12	
368	505-04	須恵器	杯身	東区	—	表土	底部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	密	良好	灰 N4/	受部3/12	367と同一個体か
369	032-04	須恵器	杯身			包含層	底部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	粗	良好	灰白 10Y7/1	口縁部1/4残	ロクロ左回転
370	032-05	須恵器	杯身	K17		包含層	底部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	粗	良好	灰白 10Y7/1	口縁部小片 受部1/4残	ロクロ左回転
371	032-06	須恵器	杯身	O8		包含層	底部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	密	良好	灰白 10Y7/1	口縁部小片 受部1/8残	ロクロ右回転
372	032-03	須恵器	高杯	G22		包含層	杯外下半ロクロケズリ 他はロクロナデ	密	良好	青灰 5B6/1	口縁部小片 杯底部完存	波状文 透孔3方
373	505-03	須恵器	蓋?	北東部	—	表採	ロクロナデ	やや密	良好	黄灰 2.5Y4/	口縁部1/12	口縁部：櫛描波状文
374	505-02	須恵器	蓋?	—	—	表採	底部内面ナデ、内面オサエ	密	良好	灰黄 2.5Y6/2	蓋一体部1/3	頸部：櫛描波状文 胴部：沈線＋櫛描波状文
375	410-04	須恵器	甕	L64	—	表土	ロクロナデ	やや粗	良好	灰 7.5Y5/1	口縁部1/12	頸部：突帯＋櫛描波状文
376	031-02	須恵器	甕	西端		表採	ロクロナデ	密	良好	青灰 5B5/1	口縁部1/8	
377	410-03	須恵器	甕	H8	—	表土	外面格子タタキ 内面無文当具痕	やや密	やや不良	灰 7.5Y5/1	体部小片	
378	409-03	土製品	土錘	—	—	表土		密	良好	にぶい橙 7.5YR7/4	完存	
379	552-13	鉄製品	不明	R106	—	攪乱溝		—	—	—	小片	刀装具の一部？
380	552-12	鉄製品	板状鉄製品	R106	—	攪乱溝		—	—	—	小片	

※紙石の粒度は、JIS研磨剤の規格に準拠するサンドペーパーと比較して示している。

Ⅴ　自然科学分析

1　分析の目的

第５次調査で検出した３基の円形土坑ＳＫ182・186・192には共通した特徴が認められた。直径1.3ｍ×深さ0.9ｍ前後で、断面逆台形を呈し、底部中央にはいずれも小穴（直径15～25㎝×深さ15～40㎝）が１つ見られた。埋土は自然堆積の特徴があり、下半は黄褐色系の地山類似土である。

ＳＫ192は西山35号墳の周溝内側で検出された。周溝とは重複していないため新旧関係は不明であるが、深さからみて、古墳盛土が無い時期、つまり古墳造営以前もしくは削平後のものと考えられた。出土遺物がないため時期を確定することはできないが、形状から縄文時代の陥し穴状遺構と想定した。

これらの土坑の用途・時期を明らかにするために、埋土を採取し分析を行った。陥し穴状遺構以外の用途も想定し、墳墓についてはリン・カルシウム分析で遺体埋納の可能性を、食料等の貯蔵穴については植物遺体・樹種同定で植物・木材利用と古植生を検討した。そして、時期を確認するために放射性炭素年代測定を行った。　（山中）

2　分析

パリノ・サーヴェイ株式会社
高橋敦　田中義文　芝口怜

（１）調査遺構

今回の分析調査では、３基の円形土坑のうち、ＳＫ182とＳＫ186の２基について分析調査を実施する。試料採取位置を第121図に示す。各土坑の充填堆積物は、調査時の断面写真をみると、現生植物および遺構埋没後に形成された根成孔隙によって、著しく乱れているものの、堆積物中に混じる炭片の分布状況などから、土坑壁斜面上部側から土坑内にかけて堆積斜面を形成しながら堆積物が累重しているようにみえる。また、明瞭な葉理・層理構造が存在しないことから、土坑周囲からの崩積やクリープなどの重力性の堆積物と推定される。また、これら充填堆積物中下部には、明瞭な土壌生成が進行している層準が確認されないことから、比較的短期間に埋没している可能性もある。なお、ＳＫ182の遺構底の基盤層との層界付近は基盤層のブロック土が確認されるが、これは掘削期の加工痕跡の可能性がある。

（２）放射性炭素年代測定

２－１　試料

年代測定試料は、ＳＫ182の第９層（C-1）、第６層（C-2）の炭化材片２点と、ＳＫ186の第４層から出土した炭質物２点(C-1, C-2)の合計４点である。ＳＫ182のC-1・C-2は炭化材の小片、ＳＫ186の試料は組織構造が認められない炭化物である。

２－２　分析方法

試料中の土壌や根などをメスやピンセットを用いて取り除いた後、HClによる炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOHによる腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、１gの酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（２時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO_2を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO_2と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径１㎜の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。

測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に^{13}C/^{12}Cの測定も行うため、この値を用いてδ^{13}Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1,950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma:68%）

に相当する年代である。暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1.0.（Copyright 1986-2014 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5,730±40年）を較正することである。暦年較正は、CALIB 7.1.0.のマニュアルにしたがい、１年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値および北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。

暦年較正結果はσ・2σ（σは統計的に真の値が68.2%の確率で存在する範囲、2σは真の値が95.4%の確率で存在する範囲）の値を示す。また、表中の相対比は、σ・2σの範囲をそれぞれ１とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。なお、較正された暦年代は、将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、１年単位で表された値も併記する。

２－３　結果

放射性炭素年代測定および暦年較正結果を第15表、第122図に示す。各遺構別に結果について記載する。

ＳＫ182

炭化材および炭化物の同位体効果による補正を行った測定結果（補正年代）および、補正年代に基づく暦年較正結果（2σ確立1位の値）は、第９層の炭化材（C-1）が2990±30BP、cal BP 3238-3072、第６層の炭化材（C-2）が3130±30BP、cal BP 3405-3322を示す。

ＳＫ186

第４層の炭質物の同位体効果による補正を行った測定結果（補正年代）および暦年較正結果（2σ確立１位の値）は、C-1が3180±30BP、cal BP 3449-3363、C-2が3160±30BP、cal BP 3449-3342を示す。このように分析を行った２試料はほぼ一致する年代値を示した。

２－４　考察

今回得られた年代値は、谷口（2001）、工藤（2012）、西本編（2006・2007）などの考古相対年代と^{14}C年代の比較を参考にすると、ＳＫ182の第９層（C-1）が縄文時代晩期初頭、第３層（C-2）が縄文時代後期後葉、ＳＫ186の第４層（C-1・C-2）が縄文時代後期後葉を示している。このように得られた年代値は、縄文時代後期後葉から晩期初頭の年代値を示しており、円形土坑の埋没がそのころに進行したことを示唆している。なお、ＳＫ182の年代値は層位的に逆転しているが、これは古木効果による影響や、土坑埋土の層相を踏まえると、上位層準からの落ち込みに起因する可能性が考えられる。この点については発掘調査成果を踏まえた評価が必要である。

（３）リン・カルシウム分析

３－１　試料

試料は、ＳＫ182の土壌試料４点（９層；№1、３層；№2、北検出面；№3、南検出面；№4）と、ＳＫ186の土壌試料４点（４層；№1、３層；№2、北検出面；№3、南検出面；№4）の合計８点である（第121図）。このうち、各遺構の北検出面および南検出面の土壌試料は、比較対照試料である。

３－２　分析方法

リン酸含量は硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法、カルシウム含量は硝酸・過塩素酸分解－原子吸光法（土壌標準分析・測定法委員会，1986）に従った。以下に各項目の操作工程を示す。

分析試料の調製

試料を風乾後、土塊を軽く崩して２mmの篩で篩い分ける。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉砕し、0.5mm篩を全通させ、粉砕土試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で４時間乾燥し、分析試料水分を求める。

リン酸・カルシウム含量の測定

粉砕土試料1.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸（HNO_3）約10mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（$HClO_4$）約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容し、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P_2O_5）濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。これ

ら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P_2O_5mg/g）とカルシウム含量（CaOmg/g）を求める。

3－3　結果

リン・カルシウム分析結果を第16表に示す。野外土性（ペドロジー学会編、1997）は、全試料でCL（埴壌土）～LiC（軽埴土）とやや粘質な土壌である。土色は、10YR4/3にぶい黄褐色から7.5YR4/6褐色と全体的に黒色味に欠ける。リン酸含量は全試料で1.00mg/g未満と少ない。カルシウム含量はＳＫ182の南検出面試料№4で1.00mg/gを超えたものの、他の試料では1.00mg/g未満と少ない含量であった。各遺構ともに、比較対照試料と同等またはそれ以下のリン酸・カルシウムの保持量である。

3－4　考察

リンは生物にとって主要な構成元素であり、動植物中に普遍的に含まれる元素であるが、特に人や動物の骨や歯には多量に含まれている。生物体内に蓄積されたリンはやがて土壌中に還元され、土壌有機物や土壌中の鉄やアルミニウムと難溶性の化合物を形成することがある。特に活性アルミニウムの多い火山灰土では、非火山性の土壌や沖積低地堆積物などに比べればリン酸の固定力が高いため、火山灰土に立地した遺跡での生物起源残留物の痕跡確認にリン酸含量は有効なことがある。

土壌中に普通に含まれるリン酸含量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例があるが（Bowen,1983;Bolt･Bruggenwert,1980;川崎ほか,1991;天野ほか,1991）、これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約3.0mg/g程度である。また、人為的な影響（化学肥料の施用など）を受けた黒ボク土の既耕地では5.5mg/g（川崎ほか,1991）という報告例があり、当社におけるこれまでの分析調査事例では骨片などの痕跡が認められる土壌では6.0mg/gを越える場合が多い。一方、カルシウムの天然賦存量は普通1～50mg/g（藤貫,1979）といわれ、含量幅がリン酸よりも大きい傾向にある。これは、リン酸に比べると土壌中に固定され難い性質による。これら天然賦存量は、遺体の痕跡を明確に判断できる目安として重要ではあるが、天然賦存量以下だからといって遺体埋納を全て否定するものではない。遺体が土壌中で分解した後、その成分が時間経過とともに徐々に系外へと流亡し、その結果含量が天然賦存量の範囲となってしまうことも考えられるからである。

今回の分析調査では、リン酸およびカルシウムの天然賦存量を考慮すると、リン酸の天然賦存量である3.0mg/g、カルシウムの賦存量である50mg/gを超える試料は認められない。また、各遺構の埋土試料が比較対照試料と同等またはそれ以下の含量であったことから遺体が埋納されていたとは考えにくく、土壌墓とは異なる用途が推定される。

（4）植物遺体同定

4－1　試料

試料は、ＳＫ182の第９層から採取された土壌試料１点で、リン・カルシウム分析と同じ堆積物試料を用いる。

4－2　分析方法

試料中の炭化物はいずれも微細であり、土壌を水洗すると流亡する恐れがあることから、自然乾燥させた後、土塊を手で割って細かくする。実体顕微鏡で観察しながら炭化物を抽出・同定する。

4－3　結果

植物遺体同定結果を第17表に示す。土壌試料中から、40片（0.2g）の炭化物が抽出された。全て炭化材であり、種実遺体は認められない。このうち、組織が観察できた炭化材20片は、いずれも広葉樹のクリに同定された。詳細については、次節で詳述する。

（5）炭化材の樹種

5－1　試料

試料は、ＳＫ182の第９層から出土した炭化材１点と、上記の植物遺体同定で抽出された炭化材片40片である。この他、ＳＫ182の第６層からも炭化材が採取されており、併せて同定を実施する。

5－2　分析方法

炭化材を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)

やWheeler他(1998)を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林(1991)や伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)を参考にする。

5－3　結果

樹種同定結果を第18表に示す。土壌試料中から、40片(0.2g)の炭化材のうち、組織が観察できた炭化材20片は、いずれも広葉樹のクリに同定された。また、第9層から出土した炭化材1点、第3層出土炭化材1点も、いずれもクリに同定された。クリの解剖学的特徴等を記す。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は3-4列、孔圏外で急激に径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

5－4　考察

ＳＫ182の第9層および第3層から検出された炭化材と植物遺体同定で抽出した微細な炭化材片は、いずれもクリに同定された。これらクリ炭化材は、埋土の層相を踏まえると、周辺から堆積物とともに取り込まれたものと推定される。クリは二次林などに生育する落葉高木であり、木材は重硬で強度・耐朽性が高い。また、果実は、生食可能であり、縄文時代には重要な植物食糧の一つであったと考えられている。ここでのクリ炭化材が、人間活動に伴うものかは判断できないが、当該期に周辺にクリが生育していたことが推定される。

伊東・山田(2012)のデータベースによれば、三重県内で縄文時代後期～晩期の木材・炭化材について樹種を明らかにした例は少なく、上箕田遺跡から出土した自然木がエノキ属、金森遺跡から出土し、年代測定に用いられた用途不明の炭化材がアカガシ亜属とツバキ属に同定されている。そのため、縄文時代後期～晩期の器種・用途別の木材利用や古植生とその地域性については、さらに県内で多くの事例を蓄積することが必要である。

【引用文献】

天野洋司・太田　健・草場　敬・中井　信,1991,中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量.農林水産省農林水産技術会議事務局編　土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発,28-36.

Bolt,G.H.・Bruggenwert,M.G.M,1980,土壌の化学.岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽　捷行訳,学会出版センター,309p.

Bowen,H.J.M.,1983,環境無機化学-元素の循環と生化学-.浅見輝男・茅野充男訳,博友社,297p.

土壌標準分析・測定法委員会編,1986,土壌標準分析・測定法.博友社,354p.

藤貫　正,1979,カルシウム.地質調査所化学分析法,52,57-61.

林　昭三,1991,日本産木材　顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.

伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.

伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.

伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.

伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.

伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.

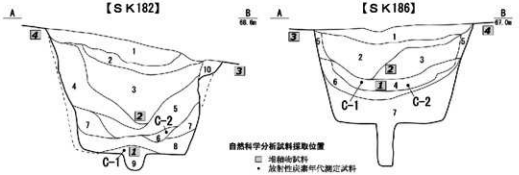
川崎　弘・吉田　溥・井上恒久,1991,九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量.農林水産省　農林水産技術会議事務局編　土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発,23-27.

農林省農林水産技術会議事務局監修,1967,新版標準土色帖.

ペドロジー学会編,1997,土壌調査ハンドブック改訂版.博友社,169p.

島地　謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998,広葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修),海青社,122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*］.

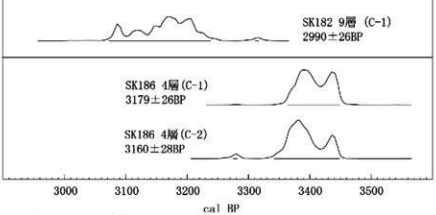


第121図　試料採取位置

第15表　放射性炭素年代測定結果

地区 遺構	種類	処理 方法	測定年代 BP	δ13C (‰)	補正年代 (暦年較正用) BP	暦年較正結果					Code No.
						誤差	cal BC/AD	cal BP	相対比		
SK182 C-1	炭化材	AAA	3,010±20	-26.19 ± 0.63	2,990±30 (2,990±26)	σ	cal BC 1,265 - cal BC 1,192 cal BC 1,143 - cal BC 1,132	cal BP 3,214 - 3,141 cal BP 3,092 - 3,081	0.898 0.102		IAAA- 141622
						2σ	cal BC 1,368 - cal BC 1,362 cal BC 1,289 - cal BC 1,123	cal BP 3,317 - 3,311 cal BP 3,238 - 3,072	0.010 0.990		
SK182 C-2	炭化材	AAA	3,150±30	-26.11 ± 0.73	3,130±30 (3,131±28)	σ	cal BC 1,437 - cal BC 1,390 cal BC 1,336 - cal BC 1,323	cal BP 3,386 - 3,339 cal BP 3,285 - 3,272	0.834 0.166		IAAA- 141623
						2σ	cal BC 1,493 - cal BC 1,479 cal BC 1,456 - cal BC 1,373 cal BC 1,356 - cal BC 1,302	cal BP 3,442 - 3,428 cal BP 3,405 - 3,322 cal BP 3,305 - 3,251	0.028 0.729 0.243		
SK186 C-1	炭質物	AAA	3,210±20	-26.71 ± 0.63	3,180±30 (3,179±26)	σ	cal BC 1,495 - cal BC 1,476 cal BC 1,459 - cal BC 1,428	cal BP 3,444 - 3,425 cal BP 3,408 - 3,377	0.359 0.641		IAAA- 141624
						2σ	cal BC 1,500 - cal BC 1,414	cal BP 3,449 - 3,363	1.000		
SK186 C-2	炭質物	AaA	3,130±20	-23.02 ± 0.74	3,160±30 (3,160±28)	σ	cal BC 1,492 - cal BC 1,481 cal BC 1,454 - cal BC 1,412	cal BP 3,441 - 3,430 cal BP 3,403 - 3,361	0.153 0.847		IAAA- 141625
						2σ	cal BC 1,500 - cal BC 1,393 cal BC 1,333 - cal BC 1,326	cal BP 3,449 - 3,342 cal BP 3,282 - 3,275	0.986 0.014		

1)処理方法のAAAは、酸処理－アルカリ処理－酸処理を示す。アルカリ濃度が1M未満の場合はAaAと表記している。
2)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
3)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
4)付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。
5)暦年の計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1 (Copyright 1986-2014 M Stuiver and PJ Reimer) を使用した。
6)暦年の計算には、補正年代に()で暦年較正用年代として示した。一桁目を丸める前の値を使用している。
7)年代値は、1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、暦年較正用年代値は1桁目を丸めていない。
8)統計的に真の値が入る確率はσは68.3%、2σは95.4%である。
9)相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。



第122図　暦年較正結果（２σ）

第16表　リン・カルシウム分析結果

遺構	番号	層位	土色		土性	全リン酸 P_2O_5 (mg/g)	全カルシウム CaO (mg/g)	備考
SK182	№1	第9層	7.5YR3/4	暗褐	LiC	0.48	0.62	試料№1
	№2	第3層	7.5YR3/4	暗褐	LiC	0.44	0.61	試料№2
	№3	北検出面	7.5YR4/6	褐	LiC	0.64	0.36	試料№3
	№4	南検出面	7.5YR4/6	褐	LiC	0.80	1.11	試料№4
SK186	№1	第4層	10YR4/3	にぶい黄褐	CL	0.45	0.48	試料№7
	№2	第3層	10YR4/3	にぶい黄褐	CL	0.52	0.04	試料№8
	№3	西検出面	7.5YR4/6	褐	LiC	0.62	0.57	試料№9
	№4	東検出面	7.5YR4/6	褐	LiC	0.53	0.03	試料№10

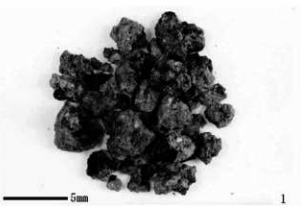
1）土性：土壌調査ハンドブック改訂版（ペドロジー学会編，1997）の野外土性による。
CL・・・埴壌土（粘土15～25%、シルト20～45%、砂3～65%）
LiC・・・軽埴土（粘土25～45%、シルト0～45%、砂10～55%）
2）土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。

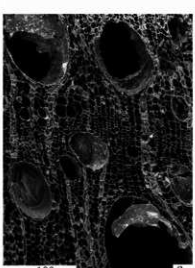
第17表　植物遺体同定結果

遺構	番号	層位	試料状態	抽出植物遺体の状態	種類	点数
SK182	№1	第9層	堆積物	炭化材 40片(0.2g)	クリ	20
					不明	20

第18表　樹種同定結果

遺構	番号	層位	試料状態	状態	種類	点数
SK182	№1	第9層	炭化材	炭化材	クリ	1
	№2	第3層	炭化材	炭化材	クリ	1





1.植物遺体同定で抽出された炭化材片(SK182;№1)
2.クリ(SK182;№1)　a:木口,b:柾目,c:板目

第123図　植物遺体・炭化材

Ⅵ　結語

1　調査のまとめ（第125図）

今回の北山Ｃ遺跡の調査では、縄文時代から飛鳥時代までの遺構と、弥生時代から中世までの遺物を確認することができた。なかでも、全く想定されていなかった55基もの古墳（西山古墳群）が発見されたことは大きな成果と言える。

以下、調査で確認された遺構・遺物について、時代ごとにみていきたい。

a　縄文時代

丘陵上の平坦面東部（第５・６次調査区）で土坑５基（ＳＫ182・186・192・318・319）を確認した。遺物はないが、規模・形状・埋土の特徴と、ＳＫ182・192出土炭化物の放射性炭素年代測定結果（「Ｖ自然科学分析」参照）から、縄文時代後期後葉～晩期初頭の陥し穴と推定できた。

円筒もしくはバケツ状を呈し、底面中央に小穴１個を有する共通した形態的特徴の陥し穴は、北勢地域でも散見される。近年の調査では、伊坂遺跡で４基[2]、小牧南遺跡で３基[2]、釜垣内遺跡で４基以上[2]、鈴山遺跡で９基[3]が確認された。遺物の出土は稀なため、時期を絞り込めるものは少ないが、鈴山遺跡の陥し穴は出土遺物から縄文時代中期後葉とされている。

b　弥生時代

第２次調査西区で終末期の土坑１基（ＳＫ６）を確認した。弥生時代の遺構・遺物は、過去に丘陵南斜面で行われた調査[2]で少なからず確認されているものの、概して終末期の生活痕跡は著しく希薄である。

c　古墳時代

丘陵上の平坦面で、古墳55基、木棺墓などの墓壙20基、竪穴建物１棟、土坑を確認した。

古墳には、円墳（８基）と方墳（47基）があり、丘陵上平坦面に設けた第２～６次調査区のほぼ全域に分布するが、木棺墓などはその北東部（第５次調査区）に集中する。古墳と木棺墓は平面的に重複しない。

木棺墓などの墓壙とした20基には、木棺痕跡が確認されたもの（ＳＫ92・174など）のほかに、木棺痕跡は確認できなかったものの規模・形状から木棺墓と考えられるもの（ＳＫ64・170など）、木棺墓ではない墓と考えられるもの（ＳＫ200）がある。

古墳の墳丘は削平され、大半は周溝を残すのみであったが、11・16・24号墳では主体部を１基ずつ、45・53号墳でもその可能性のある土坑を１基ずつ確認した。墳丘側から転がり落ちたとみられる礫が周溝から多数出土した32号墳を除いて、その他の古墳から葺石の痕跡は全く見い出されなかった。

古墳の平面規模（周溝を含めず）は、方墳では最大の45号墳で16.２×13.５m、最小の53号墳で4.２m四方、円墳では、最大の55号墳で直径14.０m、最小の２号墳で8.２m（推定）である。

辛うじて残存していた主体部から土器の出土は無い。周溝からの出土土器も少なく断片的で、隣り合う古墳の周溝間で破片が接合することもあり、個別の古墳の時期を細かく絞り込むことは困難である。こうした状況であるため、全体的な傾向をおおまかに把握することにした。築造順序の具体的な検討については次項を参照されたいが、遺物の内容を簡潔にまとめると以下のようになる。

・主体部や木棺墓からの出土品は、鉄製品（刀子・刀・鎌・斧など）や石製品（勾玉・砥石など）のみで、土器（土師器・須恵器）は含まれない。

・周溝から出土した遺物は土師器・須恵器が多く、それ以外で注目される遺物としては、21号墳の埴輪、15号墳のガラス小玉がある。

・須恵器は、猿投窯や伊勢在地窯（小杉大谷窯・久居窯）など、複数の生産地からもたらされている。地域色を織り込んだ詳細な時期検討は今後の課題となろうが、初期須恵器の時期から須恵器蓋杯が大型化する時期（概ね陶邑編年[4]のＴＫ10型式）までのものがある。

・須恵器では、把手付椀・把手付高杯・樽型瓶や、口頸部の外反が著しい壺・甕、外面格子叩きの甕など初期須恵器を含む古手のものが目を引く。とりわ

け珍しい盌形土器（平底鉢）については、別項を参照されたい。

西山古墳群の２㎞ほど南東に所在する広古墳群[⑦]は、かつて埴輪が出土したと伝えられていることから比較的古手の古墳群として注目されてきた。方墳主体で円墳も混在する状況や、葺石の存在、埴輪の出土など、西山古墳群との共通点は複数あるが、発掘調査が行われていないため詳細な比較検討は困難である。近隣の古墳群の調査例としては、城ノ広古墳群（三重郡朝日町）があり、方墳５基と前方後円墳１基が調査されている。前方後円墳の築造時期については検討課題とされているが、５世紀末に築造され始めた方墳群は、埴輪を伴う[⑧]。西山古墳群のように50基を超える大規模な初期群集墳の調査例は、北勢地域では石薬師東古墳群（鈴鹿市）くらいしか無く、稀である。石薬師東古墳群も墳丘は完全に削平され、主体部は検出されていないが、周溝から出土した須恵器や埴輪など豊富な遺物から個々の古墳の築造時期を推定し、配置の法則性や周溝内祭祀についても検討されている[⑨]。初期須恵器が目立つ西山古墳群よりも形成開始時期は遅れるが、存続期間（概ね陶邑編年ＴＫ23～ＭＴ15型式）は大きく重複することが注目される。

d　飛鳥時代以降（第124図）

調査区中央部（第３次調査区付近）で竪穴建物２棟と掘立柱建物３棟、東方に離れて土壙墓１基を確認した。５棟の建物は、平面的に重複することなく、同じ方向性で配置されていることから、ほぼ同時期に建てられていたと考えられる。明確に建物に伴う形での遺物の出土は少ないが、近くの古墳周溝をゴミ捨て場として利用していたようで、11号墳の北半部の周溝からは当該期の遺物が一定量出土した。遺構のあり方から長期間継続した集落とは考えられないため、ここでは周辺から出土した当該期の遺物を合わせて時期を考えてみたい。

暦年代推定の上では、該当する遺物のなかに尾張（猿投窯）産とみられる須恵器が含まれていることが手掛かりとなる。尾張産須恵器は、他産地のものと峻別することが容易な形質的特徴を有しており、実年代推定根拠が豊富な飛鳥藤原地域での出土例も比較的多く知られている[⑩]。西山８号墳や11号墳の周溝から出土した尾張産須恵器蓋杯（50・107）は、645年の乙巳の変との関連が指摘されている甘樫丘東麓遺跡焼土層ＳＸ037出土品[⑪]よりもやや新しい一方で、660年に建設された漏刻の覆屋ＳＢ200廃絶時の廃棄遺物である水落遺跡貼石遺構埋立出土品[⑫]よりも僅かに古相を呈する。ＳＢ200の廃絶時期は確定できないものの、漏刻本体が大津宮に移されたと考えられる667年もしくは671年を遡るとは考え難いので、西山８・11号墳周溝出土の尾張産須恵器は概ね７世紀第３四半期頃のものと考えられる。

飛鳥時代よりも新しい遺構は見つかっていないが、31号墳からは13世紀頃の山茶碗の完形品が１個出土した。古墳盛土の自然崩壊がおさまって安定した時期の表土と目される周溝埋土中層からの出土で、当時は墳丘がある程度の高さを保っていたとみられる。墳丘がすっかり削平されたのはそれ以降のことであろう。　（水橋）

【註】

①三重県埋蔵文化財センター『伊坂遺跡発掘調査報告』2004年。

②三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅵ』2016年。

③三重県埋蔵文化財センター『釜垣内遺跡（第２・４・５次）発掘調査報告』2018年。

④三重県埋蔵文化財センター『鈴山遺跡（第２・３次）発掘調査報告』2018年。

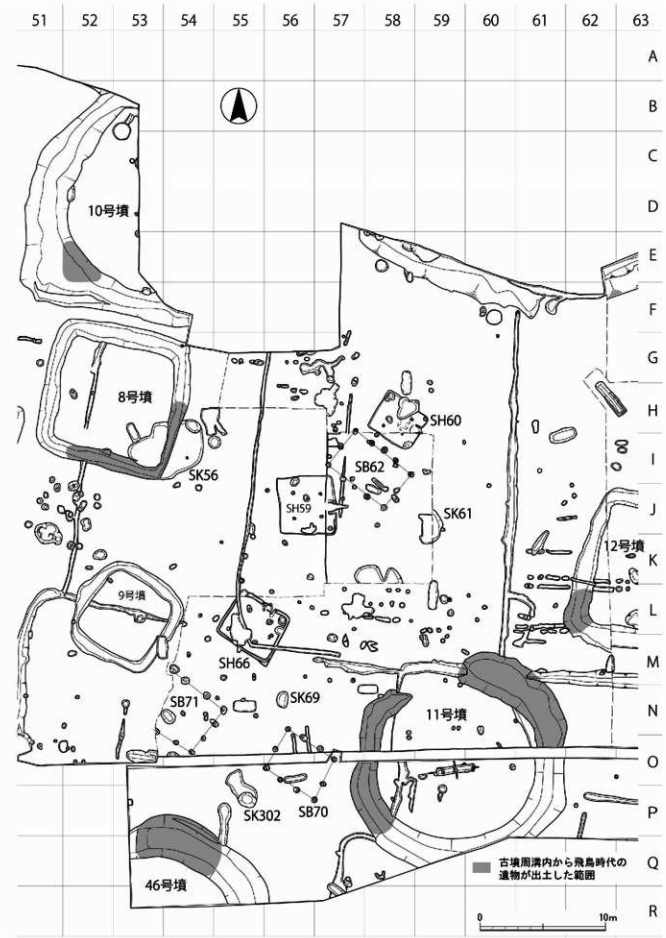
⑤四日市市教育委員会『北山遺跡試掘調査概要』1975年。四日市市遺跡調査会『北山Ｃ遺跡』1988年。

⑥平安学園考古クラブ・田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』（平安学園創立九十周年記念　研究論集第10号）平安学園、1966年。田辺昭三『須恵器大成』角川書店、1981年。

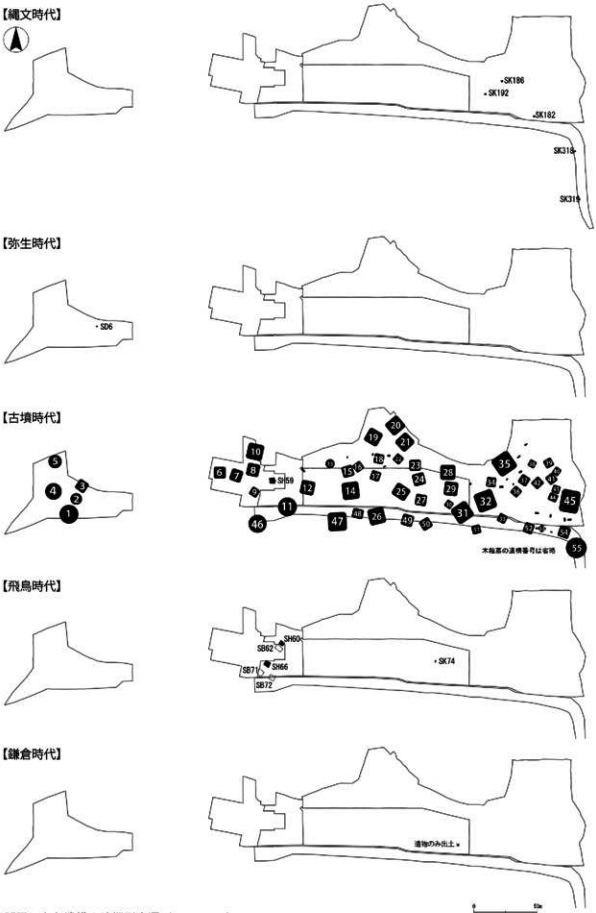
⑦四日市市『四日市市市史第二巻史料編考古Ⅰ』1988年。

⑧三重県埋蔵文化財センター『城ノ広古墳群・城ノ広遺跡（第２次）発掘調査報告』2005年。

⑨三重県埋蔵文化財センター『石薬師東古墳群・石薬師東遺跡発掘調査報告』2000年。石薬師東古墳群ほどではないが、鈴鹿市の寺谷古墳群も、大半が５世紀末～６世紀前半に築造された20基以上からなる群集墳で、大規模な初期群集墳に該当する。（藤原秀樹「寺谷古墳



第124図　飛鳥時代の建物と遺物出土範囲の関係（1：300）



第125図　主な遺構の時期別変遷（1：3,000）

群」『三重県史』資料編考古１　三重県、2005年。）

⑩尾野善裕・森川　実・大澤正吾「飛鳥地域出土の尾張産須恵器」『奈良文化財研究所紀要』奈良文化財研究所、2016年。

⑪次山　淳「甘樫丘東麓の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』25　奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部、1995年。

⑫奈良文化財研究所・歴史土器研究会『飛鳥時代の土器編年再考』2019年。

2　西山古墳群の変遷

いずれも墳丘は完全に削平されて、大半が周溝のみの残存であったことに加え、出土遺物も全般的に乏しいため、各古墳の造営時期を決定し、西山古墳群全体の形成過程を詳細に検討することは甚だ難しい。

しかし、当該期の古墳群の調査例が少ない北勢地域にあって、55基以上もの大古墳群の評価は、地域の歴史理解にとって非常に大きな意味を持つ。

そこで、僅かではあっても土器が出土した古墳について、努めて造営時期を推定し、古墳群の形成過程を大まかに把握することを試みた。

（１）土器編年にあたっての基本的な考え方

西山古墳群造営の最盛期は、土師器に須恵器が共伴するようになる古墳時代中後期である。

古墳時代における北勢地域の土器については、亀山市山城遺跡の報告書で編年案が示されて[5]いるが、土師器のＳ字甕や宇田甕[6]と有稜高杯を基軸とした編年であり、むしろ須恵器が主体を占める西山古墳群出土品の検討に、いまそのまま適用することは難しい。一方、須恵器については、北勢地域の当該期の窯跡が小杉大谷古窯址[7]（四日市市）や稲生山古窯址群[8]・徳居１号窯[9]（鈴鹿市）程度しか知られていない現状では、研究の進んでいる和泉の陶邑窯や尾張の猿投窯の編年観[10]を参照・援用せざるを得ない面がある[11]。しかし、西山古墳群へ持ち込まれた須恵器には、猿投窯だけでなく、北勢の小杉大谷窯や中勢の久居窯[12]など、系統の異なる複数の産地の製品が含まれていると考えられるため、型式認定や時期的併行関係の検討には注意を要する。

（２）段階設定と土器様相（第126・127図）

以上の点を踏まえ、ここでは主に須恵器のあり方から、西山古墳群の各古墳出土遺物を次に示すように大きく４時期（段階）に分けて捉えることとした。

①須恵器普及以前（西山古墳群において）

②初期須恵器を含む古手の須恵器の時期

③須恵器に伊勢の地域色が顕在化する時期

④須恵器蓋杯が大型化する時期

以下、各期について説明する。なお、個々の遺物を説明する際に、須恵器については器種のみを表記した。

【西山１期】須恵器普及以前

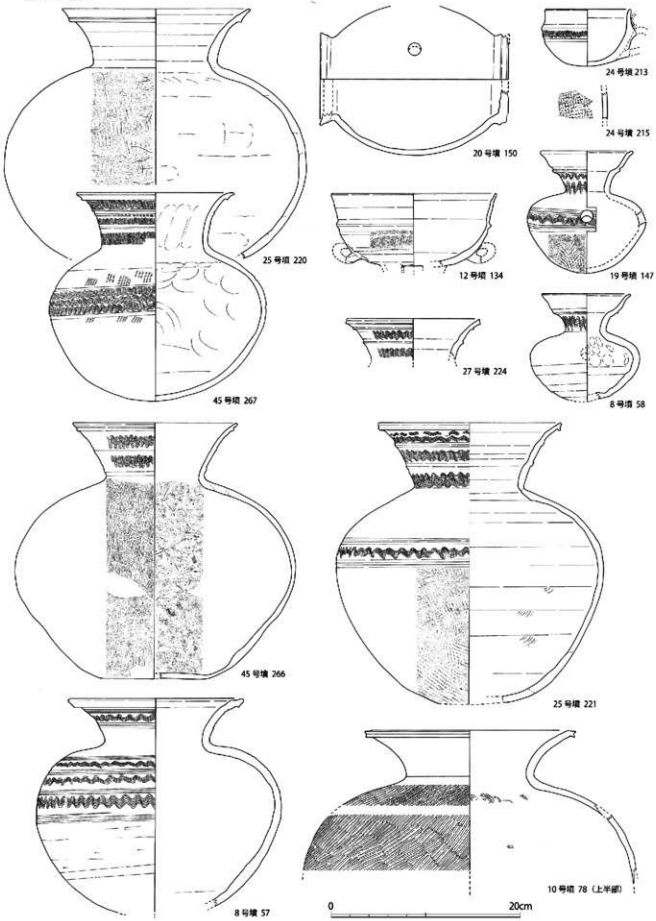
北勢地域で須恵器が出現する直前期の良好な一括資料と目されている亀山市地蔵僧遺跡ＳＢ22[13]出土品と類似の土器が出土した古墳、すなわち西山21号墳・35号墳がこの時期に該当する。ただし、西山21号墳から埴輪とともに出土した土師器のＳ字甕（151）は、Ｓ字甕としては最も新しく位置づけられるＤ類であり、杯部の稜や脚部の屈折がやや鈍くなっている35号墳出土の土師器屈折脚高杯（240・241）と共に、地蔵僧遺跡ＳＢ22出土品より僅かに新しく見える。したがって、既に他地域では須恵器生産が始まっていたとも考えられるが、西山古墳群では須恵器の存在を確認できないため[14]、１期を須恵器普及以前と位置づけておく。

【西山２期】初期須恵器を含む古手の須恵器の時期

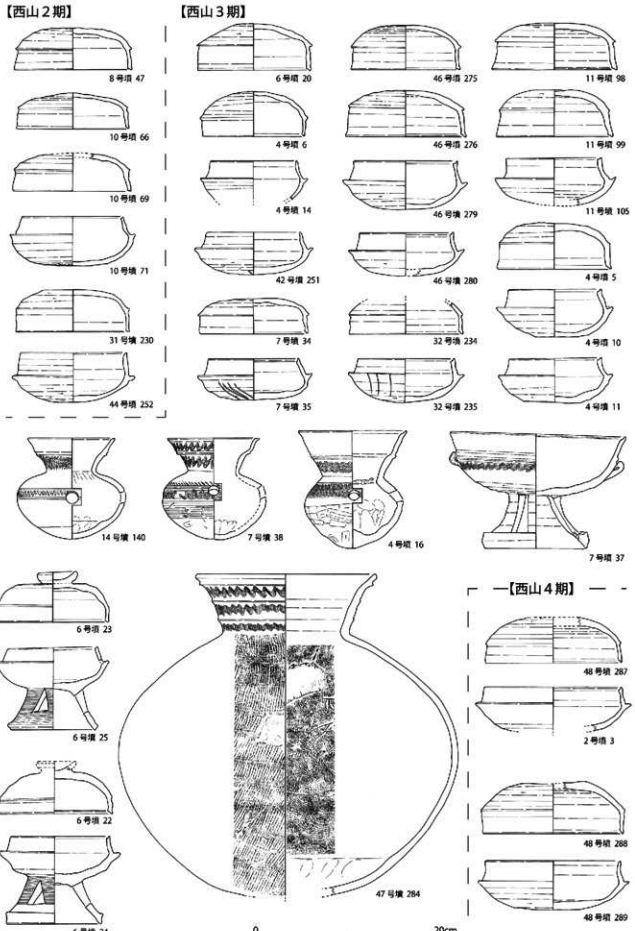
陶邑窯編年でＴＫ208型式以前とされる器種や形態的特徴をもつ須恵器が出土した古墳、すなわち西山８号墳・10号墳・12号墳・15号墳・19号墳・20号墳・24号墳・25号墳・27号墳・31号墳・44号墳・45号墳がこの時期に該当する。

これらの古墳の中で、時期的にも量的にもまとまりのある土器群が出土したのは、45号墳である。口縁端部からやや離れた位置に凸帯をもつ甕（266・267）の口縁部形状は、古手の壺・甕に認められる特徴の一つで、ＴＫ73号窯出土品の中に類例を見いだすことができる。また、小片のため断言はできないが、杯蓋（263）のような特徴的な段状の窪みを有する口縁端部もＴＫ216号窯出土品に類品がある。提瓶（265）については、かつてはＭＴ15型式に出現するとされていた[15]が、ＴＫ13号窯の発掘調査によってＴＫ216型式ないしＯＮ46型式にまで遡るこ

【西山２期】



第126図　西山２～４期の主な須恵器１（１：４）



第127図　西山２～４期の主な須恵器２（１：４）

とが明らかになっているので[8]、存在自体が古く遡らせて考えることの否定材料にはならない。つまり、これらの須恵器から45号墳の造営を初期須恵器の時代と考えることには充分な合理性があると言えよう。

量的に45号墳出土品ほどのまとまりはないが、類似した形状の口縁部をもつ甕（220）を含む25号墳の出土品も、四方透かしが施された深手の高杯（219）などにＴＫ208型式以前の古手の須恵器の特徴が色濃く認められる。

また、20号墳から出土した樽形鑵（150）や、24号墳から出土した把手付椀（213）は、存続時期がＴＫ208型式までに限定される器種とされており[9]、付け根が細く全体に小ぶりな頸部を有する19号墳出土の鑵（147）もＴＫ216号窯やＯＮ46号窯出土品との形態的類似性が高い。27号墳も、壺（224）の頸部形状が、やや小型ではあるが25号墳出土品（221）に類似することから、やはり西山２期に位置づけられる。

８号墳は、７世紀になってから隣接地に竪穴建物や掘立柱建物が建てられたこともあって、周溝には後世の遺物が少なからず紛れ込んでいるが、古相を示す蓋杯（47）はＴＫ208号窯出土品と、鑵（58～60）はＴＫ216号窯やＯＮ46号窯出土品との高い形態的類似性を示す。また、大きく外反する形状の頸部をもつ壺（57）の口縁部形態は、猿投窯を代表するH-111号窯出土の甕口縁部と類似しており、８号墳の造営が初期須恵器の時代にまで遡ることを示している。

同様に、近接する10号墳・12号墳の遺物にも７世紀のものとみられる土師器・須恵器の紛れ込みが認められるが、10号墳出土蓋杯の大半（66～71）や12号墳出土無蓋高杯（134）には、ＯＮ46号窯やＴＫ208号窯出土品との形態的類似性を見て取ることができるため、やはり古墳の造営時期は西山２期と考えられる。31号墳出土品には、鎌倉時代に降る「山茶碗」（231）が含まれているものの、古墳の造営年代は10号墳出土品との共通性が高い杯蓋（230）の時期と考えておく。

このほか、土器の出土量が少ないため、位置付けにはやや不安も残るが、やはりＯＮ46号窯出土品に似た杯身（252）が出土した44号墳や、極めて精良な胎土で、口縁端部の形状が12号墳出土無蓋高杯（134）に近似している壺（142）が出土した15号墳も、西山２期の古墳と考えることができよう。

概して、西山２期に位置づけた古墳から出土した蓋杯（８号墳：47、10号墳：66～71、31号墳：230）は、形態的特徴や胎土の質感が斉一的で、同一の産地からもたらされたもののように見受けられる。胎土の質感からは尾張地域（猿投窯・尾北窯）を有力な候補として想定でき、全体形状だけでなく、僅かに窪む口縁端部の形や広範囲に丁寧に施されたヘラケズリ調整などは、城山２・３号窯出土品[10]に似る。

なお、土師器の椀状杯高杯は、８号墳の出土事例（45・46）から判断して、西山２期には出現しているようであり、同じく土師器椀状杯高杯（228）が出土している30号墳の造営はこの時期まで遡るかもしれない。ただし、中北勢地域の出土例を概観してみると、土師器椀状杯高杯は西山２期だけでなく西山３期に相当する時期の土器群にともなう事例[11]も存在しているので、30号墳の造営は西山３期に下ることも十分に考えられる。

【西山３期】伊勢の地域色が顕在化する時期

前述のように、西山古墳群へもたらされた須恵器には、尾張地域（猿投窯・尾北窯）産のほか、伊勢地域の在地窯産のものが少なからず含まれており、形質的特徴から判断すると、伊勢地域産の須恵器の中には北勢の小杉大谷窯産と中勢の久居窯産と考えられるものが混在しているようである。このため、おおむねＴＫ23型式以降と考えられるこれら伊勢在地窯の操業開始以後については、工人集団の系統を考慮せずに、特定の形態的特徴だけを根拠にして須恵器の時期を決めることは極めて難しい。将来的には、良好な一括資料における共伴関係を通して、異なる産地の時期的併行関係を検証すべきではあるが、蓋杯が一旦小型化（ＴＫ23・ＴＫ47型式）した後に再度大型化（ＭＴ15・ＴＫ10型式）するという変化の方向性自体は、多くの須恵器産地に共通しているように見受けられるので、ここでは小型の蓋杯が出土品の主体を占めている古墳を西山３期、出土した蓋杯に顕著な大型化が認められる古墳を西山４期として、大きく２時期に区分することとした。ただし、西山３期の古墳に少なからず須恵器を供給していた

と考えられる四日市市の小杉大谷窯からは、多数を占める小型の蓋杯にともなって大型の蓋杯も少量出土しているため、量的に僅かではあるものの大型の蓋杯の出現自体は西山３期にまで遡ると考えている。

西山３期に位置づけられる古墳には、３号墳・４号墳・６号墳・７号墳・11号墳・14号墳・32号墳・42号墳・46号墳・47号墳がある。

時期的・量的にまとまりのある土器群が出土した古墳としては、４号墳・６号墳・７号墳がある。このうち蓋杯については、６号墳出土品（20）が胎土の質感から尾張地域（猿投窯・尾北窯）産、７号墳出土品（34～36）が胎土は異なるものの形態的には猿投窯系工人による製品とみられるのに対して、４号墳出土品には尾張地域産（６・13・14）に加えて、小杉大谷窯産とみられる蓋杯（５・８・10・11など）が含まれている点が異なる。ただし、６号墳からは形態的に久居窯産と思われる有蓋高杯（22～30）が多数出土しており、出土須恵器の産地構成は古墳ごとに顕著な相違を示す。

小杉大谷窯産とみられる須恵器がまとまって出土した古墳としては、４号墳以外に11号墳・46号墳をあげることができる。11号墳・46号墳は、近接して７世紀に竪穴建物や掘立柱建物が営まれていることもあって、周溝からの出土品には本来それらの遺構にともなうと考えられるものを少なからず含むが、古相を示す蓋杯（98～102・105・106・275～281）は、概ね小杉大谷窯産とみられる。

他に、当該期に属するとみられる蓋杯が出土した古墳としては、３号墳（４）・32号墳（234・235）・42号墳（251）があり、32号墳からはやや古相を示す蹠（237）も出土しているが、中層から出土した小破片であるため、７号墳出土品と共通性が高い下層出土の蓋杯を重視し、西山３期に位置づけておく。

蓋杯の出土はないものの、14号墳は蹠（140）の形態から西山３期への位置づけが可能である。この蹠は、櫛描波状文が櫛描列点文に変化している点をやや後出的の要素とみることができるものの、全体的な形状は７号墳出土例（38）に近似している。頭部の付け根が太く、頭部全体が大型化している４号墳出土例（16）より古相を示しており、西山３期への位置づけを支持する。４号墳出土例は、これらの蹠の中では明らかに新相を示していることから、４号墳を西山３期の中では新しく位置づけることが可能である。４号墳出土の尾張地域産蓋杯が、猿投窯の中でもH-10号窯出土品[8]やH-61号窯下層（推定H-39号窯）灰層出土品[9]に形質的類似性が高く、同じく西山３期に位置づけた６・７号墳の尾張地域産もしくは猿投窯系須恵器と比べると、やや新相を呈することもこの推論の裏付けとなろう。

また、47号墳出土の甕（284）は、頭部に凸帯で区画された３段の櫛描波状文を有する点で、西山２期に位置づけた25号墳出土例（221）と近似するが、頭部の外反が弱くなっている点に後出的要素を見出すことができる。共伴の土師器椀（283）も、西山２期に出現する土師器椀状杯高杯より後出の器形とされていることを考え合わせるならば、47号墳については西山３期への位置付けが妥当かと思われる。

また、須恵器を欠くため詳細な位置づけは難しいものの、47号墳と同様の土師器椀の出土が認められる９号墳（63・64）・23号墳（211・212）も、西山３期以降の古墳と考えておく。

ところで、西山３期の古墳のうち、小杉大谷窯産と目される須恵器が４号墳・11号墳・46号墳という円墳ばかりから出土している実態は、４号墳を西山３期の中でも新しく位置づけた所見とあいまって、西山古墳群における墳丘形状の主流が、方墳から円墳へと推移したことを示しているかのようである。

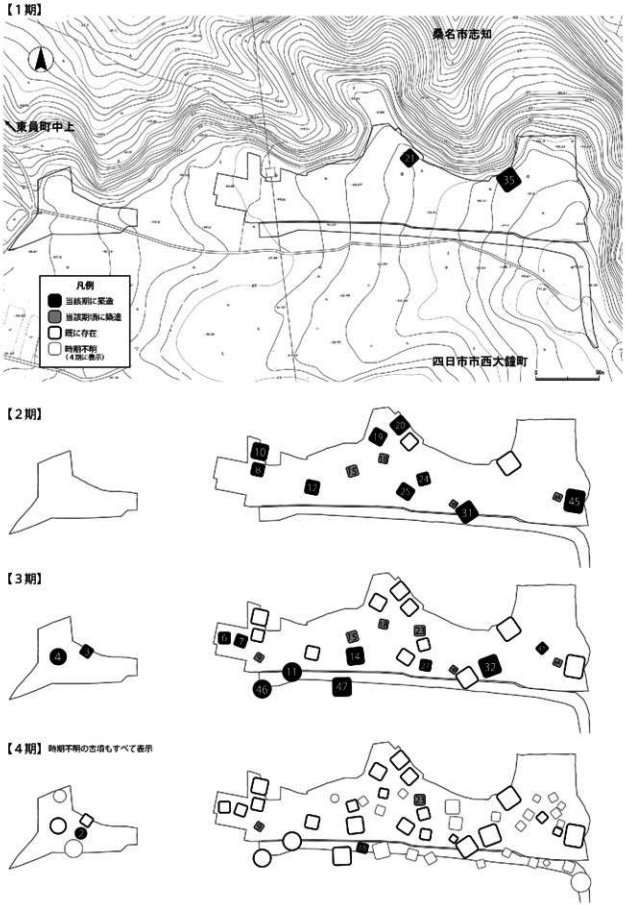
【西山４期】須恵器蓋杯が大型化する時期

西山４期に位置づけられる古墳としては、２号墳・48号墳の２基のみで、西山３期以降とした９号墳・23号墳がこの時期まで降るとしても合計４基に過ぎず、古墳の造営は明らかに衰退傾向を示している。２号墳出土の杯身（３）と48号墳出土の杯蓋のうち１点（287）は伊勢在地産とみられるのに対して、48号墳出土の蓋杯１組（288・289）は尾張地域産で、H-61号窯出土品[9]に類似する。

（３）古墳群の変遷

以上、出土土器の検討を通して推定できたものに限るが、各古墳の造営時期からは、西山古墳群の形成過程を第128図のように考えることができた。

西山１期　丘陵の東端近くの、現桑名市域の眺望が良好な北端に21号墳・35号墳が造営されることから



第128図　西山古墳群　築造過程推定図（1：3,000）

古墳群の形成がはじまる。２基とも比較的大型の方墳で、21号墳は西山古墳群のなかで唯一埴輪をともなう。

西山２期　初期須恵器を含む古手の須恵器の時期には、丘陵東部に広く方墳が築造されるようになる。この時期の古墳の分布は、平野部を見下ろすことができる丘陵の北端や東端ばかりでなく、丘陵の内側にも広がりをみせている。

西山３期　須恵器に伊勢の在地色が顕在化してくる時期になると、丘陵西部や丘陵東部内側に分布域が広がるとともに、丘陵東部では２期までに築かれた古墳の隙間に小規模な古墳が築かれるようになる。また、この期間内の、おそらく後半に円墳が築造され始める。

西山４期　須恵器蓋杯が大型化する時期には、丘陵内部に小型の円墳と方墳が築かれる。すでに存在していた古墳の隙間に新たに築かれたようにみえる。特に48号墳は、隙間に無理矢理合わせたのか、やや不自然な平面形を呈している。　（水橋）

【註】

①山田猛「４　結語　（２）弥生・古墳時代の遺物」『山城遺跡・北瀬古遺跡』三重県埋蔵文化財センター、1994年。

②土師器甕の名称については、以下のように略した。

・「宇田型」台付甕→宇田甕

・Ｓ字状口縁台付甕→Ｓ字甕

また、Ｓ字甕の分類は、赤塚次郎「第Ｖ章　考察」『廻間遺跡』財団法人愛知県埋蔵文化財センター、1990年に依る。

③四日市市教育委員会『小杉大谷古窯址』四日市市埋蔵文化財調査報告９、1974年。

④小玉道明「三重県鈴鹿市稲生山古窯址群発掘調査報告」『研究紀要』第５号　三重県埋蔵文化財センター、1996年。

⑤淺生卓司「徳居窯址群の須恵器生産」『Mie history』14　三重歴史文化研究会、2003年。

⑥田辺昭三『須恵器大成』角川書店、1981年。佐藤隆「６世紀における須恵器大型化の諸様相―陶邑窯跡編年の再構築に向けて・その３―」『大阪市歴史博物館　研究紀要』第６号、2007年など。楠崎彰一「猿投窯の編年について」『愛知県古窯跡群分布調査報告（Ⅲ）』愛知県教育委員会、1983年。尾野善裕「尾張・西三河（窯跡）　猿投・尾北・その他」『古代の土器５－１　７世紀の土器（近畿東部・東海編）』古代の土器研究会、1997年。同「猿投窯（系）須恵器編年の再構築」『第１回東海土器研究会　須恵器生産の出現から消滅―猿投窯・湖西窯編年の再構築―』東海土器研究会、2000年。

⑦伊勢地域の古墳時代須恵器に陶邑窯とは異なる地方色があることや、伊勢国内の地域差があることは以前から認識されており、近年の研究では中勢（徳居古窯跡群）と南勢（外城田古窯跡群）の須恵器について、それぞれの編年案（淺生卓司「徳居窯址群の須恵器生産」『Mie history』14　三重歴史文化研究会、2003年。同「伊勢南部の須恵器生産―外城田窯址群の検討―」『Mie history』16　三重歴史文化研究会、2005年。）が示されている。また、伊勢地域における須恵器生産の系統的整理を試みた研究（大西遼「古墳時代伊勢地域の須恵器生産の流通～系統・傾向の整理をとおして～」『Mie history』vol.26　三重歴史文化研究会　2019年。）も発表されているが、系統の認定方法や異系統の須恵器の共時性の検証などに、今後の課題が多く残されている。なお、伊勢地域の古墳時代須恵器編年研究全般については、『三重県史』に簡潔にまとめられているので、そちらを参照されたい（田中秀和「古墳時代須恵器編年概観」『三重県史　資料編　考古１』三重県、2005年）。

⑧久居古窯址群発掘調査団『久居古窯址群発掘調査―２号窯、４号窯―』1968年。

⑨亀山市教育委員会『地蔵僧遺跡発掘調査報告』1978年。地蔵僧遺跡竪穴住居出土品は、当該期の良好な一括資料として古くから注目されてきた。

・赤塚次郎「付論　松河戸様式の設定」『松河戸遺跡発掘調査報告書』財団法人愛知県埋蔵文化財センター、1994年。

・上村安生「宇田型甕衰退から伊勢型甕成立過程についての基礎的研究」『Ｓ字甕を考える』東海考古学フォーラム三重県大会事務局、2000年。

・村木誠「名古屋市域の土師器について」『埋蔵文化財発掘調査報告書』24（名古屋市文化財調査報告31）名古屋市教育委員会、1996年。

⑩35号墳の周溝理土からは、コンテナケースに３箱の土師器とともに須恵器甕の胴部が１点出土しているが、

3㎝ほどの小片であることに加え、上層からの出土であるため、35号墳に伴うものとは考えていない。

⑪田辺昭三『須恵器大成』角川書店、1981年（41頁）。

⑫阪田育功『陶邑窯跡群発掘調査概要「大阪こどもの城（仮称）」建設にともなう高蔵寺13号窯他の調査』大阪府教育委員会、1995年。

⑬註⑩に同じ（39頁）。

⑭尾張旭市教育委員会『尾張旭市の古窯』1979年。

⑮例えば、木造赤坂遺跡ＳＨ640は西山２期、ＳＨ639は３期に該当する。三重県埋蔵文化財センター『木造赤坂遺跡・池新田遺跡・井手ノ上遺跡発掘調査報告書』2012年

⑯尾野善裕「尾張・西三河（窯跡）　猿投・尾北・その他」『古代の土器５－１　７世紀の土器（近畿東部・東海編）』古代の土器研究会、1997年。

⑰尾野善裕「Ⅶ　考察―Ｈ－61号窯の調査をめぐる諸問題―」『東山61号窯発掘調査報告書』名古屋大学大学院文学研究科考古学研究室、2010年。

⑱斎藤孝正「東山61号窯出土の須恵器」『名古屋大学総合研究資料館報告』第２号　名古屋大学総合研究資料館、1986年。名古屋大学大学院文学研究科考古学研究室『東山61号窯発掘調査報告書』、2010年。

3　西山８号墳出土盌形土器

今回の調査で出土した須恵器のなかで注目すべきものに須恵器鉢（第102図61）がある。西山８号墳（ＳＤ53）周溝に埋納されていたもので、ほぼ完形で出土した。時期的には、他の共伴須恵器からＩ-3[1]、ＴＫ208[2]に並行し、５世紀後半の時期が与えられる。鉢としたが、平底の底部から内弯気味に立ち上がる体部に外反する短い口縁部をもつ特異な器形である。

この様な形態の須恵器は、朝鮮半島で出土例が多く、韓国考古学界では「盌」と呼称している[3]。この盌形土器については、土田純子氏によって既に分類と編年が示されている[4]。盌形土器は外反口縁のＢ形と直立口縁のＣ形に分類され、Ｂ形は徐々に器高を減じ５世紀後半を降ったあたりでＣ形へと変化するとされる。そして、詳細な特定は困難とするものの百済地域または全羅道の朝鮮半島南西部に故地を求め、日本出土の百済（系）盌の大部分は栄山江流域と関連があることを想定している[5]。これによると西山８号墳出土の盌形土器（61）は百済系土器で、Ｂ形となる。時期的にはＢ形からＣ形へ移り変わる時期で、Ｂ形としては最も新しい部類となるが、口径に対する器高が高く、古相を呈する。したがって製作年代としては共伴する須恵器より先行する可能性もある。

また、国内出土の盌形土器を集成[6]した辻川哲朗氏は、国内では20個体ほどの出土しかなく、どの遺跡からも１個体か２個体しか出土しない状況を浮き彫りにしている。また、分布が大阪府と福岡県に偏り、他は兵庫県、滋賀県、和歌山県の近畿地方である。詳細にみれば、渡来系集団の居住が想定される地域から出土するとしている。近畿より東では、唯一千葉県に出土例がある。今回の出土は千葉県に次いで東方からの出土となるが、近畿地方の出土地群の東端と位置付けるべきであろう。また、西山古墳群やそれを含む北山Ｃ遺跡の調査でも61以外に盌形土器は出土しておらず、全国の出土状況に沿うものである。そして、破片試料が多い中、ほぼ完形の61は全国的にみても貴重な個体[7]と言える。さらに特徴として注目したいのが法量である。出土例の大半は、口径10～15㎝、器高４～５㎝であるのに対し、口径20㎝以上、器高10㎝以上になるものは国内に４例しかなく[8]、61はそのひとつの希少例である。焼成は明灰色で、瓦質とまでは言えないが、やや甘いものである。朝鮮半島でも焼成の状態は多様であり[9]、国内では４～５世紀には瓦質焼成等の軟質のものが多く、５世紀代になると硬質のものが増える[10]ようである。既述したように西山８号墳の61が古相を帯びる点と矛盾しない。

このように、出土例が希少で共伴須恵器より時期的に若干先行する特徴を有するとなれば、国内生産が開始されていた可能性[11]を踏まえても、百済からの搬入品の可能性も考慮しておきたい。

次に盌形土器が西山８号墳に埋納された背景についてであるが、今回の調査では盌形土器以外には百済を彷彿させる遺構は検出されておらず、遺物も出土していない。渡来人の直接の関与を想定することは困難である。この状況は、国内の出土例の中で地理的に最も近い滋賀県草津市の谷遺跡[12]と類似する。鈴鹿山脈を間に挟んで東西約65㎞の位置にあり、列

島的視点でみれば、比較的近いと言える。両者とも方墳を主体とする古墳群に円墳が混じる群集墳である。ただし、谷遺跡のものは古墳からの出土ではあるものの近隣に竪穴建物があり、1／2の残存率も加味して、竪穴建物からの混入も想定できる[8]としている。いずれにしても、谷遺跡の所在する近江盆地は多数の渡来人が関与する遺跡があり、その背景で持ち込まれたことは容易に想定できる。

一方、西山８号墳の周辺に目を向けると、西山古墳群に隣接する西大鍋町及び大鍋町は『和名類聚抄』記載の「大金郷」と同名で、製鉄（鍛冶）集団の存在が想定され[9]、渡来系集落が考えられている。しかし、今回の調査区は北山Ｃ遺跡北端部で、その大半は桑名市となる。段丘北端部に位置し、段丘北麓の志知集落住民が所有する畑であった。この関係を古墳時代にまで遡らせることが可能かどうかは不明であるが、古墳の立地が段丘北端部で、北側に広がる員弁川の沖積平野を見晴らす位置にあることから、その可能性は高いものと考えられる。つまり、この古墳群を築造した集落は、「大金郷」よりも志知集落近辺に存在したものと考えざるを得ない。現在の志知集落は、元は久米村に属し、集落内の平群山には式内社の平群神社が鎮座する。このように志知集落周辺には「平群」や「久米」の中央豪族につながる名称が残る。久米氏は大伴氏の配下にあり、その大伴氏は雄略朝で強力な軍事力を背景に最盛期を迎え、朝鮮半島での軍事行動等が日本書紀に記されている[10]。一方の平群氏については、新羅討伐のため応神天皇十六年に「遣平群木菟宿禰・的戸田宿禰於加羅。[11]」とあり平群木菟宿禰等を加羅に遣わした記載、履中天皇二年には「都於磐余。當是時、平群木菟宿禰・蘇賀滿智宿禰‥‥共執國事。[12]」とあり平群木菟宿禰等が国政に携わった記載がある。このような平群氏の５世紀代からの活躍には、始祖伝承として否定的な意見もある[13]が、４世紀末から５世紀にかけて大きな勢力をもっていた葛城氏が衰退する間隙をついて平群氏が勢いを増したことは認められる[14]かも知れない。日本書紀の記述に誇張があったとしても朝鮮半島に直接関わっていた可能性も大きい。このように両氏とも５世紀から６世紀初頭にかけて朝鮮半島との関わりを想定できる豪族である。

特に、祭神を平群氏族の祖神とする平群神社については、社務所建設の際に完形の土師器・須恵器が出土し、平群山を神奈備として、古墳時代の祭祀場であったと考察されている[15]。『桑名市史』にはその際に出土した短脚の須恵器高杯等の写真が掲載されており、西山８号墳と同様な時期にまで遡るものと考えられる。このことから盌形土器（61）は、どちらかと言えば平群氏との関係で搬入されたものと想定したい。既述したように、他に百済系土器の出土が無いため、渡来人集落に係る古墳群に想定することはできず、渡来人の直接的関与の可能性は低いものと考えられる。平群氏が朝鮮半島から搬入したものを同氏との関係から志知集落近辺に所在した勢力が所有することになったものと推測する。盌形土器（61）は、５世紀から６世紀へかけての激動する朝鮮半島情勢に関わりながら勢力を増す平群氏の地方への伸長を示しているのかも知れない。　（森川）

【註】

①中村浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房、1981年。

②田辺昭三『須恵器大成』角川書店、1981年。

③辻川哲朗「近江地域における百済系土器の一様相」『紀要26』財団法人滋賀県文化財保護協会、2013年。

④土田純子「日本出土百済（系）土器：出現と変遷」『古代学研究』第193号、2012年。

⑤土田純子「日本出土百済（系）土器：出現と変遷」『東アジアと百済土器』（株）同成社、2017年。

⑥前掲③と同じ。

⑦辻川哲朗氏（公益財団法人滋賀県文化財保護協会）のご教示による。

⑧前掲⑤と同じ。

⑨前掲⑦と同じ。

⑩（財）大阪市文化財協会『大坂城Ⅴ』2002年。

⑪前掲③で大阪府ＯＮ231号窯出土須恵器跡が盌形土器である可能性を示唆している。

⑫草津市教育委員会『谷遺跡発掘調査報告Ⅰ』2001年。

⑬前掲③と同じ。

⑭四日市市『四日市市第三巻』1993年。

⑮加藤謙吉『大和の豪族と渡来人』吉川弘文館、2002年。

⑯大野晋ほか校注『日本書紀上　日本古典文学大系67』岩波書店、1967年。

⑰前掲⑯と同じ。

⑱前掲⑮と同じ。

⑲直木孝次郎『奈良』岩波書店、1971年。

⑳桑名市教育委員会『桑名市史』1959年。

　桑名市教育委員会『桑名市史補遺』1960年。

写　真　図　版

東上空から見た北山Ｃ遺跡・西山古墳群（御在所岳を遠望）　中日本高速道路㈱提供

第２次調査（西から）

第５次調査（真上から）

第２次調査　東区（真上から）

第６次調査（西から）

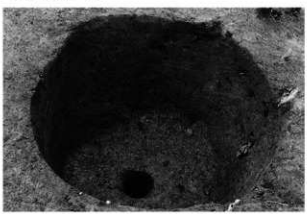
第２次調査　西区（西から）

第４次調査（真上から）

第７次調査（北東から）

ＳＫ182（北から）

ＳＫ182　土層（東から）



ＳＫ186（南から）

ＳＫ192（南から）

ＳＫ318（東から）

ＳＫ319（東から）

ＳＫ６　（南東から）

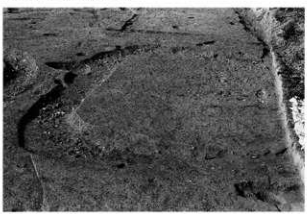
ＳＫ６　遺物出土状況（拡大）

1号墳（北東から）

2号墳（東から）

1号墳　土層（北から）

2号墳　土層（南西から）



3号墳（東から）

3号墳　土層（北西から）

4号墳（東から）

4号墳　土層（南西から）

5号墳　（東から）

5号墳　土層（北東から）

6号墳（北東から）

7号墳（北東から）

6号墳　遺物出土状況（北西から）

6号墳　遺物出土状況（北西から）

7号墳　遺物出土状況（北西から）

7号墳　遺物出土状況（北西から）

8号墳（北西から）

8号墳　遺物出土状況（北西から）

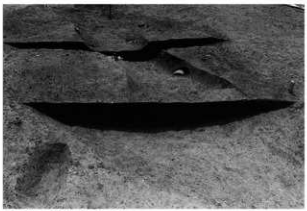
8号墳　遺物出土状況（南東から）

9号墳（西から）

9号墳　遺物出土状況（北から）

10号墳（南から）

11号墳（西から）



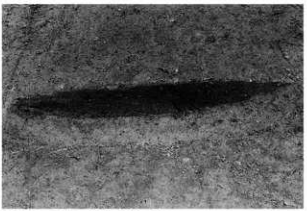
11号墳　土層（西から）

11号墳　遺物出土状況（北から）

11号墳　主体部（南から）

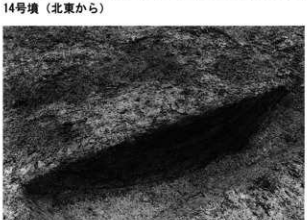
12号墳（北から）

13号墳（東から）



13号墳　東溝　土層（南から）

14号墳（北東から）



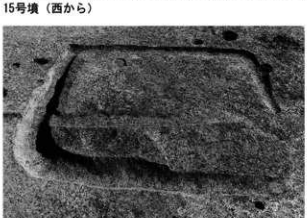
14号墳　南溝　土層（西から）

14号墳　西溝　遺物出土状況（北東から）

16号墳（南西から）

15号墳（西から）

16号墳　主体部（南から）



17号墳（北西から）

17号墳　北溝　土層（西から）

18号墳（南から）

18号墳　西溝　土層（南から）

19号墳（東から）

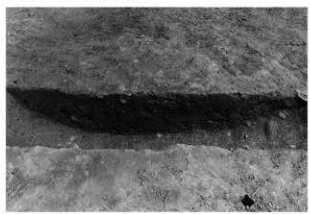
19号墳　南溝　土層（西から）

19号墳　遺物出土状況（南から）

20号墳（南から）

20号墳　土層（南から）

21号墳（南から）


21号墳　南溝　土層（西から）

21号墳　東溝　遺物出土状況（北から）

21号墳　北溝　遺物出土状況（西から）

22号墳（南から）

22号墳　東溝　土層（南から）

23号墳（北から）

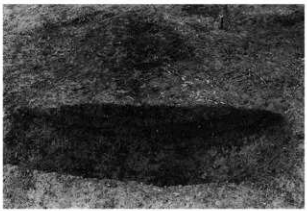
23号墳　南溝　土層（東から）

24号墳（西から）

24号墳　主体部（北東から）

24号墳　南溝　土層（西から）

25号墳（北西から）


25号墳　西溝　土層（東から）

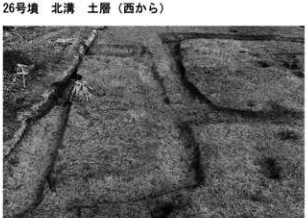
25号墳　南溝　遺物出土状況（西から）

25号墳　西溝　遺物出土状況（西から）

26号墳（東から）

26号墳　北溝　土層（西から）

28号墳（南から）


28号墳（北西から）

27号墳（北西から）

27号墳　東溝　土層（北から）

27号墳　南溝　遺物出土状況（西から）

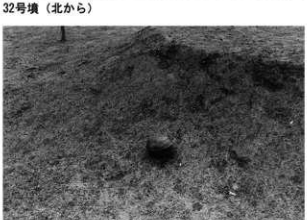
29号墳（北西から）

29号墳　東溝　土層（南から）

30号墳（北西から）

31号墳（北から）

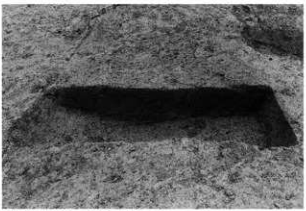
32号墳（北から）



32号墳　西溝　遺物出土状況（南から）

32号墳　東溝　遺物出土状況（南から）

34号墳（北から）



34号墳　東溝　土層（南から）

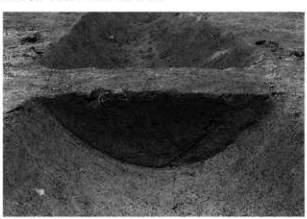
35号墳（南東から）

35号墳　南溝　遺物出土状況（東から）

36・37号墳（東から）

37号墳　南溝　土層（東から）

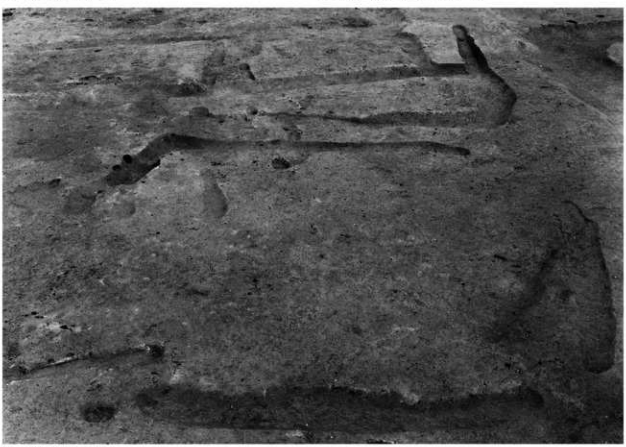
38号墳（南から）



38号墳　南溝　土層（東から）

39～42号墳（南から）

39号墳　南溝　土層（東から）



43・44号墳（南から）

44号墳　西溝　遺物出土状況（北西から）

43号墳　南溝　土層（西から）

45号墳（北から）

ＳＫ161（北から）

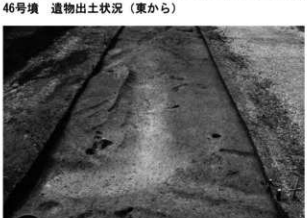
45号墳　西溝　土層（南から）

45号墳　西溝　遺物出土状況（南から）

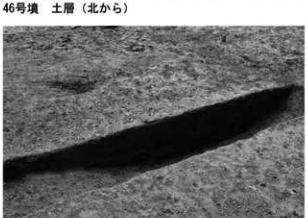
46号墳（東から）

46号墳　遺物出土状況（東から）

46号墳　土層（北から）



47号墳（東から）



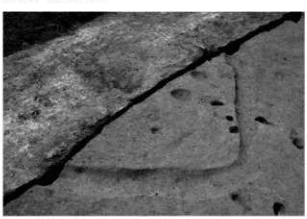
47号墳　土層（西から）

48号墳（東から）

48号墳　土層（南から）

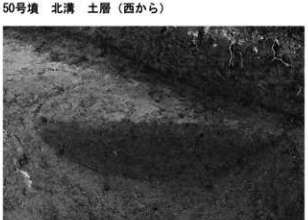
49号墳（北西から）

49号墳　土層（西から）


50号墳（北東から）

50号墳　北溝　土層（西から）

51号墳（北東から）


51号墳　東溝　土層（北から）

52号墳（東から）

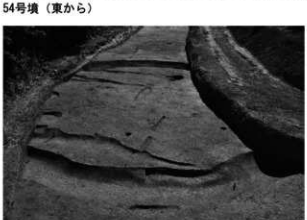
52号墳　土層（南から）

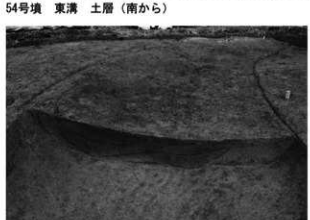
53号墳（東から）

ＳＫ312（南から）

54号墳（東から）

54号墳　東溝　土層（南から）


55号墳（北から）


55号墳　北溝　土層（西から）

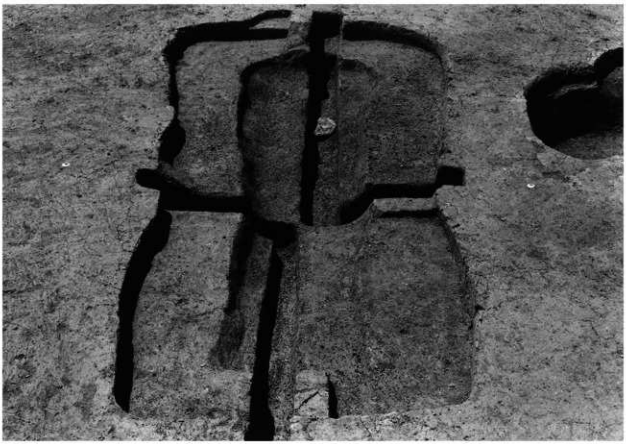
ＳＫ92（南から）

ＳＫ92　遺物出土状況（拡大）

ＳＫ92　遺物出土状況（拡大）

ＳＫ92　遺物出土状況（拡大）

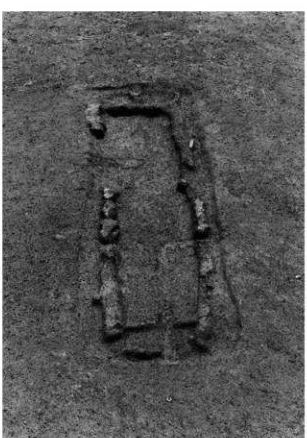
ＳＫ92　土層（北西から）



ＳＫ152（北から）

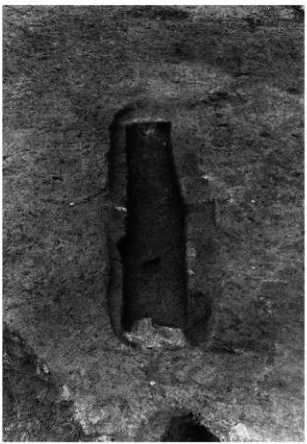
ＳＫ152　遺物出土状況（北から）

ＳＫ154（西から）



ＳＫ159（東から）

ＳＫ174（北から）



ＳＫ179（東から）

ＳＫ181　遺物出土状況（北から）

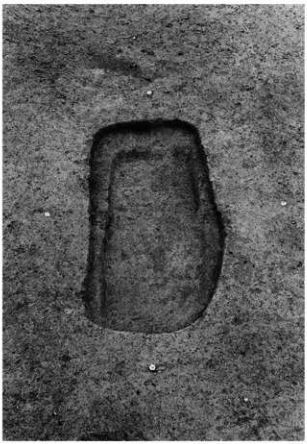
ＳＫ183（東から）

ＳＫ185（西から）

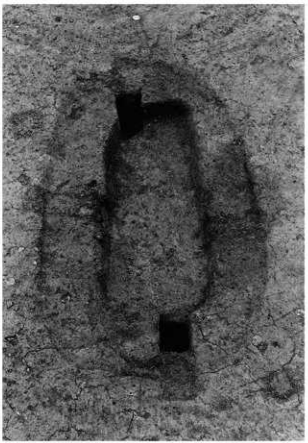
ＳＫ185　上層遺物出土状況（東から）

ＳＫ185　下層遺物出土状況（東から）

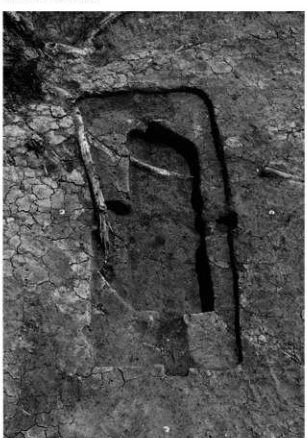
ＳＫ185　遺物出土状況（拡大）



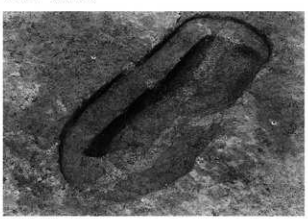
ＳＫ184（東から）



ＳＫ187（北から）



ＳＫ191（北から）



ＳＫ197（南から）

ＳＫ207（北から）

ＳＫ200（西から）

ＳＫ315（北から）

ＳＨ59（西から）

ＳＨ59　竈（南西から）

ＳＤ３（北西から）

ＳＤ３　遺物出土状況（拡大）

ＳＤ51　遺物出土状況（東から）

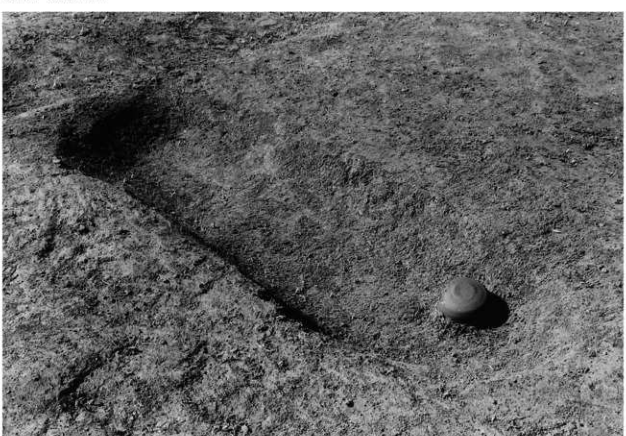
ＳＨ60（東から）

ＳＨ66（南東から）

ＳＢ62（南東から）

ＳＢ70（北東から）

ＳＢ71（北東から）



ＳＫ74　遺物出土状況（北東から）

1（上）

5

1（下）

6

10

11

15

16

20

21

22

23

24

25

26

28

34

36

35

36(ヘラ記号)

35(ヘラ記号)

37

38

39

41

42

47

47（口縁部）

50

51

52

57

58

59

60

61

63

64

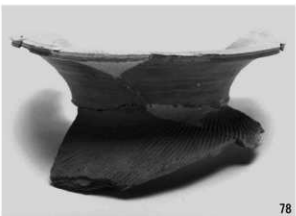
68

69

71

74

75


78

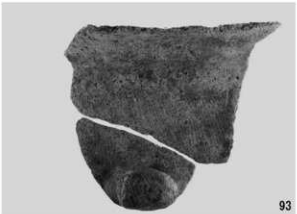
80

89

90

91

92


93

97

98

99

103

105

107

108

109

110

111

112

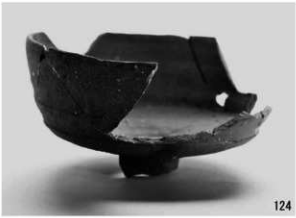
114

119

120

122

123


124

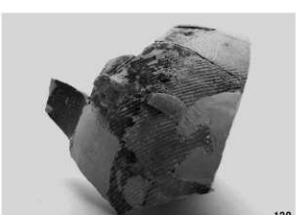
125

128

129

130

131

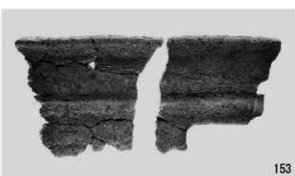

132

134

140

143

147


153

139

142

151

152

154

156

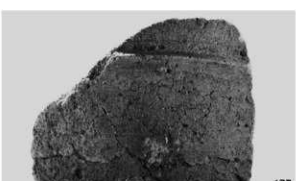
167

171

174

175

176


177

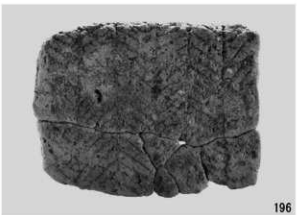
178

179

185（表）

185（裏）

187


196

187（底）

201

205

207

212

213

215

217

219

221

220

220（外面拡大）

224

225

226

230

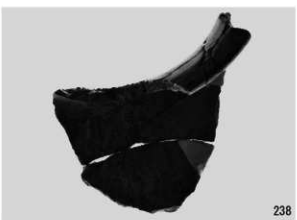
231

232

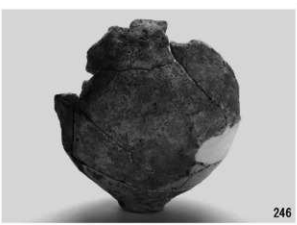
235

237

235（ヘラ記号）

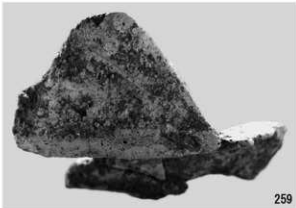

238

241

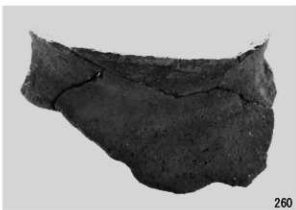

246

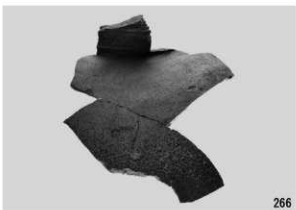
251

252


259

266（口縁部）


260


266

267

268

275

276

279

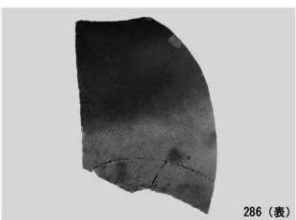
282

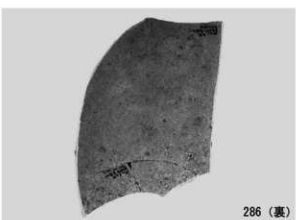
284

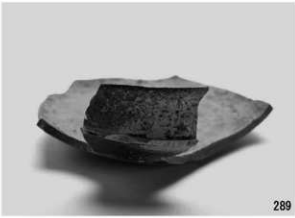
288

285（表）

285（裏）


286（表）


286（裏）

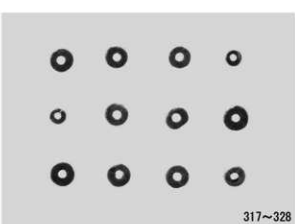

289

311

312

314

315・316


317～328

341

347

353

354

360

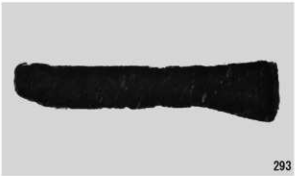
372

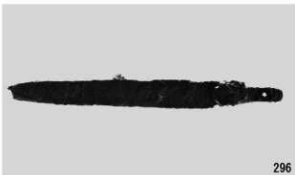
374

377

378

291


293


296

297

298

301

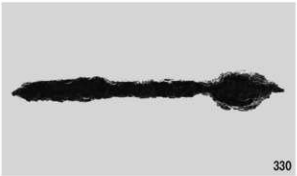
303

304

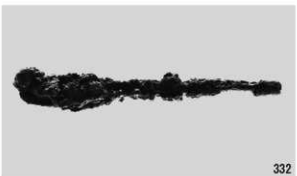
305

308

329


330

331

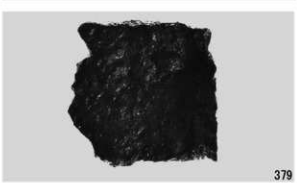

332

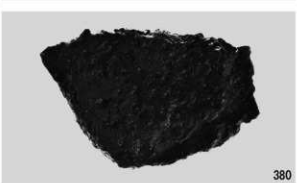
333

334

338

339


379


380

報告書抄録

ふりがな	きたやましーいせき（だいにかんななじ）・にしやまこふんぐん　ほっくつちょうさほうこく
書名	北山Ｃ遺跡（第２～７次）・西山古墳群 発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	３２３－４
編著者名	服部芳人・森川常厚・鈴木規之・山中由紀子・萩原義彦・水橋公恵
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515－0325　三重県多気郡明和町竹川503　TEL 0596（52）1732
発行年月日	2020年３月３日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
きたやましーいせき 北山Ｃ遺跡	くわなし 桑名市 おおあざしも 大字志知	24205	a 154	35° 2′ 49″	136° 35′ 54″	一次 20110711～20110909 第２次 20121010～20130318 第３次 20130424～20130829 一次 20130619～20130712 第４次 20130821～20140114 第５次 20140418～20140929 第６次 20150605～20151211 一次 20151019～20151022 第７次 20170628～20171204	一次 (600) 第２次 4,350 第３次 915 一次 (1,000) 第４次 4,030 第５次 9,047 第６次 2,423 一次 (216) 第７次 1,960	近畿自動車道名古屋神戸線（四日市ＪＣＴ～亀山ＪＣＴ）建設事業
よっかいちし 四日市市 にしおおがわちょう 西大鐘町		24202	241					
にしやまこふんぐん 西山古墳群	くわなし 桑名市 おおあざしも 大字志知	24205	a 155	35° 2′ 58″	136° 36′ 10″			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北山Ｃ遺跡	集落跡	縄文	陥し穴５基	なし	第２～７次の調査面積は、合計22,725㎡
		古墳	竪穴建物１棟 木棺墓など20基	須恵器・土師器・鉄器・砥石・勾玉・臼玉	
		飛鳥	竪穴建物２棟 （掘立柱建物） 土壙墓１基	須恵器・土師器	
西山古墳群	古墳	古墳	古墳55基 （周溝・主体部）	須恵器・土師器・ガラス玉・砥石・鉄器・埴輪	古墳55基は個別に遺跡登録（ａ155-1～ａ155-55）

要約

過去の調査では、丘陵南斜面に広がる弥生時代後期と古墳時代後期の遺跡とされていたが、丘陵頂部の平坦面まで遺跡が広がることと古墳群の存在が明らかになった。このため北山Ｃ遺跡の範囲を変更し、古墳については西山古墳群として新規に遺跡を登録した。

古墳は墳丘がすべて削平され、主体部が残存していたものは僅か３基（確実なものに限る）であった。古墳55基の内訳は、円墳８基・方墳47基で、方墳が主体の古墳群である。周溝から出土した土師器・須恵器から、概ね古墳時代中期から後期初頭の築造と考えられる。

古墳の脇にある長方形土坑は、木棺痕跡が確認できるものや、木棺固定用とみられる粘土の存在から、大半は木棺墓とみられる。

ほかに、縄文時代の陥し穴、飛鳥時代の建物・土壙墓などが確認された。

付図１　遺構全体図１　―第２次西区―（１：400）

三重県埋蔵文化財調査報告３２３－４

北山Ｃ遺跡（第２～７次）・西山古墳群 発掘調査報告

2020（令和２）年３月

付図１　遺構全体図１

―　第２次西区　―

（１：400）

付図２　遺構全体図２　―第２次東区～第６次―（１：400）

三重県埋蔵文化財調査報告３２３－４

北山Ｃ遺跡（第２～７次）・西山古墳群 発掘調査報告

2020（令和２）年３月

付図２　遺構全体図２

―　第２次東区～第６次　―

（１：400）

三重県埋蔵文化財調査報告書３２３－４

北山Ｃ遺跡（第２～７次）・西山古墳群　発掘調査報告

2020（令和２）年３月

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印刷　　共立印刷株式会社